

かみ のほ ほん ごう い せき
上 保 本 郷 遺 跡
(第3分冊)

2 0 2 1

岐阜県文化財保護センター



4 地点全景（南東から）



4 地点出土繩羽口・砥石

目 次

第4章 調査の成果	1
第7節 12地点の遺構・遺物	1
第8節 3・4地点の遺構・遺物	77
第5章 自然科学分析	241
第1節 分析の概要と成果	241
第2節 花粉分析とプランツ・オバール分析	243
第3節 石材同定	246
第4節 ガラス玉蛍光X線分析	251
第5節 鉛錫・鍛冶関連遺物の成分分析	257
第6節 獣骨同定分析	281
第7節 織維同定	283
第8節 木製品樹種同定	285
第9節 漆製品の塗膜構造調査	289

第1分冊 目次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯

 第1節 調査に至る経緯

 第2節 調査の方法と経過

第2章 遺跡の環境

 第1節 地理的環境

 第2節 歴史的環境

第3章 調査の成果

 第1節 基本層序

 第2節 遺構・遺物の概要

第4章 調査の成果

 第1節 9・10・19地点の遺構・遺物

 第2節 6～8・17・18地点の遺構・遺物

 第3節 5・14～16地点の遺構・遺物

 第4節 13地点の遺構・遺物

報告書抄録

第2分冊 目次

第4章 調査の成果

第5節 1・2・20・21 地点の遺構・遺物

第6節 11 地点の遺構・遺物

第4分冊 目次

第6章 総括

第1節 遺構について

第2節 遺物について

第3節 土地利用の変遷

参考文献

遺構一覧表

第5分冊 目次

遺物観察表

発掘区全図分割図

9・10・19 地点

6～8・17・18 地点

5・14～16 地点

3・4 地点

1・2・13・20・21 地点

11・12 地点

第6分冊 目次

写真図版

挿図目次

図456	12地点平面図	1
図457	SB33遺構図（1）	3
図458	SB33遺構図（2）	4
図459	SB34遺構図（1）	5
図460	SB34遺構図（2）	6
図461	SB35遺構図	7
図462	SB36遺構図（1）	8
図463	SB36遺構図（2）・出土遺物実測図	9
図464	SB37遺構図・出土遺物実測図	10
図465	SB38遺構図・出土遺物実測図	11
図466	SB39遺構図	13
図467	SA44遺構図	14
図468	SA45遺構図	15
図469	SA46遺構図	16
図470	SA47遺構図・出土遺物実測図	17
図471	SA48遺構図・出土遺物実測図	18
図472	SA49遺構図・出土遺物実測図	20
図473	SP535・SP542・SP543・SP565・SP567 遺構図・出土遺物実測図	22
図474	SP569遺構図・出土遺物実測図	23
図475	SK3713遺構図・出土遺物実測図	24
図476	SK3721遺構図・出土遺物実測図	25
図477	SK3739・SK3751・SK3755・SK3777・SK3783 遺構図・出土遺物実測図	27
図478	SK3785・SK3799遺構図・出土遺物実測図	29
図479	SK3852遺構図・出土遺物実測図	30
図480	SK3859遺構図	31
図481	SK3859出土遺物実測図	32
図482	SK3900・SK3943・SK3960・SK3973・SK3974 遺構図・出土遺物実測図	34
図483	SK4008・SK4030・SK4039・SK4046遺構図・ 出土遺物実測図	36
図484	SK4122遺構図・出土遺物実測図	37
図485	SK4154遺構図・出土遺物実測図	38
図486	SK4191・SK4192遺構図・出土遺物 実測図	39
図487	SK4196遺構図・出土遺物実測図	41
図488	SK4204遺構図・出土遺物実測図	42
図489	SK4205遺構図・出土遺物実測図	43
図490	SK4206・SK4208・SK4215・SK4218遺構図・ 出土遺物実測図	45
図491	SK4220・SK4225・SK4226・SK4230・SK4234・ SK4247遺構図・出土遺物実測図	48
図492	SK4248・SK4252・SK4272遺構図・出土遺物 実測図	49
図493	SK4283遺構図・出土遺物実測図	50
図494	SK4323遺構図	51
図495	SD329・SD331遺構図・出土遺物実測図	53
図496	SD332・SD333遺構図・出土遺物実測図	54
図497	SD334・SD335遺構図・出土遺物実測図	56
図498	SD336遺構図	57
図499	SD341遺構図・出土遺物実測図	59
図500	SD342・SD343遺構図・出土遺物実測図	60
図501	SD344遺構図・出土遺物実測図	62
図502	SD345遺構図・出土遺物実測図	63
図503	SD346・SD348・SD349遺構図	65
図504	SD347遺構図	66
図505	SD347出土遺物実測図	67
図506	SD350遺構図・出土遺物実測図	68
図507	SD351・SD355・SD356遺構図・出土遺物 実測図	70
図508	SD353・SD354・SD357・SD358遺構図	72
図509	SM7・SM8遺構図	74
図510	その他の遺構出土遺物実測図	75
図511	III層等出土遺物実測図（1）	75
図512	III層等出土遺物実測図（2）	76
図513	3・4地点平面図（1）	77
図514	3・4地点平面図（2）	78
図515	3・4地点平面図（3）	79

図516	SI15遺構図（1）	80	図549	SK4519遺構図・出土遺物実測図	118
図517	SI15遺構図（2）	81	図550	SK4523遺構図	119
図518	SI15遺構図（3）	82	図551	SK4523出土遺物実測図	120
図519	SI15出土遺物実測図	83	図552	SK4555・SK4968遺構図・出土遺物 実測図	121
図520	SB40遺構図	85	図553	SK5071遺構図・出土遺物実測図	122
図521	SB41遺構図	87	図554	SK5109遺構図・出土遺物実測図	123
図522	SB42遺構図	88	図555	SK5112遺構図・出土遺物実測図	124
図523	SB43遺構図	89	図556	SK5115遺構図・出土遺物実測図	125
図524	SB44遺構図	90	図557	SK5134遺構図・出土遺物実測図	126
図525	SB45遺構図	92	図558	SK5163遺構図・出土遺物実測図	127
図526	SB46遺構図	93	図559	SK5169遺構図・出土遺物実測図	128
図527	SB47遺構図・出土遺物実測図	95	図560	SK5212遺構図・出土遺物実測図	129
図528	SB48遺構図	96	図561	SK5243遺構図・出土遺物実測図	130
図529	SB49遺構図・出土遺物実測図	97	図562	SK5258・SK5265遺構図・出土遺物 実測図	131
図530	SA50遺構図	98	図563	SK5266・SK5278遺構図・出土遺物 実測図	133
図531	SA51遺構図	99	図564	SK5297遺構図・出土遺物実測図	134
図532	SA53遺構図	100	図565	SK5306・SK5331遺構図・出土遺物 実測図	135
図533	SA54・SA55遺構図	102	図566	SK5347遺構図・出土遺物実測図	136
図534	SA56・SA57遺構図	103	図567	SK5365遺構図・出土遺物実測図	137
図535	SA58遺構図	104	図568	SK5371遺構図・出土遺物実測図	138
図536	SA59・SA60遺構図	105	図569	SK5376遺構図・出土遺物実測図	139
図537	SA61遺構図（1）	106	図570	SK5377・SK5378遺構図・出土遺物 実測図	140
図538	SA62遺構図（1）	107	図571	SK5380・SK5387遺構図・出土遺物 実測図	142
図539	SA61・SA62遺構図（2）・出土遺物実測図	108	図572	SK5395遺構図・出土遺物実測図	143
図540	SA63遺構図	109	図573	SK5410遺構図（1）	144
図541	SP576遺構図	110	図574	SK5410遺構図（2）	145
図542	SP581遺構図・出土遺物実測図	110	図575	SK5410出土遺物実測図（1）	146
図543	SP595・SP602・SP618・SP619遺構図・ 出土遺物実測図	112	図576	SK5410出土遺物実測図（2）	147
図544	SK4393・SK4405遺構図・出土遺物 実測図	113	図577	SK5411遺構図	148
図545	SK4462遺構図・出土遺物実測図	114	図578	SK5416遺構図・出土遺物実測図	149
図546	SK4476・SK4494遺構図・出土遺物 実測図	115	図579	SK5421遺構図・出土遺物実測図	150
図547	SK4496遺構図・出土遺物実測図	116			
図548	SK4500・SK4503遺構図・出土遺物 実測図	117			

図580	SK5422遺構図・出土遺物実測図	151	図610	SK5977遺構図	185
図581	SK5424・SL18遺構図（1）	153	図611	SK5977出土遺物実測図	186
図582	SL18遺構図（2）・SK5424出土遺物 実測図（1）	154	図612	SK6063遺構図・出土遺物実測図	187
図583	SK5424・SL18-P1出土遺物実測図（2）	155	図613	SD361遺構図・出土遺物実測図	188
図584	SK5410最下層出土遺物実測図	156	図614	SD366・SD367遺構図・出土遺物実測図	190
図585	SK5457遺構図・出土遺物実測図	157	図615	SD375・SD376・SD378遺構図	192
図586	SK5464遺構図・出土遺物実測図	158	図616	SD379・SD380・SD387遺構図	193
図587	SK5465遺構図・出土遺物実測図	159	図617	SD389～SD391遺構図・出土遺物実測図	195
図588	SK5497遺構図・出土遺物実測図	160	図618	SD392～SD395遺構図（1）	198
図589	SK5532・SK5552遺構図・出土遺物 実測図	161	図619	SD392～SD395遺構図（2）	199
図590	SK5555遺構図・出土遺物実測図（1）	163	図620	SD392～SD395出土遺物実測図	200
図591	SK5555出土遺物実測図（2）	164	図621	SD397遺構図・出土遺物実測図	201
図592	SK5620遺構図・出土遺物実測図	165	図622	SD402・SD405～SD409遺構図（1）	204
図593	SK5651遺構図・出土遺物実測図	166	図623	SD408・SD409遺構図（2）・出土遺物 実測図	205
図594	SK5655・SK5656遺構図・出土遺物 実測図	167	図624	SD414・SD418～SD421遺構図（1）	208
図595	SK5667・SK5673遺構図・出土遺物 実測図	169	図625	SD414・SD418～SD421遺構図（2）・出土 遺物実測図	209
図596	SK5709・SK5728遺構図・出土遺物 実測図	170	図626	SD424・SD426・SD428～SD431・ SD444～SD448遺構図（1）	212
図597	SK5733遺構図・出土遺物実測図	172	図627	SD424・SD428～SD431・SD444～SD448 遺構図（2）	213
図598	SK5734・SK5736遺構図・出土遺物 実測図	173	図628	SD430・SD447遺構図（3）	215
図599	SK5743・SK5760遺構図・出土遺物 実測図	174	図629	SD424・SD426・SD428・SD429出土遺物 実測図	216
図600	SK5805遺構図・出土遺物実測図	175	図630	SD430・SD431・SD445～SD447出土遺物 実測図	217
図601	SK5809遺構図・出土遺物実測図	177	図631	SD440～SD443・SD449～SD451 遺構図（1）	222
図602	SK5830遺構図	177	図632	SD443・SD451遺構図（2）	223
図603	SK5830出土遺物実測図	178	図633	SD451遺構図（3）	224
図604	SK5886遺構図・出土遺物実測図	179	図634	SD442・SD443・SD449～SD451出土遺物 実測図（1）	225
図605	SK5897遺構図・出土遺物実測図	180	図635	SD451出土遺物実測図（2）	226
図606	SK5919遺構図・出土遺物実測図	181	図636	SD451出土遺物実測図（3）	227
図607	SK5920遺構図・出土遺物実測図	182	図637	SD458遺構図・出土遺物実測図	228
図608	SK5926遺構図・出土遺物実測図	183	図638	その他の遺構出土遺物実測図（1）	230
図609	SK5948遺構図・出土遺物実測図	184			

図639	その他の遺構出土遺物実測図（2）	231	図661	鉄滓関連遺物の断面組織（6）	266
図640	その他の遺構出土遺物実測図（3）	232	図662	鉄滓関連遺物の断面組織（7）	267
図641	その他の遺構出土遺物実測図（4）	233	図663	鉄滓関連遺物の断面組織（8）	268
図642	その他の遺構出土遺物実測図（5）	234	図664	鉄滓関連遺物の断面組織（9）	269
図643	遺物集中区遺物出土状況図	235	図665	鉄滓の断面組織	272
図644	遺物集中区出土遺物実測図	236	図666	元素マッピング図	273
図645	Ⅲ層等出土遺物実測図（1）	238	図667	No. 1 坪場の元素マッピング図およびポイント b の蛍光X線スペクトル	277
図646	Ⅲ層等出土遺物実測図（2）	239	図668	No. 2 輪羽口の元素マッピング図およびポイント c の蛍光X線スペクトル	278
図647	Ⅲ層等出土遺物実測図（3）	240	図669	金属関連遺物の断面組織（1）	279
図648	植物珪酸体分布図	244	図670	金属関連遺物の断面組織（2）	280
図649	上保本郷遺跡東地区から産出した植物珪酸体	245	図671	SD316出土の哺乳鋼四肢骨	282
図650	上保岩坪1号古墳・2号古墳の試料番号と石材	246	図672	織機の試料写真と光学顕微鏡写真	284
図651	石材の実体顕微鏡写真	249	図673	木製品の光学顕微鏡写真	288
図652	上保本郷遺跡とその周辺の地質	250	図674	塗膜のスペクトル（1）	290
図653	ガラス玉の蛍光X線分析（No. 1）	254	図675	塗膜のスペクトル（2）	291
図654	ガラス玉の蛍光X線分析（No. 2）	255	図676	塗膜の断面組織（1）	291
図655	ガラス玉の蛍光X線分析（No. 3）	256	図677	塗膜の断面組織（2）	292
図656	鉄滓関連遺物の断面組織（1）	261	図678	漆製品の塗膜構造（a）と反射電子像（b）	295
図657	鉄滓関連遺物の断面組織（2）	262	図679	塗膜および内容物の赤外線分光スペクトル	296
図658	鉄滓関連遺物の断面組織（3）	263			
図659	鉄滓関連遺物の断面組織（4）	264			
図660	鉄滓関連遺物の断面組織（5）	265			

表目次

表5	試料 1 g 当たりのプラント・オパール個数	243	表16	EDS 分析結果	259
表6	上保岩坪1号・2号古墳石室石材と比較試料	247	表17	分析対象一覧	270
表7	上保岩坪1号・2号古墳石室石材と比較 試料の分類	247	表18	XRF 分析による鉄滓の半定量値	270
表8	分析対象一覧	251	表19	XRF 分析による金属銅の半定量値	271
表9	蛍光X線分析装置仕様	251	表20	EDS 分析結果	271
表10	半定量分析結果	252	表21	土器付着物マッピング図中のポイントの半定量値	271
表11	分析対象一覧	257	表22	分析対象一覧	274
表12	XRF 分析による金属鉄ないし鉻化鉄の半定量値	258	表23	元素マッピング図中のポイントの半定量値	274
表13	XRF 分析による土器付着金属の半定量値	258	表24	XRF 分析による鉄滓の半定量値	275
表14	XRF 分析による鉄滓類の半定量値	258	表25	XRF 分析による金属銅の半定量値	275
表15	鉄の金属組織観察結果	259	表26	EDS 分析結果	275
			表27	半定量分析結果	281

表28 上保本郷遺跡出土木製品の樹種同定結果	285	表32 漆器の断面観察結果表	290
表29 上保本郷遺跡出土木製品の樹種同定結果 一覧	286	表33 分析対象一覧	293
表30 分析対象一覧	289	表34 生漆の赤外吸収位置とその強度	293
表31 成分分析結果	289	表35 赤色塗膜層等のX線分析結果	294
		表36 塗膜分析結果	294

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版 6

4 地点全景（南東から）

4 地点出土輪羽口 砥石

第7節 12地点の遺構・遺物

遺跡の西部に位置する調査地点で、南西端の調査区地点である。調査面積は1,503.4 m²で、糸貫IC出口車線部分を調査した。試掘確認調査の結果、これより西側は糸貫川の旧河道と考えられ、遺構は確認できなかった。

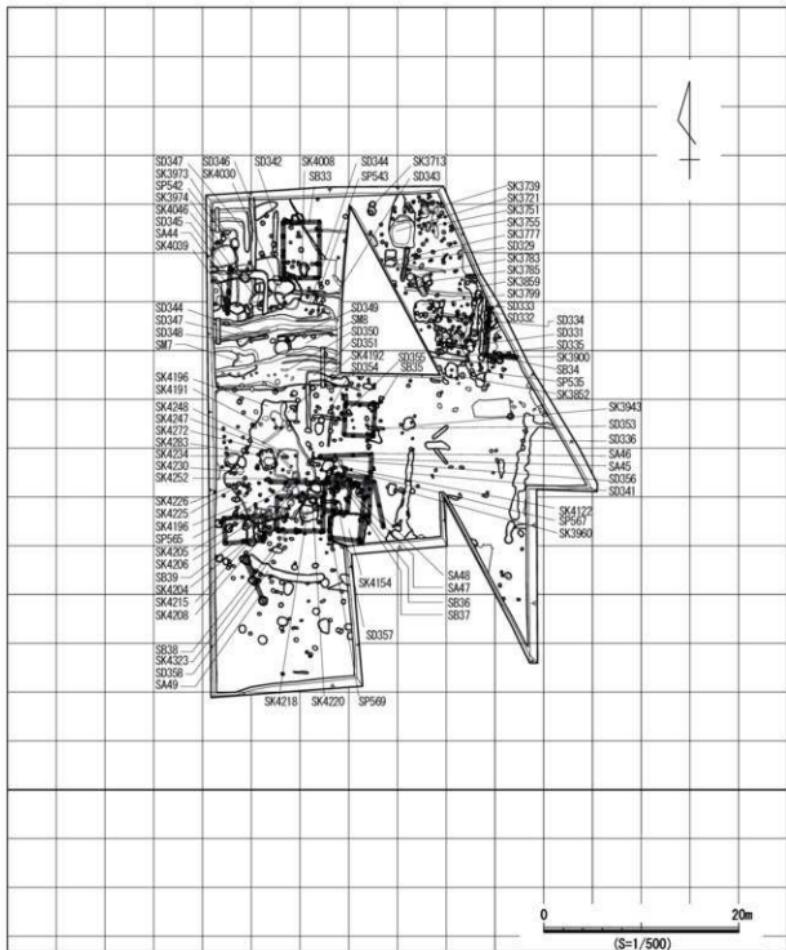


図 456 12 地点平面図

1 堀立柱建物

SB33（図 457・458）

検出状況 NI 8～NJ 9 グリッド、IV b 層上面で検出した。4間×2間の建物と考えられる。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。西側約 0.6m に SD342、北側約 1.3m に SD343 が並行する。

規模・形状 長軸方位は N-0° - E-W である。平面形は南北に長い長方形で、桁行 4間 (5.7m、柱間 1.5m-1.5m-1.2m-1.5m)、梁行 2間 (3.7m、柱間 1.7m-2.0m)、床面積 21.1 m² となる側柱建物である。P5 と P9 に対応する柱穴は確認できなかった。また P4 は柱筋から内側にやや外れる。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。いずれの柱穴でも特徴ある堆積状況は確認できなかった。P1 から須恵器 1点、P2 から土師器 6点、山茶碗 2点、P3 から土師器 1点、P4 から須恵器 2点、山茶碗 3点、P8 から山茶碗 1点、白磁 1点、P9 から須恵器 1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SD342 との位置関係から、本遺構は 12世紀後葉から 13世紀初頭と考えられる。

SB34（図 459・460）

検出状況 NL12～NL13 グリッド、IV b 層上面で検出した。3間以上×2間以上の建物と考えられるが、L字形の構造になる可能性もある。東側と北側は発掘区外に続く。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P3 は SK3859、P6 は SK3900 と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。西側に約 0.4m 離れて、SD333 が並行する。

規模・形状 長軸方位は N-4° - E である。検出した範囲では、平面形は南北に長い長方形で、桁行 3間以上 (4.8m、柱間 1.7m-1.4m-1.7m)、梁行 2間以上 (3.1m、柱間 1.7m-1.4m)、床面積 14.9 m² と考えられる側柱建物である。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。P1 で柱痕跡を確認した。その他の柱穴では特徴的な堆積状況は確認できなかった。P4 は底面が 2段の掘り込みとなる。P1 から土師器 1点、須恵器 1点、山茶碗 3点、P2 から土師器 2点、須恵器 2点、山茶碗 5点、陶器 1点、P3 から土師器 9点、須恵器 1点、山茶碗 5点、P5 から土師器 1点、P6 から山茶碗 3点が出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SK3859・SK3900 との重複関係、SD333 との位置関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は 13世紀初頭から中葉と考えられる。

SB35（図 461）

検出状況 NM 9～NM 10 グリッド、IV b 層上面で検出した。2間×1間の建物と考えられる。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。西側に約 3.5m 離れて存在する区画溝と考えられる SD351 と SD356 の内側に位置する。

規模・形状 長軸方位は N-2° - E である。平面形は南北にやや長い長方形で、桁行 2間 (3.2m、柱間 1.6m-1.6m)、梁行 1間 (3.0m)、床面積 9.6 m² となる側柱建物である。P3 に対応する柱穴は確認できなかった。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。P2 で柱痕跡を確認したが、その他の柱穴では特徴

SB33

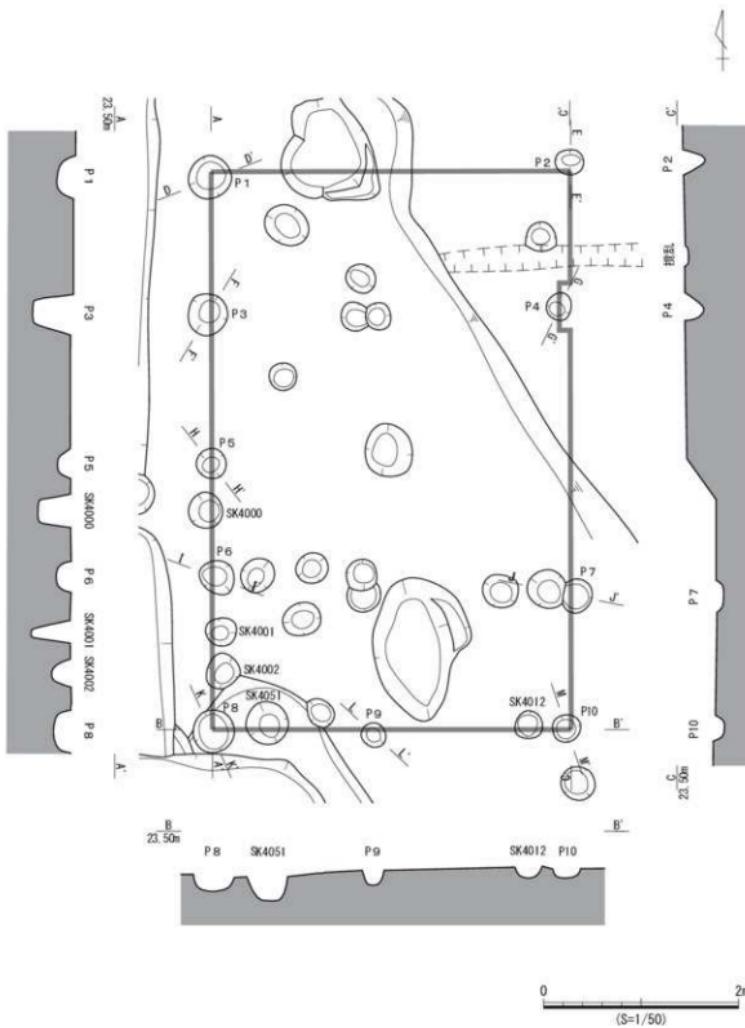


図 457 SB33 遺構図(1)

4 第4章 調査の成果

ある堆積状況は確認できなかった。P1から山茶碗2点、P2から土師器2点、山茶碗2点が出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SD351・SD356との位置関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SB36(図462・463)

検出状況 NN9～N010グリッド、P1～P4・P7はIVb層上面、P5・P6・P8はSK4154底面で検出した。3間×1間の建物と考えられる。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。本遺構はSK4154より古い。またSB37・SA47・SA48と重複する位置関係である。

規模・形状 長軸方位はN-6°-Eである。平面形は南北に長い長方形で、桁行3間(6.5m、柱間2.1m-2.3m-2.1m)、梁行1間(3.1m)、床面積20.5m²となる側柱建物である。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴ある堆積状況は確認できなかった。P1から土師器11点、山茶碗2点、陶磁器2点、砥石1点、P2から土師器2点、山茶碗1点、P3から土師器1点、山茶碗

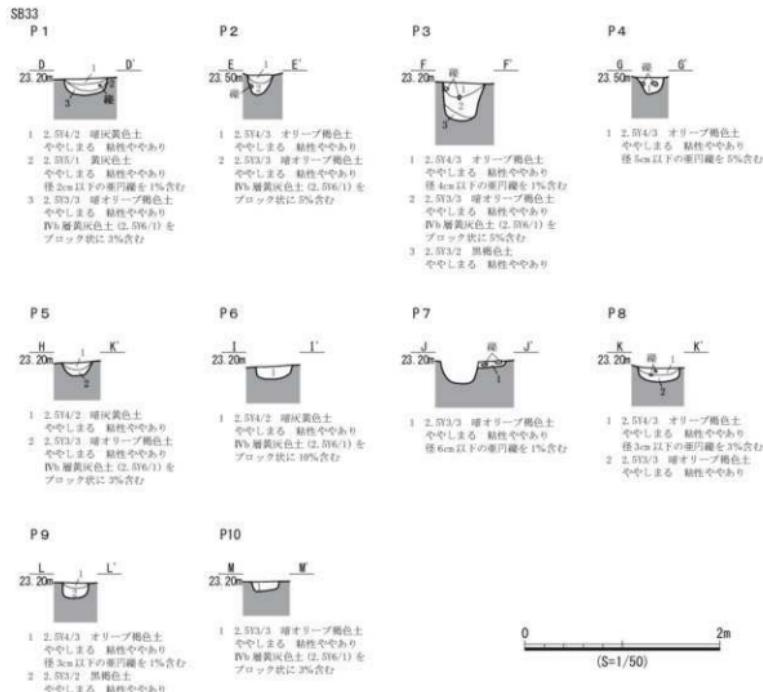


図458 SB33遺構図(2)

3点、P4から土師器2点、山茶碗1点、P6から山茶碗1点、P7から山茶碗3点、P8から山茶碗2点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗など2点を図示した。2777は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。2776は砥石である。

時期 SK4154との重複関係と図示した2777から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SB34

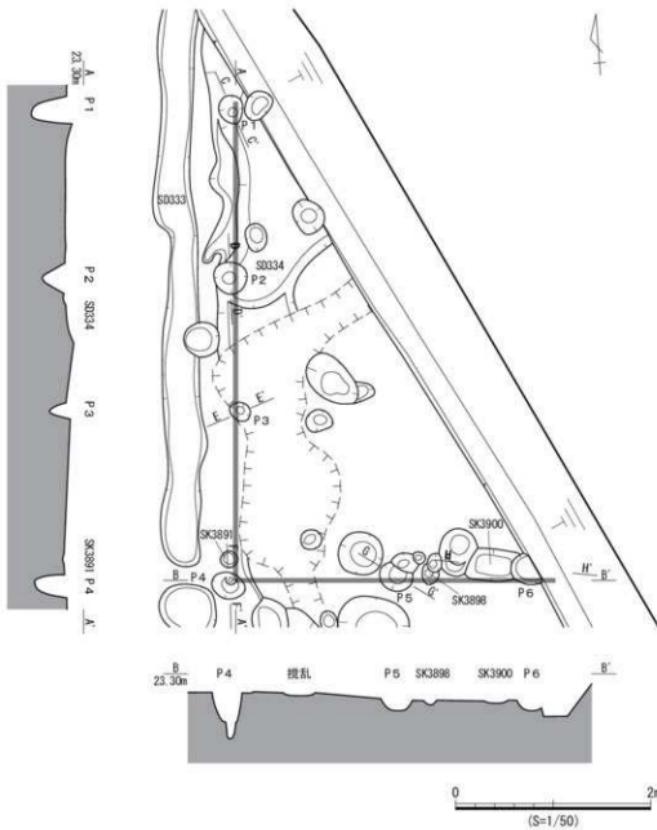


図459 SB34 遺構図(1)

SB37 (図464)

検出状況 NN9～NO9グリッド、IVb層上面で検出した。2間×1間の建物と考えられるが、南西隅部にあたる柱穴は確認できなかった。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P5はSK4154と重複する。本遺構はSK4154より古い。またSB36・SB38・SA47・SA48と重複する位置関係である。

規模・形状 長軸方位はN-5°-Eである。平面形は南北に長い長方形で、桁行2間(3.3m)、柱間1.7m-1.6m)、梁行1間(2.5m)、床面積8.3m²となる側柱建物である。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴ある堆積状況は確認できなかった。P1から土師器1点、P4から山茶碗2点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。2778はM3類の土師器皿である。

時期 SK4154との重複関係と図示した2778から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

SB38 (図465)

検出状況 NO8～NO9グリッド、IVb層上面で検出した。2間×1間の建物と考えられる。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。北側に約1.5m離れてSA47が並行する。P1とP2はSK4196と重複する。本遺構はSK4196より新しい。またSB37と重複する位置関係である。

規模・形状 長軸方位はN-89°-Wである。平面形は東西に長い長方形で、桁行2間(4.6m)、柱間

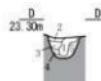
SB34

P1



1. 2.SV3/2 黒褐色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず マンガン斑が沈着 鉄化物を少量含む
2. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず マンガングリが沈着 鉄化物を少量含む
3. 2.SV4/3 オリーブ褐色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず マンガングリが沈着 鉄分を10%含む
4. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず マンガングリが沈着 鉄分を3%含む
5. 2.SV4/3 オリーブ褐色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず マンガングリが沈着

P2



1. 2.SV3/2 黒褐色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず マンガン斑が沈着 鉄分を2%含む
2. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず オリーブ褐色土(2.SV4/3)を
ブロック状に30%含む マンガングリが沈着
鉄化物を少量含む
3. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず オリーブ褐色土(2.SV4/3)を
ブロック状に10%含む マンガングリが沈着
4. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず オリーブ褐色土(2.SV4/3)を
ブロック状に3%含む マンガングリが沈着
5. 2.SV3/2 黒褐色土、ややしまる 粘性なし
繩を含まず オリーブ褐色土(2.SV4/3)を
ブロック状に10%含む マンガングリが沈着
鉄分を2%含む

P3



1. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
鉄化物を多く含む 地殻を少量含む
2. 2.SV3/2 黑褐色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
鉄化物を少量含む

P4



1. 2.SV3/2 黑褐色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
鉄化物を少量含む
2. 2.SV4/2 黑褐色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
鉄化物を少量含む
3. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
鉄分を10%含む 鉄化物を少量含む

P5



1. 2.SV4/4 オリーブ褐色土、しまる
粘性なし 繩を含まず
マンガングリが沈着
2. 2.SV4/2 増灰黄色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
マンガングリが沈着

P6



1. 2.SV3/2 黑褐色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
マンガングリが沈着
2. 2.SV3/2 黑褐色土、ややしまる
粘性なし 繩を含まず
マンガングリが沈着

0 2m
(S=1/50)

図460 SB34遺構図(2)

SB35

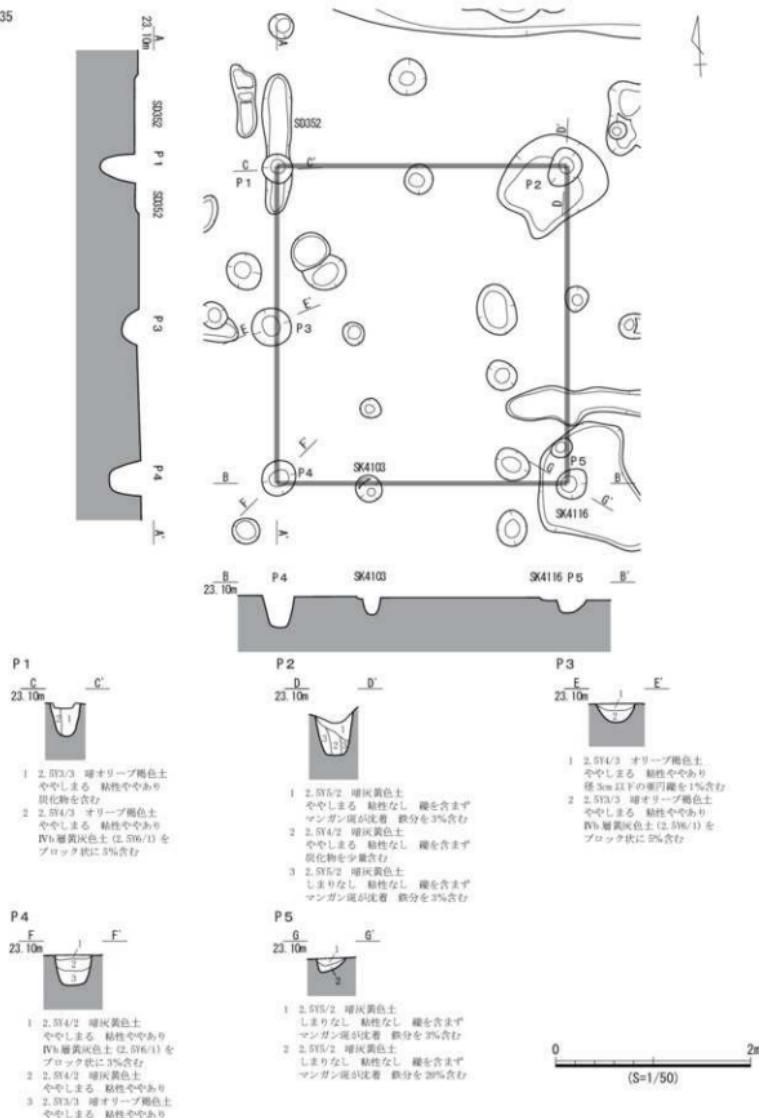


図 461 SB35 遺構図

SB36

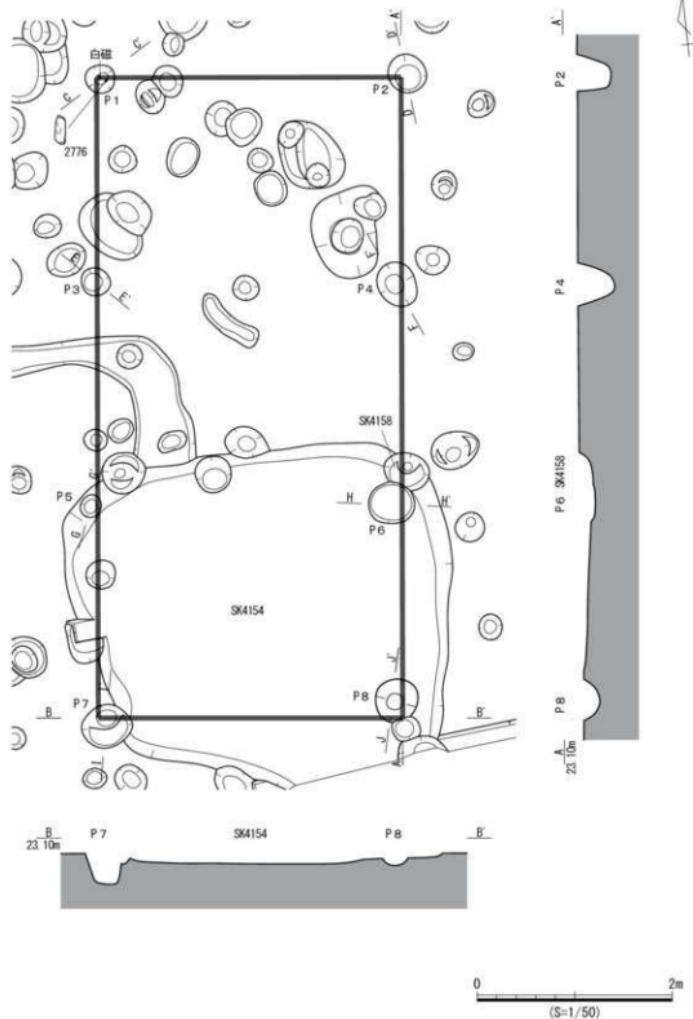


図 462 SB36 遺構図 (1)

SB36

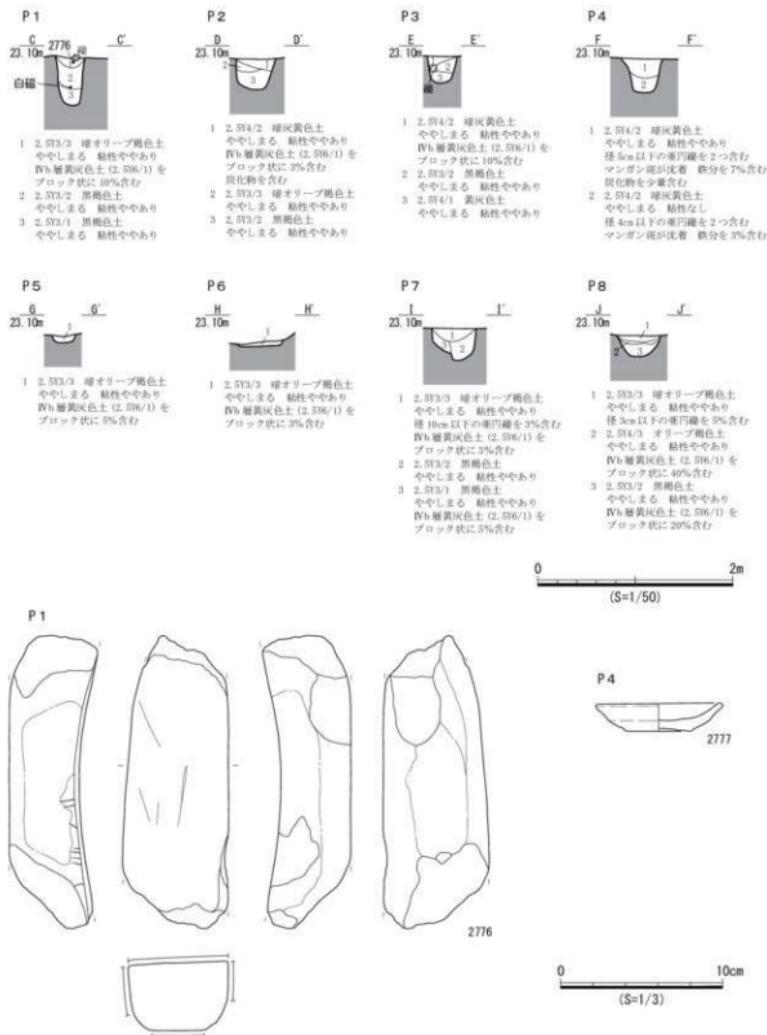


図463 SB36 遺構図(2)・出土遺物実測図

SB37

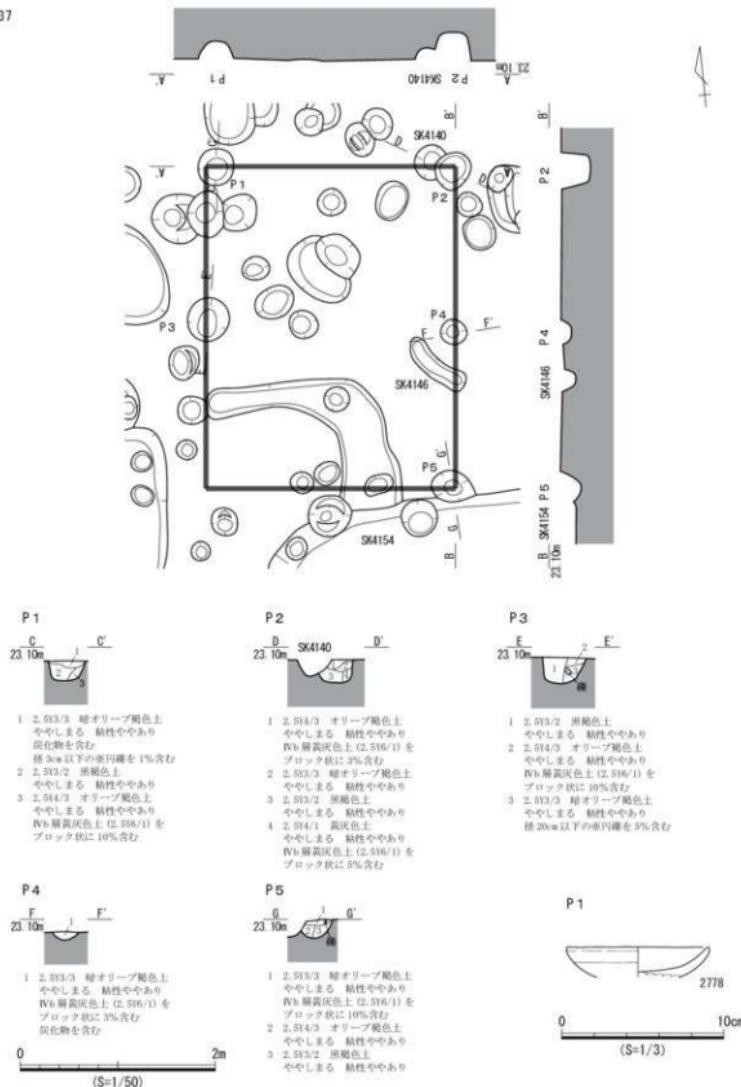


図464 SB37 造構図・出土遺物実測図

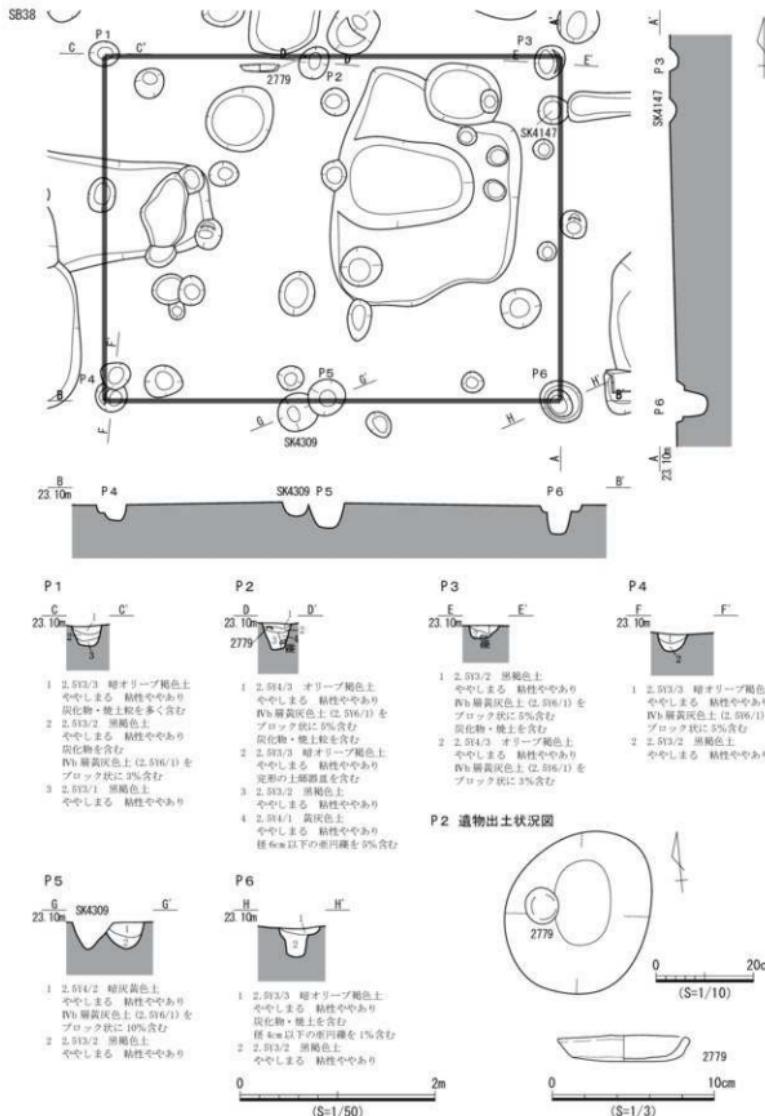


図465 SB38 遺構図・出土遺物実測図

2.2m-2.4m)、梁行1間(3.5m)、床面積16.1m²となる側柱建物である。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴ある堆積状況は確認できなかった。P2の2層からほぼ完全形の土師器皿1点(2779)が逆位で出土した。その他にP1から土師器3点、山茶碗6点、P2から土師器14点、山茶碗10点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。2779はM3類の土師器皿である。

時期 SK4196との重複関係と図示した2779から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

SB39(図466)

検出状況 N07～N08グリッド、IVb層上面で検出した。2間×1間の建物と考えられる。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P3はSK4196・SK4204・SK4205と重複する。本遺構はSK4204より古く、SK4196・SK4205より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-87°-Eである。平面形は東西に長い長方形で、桁行2間(4.0m、柱間1.9m-2.1m)、梁行1間(2.5m)、床面積10.0m²となる側柱建物である。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴ある堆積状況は確認できなかった。P1から土師器1点、山茶碗2点、P2から山茶碗1点、P3から土師器3点、山茶碗5点、P6から山茶碗1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SK4204・SK4205との重複関係から、本遺構は13世紀中葉から末と考えられる。

2 横

SA44(図467)

検出状況 NJ7～NK7グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。北東側にSB33が約5.5m離れ、方位を揃えて存在する。

規模・形状 3基の柱穴が直線的に並ぶ。方位はN-4°-Eで、柱間距離は2.6m～2.2mである。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴的な堆積状況は確認できなかった。P2の底面は2段になる。P2から土師器3点、須恵器1点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SB33との位置関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SA45(図468)

検出状況 NN10～N010グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。SA48と重複する位置関係である。

規模・形状 5基の柱穴が直線的に並ぶ。方位はN-2°-Eで、柱間距離は1.7m～1.9mである。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。P3の底面は2段になる。P4で柱痕跡を確認した。それ以外の柱穴では特徴的な堆積状況は確認できなかった。P3から須恵器1点、山茶碗1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 第5型式以降の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SB39

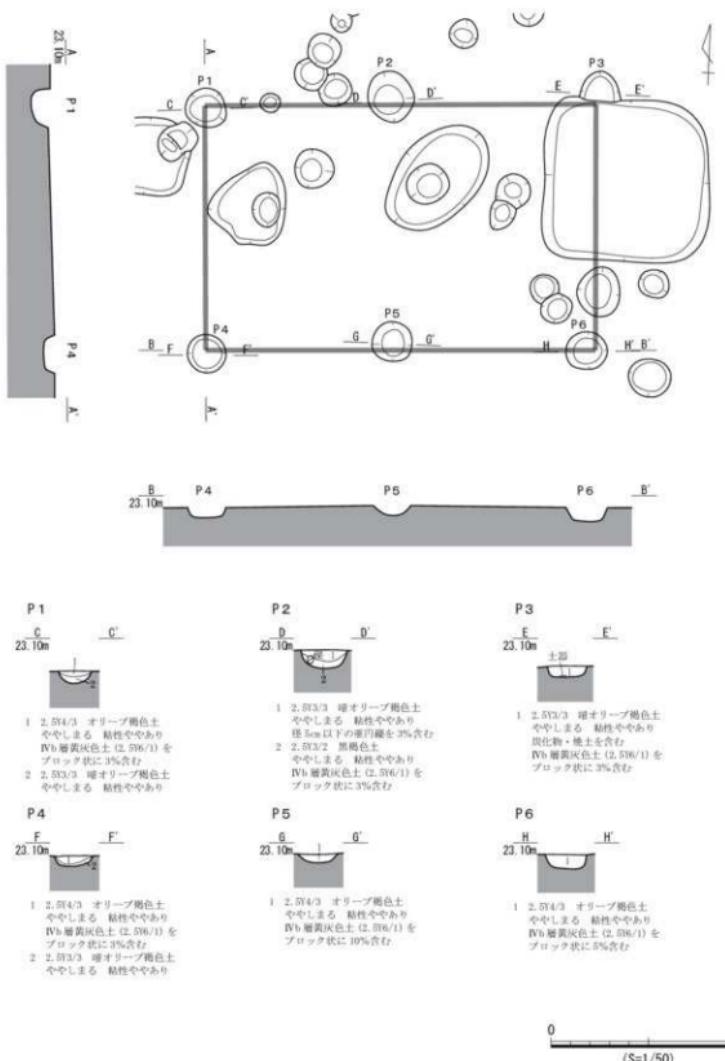


図 466 SB39 遺構図

SA46 (図 469)

検出状況 NN 9～NN10 グリッド、IV b 層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。区画溝と考えた SD356 の内側に近接し、長軸方位が揃う。

規模・形状 4 基の柱穴が直線的に並ぶ。方位は N-86° - E で、柱間距離は 1.6m～1.9m である。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴的な堆積状況は確認できなかった。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 SB35・SD351・SD356 との位置関係から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭と考えられる。

SA47 (図 470)

検出状況 NN 8～NN 9 グリッド、IV b 層上面で検出した。各柱穴の平面形は、いずれも明瞭であった。

南側に約 1.5m 離れて SB38 が並行する。P1～P3 は SK4196、P4 は SP569 と重複する。本遺構は SP569

SA44

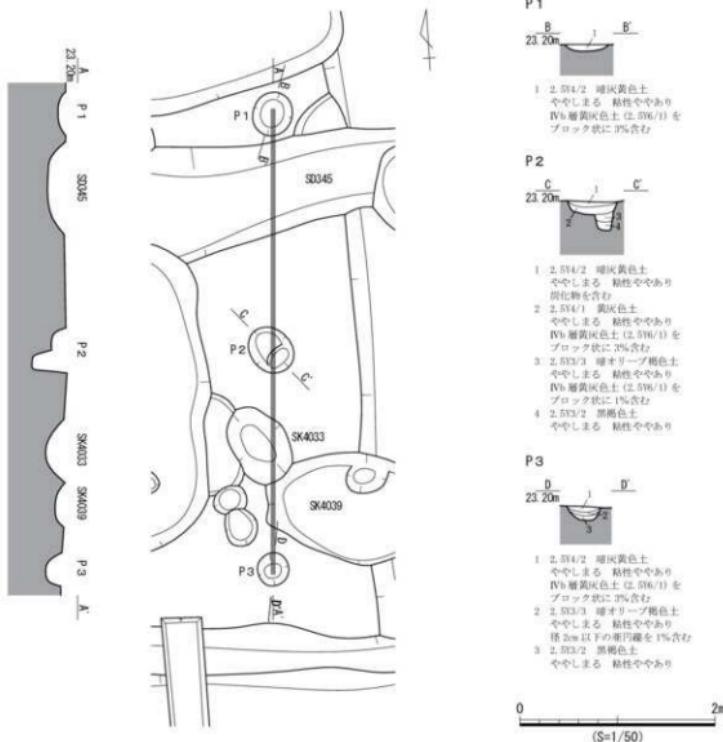


図 467 SA44 遺構図

SA45

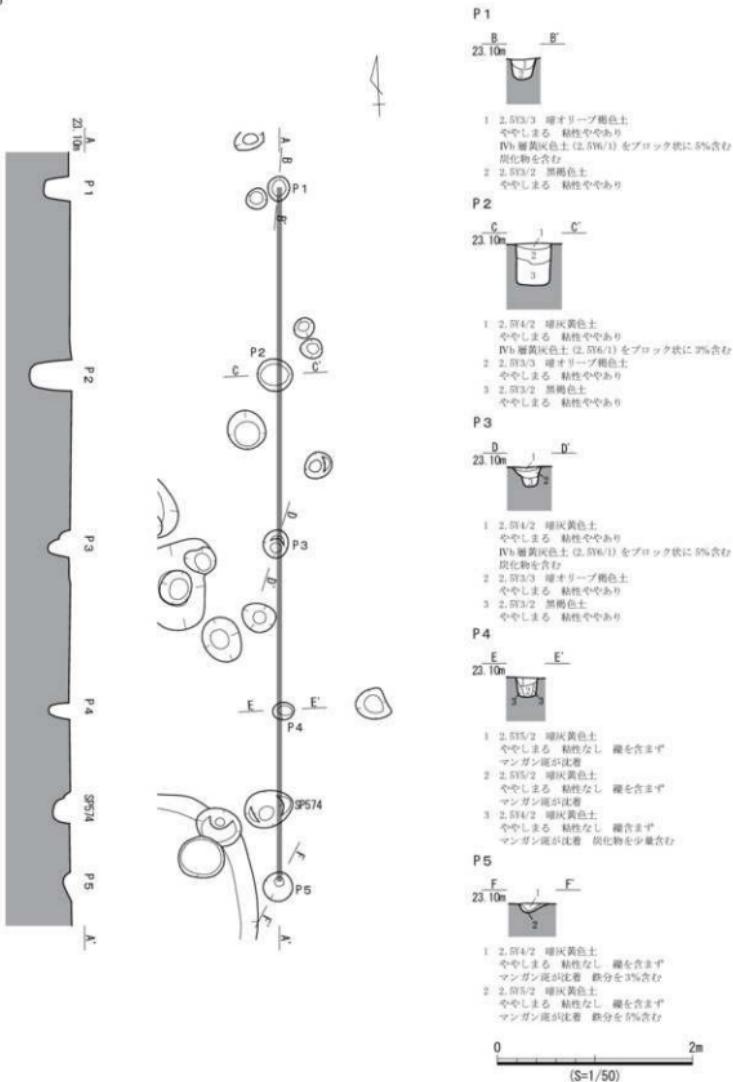


図 468 SA45 遺構図

より古く、SK4196 より新しい。また SB37・SB38 と重複する位置関係である。

規模・形状 5基の柱穴が直線的に並ぶ。方位はN-89°-Wで、柱間距離は1.7m~2.2mである。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形で、特徴的な堆積状況は確認できなかった。P3は他の柱穴に比べ長軸長が0.58mと大きい。P1から土師器1点、山茶碗1点、P2から土師器11点、須恵器1点、山茶碗2点、P3から土師器10点、須恵器1点、山茶碗6点、鉄滓2点、P4から土師器8点、山茶碗6点、P5から山茶碗1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗2点を図示した。2780と2781は第5型式の尾張型山茶碗の碗と小皿である。

時期 SP569・SK4196との重複関係と図示した2780・2781から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SA48(図471)

検出状況 NN9~N010 グリッド、IV b層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。SB37・SB38・SA45と重複する位置関係である。

SA46

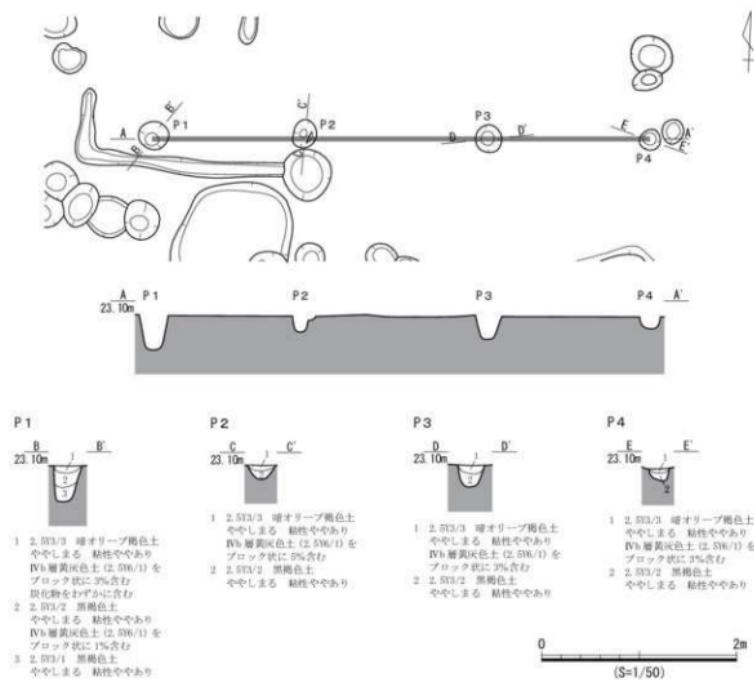


図469 SA46 遺構図

SA47

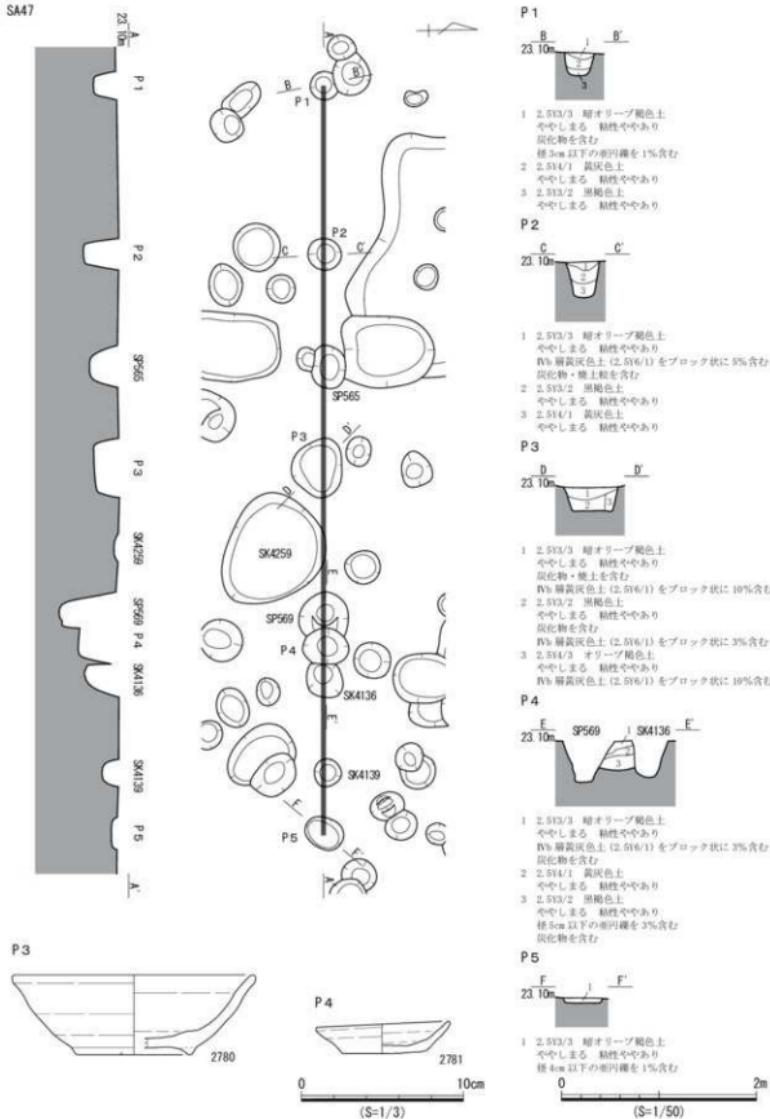


図470 SA47 遺構図・出土遺物実測図

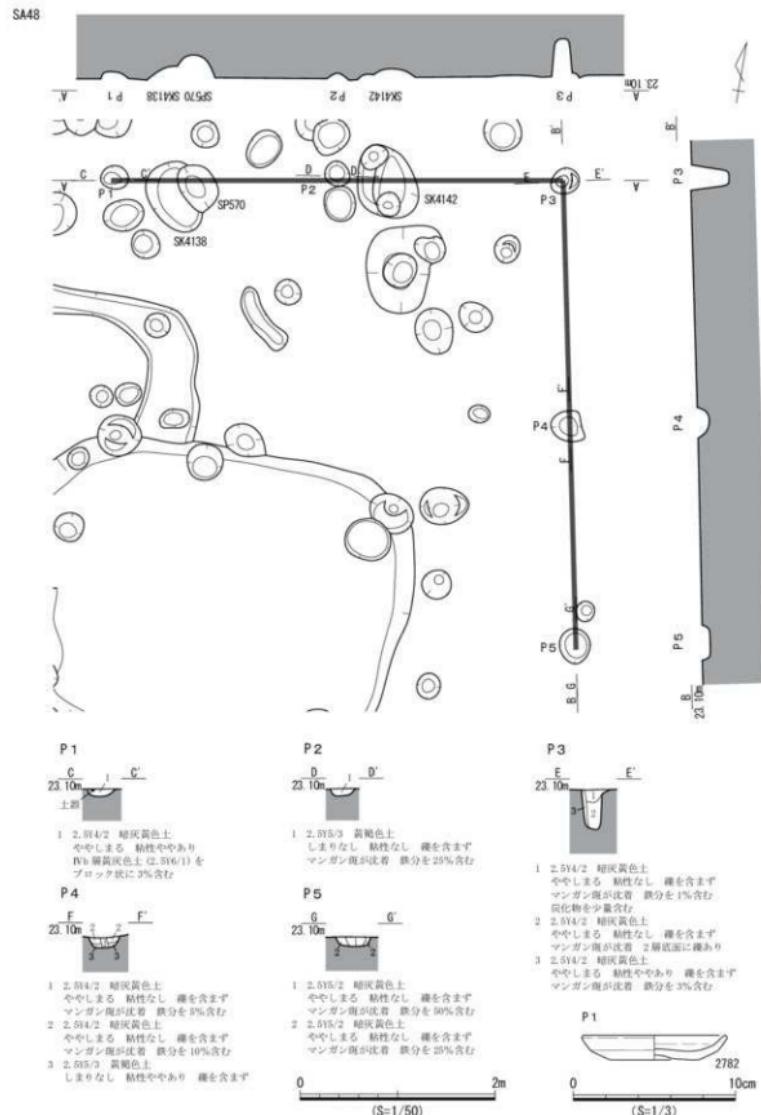


図471 SA48 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 5基の柱穴がP3で直角に屈曲し、L字形に並ぶ。長軸方位はN-12°-Wで、柱間距離は2.3m~2.5mである。

柱穴 柱穴の平面形はP4が不整円形、その他が円形である。P4で柱痕跡を確認した。その他の柱穴では特徴的な堆積状況は確認できなかった。P1から土師器1点が出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。2782はM3類の土師器皿である。

時期 図示した2782から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

SA49（図472）

検出状況 NP7～NQ8グリッド、IVb層上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P1はSD358と重複する。本遺構はSD358より新しい。

規模・形状 3基の柱穴が直線的に並ぶ。方位はN-23°-Wで、柱間距離は2.3mである。

柱穴 柱穴の平面形はP1とP2が不整形、P3が円形である。いずれの柱穴も長軸長約0.90mとなる。いずれの柱穴も特徴的な堆積状況は確認できなかった。P1から土師器6点、山茶碗1点、P3から土師器4点、山茶碗1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。2783はM3類の土師器皿である。

時期 SD358との重複関係と図示した2783から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

3 柱穴

SP535（図473）

検出状況 NL12グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は梢円形で、断面は浅い皿状である。深さはないが柱痕跡であると考えられる堆積を確認したため、単独の柱穴として報告する。

埋土 2層に分層した。1層は柱痕跡と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器3点、灰釉陶器2点、山茶碗4点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2784は第4型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2784から、本遺構は12世紀中葉から後葉と考えられる。

SP542（図473）

検出状況 NI7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK3973、西側でSK3974、東側でSD347と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。1層は垂直方向に堆積する。

遺物出土状況 埋土中から山茶碗4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SK3973・SK3974・SD367との重複関係と山茶碗が出土したことから、本遺構は11世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SP543（図473）

検出状況 NJ9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面で柱当たりと考えられる凹みを確認した。

SA49

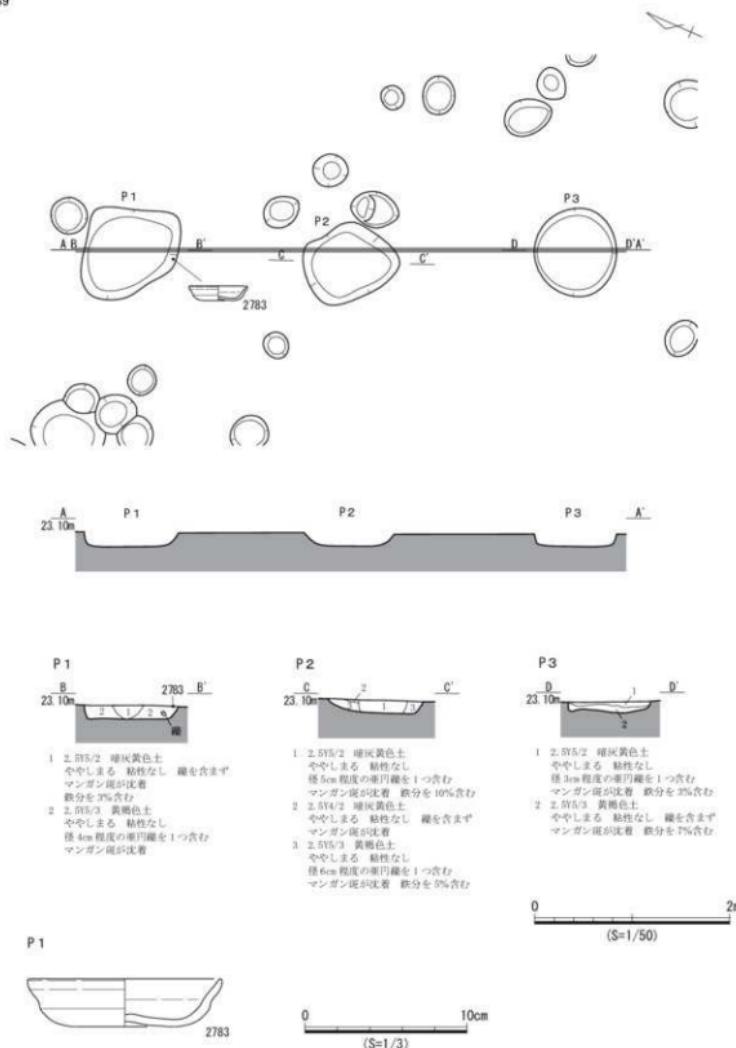


図 472 SA49 遺構図・出土遺物実測図

埋土 3層に分層した。1層と2層・3層との境に礫が混じる。3層は柱痕跡の可能性がある。

遺物出土状況 1層から常滑産陶器1点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 常滑産陶器が出土したことから、本遺構は中世以降と考えられる。

SP565（図473）

検出状況 NN8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体がSK4196、北側でSK4272と重複する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。2層は柱抜取穴埋土と考えられ、土器と礫が混じる。

遺物出土状況 1層からほぼ完形の山茶碗1点(2785)が正位で出土した。また2層の底面から常滑産陶器1点や扁平な円礫とともに山茶碗片1点(2786)が正位で出土した。その他に埋土中から山茶碗3点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗2点を図示した。2785と2786は第6型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2785と2786から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SP567（図473）

検出状況 NN9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面は底面付近では垂直に立ち上がり、南側では上部にかけてやや開く。底面はほぼ平坦で北側に向かって下がる。

埋土 5層に分層した。1層～4層は柱抜取穴埋土と考えられる。

遺物出土状況 2層から山茶碗1点(2787)が正位で出土した。その他に埋土中から山茶碗1点が出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2787は第5型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2787から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SP569（図474）

検出状況 NN9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSA47-P4と重複する。本遺構はSA47より新しい。

規模・形状 平面形は円形である。壁面は底面から上部にかけてはラッパ状に開くが、底面付近では垂直に立ち上がることから柱当たりと考えられる。底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。2層と3層は柱抜取穴埋土と考えられ、土器が混じる。

遺物出土状況 1層からほぼ完形の山茶碗の小皿(2788)が縦位で出土した。その他に埋土中から土師器20点、山茶碗10点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2788は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した2788から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

4 土坑

SK3713（図475）

検出状況 NI10グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 南側と北側の2つの土坑が組み合った形状で、平面形は不定形である。南側の平面は椭

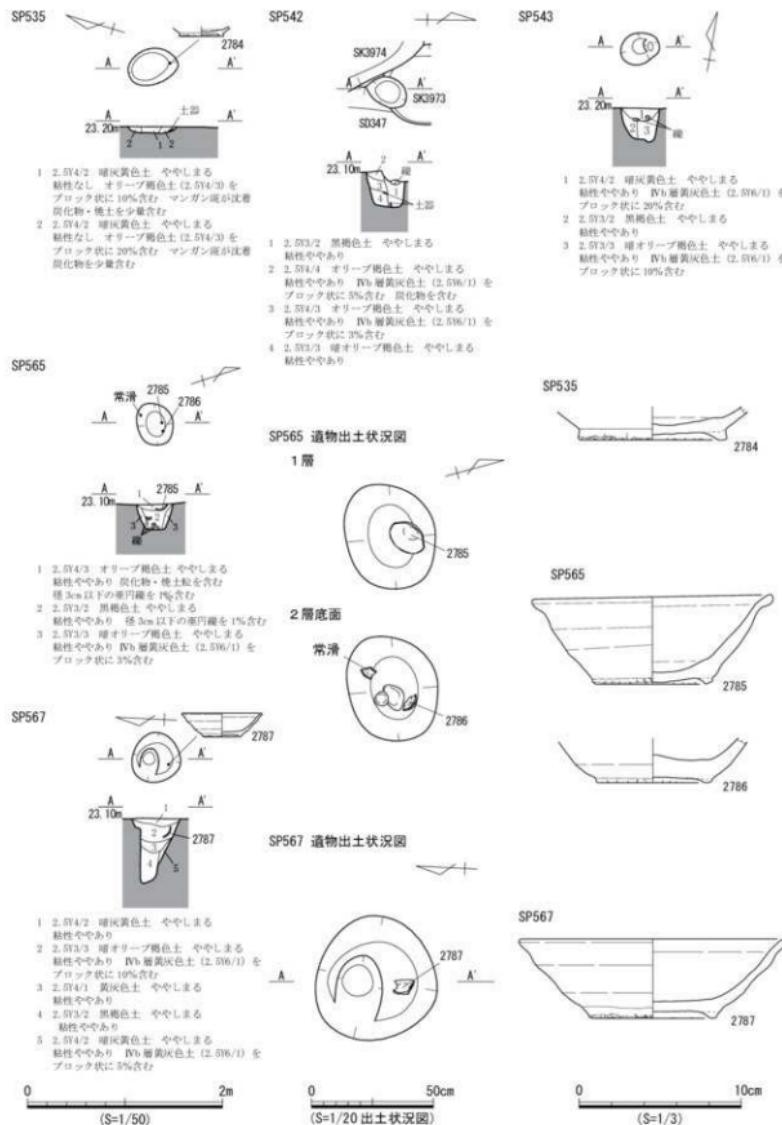


図473 SP535・SP542・SP543・SP565・SP567 遺構図・出土遺物実測図

筈型である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はやや丸くなる。北側の平面は不整円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 7層に分層した。1層～4層が南側の土坑状の堆積で、5層～7層が北側の土坑状の堆積である。焼土ブロックと炭化物が混じる埋土は南側と北側で類似するが、2層が5層を掘り込むように堆積することから、南側と北側は別遺構であった可能性がある。

遺物出土状況 南側の土坑状の1層から土師器皿1点(2789)が逆位で、北側の土坑状の5層から山茶碗2点(2790・2791)が逆位で、いずれも焼土ブロックと炭が広がる範囲内から出土した。その他に埋土中から土師器24点、須恵器7点、陶器7点、山茶碗24点、釘1点が散在して出土した。1層若しくは5層からの出土が多い。

出土遺物 土師器など4点を図示した。2789はロクロ土師器の小皿である。2790と2791は第5型式の尾張型山茶碗の小皿と碗である。2792は釘である。

時期 図示した2790と2791から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3721 (図476)

検出状況 NH10～NI11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。北側は発掘区外続くが、北側に向かって収束すると思われる。南側でSD329と重複する。本遺構はSD329より新しい。

規模・形状 平面形は北側の不定形と、南側の不整方形が接続した形状である。壁面の傾斜は緩やかである。底面は南側の不整方形部分が一段下がり、平坦である。

埋土 A-A'断面は2層、B-B'断面は3層に分層した。いずれも水平に堆積する。A-A'断面の1層は北側の不定形部分と南側の不整方形部分との転換点で分層できるため、北側部分と南側部分は別遺構の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器190点、須恵器15点、山茶碗79点、陶器6点、金属製品4点(釘)

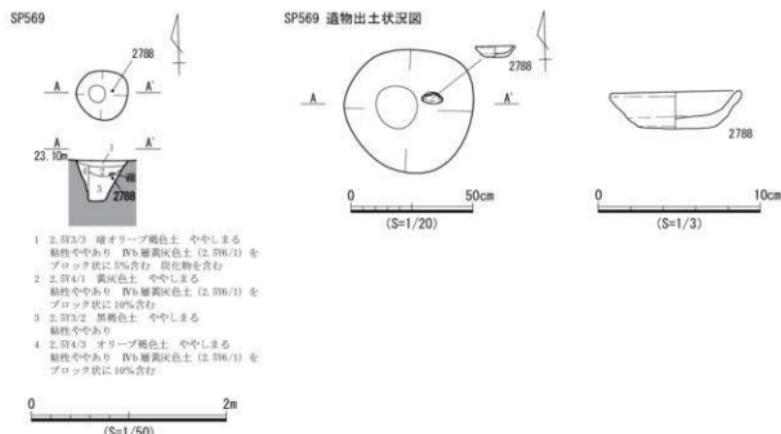


図474 SP569遺構図・出土遺物実測図

3点、鉄球1点)が散在して出土した。

出土遺物 土師器など3点を図示した。2793はM3類の土師器皿である。2794は土師器の茶釜で、直立する口縁部が高い。2795は釘、2796は鉄球である。

時期 図示した2794から、本遺構は15世紀後葉から16世紀前葉と考えられる。

SK3739(図477)

検出状況 NI11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。水平に堆積する。1層と2層に礫と炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器38点、須恵器3点、山茶碗23点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2797は浅間窯下1号窯式に比定した東濃型山茶碗である。

時期 図示した2797から、本遺構は12世紀後葉と考えられる。

SK3751(図477)

検出状況 NI11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不整梢円形である。壁面の傾斜はやや緩やかで、底面は丸くなる。

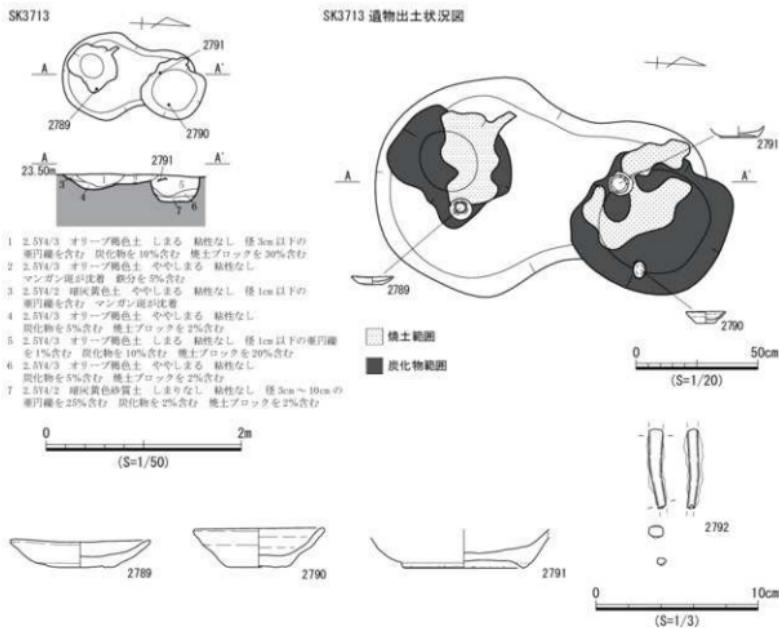


図475 SK3713 遺構図・出土遺物実測図

SK3721

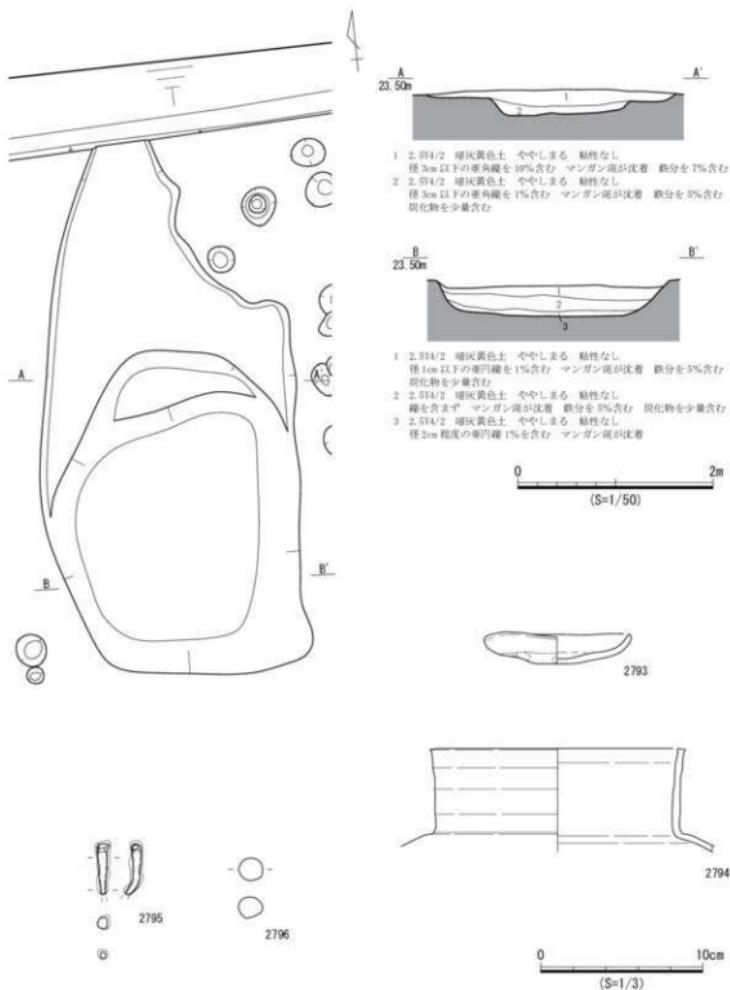


図 476 SK3721 遺構図・出土遺物実測図

埋土 2層に分層した。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器8点、山茶碗16点、鉄滓1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 第5型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3755（図477）

検出状況 NI11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦であるが狭い。

埋土 4層に分層した。1層～3層は4層を再掘削したような堆積である。また、1層の底部で扁平な角礫を確認した。形状と堆積状況から、柱穴の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器2点と山茶碗5点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

1層からの出土が多かった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 第5型式以降の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SK3777（図477）

検出状況 NI10～NJ10 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は南北方向に長い隅丸方形である。壁面の傾斜はやや急である。底面は中央部が撥状にやや盛り上がるため、北側に不整隅丸方形、南側に不整梢円形の凹みができる。

埋土 2層に分層した。層界にやや凹凸があるものの、ほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 埋土中から土師器112点、須恵器7点、山茶碗97点、常滑産陶器1点、砥石1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 第5型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3783（図477）

検出状況 NJ11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不整円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや丸い。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平に堆積する。2層はやや中央部が窪む。

遺物出土状況 埋土中から土師器95点、須恵器4点、灰釉陶器1点、山茶碗82点、白磁1点、土鍤1点、剥片1点、釘2点が散在して出土した。中層付近に残りのよい遺物が多い。

出土遺物 山茶碗など4点を図示した。2798と2799は第5型式の尾張型山茶碗の小皿と碗である。2800はVII-1 b類の白磁皿で、内面見込みにヘラ描きの花文が施される。2801は釘である。

時期 図示した2790と2791から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3785（図478）

検出状況 NJ11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。



図477 SK3739・SK3751・SK3755・SK3777・SK3783 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 平面形は不整円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はやや丸くなる。

埋土 4層に分層した。2層～4層はレンズ状に堆積する。1層・2層・4層に炭化物を少量含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器77点、須恵器5点、山茶碗61点、陶器3点、土製品2点（輪羽口、土鍤）、金属製品2点（盤、棒状鉄製品）が散在して出土した。

出土遺物 土師器など4点を図示した。2802はD類の伊勢型鍋である。2803は土製の輪羽口で、滓が付着し、緑青が確認できる。2804は盤、2805は棒状鉄製品である。

時期 図示した2802から、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

SK3799（図478）

検出状況 NJ11～NK11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。埋土全体にブロック土や焼土ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 南側の底面から完形の土師器皿1点(2806)と白磁碗1点(2810)が並んで出土し、土師器皿は逆位、白磁碗は2つに割れ、半分程度残存する状態で正位で出土した。その他に埋土中から土師器177点、須恵器21点、灰釉陶器1点、山茶碗232点、陶磁器5点、釘4点が散在して出土した。南側に残りのよい土器が多い。

出土遺物 土師器など8点を図示した。2806と2807はM2類の土師器皿である。2808と2809は第5型式の尾張型山茶碗の碗と小皿で、2809の外面底部には「千」とみられる墨書が確認できる。2810はIV-2 b c類の白磁碗で、扁平な玉縁口縁を有し、底部内面は沈線より下部が凹む。2811～2813は釘である。

時期 図示した2808と2809から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3852（図479）

検出状況 NL11～NL12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。2層は底面北側に部分的に堆積する。

遺物出土状況 埋土中から土師器38点、須恵器7点、山茶碗50点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗2点を図示した。2815と2814は第5型式の尾張型山茶碗の碗と小皿である。

時期 図示した2814と2815から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3859（図480・481）

検出状況 NJ12～NK12グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。北東側は発掘区外に続く。北側と南東側は搅乱により消失する。中央でSB34-P3・SD332～SD335と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 検出した範囲では、平面形は不定形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層と2層に埋土にブロック土が含まれることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 東側の1層から完形の山茶碗の小皿(2818)が正位で出土した。その他に埋土中から土師器213点、須恵器75点、山茶碗457点、陶磁器13点、金属製品5点（石突状鉄製品1点、釘2点、鉄滓2点）が散在して出土した。

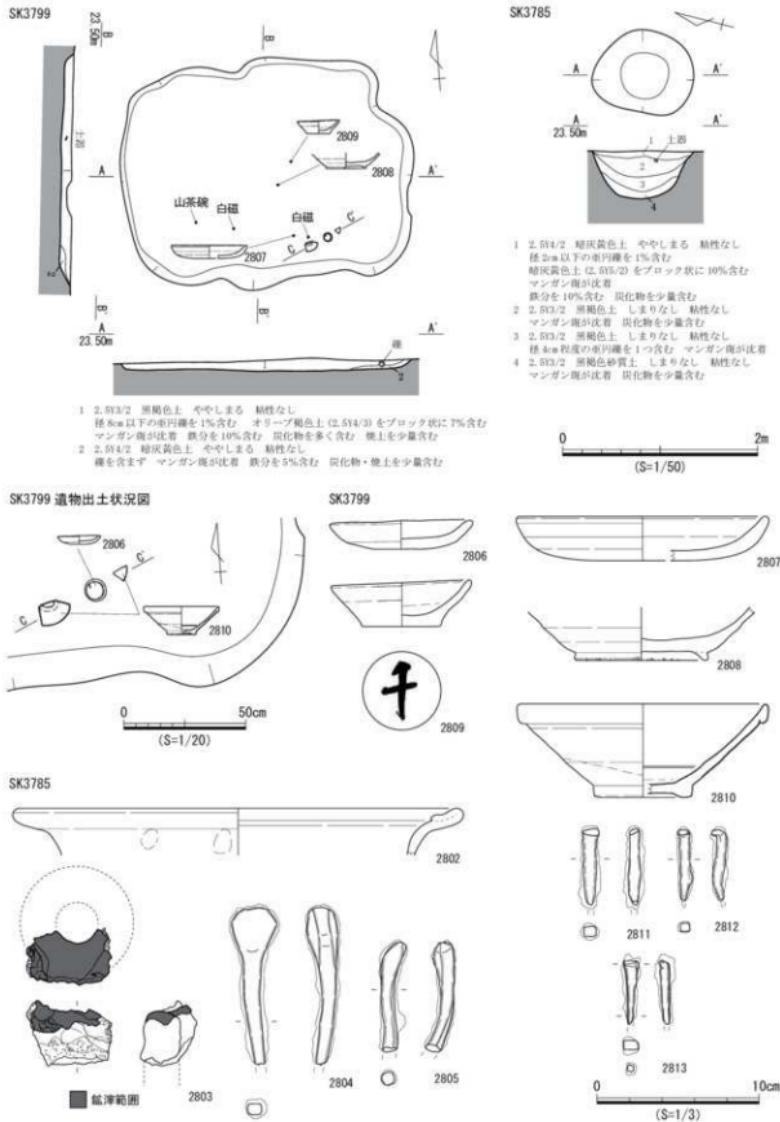


図 478 SK3785・SK3799 遺構図・出土遺物実測図

出土遺物 須恵器など8点を図示した。2816と2817は美濃須衛窯産の須恵器で、2816はⅢ期後半に比定した杯身B類、2817はⅢ期後半～Ⅳ期第1小期に比定した短頸壺である。2818と2819は第5型式と第6型式の尾張型山茶碗の小皿、2820は谷追間2号窯式に比定した東濃型山茶碗である。2821は石突状鉄製品で、内側は中程まで中空で袋状となり、先端部は丸く作られる。2822と2823は鉄滓である。

時期 SB34・SD332～SD335との重複関係と図示した2819から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK3900（図482）

検出状況 NL13 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側で SB34-P6 と重複する。本遺構は SB34 より新しい。

規模・形状 平面形は長方形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。2層は底面付近に薄く堆積し、1層が大半を占める。

遺物出土状況 1層から土師器2点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 SB34 との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK3943（図482）

検出状況 NM11 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。亜円錐を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 第5型式以降の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

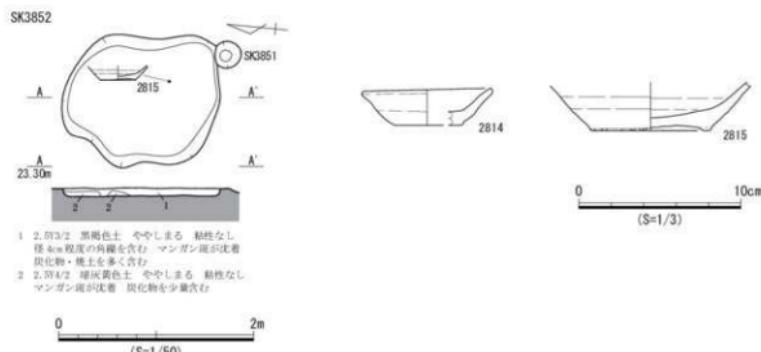
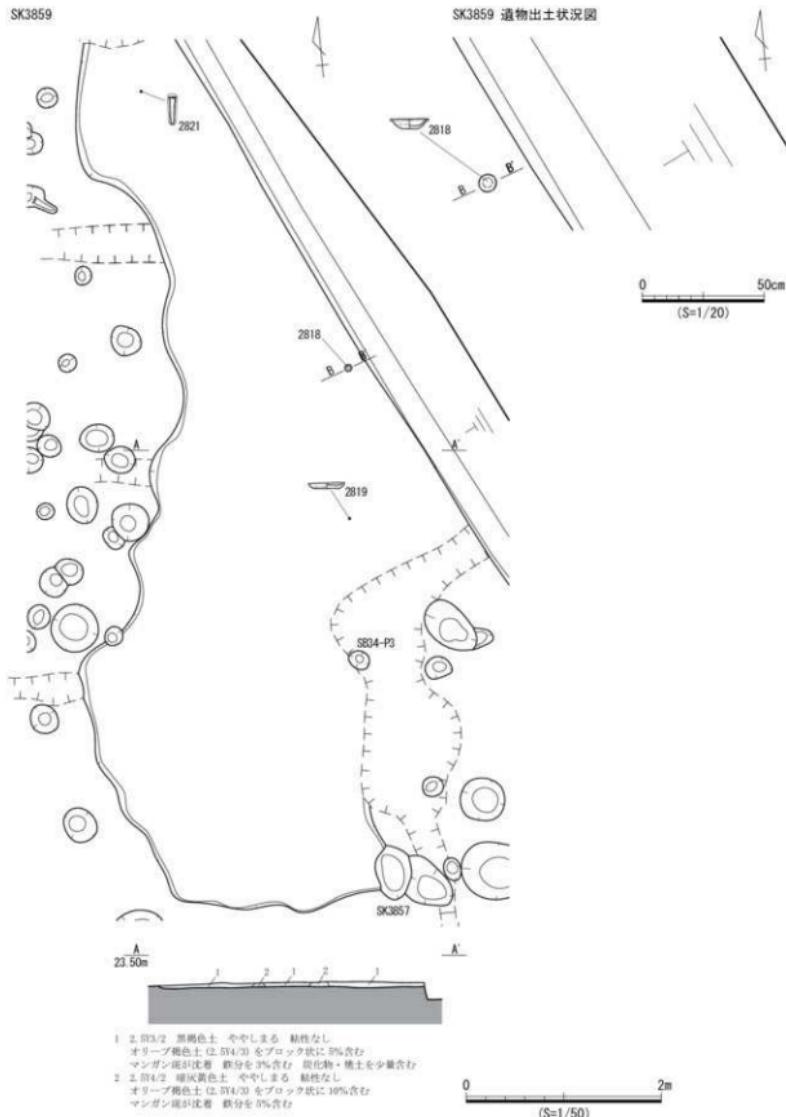


図479 SK3852 遺構図・出土遺物実測図



えられる。

SK3960 (図 482)

検出状況 NN10 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不整橢円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層と2層は部分的に堆積することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、須恵器1点、山茶碗4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 第5型式以降の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SK3973 (図 482)

検出状況 NI 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。南側で SP542・SK3974・東側で SD347 と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は橢円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 埋土中から土師器16点、須恵器1点、山茶碗16点が散在して出土した。

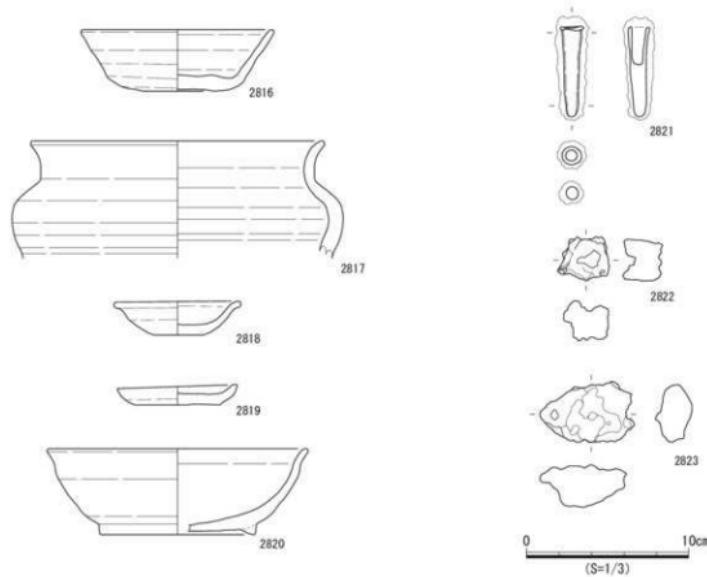


図 481 SK3859 出土遺物実測図

出土遺物 土師器など3点を図示した。2824はA類の伊勢型鍋である。2825と2826は第5型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2825と2826から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK3974（図482）

検出状況 NJ7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であったが、西側の一部は不明瞭であった。西側は発掘区外に続く。北側でSP542・SK3973、東側でSD347と重複する。本遺構はSK3973・SD347より古く、SP542より新しい。

規模・形状 平面形は不整円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器12点、須恵器6点、灰釉陶器3点、山茶碗25点、陶磁器2点、土製品1点（種別不明）、刀子1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗など3点を図示した。2827は第5型式の尾張型山茶碗、2828は丸石3号窯式に比定した東濃型山茶碗である。2829は刀子で、茎と刃部の基部が残存する。

時期 図示した2827から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4008（図483）

検出状況 NJ9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不整円形で、北東側に張り出す。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや丸みを帯びる。北東側の張り出し部分にテラス状の平坦面をもつ。

埋土 4層に分層した。レンズ状に中央が窪む堆積である。1層・3層・4層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器16点、須恵器8点、山茶碗15点、陶磁器3点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2830はⅧ期（尾張型第3型式併行）に比定した美濃須衛産の山茶碗である。

時期 図示した2830から、本遺構は11世紀後葉から12世紀中葉と考えられる。

SK4030（図483）

検出状況 NJ8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。西側でSK4046・SD345、東側でSD343と重複する。本遺構はSD345より古く、SK4046・SD343より新しい。

規模・形状 平面形は不整梢円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。2層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器3点、須恵器6点、山茶碗9点、常滑産陶器2点、釘1点が散在して出土した。

出土遺物 釘1点（2831）を図示した。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK4039（図483）

検出状況 NJ7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSD347と重複する。

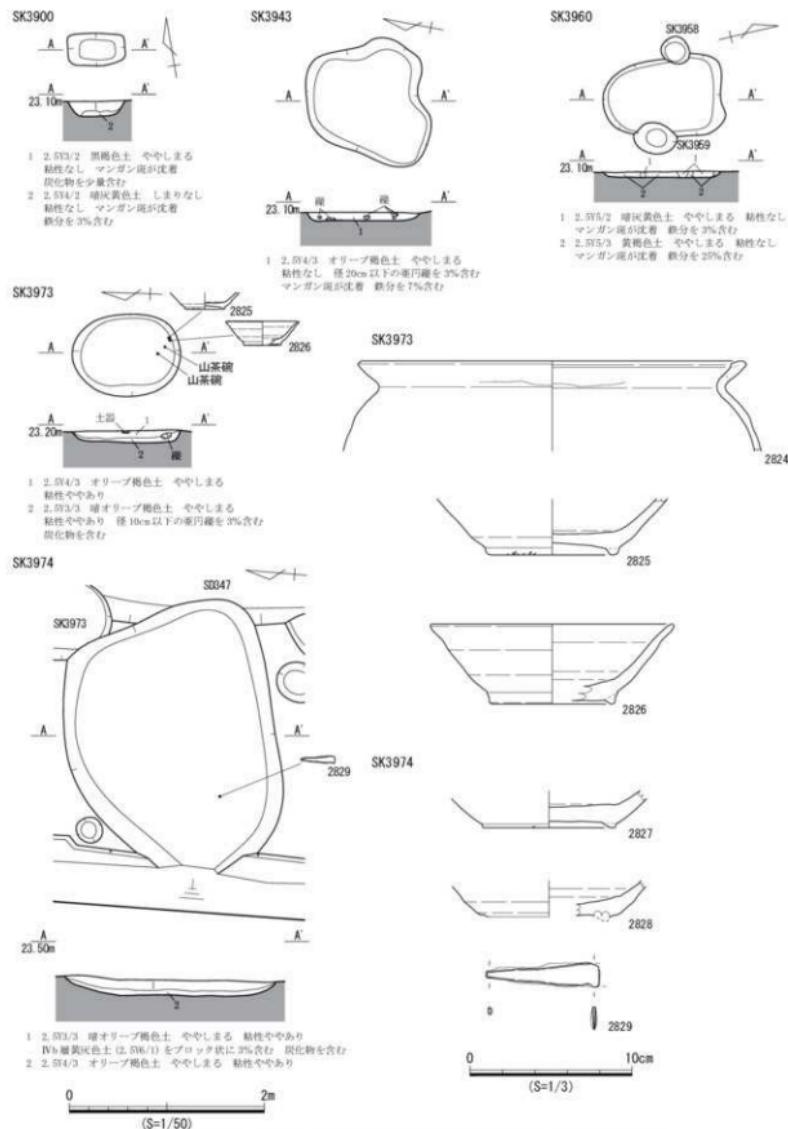


図482 SK3900・SK3943・SK3960・SK3973・SK3974 遺構図・出土遺物実測図

本遺構はSD347より新しい。

規模・形状 平面形は楕円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央北側に小土坑状の凹みがある。

埋土 6層に分層した。3層と4層は小土坑状の凹み部分に堆積する。1層と2層は3層～6層の上にレンズ状に堆積する。4層と6層に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器80点、須恵器2点、山茶碗29点、金属製品19点（鉤金具1点、釘18点）が散在して出土した。上層からの出土が多く、金属製品はすべて1層から出土した。

出土遺物 土師器など6点を図示した。2832はM3類の土師器皿である。2833～2835は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。2836は鉤金具で、先端部は扁平である。2837は釘である。

時期 SD347との重複関係と図示した2833～2835から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4046（図483）

検出状況 NJ8～NK8グリッド、IVb層上面で検出した。遺構埋土と基盤層が類似し、平面形は不明瞭であった。北側でSD346、東側でSD345と重複する。本遺構はSD345より古く、SD346より新しい。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸くなる。

埋土 3層に分層した。レンズ状に堆積する。1層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 中央西側の底面近くで山茶碗（2838）が正位で出土した。その他に埋土中から須恵器1点、山茶碗9点、白磁2点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2838は第6型式の尾張型山茶碗である。

時期 SD345・SD346との重複関係と図示した2838から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK4122（図484）

検出状況 NN9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土や礫を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 底面北側で擂鉢（2839）と平坦面を上にした礫が出土したが、意図的な配置は見られなかった。その他に埋土中から土師器8点、山茶碗20点が散在して出土した。

出土遺物 古瀬戸1点を図示した。2839は後IV期新段階の擂鉢である。

時期 図示した2839から、本遺構は15世紀後葉と考えられる。

SK4154（図485）

検出状況 NO9～NO10グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSB37-P5・SD357、西側でSB36-P7と重複する。底面でSB36-P5・P6・P8を検出した。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は不整方形である。壁面の傾斜はやや急である。底面は中央に向かってやや窪み、丸みを帯びる。なお、本遺構内外でSK4157～SK4162・SK4170を検出したが、関連は不明である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。2層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

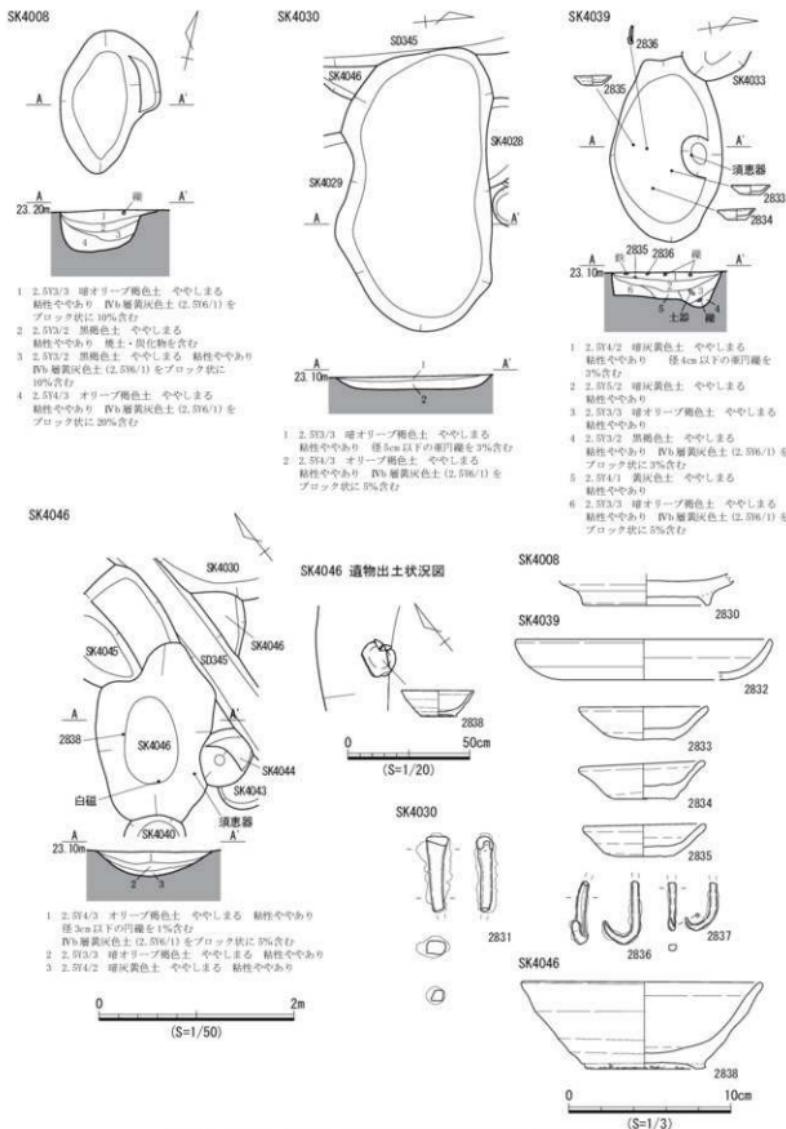


図 483 SK4008・SK4030・SK4039・SK4046 造構図・出土遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から土師器 148 点、須恵器 6 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 299 点、陶磁器 8 点、土錘 1 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など 5 点を図示した。2840 は M3 類の土師器皿である。2841 は C 類の伊勢型鍋である。2842 は第 6 型式の尾張型山茶碗である。2843 は窯洞 1 号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。2844 は土錘である。

時期 SB36・SB37 との重複関係と図示した 2842 から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉と考えられる。SK4191 (図 486)

検出状況 NM8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体で SK4196 と重複

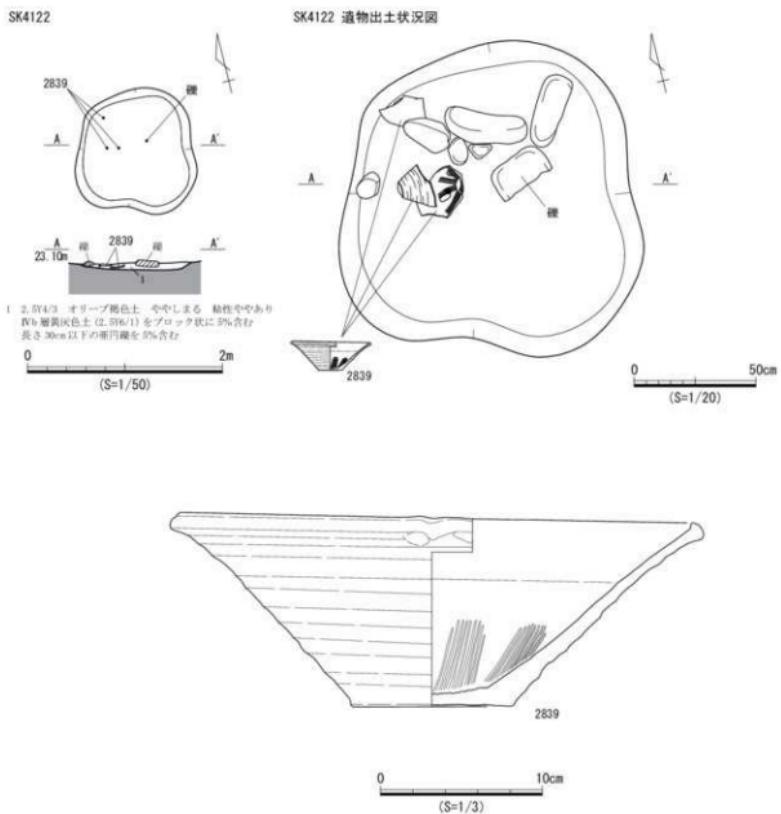


図 484 SK4122 遺構図・出土遺物実測図

SK4154

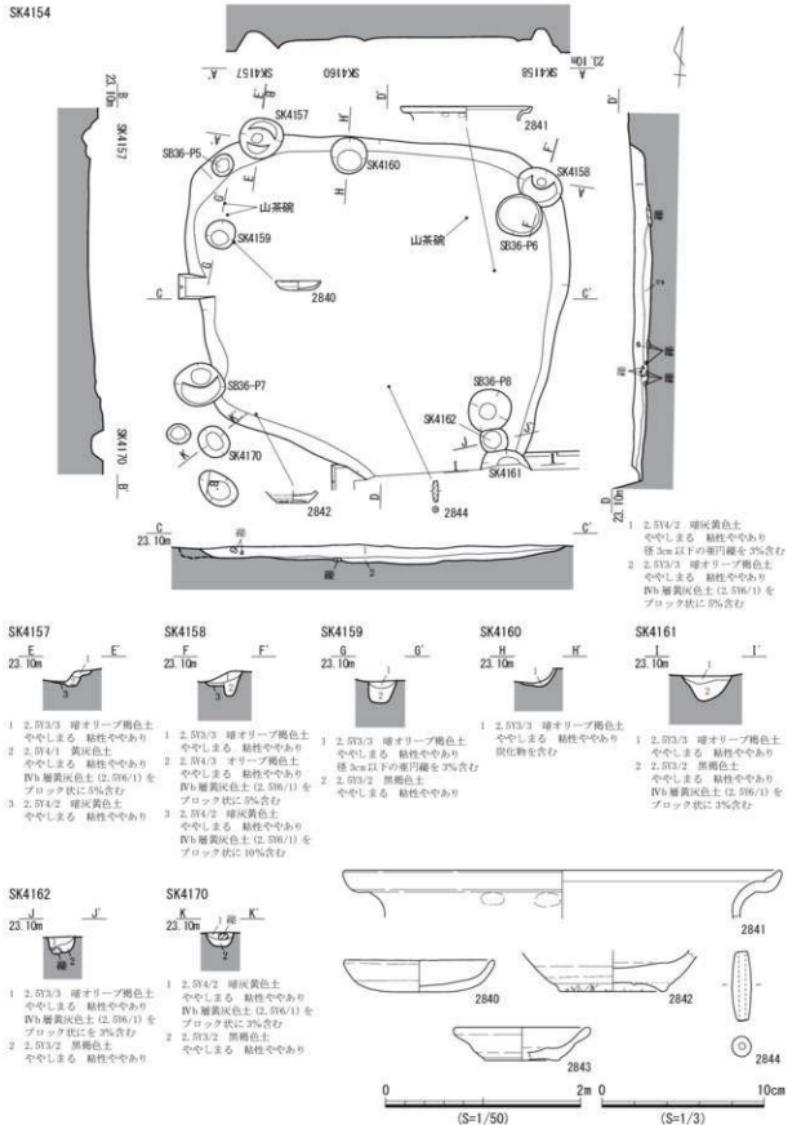


図 485 SK4154 造構図・出土遺物実測図

する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。亜円礫を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 北西側で山茶碗1点(2845)が縦位で出土した。その他に埋土中から山茶碗1点が出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2845は第5型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2845から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4192(図486)

検出状況 NM8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側でSK4196と重複する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は隅丸方形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。なお、本遺構内でSK4198を検出したが、関連は不明である。

埋土 2層に分層した。1層に径4cm以下の亜円礫を多く含む。2層に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器5点、灰釉陶器1点、陶器1点、山茶碗7点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。2846はM3類の土師器皿である。

時期 図示した2846から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

SK4196(図487)

検出状況 NM8～NM9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。遺構内でSB38-P1・P2・SB39-P3・SA47-P1・SP565、北側でSK4192、南側でSK4204と重複する。底面でSK4283を

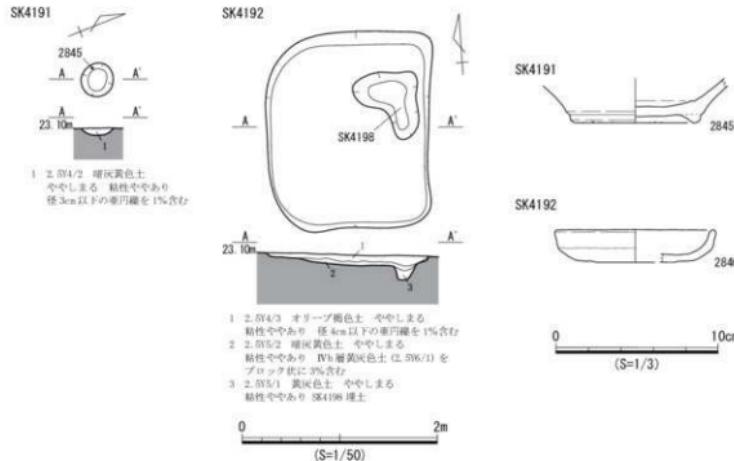


図486 SK4191・SK4192遺構図・出土遺物実測図

検出した。本遺構はSB38・SB39・SA47・SP565・SK4204より古く、SK4283より新しい。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。周辺の建物群の形成に伴い、地形の浅い窪みを水平にするために埋め戻した整地土の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器55点、須恵器25点、灰釉陶器7点、山茶碗245点、陶磁器12点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など2点を図示した。2847はM3類の土師器皿である。2848は第5型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2848から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4204（図488）

検出状況 N08グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSB39-P3・SK4196・SK4205と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は隅丸方形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。3層と4層は壁際に三角堆積し、1層と2層は全体に水平に堆積する。埋土全体に炭化物を含む。1層と4層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 底面で山茶碗6点（2849～2853、小皿1点）が、2849と2850は正位、2851と2852は逆位で出土した。また、炭化物が付着した円錐を確認した。その他に埋土中から土師器66点、灰釉陶器1点、山茶碗122点、常滑産陶器2点が散在して出土した。

出土遺物 土師器5点を図示した。2849～2853は尾張型山茶碗で、2853は第4型式の片口鉢、2849と2850は第5型式、2851と2852は第7型式の碗である。

時期 図示した2851と2852から、本遺構は13世紀中葉から末と考えられる。

SK4205（図489）

検出状況 N08グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体でSK4196、南側でSK4204、東側でSK4206と重複する。本遺構はSK4204より古く、SK4196・SK4206より新しい。

規模・形状 南東側が重複により消失するが、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。3層に炭化物を含む。2層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 底面で残りのよい山茶碗8点（2854～2861）、青磁碗2点（2862・2863）が出土した。山茶碗は正位と逆位が混在していた。その他に埋土中から土師器34点、灰釉陶器2点、山茶碗89点、陶磁器8点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗など11点を図示した。2854～2861は尾張型山茶碗で、2854は第6型式の小皿、2855～2857は第6型式の碗、2858～2861は第7型式の碗である。2857は外面底部に「彦平」と判読できる墨書が確認できる。2862と2863は龍泉窯系青磁碗である。2862はI-4類で、体部内面を片彫により五分割している。2863はI-2C類で、内面に片彫蓮花文を施す。2864はI-1b類の同安窯系青磁碗で、内面に柳点描文、外面に柳目文を施す。

時期 図示した2858～2861から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

SK4196

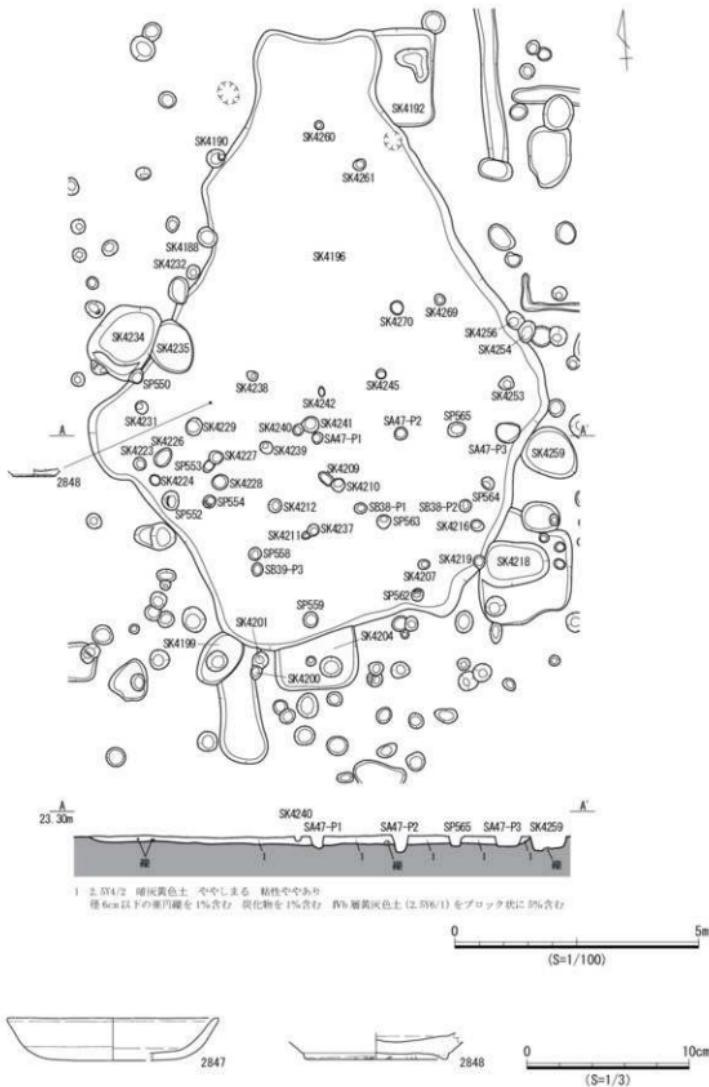


図 487 SK4196 遺構図・出土遺物実測図

SK4206 (図490)

検出状況 N08グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南西側でSK4204・SK4205、遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4204・SK4205より古く、SK4196より新しい。

規模・形状 南側が消失するが、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。炭化物と焼土が混じる。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と

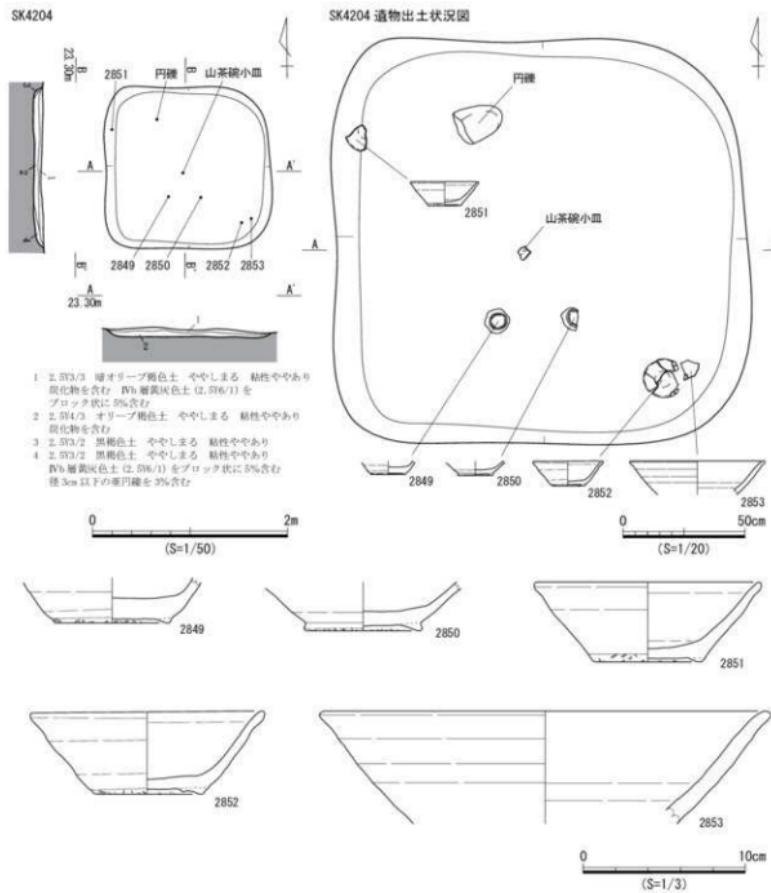


図488 SK4204遺構図・出土遺物実測図

考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器 28 点、山茶碗 40 点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4196・SK4204・SK4205との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

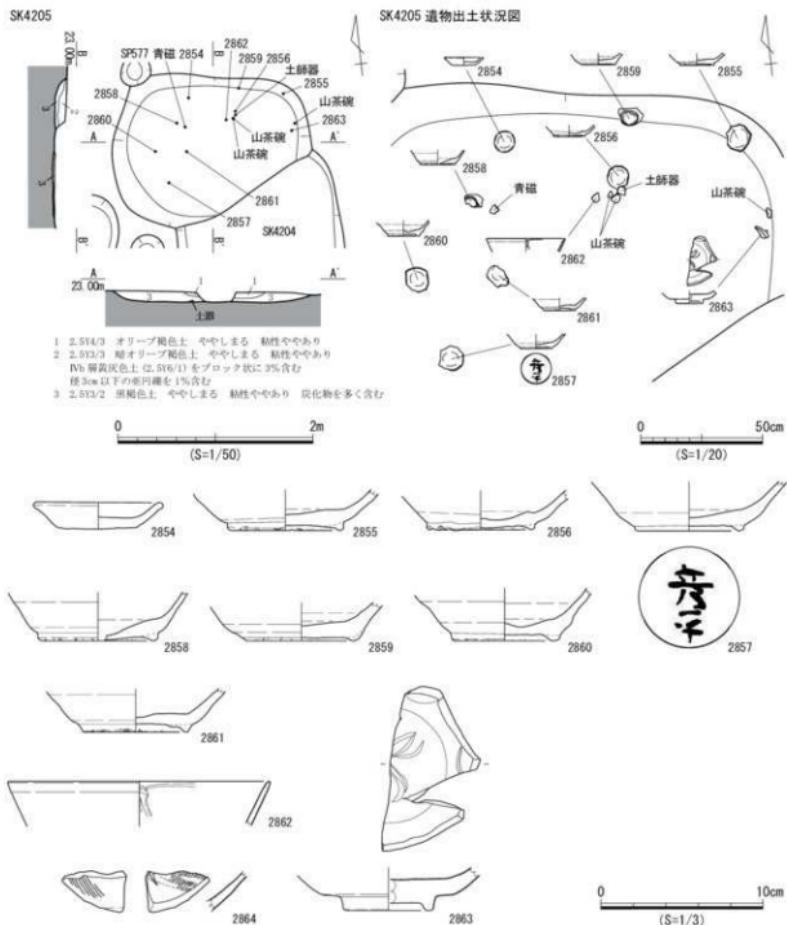


図 489 SK4205 遺構図・出土遺物実測図

SK4208（図490）

検出状況 N08グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は不整円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。炭化物と焼土が混じる。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 検出面で山茶碗1点（2865）が逆位で出土した。その他に埋土中から土師器9点、青磁1点、山茶碗50点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2865は第7型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2865から、本遺構は13世紀後葉から末と考えられる。

SK4215（図490）

検出状況 NN8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は不整楕円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。層界にやや凹凸があるが、ほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 埋土中から山茶碗4点、常滑産陶器1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4196との重複関係と第5型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4218（図490）

検出状況 N09グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK4220、北東側でSK4196と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は不定形である。中央から西側が梢円形の土坑状に一段落ち込む。壁面の傾斜は緩やかで、底面はやや丸くなる。土坑状の落ち込みの周り、北側から南側にかけてコ字形にテラス状の平坦面をもつ。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層と2層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。なお、底面の形状が歪になる遺構であるが、複数の遺構が重複する堆積状況は認められなかった。

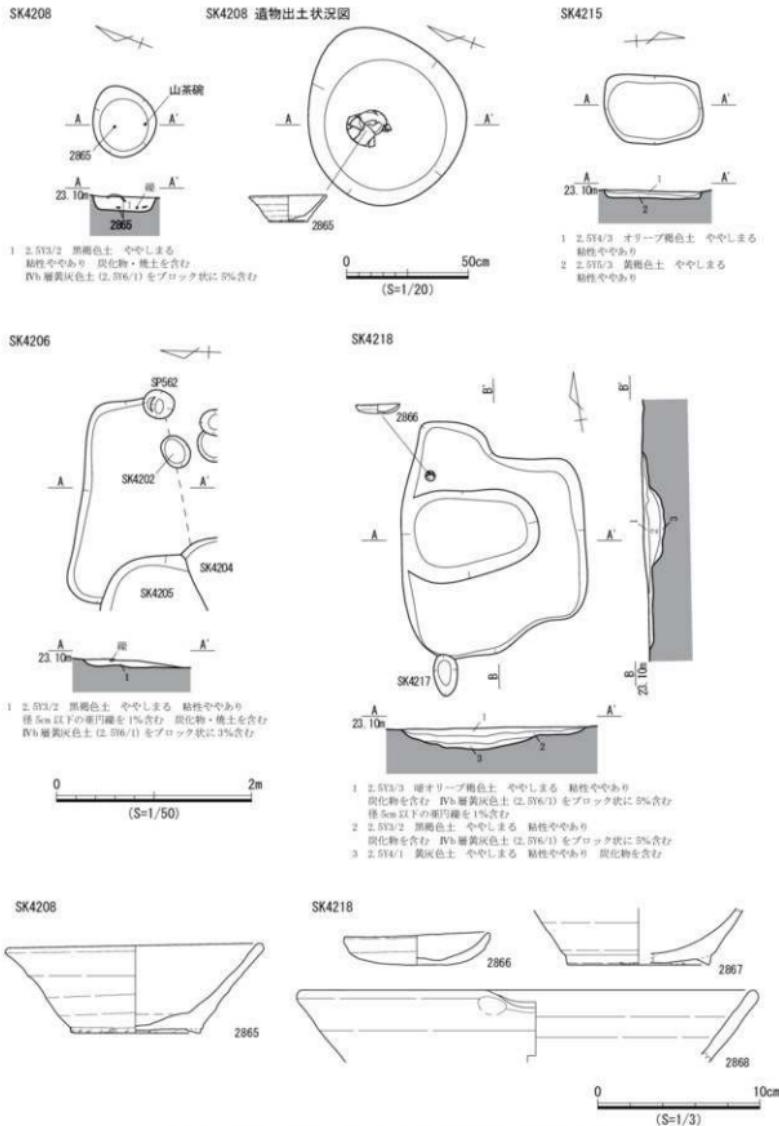
遺物出土状況 北部のテラス状の平坦面から、完形の土師器皿（2866）が正位で出土した。その他に埋土中から土師器107点、須恵器2点、山茶碗180点、陶磁器4点、土製品1点（種別不明）が散在して出土した。

出土遺物 土師器など3点を図示した。2866はM3類の土師器皿である。2868は第5型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。2867は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗である。

時期 図示した2868から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4220（図491）

検出状況 N09グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK4218と重複する。



本遺構は SK4218 より古い。

規模・形状 平面形は楕円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。2層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 中央で被熱した礫を縦位で確認した。その他に埋土中から須恵器1点、山茶碗4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4218との重複関係から、本遺構は13世紀初頭以前と考えられる。

SK4225（図491）

検出状況 NN7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側でSK4226、遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は丸みを帯びる。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 中央で亜円礫を確認した。その他に埋土中から山茶碗1点が出土した。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4196・SK4226との重複関係から、本遺構は12世紀後葉以降と考えられる。

SK4226（図491）

検出状況 NN7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSK4225、遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4225より古く、SK4196より新しい。

規模・形状 平面形は不整楕円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 底面近くから中層にかけて、山茶碗2点(2870・2869)と土師器皿1点が正位で、山茶碗1点(2869)が逆位で出土した。その他に埋土中から土師器3点、山茶碗6点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など3点を図示した。2869はM3類の土師器皿である。2870と2871は第5型式の尾張型山茶碗で、2870は小皿、2871は碗である。

時期 図示した2870と2871から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4230（図491）

検出状況 NN7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は不整円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 南東側の底面で、平坦面を上にして据え付けられたような扁平な円礫を確認した。その他に埋土中から土師器3点、山茶碗8点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4196との重複関係と第5型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4234（図491）

検出状況 NN7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は不定形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はわずかに丸みを帯びる。南壁面にテラス状の平坦面をもつ。

埋土 4層に分層した。最初に4層が底面中央に堆積し、3層がその周辺を充填するように堆積する。このような堆積状況から、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器13点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗28点、白磁2点、鉄滓1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2872は第6型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した2872から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK4247（図491）

検出状況 NN8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。遺構全体でSK4196・SK4248と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土、炭化物や焼土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 南西側の底面から土師器皿1点（2873）が縦位で出土した。その他に埋土中から土師器3点、山茶碗2点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。2873はM4類の土師器皿である。

時期 図示した2873から、本遺構は13世紀末から14世紀後葉と考えられる。

SK4248（図492）

検出状況 NN8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は、遺構埋土と基盤層が類似し、かつ周縁の土色が漸移的であり不明瞭であった。南東側でSK4272、遺構内でSK4247、遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4247より古く、SK4196・SK4272より新しい。

規模・形状 平面形は不整方形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器77点、須恵器3点、山茶碗147点、陶器8点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4196・SK4247・SK4272との重複関係と第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK4252（図492）

検出状況 NN9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体でSK4196と重複する。本遺構はSK4196より新しい。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面は丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。水平に堆積する。1層には炭化物と焼土が混じる。埋土全体に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から検出面にかけて、被熱した円礫を斜位で確認した。埋土中から土師器1点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

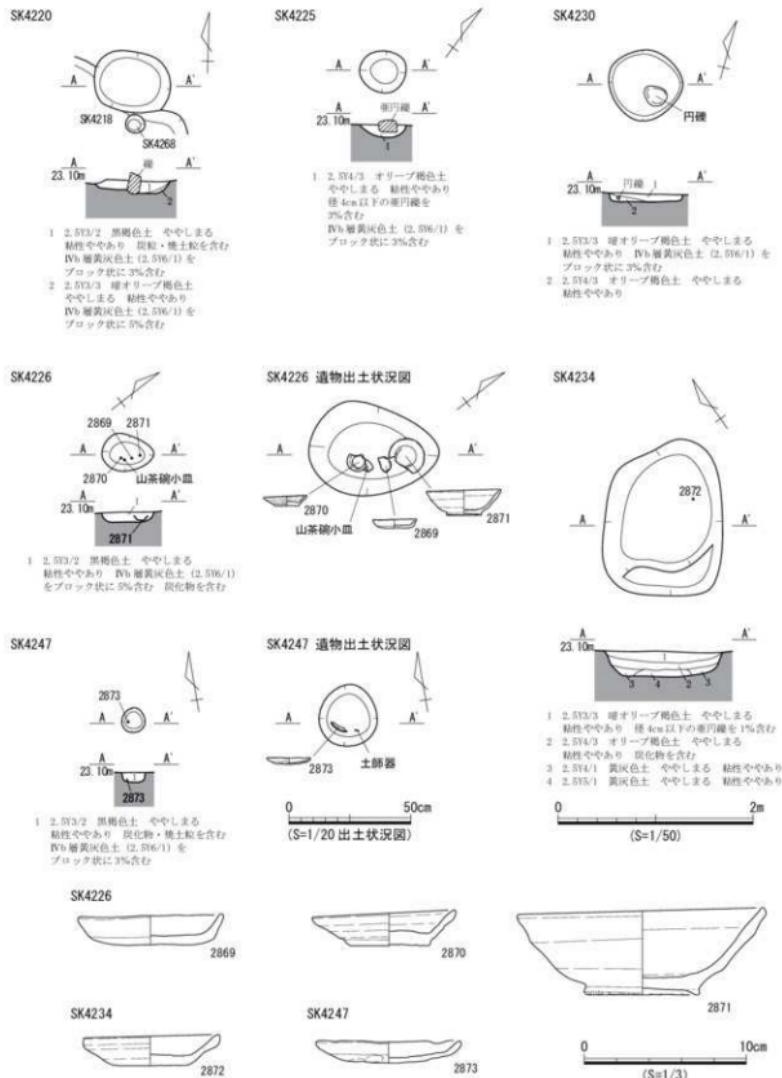


図491 SK4220・SK4225・SK4226・SK4230・SK4234・SK4247 遺構図・出土遺物実測図

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4196との重複関係から、本遺構は12世紀後葉以降と考えられる。

SK4272(図492)

検出状況 NN9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。遺構全体でSK4196、北東側でSK4248と重複する。本遺構はSK4248より古く、SK4196より新しい。

規模・形状 平面形は不整方形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層から土師器4点、山茶碗6点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2874は第4型式の尾張型山茶碗の小碗である。

時期 SK4196・SK4248との重複関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

SK4283(図493)

検出状況 NN8グリッド、SK4196底面で検出した。平面形は明瞭であった。本遺構はSK4196より古い。

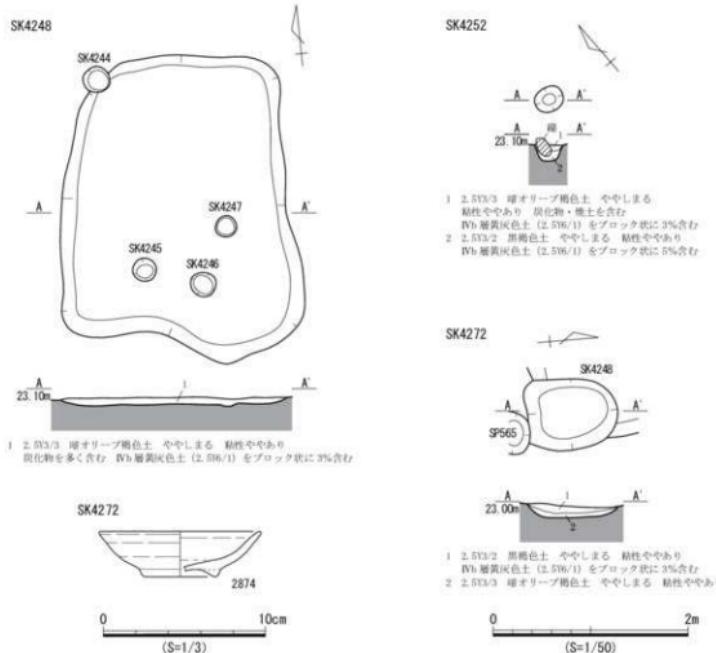


図492 SK4248・SK4252・SK4272 遺構図・出土遺物実測図

SK4283

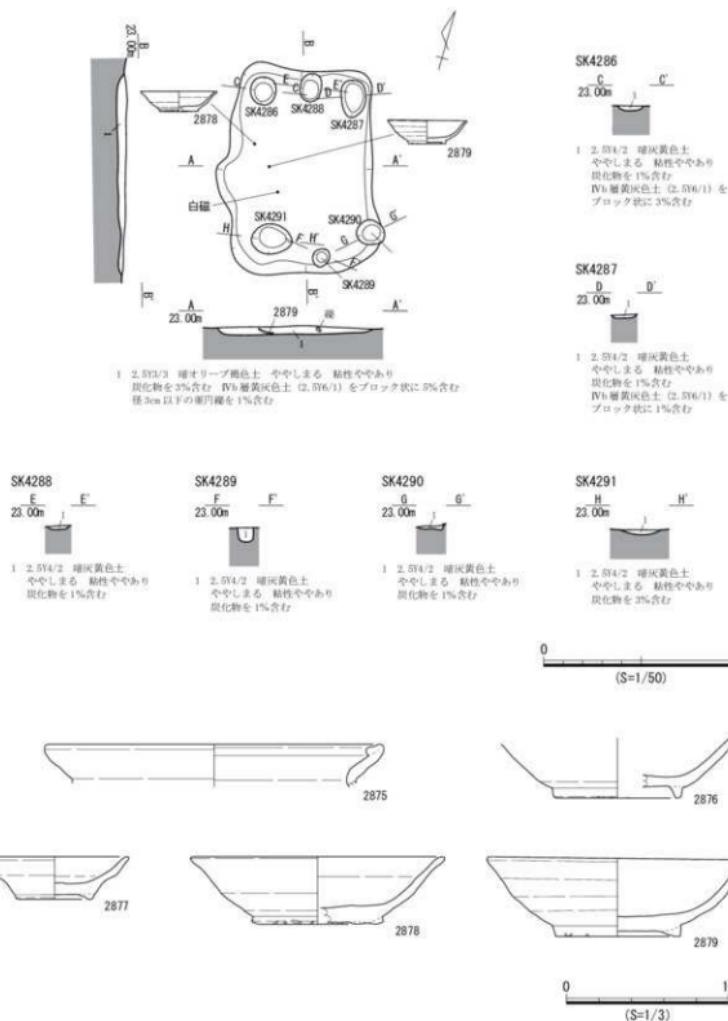


図 493 SK4283 造構図・出土遺物実測図

規模・形状 平面形は不整方形で、西辺の一部が外側に突出する。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。底面から北辺と南辺に沿うように6基の土坑（SK4286～SK4291）を検出したが、本遺構との関連性は不明である。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器20点、山茶碗45点、陶磁器1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など5点を図示した。2875はA類の伊勢型鍋である。2877～2879は尾張型山茶碗で、2877は第4型式の小碗、2878と2879は第5型式の碗である。2876は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗である。

時期 SK4196との重複関係と図示した2878・2879から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4323（図494）

検出状況 NP8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。検出時に複数の円窓が確認できた。

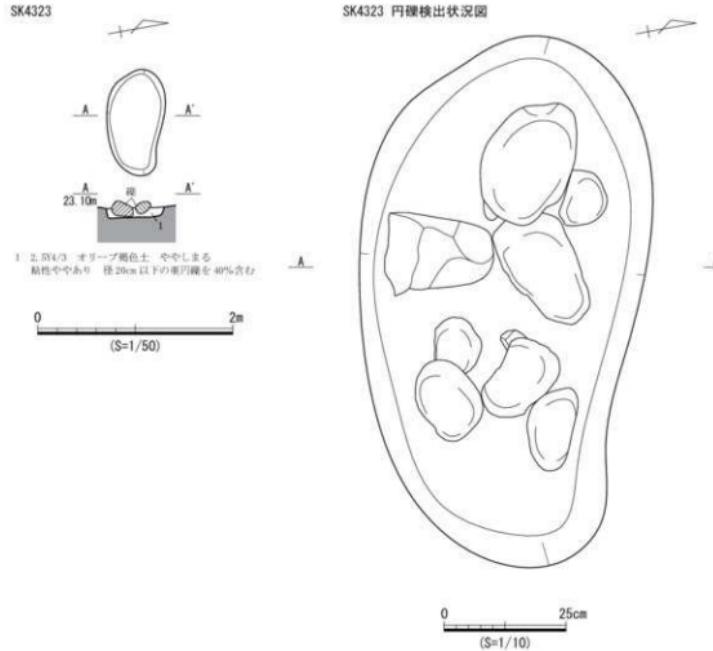


図494 SK4323 遺構図

規模・形状 平面形は不整梢円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面は平坦である。

埋土 単層の埋土である。多数の礫を含むことから、人為堆積と考えられる。礫の中には被熱したものもあった。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点、山茶碗3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

5 溝状遺構

SD329（図495）

検出状況 NI11～NJ11 グリッド、IV層b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側で SK3721 と重複する。本遺構は SK3721 より古い。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構である。壁面の傾斜は底面から中部にかけては急であるが、中部から上部にかけてやや緩やかとなる。このため、底面は一段深く掘り込まれたような形状となる。底面は丸くなり、底面の標高は南に向かって若干下がる。

埋土 2層に分層した。1層に礫やブロック土を含む。堆積状況から、1層は再掘削された可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器31点、須恵器13点、山茶碗56点、陶磁器3点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2880は第4型式の尾張型山茶碗の小碗である。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD331（図495）

検出状況 NK12 グリッド、IV層b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。東西端は重複により消失する。東側で SD332 と重複する。本遺構は SD332 より古い。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構である。壁面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平坦である。

埋土 2層に分層した。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器2点、須恵器2点、山茶碗5点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SD332との重複関係から、本遺構は12世紀中葉以前と考えられる。

SD332（図496）

検出状況 NJ12～NK12 グリッド、IV層b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。北部は発掘区外に延びる。南西側で SD331 と重複する。本遺構は SD331 よりも新しい。また、東側に近接する SD333 とは並行し、北側で接合するが、先後関係は判然としなかった。SD332 と SD333 は別遺構として調査した。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構である。南端は SD333 南端とほぼ同じ位置で収束し、北側は前述したように SD333 と接続し、併せてコ字形になる。上端は湾曲するため、幅は一定せず、北側に比べ南側が広くなる。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埋土 2層に分層した。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 南側で土師器皿4点(2881～2884)が逆位でまとまって出土した。その他に埋土中から

土師器 184 点、須恵器 15 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 191 点、陶磁器 5 点、鉄滓 2 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など 7 点を図示した。2881～2884 は M2 類の土師器皿である。2885 は谷迫間 2 号窯式に比定した東濃型山茶碗である。2886 と 2887 は鉄滓である。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD333 (図 496)

検出状況 NJ12～NK12 グリッド、IV 層 b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側は発掘区外に延びる。前述のとおり、東側の SD332 と並行し北部で接合するが、先後関係は判然としなかった。また、東側には約 0.4m 離れて SB34 が並行する。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構である。南端は SD332 南端とほぼ同じ位置で収束し、北側は

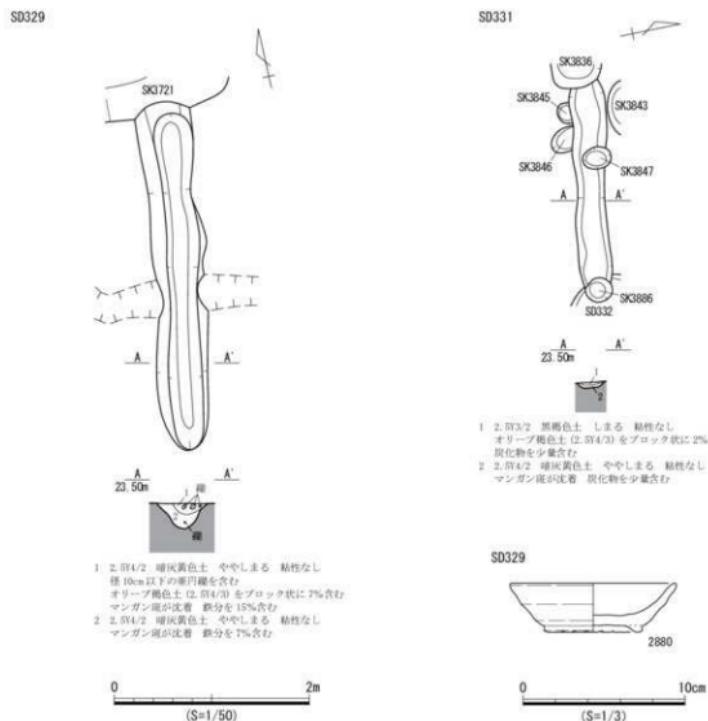
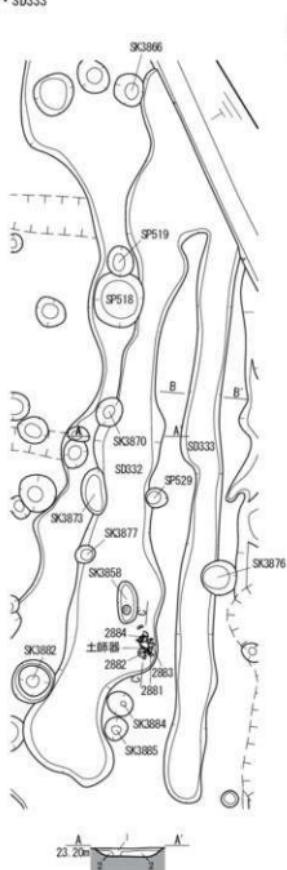
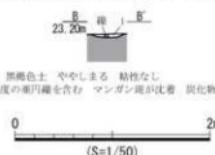


図 495 SD329・SD331 遺構図・出土遺物実測図

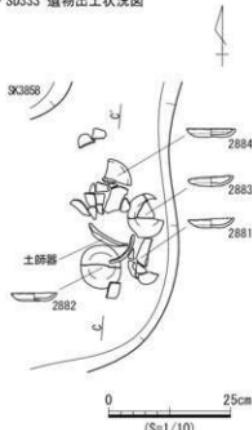
SD332・SD333



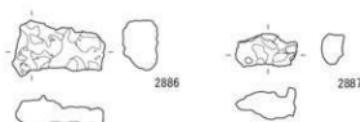
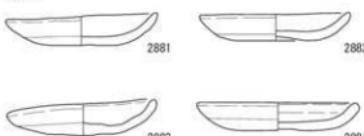
1. 2. BY3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
オリーブ褐色土 (2. BY4/3) をブロック状に15%含む マンガン斑が沈着
2. BY4/2 増灰褐色土 ややしまる 粘性なし
増灰褐色土 (2. BY5/2) をブロック状に7%含む マンガン斑が沈着



SD332・SD333 遺物出土状況図



SD332



SD333

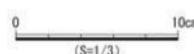


図496 SD332・SD333 遺構図・出土遺物実測図

SD332 と接続し併せてコ字状になる。上端はやや湾曲するが、幅はほぼ一定である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層の埋土である。

遺物出土状況 埋土中から土師器45点、須恵器4点、灰釉陶器1点、山茶碗55点、陶器1点、釘1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2888は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD334（図497）

検出状況 NK12～NK13グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側は発掘区外に延びる。南側は搅乱により消失する。西側でSB34-P1・P2、遺構全体でSK3859と重複する。本遺構はSK3859より古く、SB34より新しい。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構であるが、上端が湾曲することや南北端が確認できなかつたことで、全体の形状は判然としない。壁面の傾斜は緩やかである。底面はほぼ平坦であるが、西側の一部と南側にテラス状の平坦面をもち、北東側が一段深くなる。

埋土 4層に分層した。埋土全体にブロック土や焼土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器58点、須恵器10点、山茶碗66点、陶磁器6点、釘2点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など4点を図示した。2889はM3類の土師器皿である。2890は第4型式の尾張型山茶碗である。2891と2892は釘である。

時期 SB34・SK3859との重複関係と図示した2889から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD335（図497）

検出状況 NL11～NL12グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側は発掘区外に延びる。東側でSK3859と重複する。本遺構はSK3859より古い。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埋土 2層に分層した。

遺物出土状況 埋土中から土師器4点、須恵器5点、山茶碗16点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2893は第6型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2893から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD336（図498）

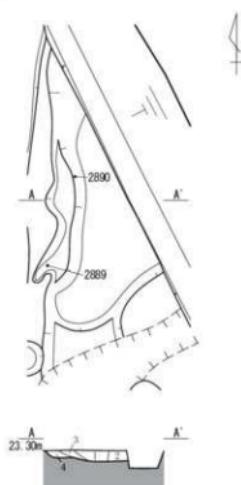
検出状況 NM13～NM14・NM13～N013グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側は発掘区外に延びる。

規模・形状 東から西に延び、南に直角に曲がり収束するL字形の溝状遺構である。上端は大きく湾曲するため、幅は場所によって0.3m～1.3mとなる。また、屈曲部では北西方向に突出する部分がある。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層の埋土である。

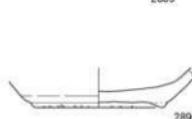
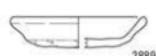
遺物出土状況 埋土中から土師器4点、須恵器8点、山茶碗8点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

SD334

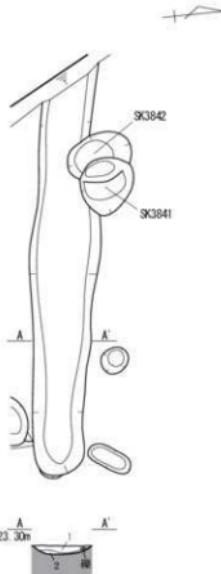


1. 2.0/3/3 緑オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし
黄褐色土は30%をブロック状に15%含む
マンガン斑が沈着 固化物を少量含む
2. 2.0/4/2 緑灰褐色土 ややしまる 粘性なし
マンガン斑が沈着 粘分を3%含む
3. 2.0/4/2 緑灰褐色土 ややしまる 粘性なし
マンガン斑が沈着 固化物・粘土を少量含む
4. 2.0/4/2 緑灰褐色土 ややしまる 粘性なし
マンガン斑が沈着

SD334



SD335



1. 2.0/4/2 増灰黄色土 ややしまる 粘性なし
径5cm程度の垂直縦線を含む
マンガン斑が沈着 固化物を少量含む
2. 2.0/4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性なし
マンガン斑が沈着

0 2m
(S=1/50)

SD335



0 10cm
(S=1/3)

図497 SD334・SD335 遺構図・出土遺物実測図

SD336

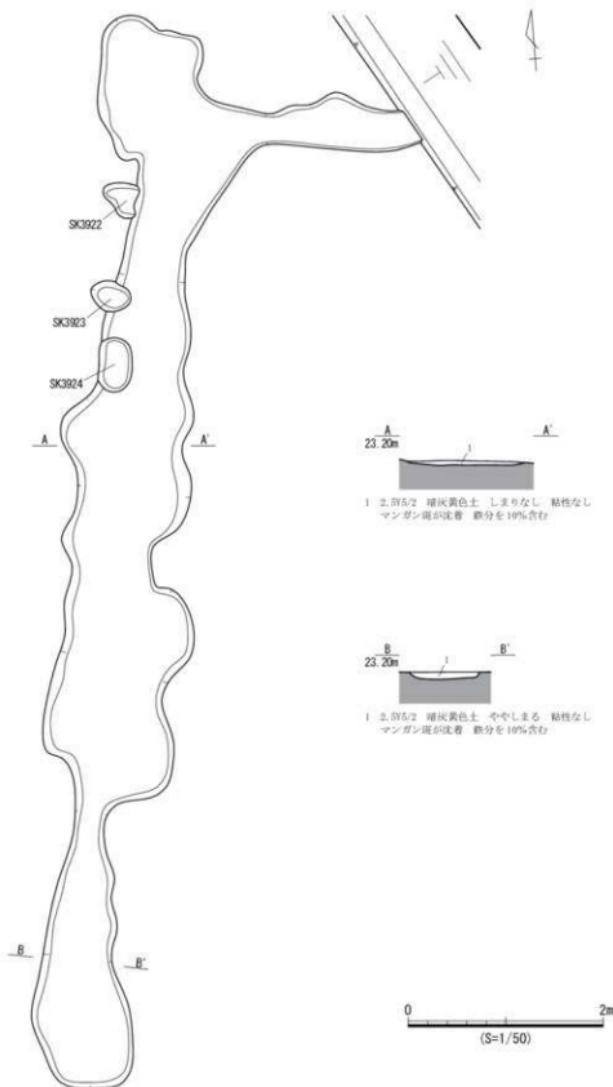


図 498 SD336 遺構図

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 第5型式以降の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SD341（図499）

検出状況 NN11～N011グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構であるが、上端は南へ向かうほど湾曲しながら幅広になっていくため、溝の幅は北端では0.4mに対し、南端では3.1mとなる。壁面の傾斜は緩やかである。底面はほぼ平坦であるが、南側と北側にテラス状の平坦面をもつ。標高は北側に対し南側がやや低くなる。

埋土 A-A'断面では単層に、B-B'断面では2層に分層した。堆積状況は北側と南側でやや異なるが、一部にブロック土を含むため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器86点、須恵器6点、灰釉陶器1点、山茶碗117点、陶磁器5点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2894は第6型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した2894から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD342（図500）

検出状況 NI8グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であったが、南側の重複関係は不明瞭であった。南側は重複により消失する。東側に約0.6m離れてSB33の西辺が並行し、SD343とともにSB33を囲む位置関係となる。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構である。上端は直線的で、幅はほぼ一定である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸みを帯びる。底面の標高は北から南に向かってやや下がる。

埋土 3層に分層した。1層はレンズ状に堆積し、3層は東側のみに堆積する。3層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SD343との位置関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD343（図500）

検出状況 NJ9グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。西端は重複により消失し、東側は発掘区外へ延びる。北側に約1.3m離れてSB33の南辺が並行し、SD343とともにSB33を囲む位置関係となる。西側でSK4030と重複する。本遺構はSK4030より古い。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構である。壁面の傾斜は南側では急で、北側では緩やかである。A-A'断面周辺では北側にテラス状の平坦面をもち、底面は一段深くなる。底面の標高は東側に比べ、中央部から西側にかけて下がる。

埋土 3層に分層した。1層と2層に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 検出面で内面全面に漆が付着した山茶碗の小皿1点(2895)が縦位で出土した。その他に埋土中から土師器17点、須恵器3点、灰釉陶器1点、山茶碗12点、磁器2点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2895は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。

SD341

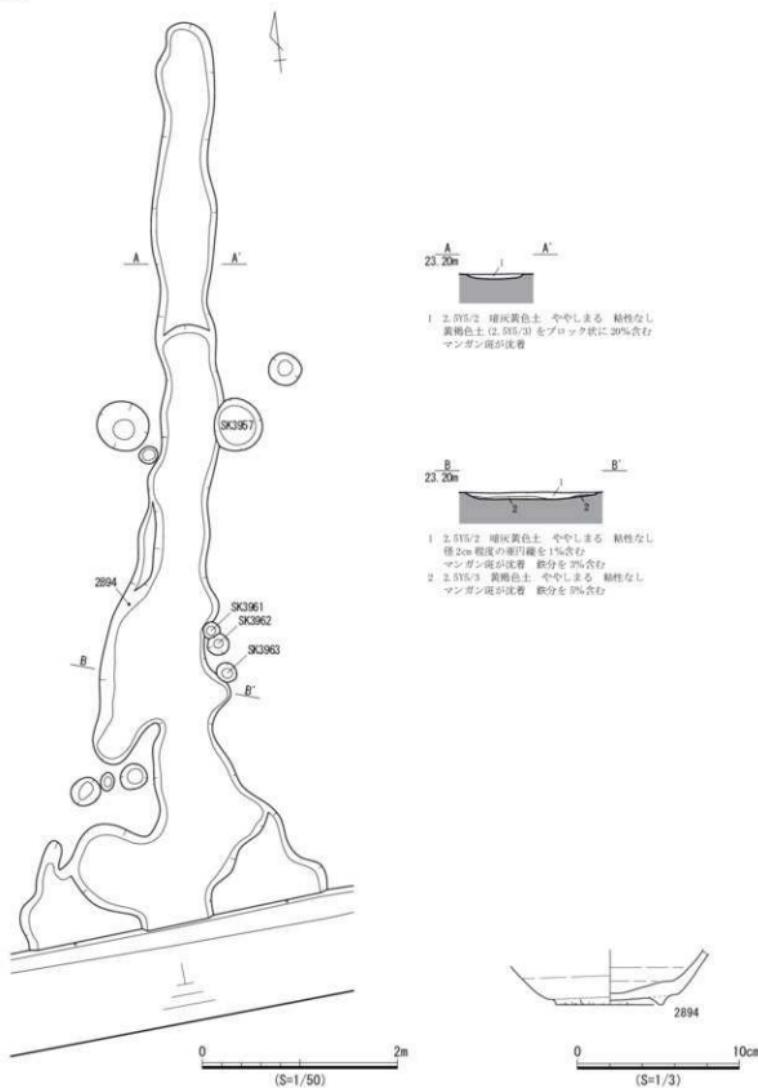


図499 SD341 遺構図・出土遺物実測図

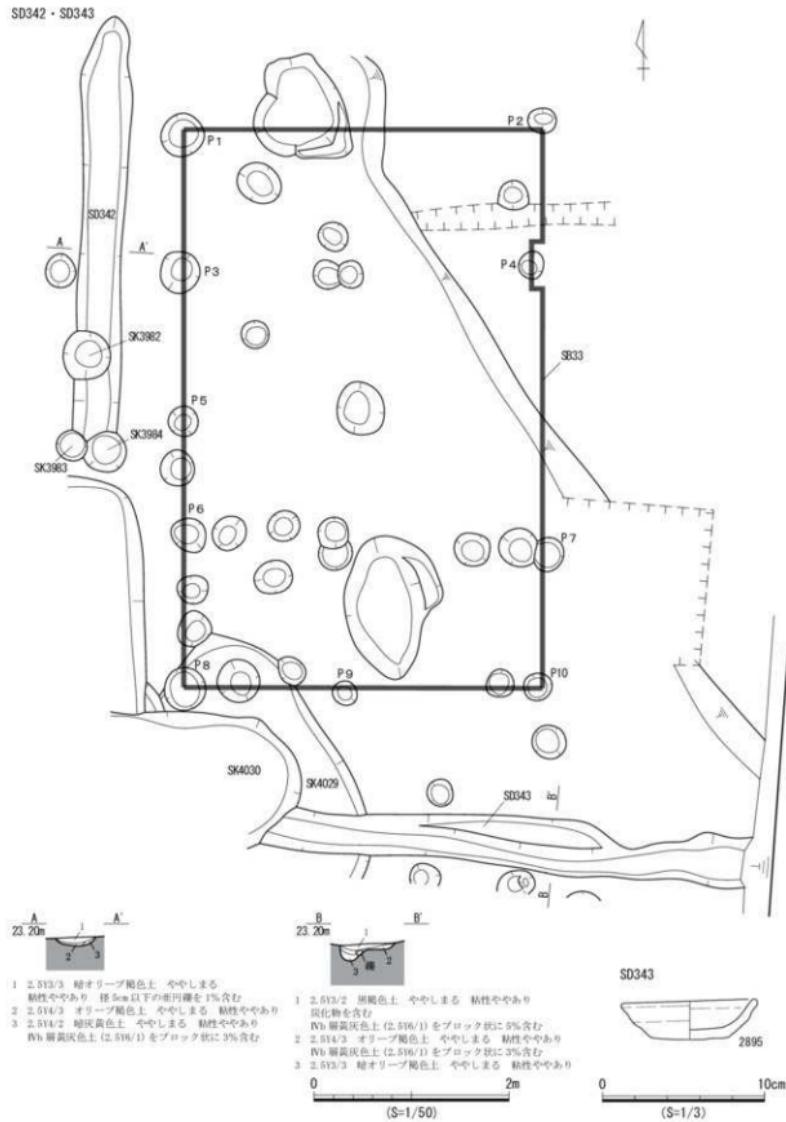


図500 SD342・SD343 造構図・出土遺物実測図

時期 SK4030との重複関係、SD342との位置関係と図示した2895から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD344（図501）

検出状況 NK7～NK9グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は東側の一部を除き明瞭であった。東西側はそれぞれ発掘区外に延びる。北側でSD345、西側でSD347と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構である。上端はやや湾曲し、中央やや東寄りで最大幅となるが、東側の発掘区間では最小幅となる。北側と南側の西半分にテラス状の平坦面をもち、最大幅になる部分ではこの平坦面が広くなる。底面は平坦で、その標高はほぼ均一である。

埋土 4層に分層した。1層に炭化物を含む。2層に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 検出面から埋土上層にかけて、残りの良い山茶碗3点(2897・2898・2900)と釘1点(2902)が須恵器1点、山茶碗3点、陶磁器6点とともに散在して出土した。その他に埋土中から土師器59点、須恵器24点、灰釉陶器5点、山茶碗316点、陶磁器20点、砥石1点、釘1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など8点を図示した。2896はM3類の土師器皿である。2897～2900は尾張型山茶碗で、2897は第4型式の小碗、2898と2899は第5型式の碗、2900は第6型式の碗である。2901は砥石である。2902と2903は釘である。

時期 SD345との重複関係と図示した2900から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD345（図502）

検出状況 NJ7グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であったが、SD347との重複関係は不明瞭であった。西側は発掘区外に延びる。南側は重複により消失する。東西方向の中央でSD346・SD347、南北方向の東側でSK4030、西側でSK4046、南側でSD344と重複する。本遺構はSD344より古く、SK4030・SK4046・SD346・SD347より新しい。

規模・形状 西から東に延びて、南に直角に曲がるL字形の溝状遺構である。上端は直線的であるが、幅は東西方向部分に対し南北方向部分は狭くなる。断面形は浅い皿状となる。

埋土 2層に分層した。レンズ状に堆積する。1層に基盤層のブロック土を含むため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土上層から残りの良い山茶碗1点(2905)と砥石1点(2904)が常滑産の甕4点とともに出土した。その他に埋土中から土師器9点、須恵器1点、山茶碗39点、陶器2点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗など2点を図示した。2905は第4型式の尾張型山茶碗である。2904は砥石である。

時期 SK4030・SK4046・SD344との重複関係から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD346（図503）

検出状況 NH7～NJ8グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は北側では明瞭で、南側ではやや不明瞭であった。北側は発掘区外に延び、南側は重複により消失する。南側でSK4046・SD345・SD347と重複する。本遺構はSK4046・SD345より古く、SD347より新しい。

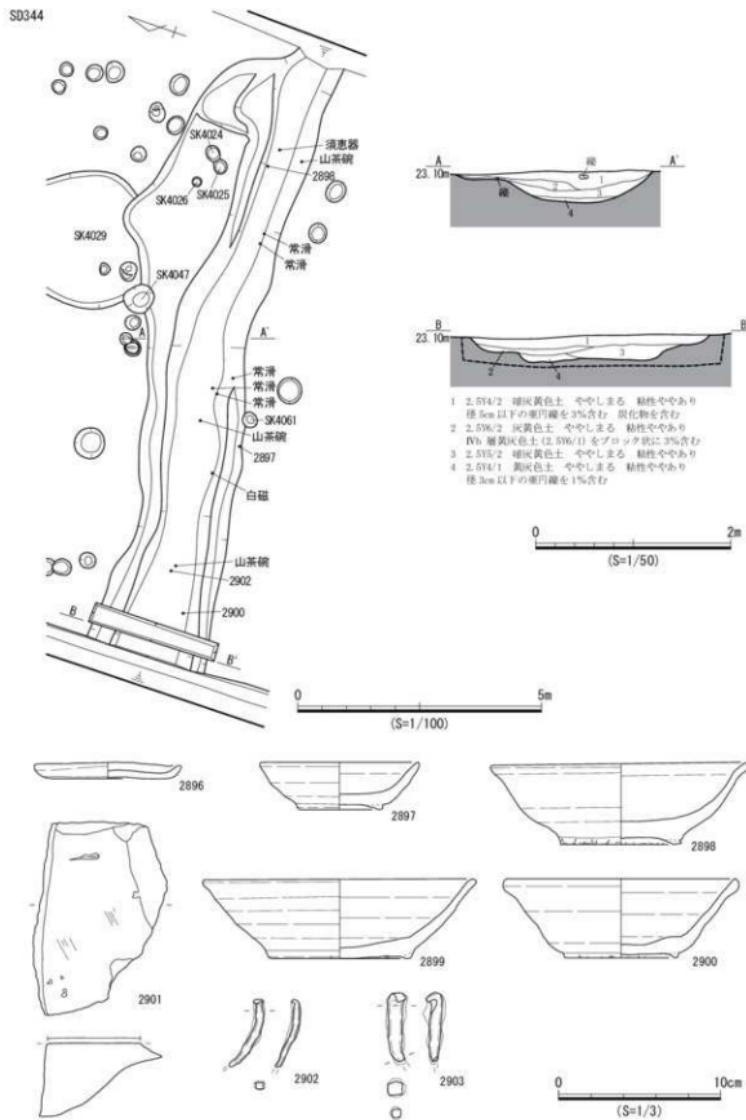


図501 SD344 遺構図・出土遺物実測図

SD345

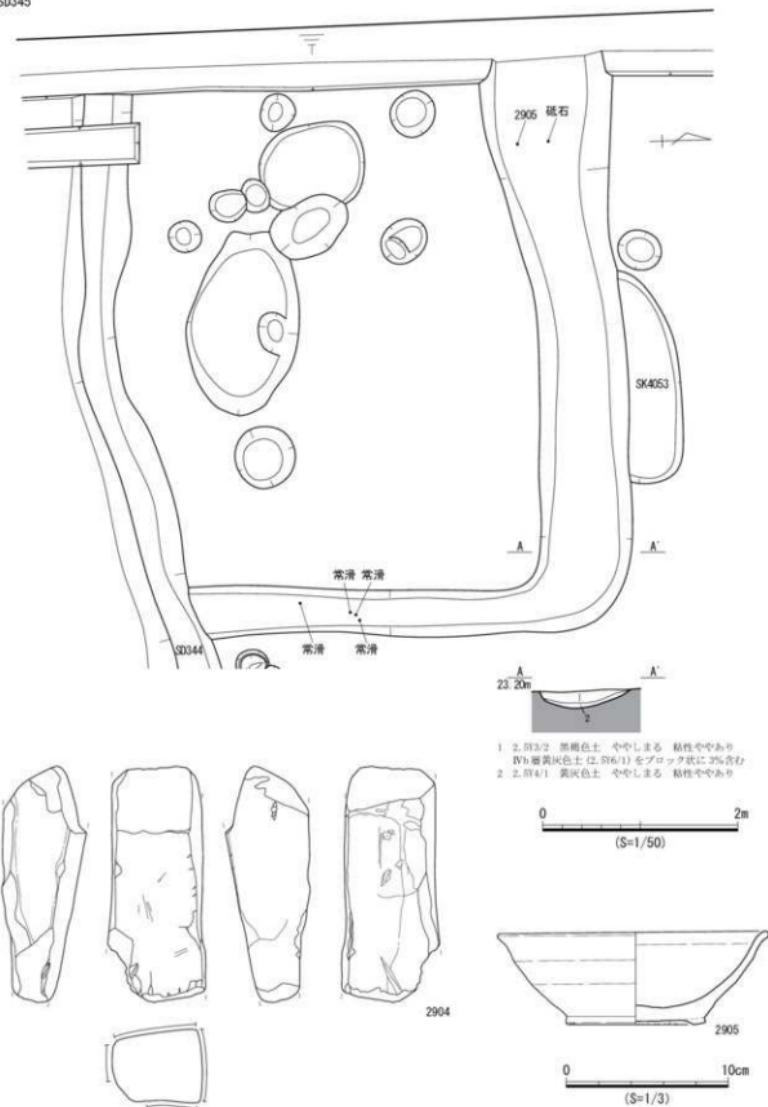


図 502 SD345 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構である。上端は直線的で、幅はほぼ一定である。壁面の傾斜はやや急で、底面は丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。2層は壁面崩落土と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器11点、須恵器2点、灰釉陶器1点、山茶碗12点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4046・SD345・SD347との重複関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD347（図504・505）

検出状況 NK7～NK7グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は北側では明瞭で、南側では不明瞭であった。西側は発掘区外に延びる。南北方向の西側でSK3973・SK3974・SK4039、中央でSD345、南側でSD344、東側でSK4046・SD346と重複する。本遺構はSK3973・SK4039・SK4046・SD344・SD346より古く、SK3974より新しい。

規模・形状 西側の壁面から東に延びて、南に直角に曲がり収束するL字形の溝状遺構である。上端は直線的で、幅はほぼ一定である。壁面の傾斜は緩やかである。底面は北側の屈曲部付近でL字形に一段深くなるが、それ以外はほぼ平坦である。

埋土 A-A'断面では3層、B-B'断面では2層に分層した。B-B'断面の1層に基盤層のブロック土を含むため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 北側の屈曲部分の1層から常滑産の甕1点(2912)がまとまって出土した。また、残りの良い山茶碗5点(2907～2911)、土鍾3点(2913～2915)、銅板1点(2918)が散在して出土した。その他に埋土中から土師器41点、須恵器6点、灰釉陶器1点、山茶碗55点、常滑産の甕4点、金属製品2点(楔、釘)が散在して出土した。

出土遺物 土師器など13点を図示した。2906はロクロ成形の土師器皿である。2907～2911は尾張型山茶碗で、2907・2908・2910は第4型式の小碗と碗、2909と2911は第5型式の小皿と碗である。2912は1b型式の常滑産の甕で、四段の押印文が輪積み接合部の外面に帶状に施される2913～2915は土鍾である。2916は楔、2917は釘である。2918は銅板で、端部はいずれも割れているため全体形は推測できないが、側面の観察から緩やかに弧を描くことが確認できる。表面は滑らかで、裏面には付着物が認められる。

時期 SK3973・SK3974・SK4039との重複関係と図示した2909・2910から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD348（図503）

検出状況 NK7～NK8グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。本遺構の東への延長線上には、幅をほぼ同じくする東西方向の溝SD349が存在する。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構である。西側は南に屈曲し収束する。断面は浅い皿状となる。

埋土 単層の埋土である。疊と炭化物を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SD349との位置関係から、本遺構は中世と考えられる。

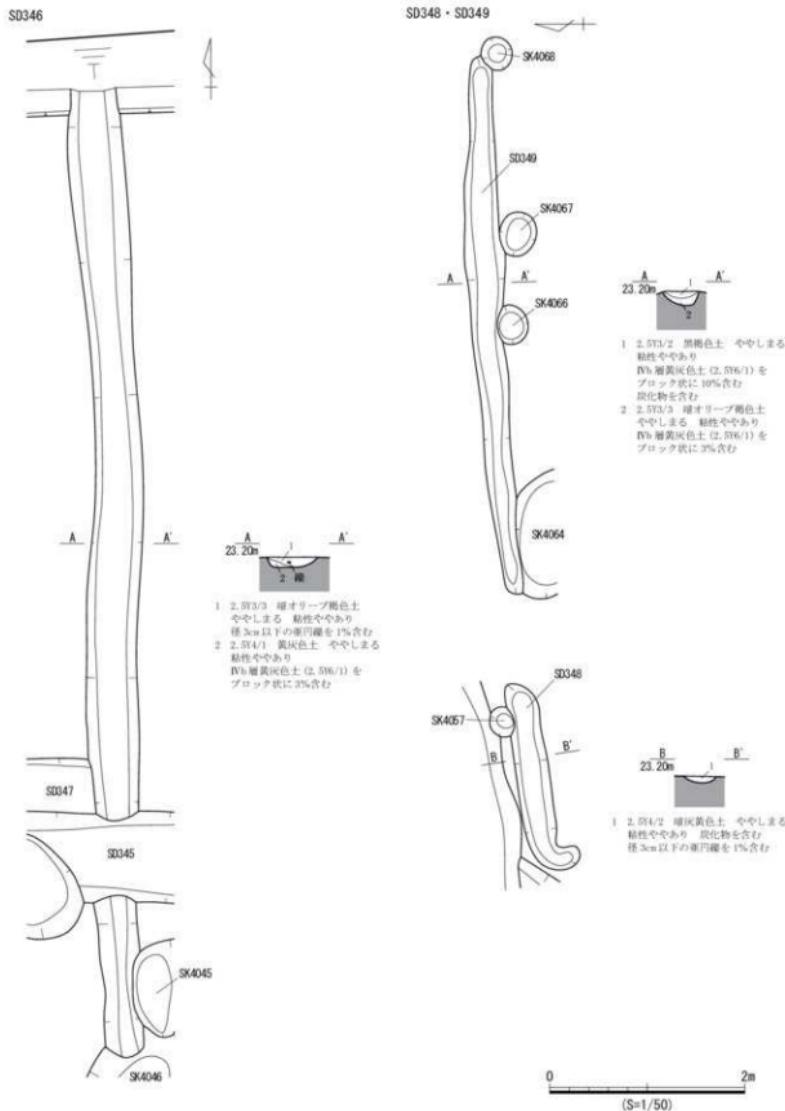


図 503 SD346・SD348・SD349 遺構図

SD349 (図 503)

検出状況 NK8～NK9 グリッド、IV 層 b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。本遺構の西への延長線上には、幅をほぼ同じくする東西方向の溝 SD348 が存在する。また、南側には SM8 が隣接する。

規模・形状 東西方向に伸びる溝状遺構である。壁面の傾斜は南側ではやや急で、北側では緩やかである。底面は丸くなる。

埋土 2 層に分層した。1 層に炭化物を含む。埋土全体に基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器 3 点、須恵器 2 点、山茶碗 9 点が散在して出土したが、いずれも小

SD347

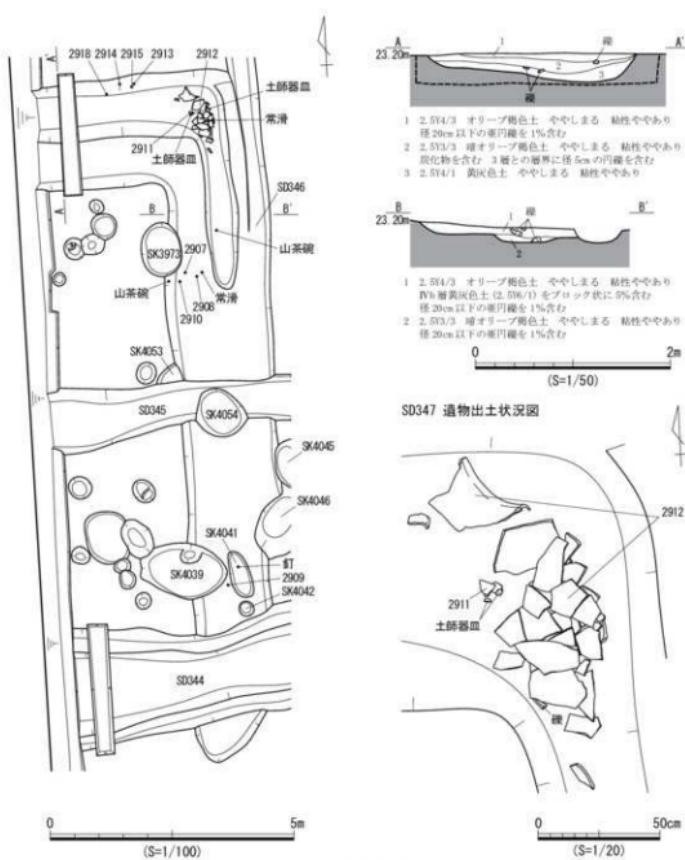


図 504 SD347 遺構図

片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 第5型式以降の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は12世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SD350 (図 506)

検出状況 NL 7～NL 9 グリッド、IV層 b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側は発掘区外に延びる。東端部では掘り込みを確認できなかつたが、これは地形が下がっていくためと考えられ、NL10 グリッドあたりで収束するものと思われる。南側で SD351、北側で SM7・SM8 と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構である。上端はやや湾曲し、西側に比べ東側の幅が広くなる。壁面の南側で西半分に、北側で東半分にテラス状の平坦面をもつ。底面はほぼ平坦であるが、北側が

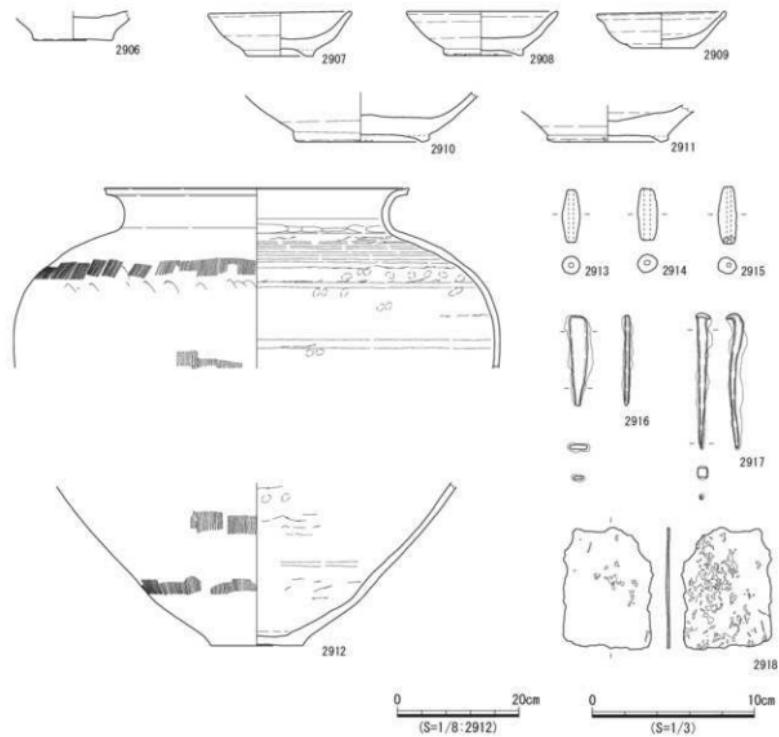


図 506 SD347 出土遺物実測図

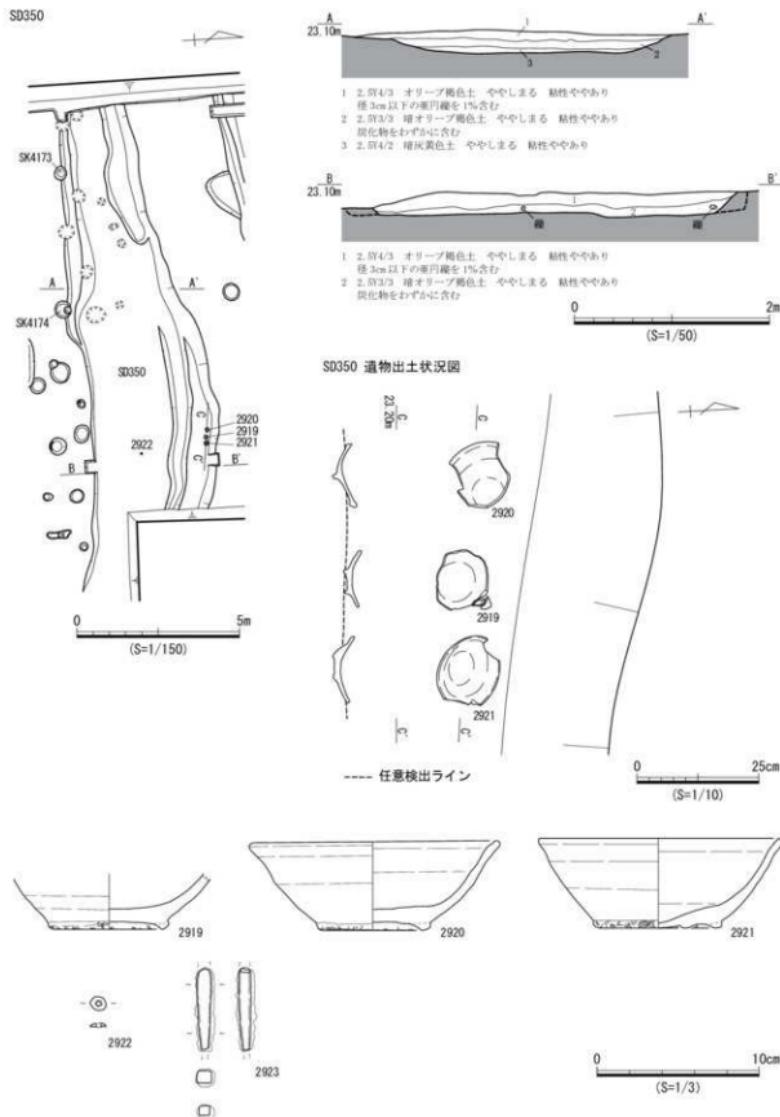


図 506 SD350 遺構図・出土遺物実測図

部分的に細く溝状に掘削されている。

埋土 A-A'断面では3層、B-B'断面では2層に分層した。いずれも水平に堆積する。埋土に礫と炭化物を含む。

遺物出土状況 東側の幅広部分にあたる検出面上から山茶碗3点(2919~2921)が正位で並んで、中央の検出面上から環状銅製品1点(2922)が出土した。その他に埋土中から土師器41点、須恵器31点、灰釉陶器1点、山茶碗453点、陶磁器68点、金属製品2点(釘)が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗など5点を図示した。2919~2921は尾張型山茶碗で、2919は第5型式、2920と2921は第6型式である。2922は環状銅製品で、ハトメ状の形状である。

時期 図示した2920・2921から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD351・SD356(図507)

検出状況 NL9~NM9グリッド、IV層b上面で検出した。SD351・SD356とも暗オリーブ褐色土を主体とした類似した埋土で、平面形は明瞭であった。SD351は北側でSD350と重複する。SD351はSD350より古い。

規模・形状 いずれもL字形の溝状遺構である。SD351は北側、SD356は南側に位置する。SD351は東西方向の溝の西側で南へ屈曲し、SD356は東西方向の溝の西側で北へ屈曲することから、両溝で方形の区画を作り出しているように見えるため、区画溝と判断した。両者の南北溝はほぼ同一軸上に乗り、その間には約2.0mの空間ができる。区画内にはSB35・SA46・SD355が方位を揃えて存在する。上端はやや湾曲する部分もあるがおよそ直線的で、SD351の東西溝が他の部分に比べ幅広となる。断面形状はともに浅い皿状となる。

埋土 両遺構とも単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 SD351埋土中から土師器4点、須恵器3点、山茶碗15点、陶磁器3点、SD356埋土中から山茶碗1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。2924は第5型式の尾張型山茶碗で、外面底部に「中」の墨書が確認できる。

時期 図示した2924とSD356から第5型式の尾張型山茶碗が出土したことから、SD351とSD356は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD353(図508)

検出状況 NM10グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB35と重複する位置関係である。

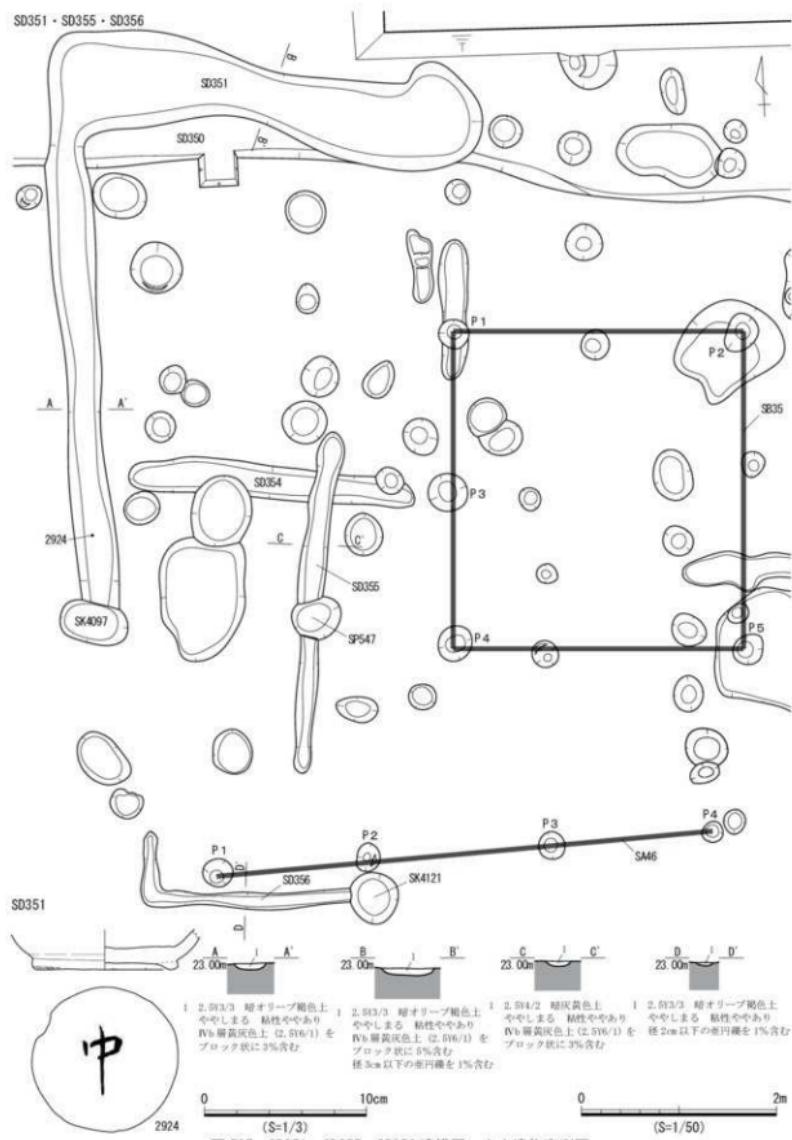
規模・形状 東西方向に延びる1.7mほどの短い溝状遺構である。上端はやや湾曲する。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層の埋土である。

遺物出土状況 埋土中から土師器4点、須恵器1点、山茶碗7点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 第4型式の尾張型山茶碗の小碗が出土したことから、本遺構は12世紀中葉から後葉と考えられる。



SD354（図508）

検出状況 NM9グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSD355と重複する。本遺構はSD355より新しい。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構で、両端は収束する。断面形は浅い皿状となる。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器6点、山茶碗6点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD355（図507）

検出状況 NM9グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSD354と重複する。本遺構はSD354より古い。SB35・SA46とともにSD351とSD356による区画内に存在し、東側約1.3m離れてSB35の西辺が並行する。

規模・形状 南北方向に延びる溝状遺構で、両端は収束する。断面形は浅い皿状となる。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、山茶碗7点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SD354との重複関係とSB35・SA46・SD351・SD356との位置関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD357（図508）

検出状況 N09グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側は重複により消失する。南側でSK4154と重複する。本遺構はSK4154より古い。

規模・形状 東西方向の溝の東側で南に直角に曲がるL字形の溝状遺構である。東西溝に比べ南北溝が幅広である。断面形は浅い皿状となる。

埋土 単層の埋土である。基盤層のブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器5点、山茶碗3点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SK4154との重複関係から、本遺構は13世紀中葉以前と考えられる。

SD358（図508）

検出状況 NP7～N9グリッド、IV層b上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSA49-P1と重複する。本遺構はSA49より古い。

規模・形状 東西方向に延びる溝状遺構で、両端は収束する。西側は北に向かってやや湾曲する。壁面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平坦である。

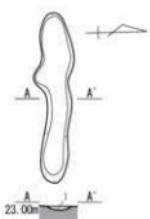
埋土 単層の埋土である。礫を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器98点、須恵器4点、山茶碗210点、陶器3点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など3点を図示した。2925はM3類の土師器皿である。2926と2927は第6型式の尾張型山茶碗である。

時期 SA49との重複関係と図示した2926・2927から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD353



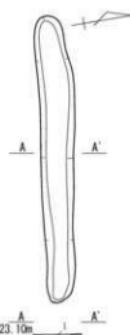
I 2. 5V4/2 塗灰黄色土 ややしまる
粘性ややあり 粒分を 20%含む
炭化物を少量含む

SD358



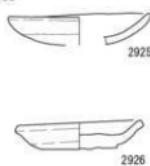
SA49-P1

SD354



I 2. 5V4/2 塗灰黄色土 ややしまる
粘性ややあり
IVb 層黄灰色土 (2. 5V6/1) を
ブロック状に 3%含む

SD358



2925

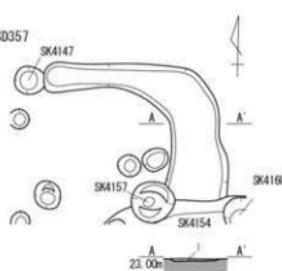
2926



2927

0
(S=1/3)

SD357



I 2. 5V3/3 塗オーリーブ褐色土 ややしまる
粘性ややあり IVb 層黄灰色土 (2. 5V6/1) を
ブロック状に 3%含む



I 2. 5V5/2 塗灰黄色土 ややしまる 粘性なし
粒径4mm以下の重角礫を 2%含む マンガニッシュを含む
粒分を 2%含む 炭化物を少量含む

0
(S=1/50)
2m

図 508 SD353・SD354・SD357・SD358 遺構図

6 盛土

SM 7 (図 509)

検出状況 NI 7 グリッド、IV層 b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。西側は発掘区外へ続く。南側で SD350 と重複する。本遺構は SD350 より古い。周辺に耕作痕は確認できなかったため、土星の可能性がある。北側の SD347 とともにコ字形の区画を作り出す位置関係にある。

規模・形状 南北方向に延びる盛土で、東側は収束する。断面形状は台形で、基底部の幅は約 3.0m である。上部は削平されているが、東に向かって一段低くなる。

埋土 盛土を 2 層に分層した。ほぼ水平に盛土される。

遺物出土状況 盛土中から山茶碗 1 点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物がなかった。

時期 SD350 との重複関係と SD347 との位置関係から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭と考えられる。

SM 8 (図 509)

検出状況 NK 8 ~ NK 9 グリッド、IV層 b 上面で検出した。平面形は明瞭であった。明確な盛土堆積は確認できなかった。B-B' 断面中央の基盤層は周辺の検出面の標高より若干高くなっている。この高まりが盛土の基底部と考えられる。南北側に溝 (SD349・SD350) が並行し、西側に SM 7 が存在する位置関係である。東側は発掘区外へ続く。周辺に耕作痕は確認できなかったため、SM 7 同様土星の可能性がある。

規模・形状 南北方向に延び、西側は収束する。基底部の幅は約 1.6m を測る。

埋土 盛土は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 SD347・SM 7 との位置関係から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭と考えられる。

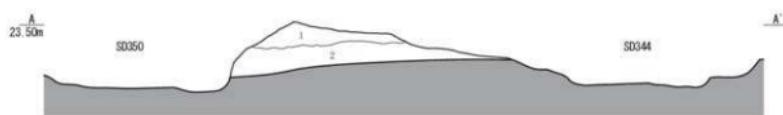
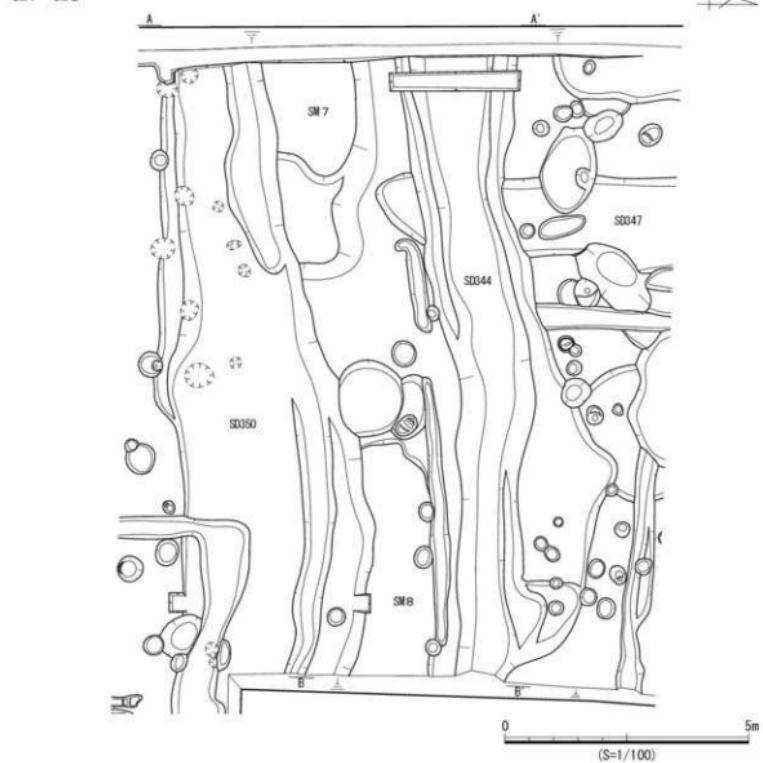
7 その他の遺構出土遺物 (図 510)

出土遺物のうち 5 点を図示した。2928 は砥石である。2929 は鉄鐵で、鐵身の先端部が欠損する。2930 ~ 2932 は釘である。

8 Ⅲ層等出土遺物 (図 511・512)

出土遺物のうち 25 点を図示した。2933~2935 は瓦質土器の足釜である。2933 は羽釜状の鐸の下側に接する部分から三足が取り付けられる。2934 と 2935 は足で、2934 は 2933・2935 と比較すると小型である。2936 は美濃須衛窯 IV 期第 1 小期に比定した須恵器の坏身 B 類で、内面見込に「美濃國」の刻印が施される。2937~2939 は尾張型山茶碗である。2937 は第 5 型式、2938 と 2939 は第 6 型式でいずれも外面底部に墨書が確認できる。2938 は「刀」の可能性があるが、2937 と 2939 は訛読できない。2940~2944 東濃型山茶碗である。2940 と 2941 は谷迫間 2 号窯式、2942 は丸石 3 号窯式、2943 と 2944 は窯洞 1 号窯式に比定した。2940・2942・2943 は外面底部、2944 は外面胴部に墨書が確認できる。2940 は「す」と書かれた可能性があり、下に文字が続く。2943 は「十」と考えられる。2942 と 2944 は訛読できない。2945 は古瀬戸後 IV 期新段階の仏龕具である。2946 は龍泉窯系 I-1 c 類の青磁碗で、内面見込に「金玉滿堂」の刻印が施される。2947 は瓦で、凹面に布目痕が確認できる。2948 は石硯で、中央の海が窪む。台形硯若しくは長方硯と考えられる。2949 は板状鉄製品で、緩やかに弧を描く外形

SM 7・SM 8



1. 2. BY4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり IVb層黄灰色土 (2. BY6/1) をブロック状に20%含む (SD7 墓土)
2. 2. BY5/4 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり IVb層黄灰色土 (2. BY6/1) をブロック状に20%含む (SD7 墓土)

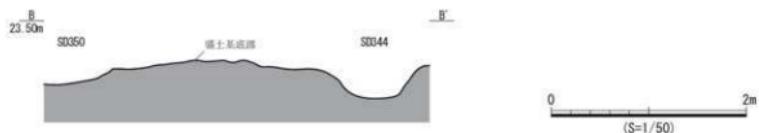


図 509 SM 7・SM 8 遺構図

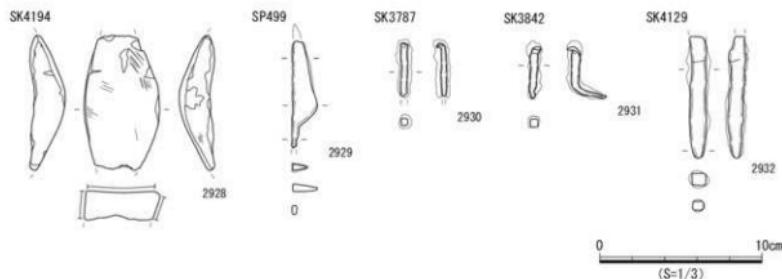


図510 その他の遺構出土遺物実測図

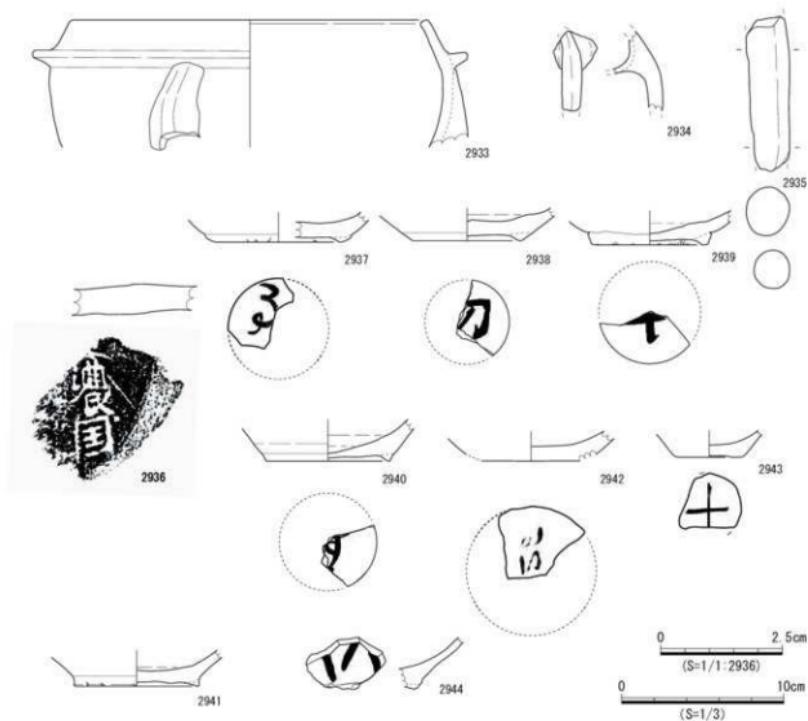


図511 III層等出土遺物実測図（1）

であるが、全体の形状は不明である。2950 は棒状鉄製品で、上側は山形、下側は直線的に成形される。文鎮の可能性がある。2951 と 2952 は釘である。2953 は鉄球である。2954 と 2955 は鉄滓である。2956 と 2957 は銭貨で、2956 は「元豊通寶」(初鑄 1078 年)である。2957 は「政」と「寶」の 2 文字が軸読でき、「政和通寶」(初鑄 1111 年)の可能性がある。

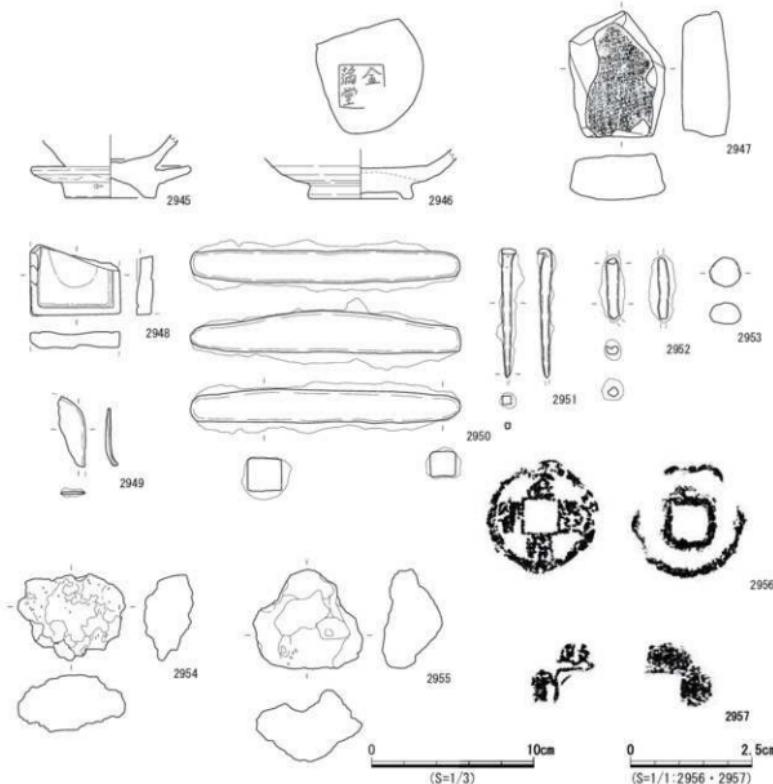


図 512 III 層等出土遺物実測図 (2)

第8節 3・4地点の遺構・遺物

遺跡の中央部から西部に位置する調査地点で、3地点と市道を挟んだ北東に4地点が位置する。調査面積は4,739.7m²で、本線橋脚や側道、調整池部分になる予定の箇所対象に調査を行った。3地点は南西に位置する席田用水に向かって旧地形が下がっており、旧河道があつたと考えられる。

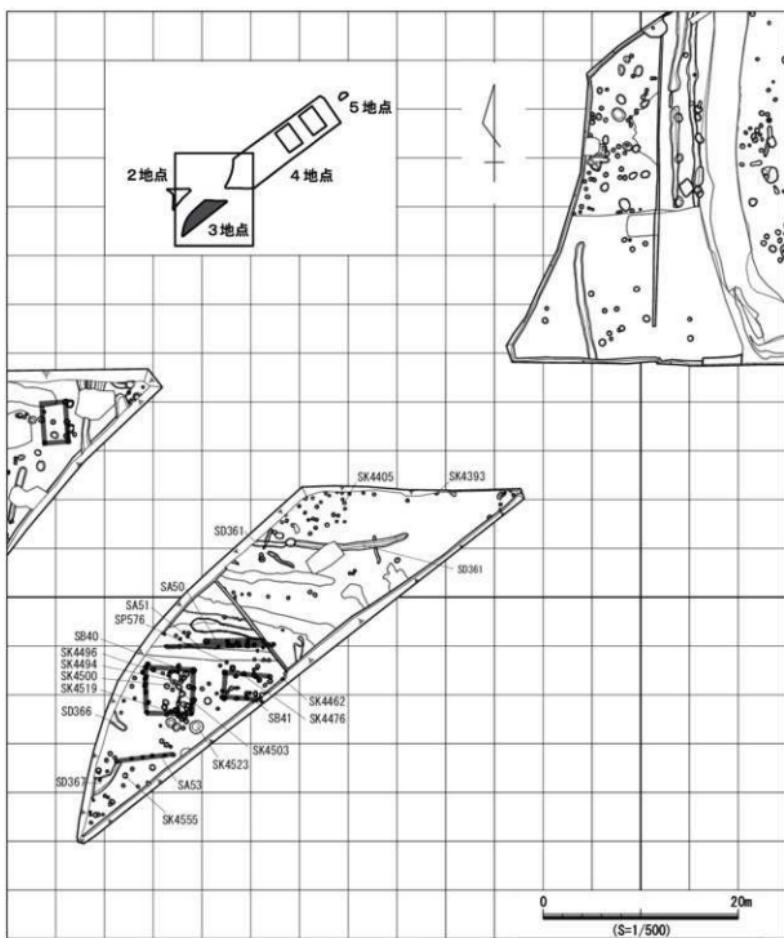


図 513 3・4 地点平面図（1）

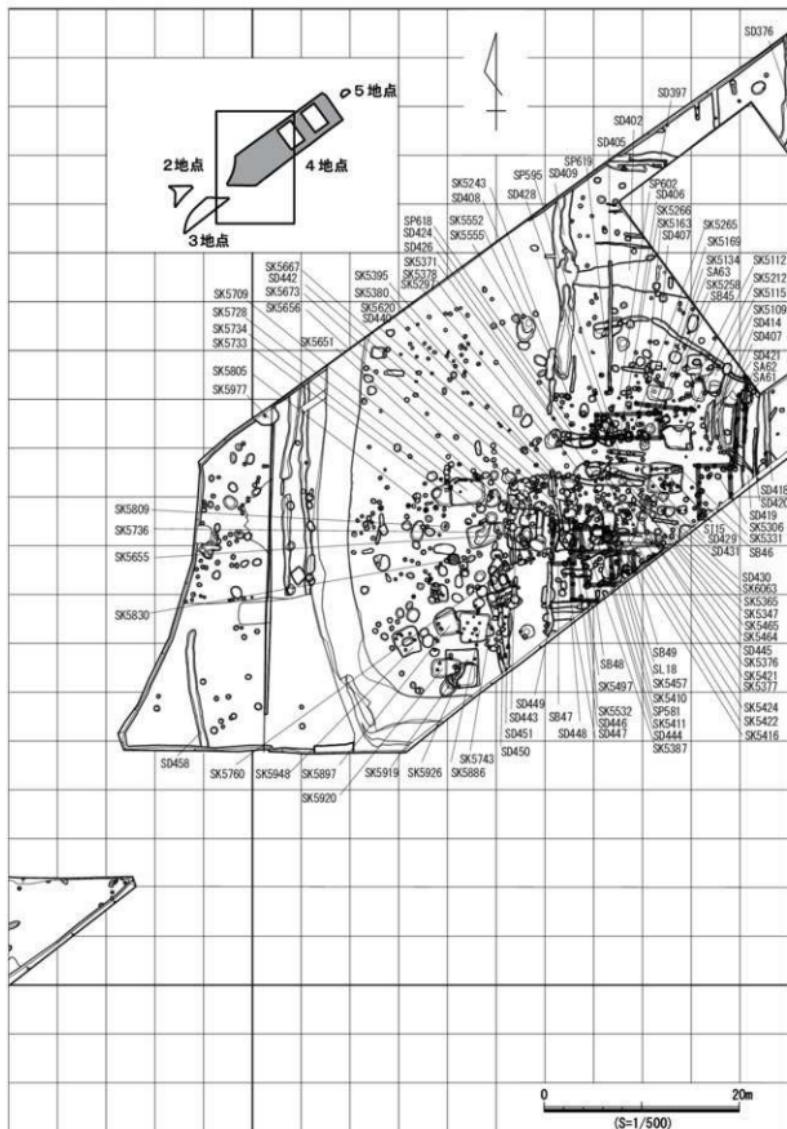


図 514 3・4 地点平面図 (2)

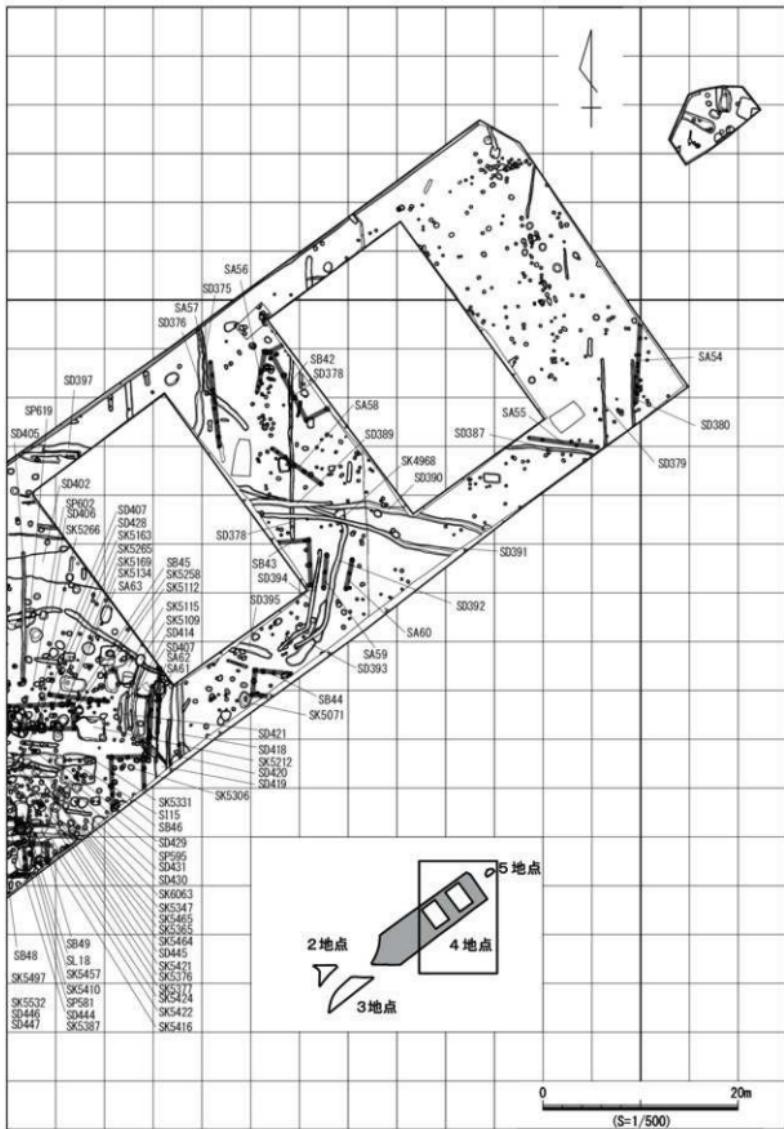


図 515 3・4 地点平面図 (3)

1 堅穴遺物

SI15 (図516~519)

検出状況 4地点 JJ9 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西部で SD429、南部で SK5333、北東部で SK5330 と重複する。本遺構は SK5330・SK5333 より古く、SD429 より新しい。

規模・形状 平面形は、長軸 3.4m、短軸 3.1m の東西にやや長い方形である。長軸方位は N-87°-W である。壁面の断面形は緩やかに傾斜した逆台形で、底面は平坦である。

埴土 3層に分層した。1層は水平に堆積し、南部に2層、北部に3層が薄く堆積する。1層下面で遺構を検出できなかったことや、2層・3層がしまりは良いものの埋土にブロック等を含まず硬化面を確認できなかったことから貼り床を構築せず床面としたと考えられる。

床面 床面は平坦である。床面で5基の柱穴と14基の土坑を検出した。堅穴建物四隅に位置する P1・P2・P11・P12 が主柱穴と考えられる。P2 が北東端に寄り SI15 下端壁面を切り込む他は、各壁面の角部分より 0.4m~0.5m の距離に配置される。主柱穴の平面形はいずれも明瞭で、平面形は円形

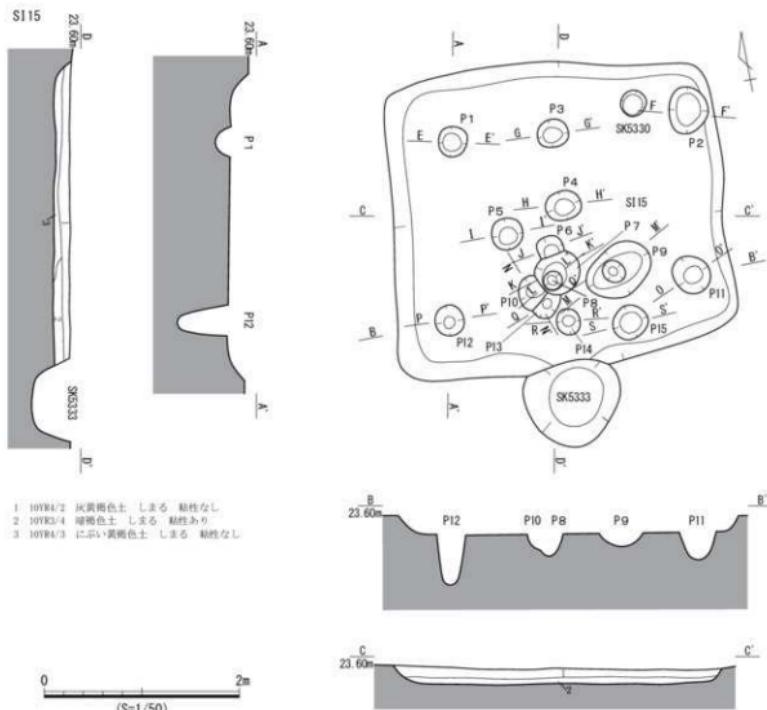


図 516 SI15 遺構図 (1)

SI15 遺物出土状況図

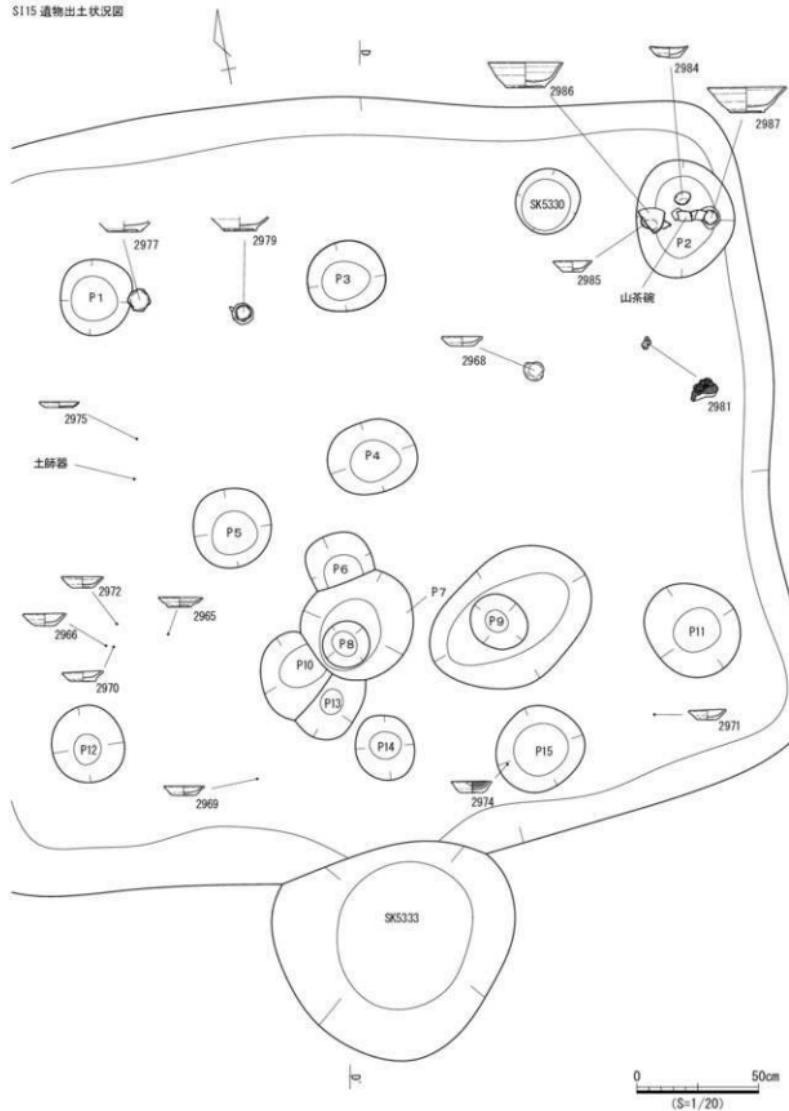


図 517 SI15 遺構図 (2)

である。埋土はP1が単層となる他は2層に分層でき、P2は西側にやや片寄った堆積、P11・P12は水平堆積である。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。P9は堅穴建物の南東部底面で検出した柱穴である。楕円形の掘形の南東部に柱穴と考えられる掘り込みが明瞭に認められるが、二つの遺構の可能性もある。

遺物出土状況 土師器 278点、須恵器4点、山茶碗426点、中近世陶磁器14点、石鐵1点、輪羽口4点、鉄塊4点、鐵鋤5点が出土した。中近世陶磁器のうち10点は常滑産陶器、3点は白磁であった。出土位置は北西部240点、北東部214点、南東部100点、南西部110点、土層観察用畦から102点が出土し、出土層位はa層368点、b層265点、1層62点、2層40点となり、本遺構の北部上層から中層にかけて出土した遺物が多くを占める。山茶碗446点のうち、未注記の小片を除いて尾張型山茶碗は266点、東濃型山茶碗は図示した2975を含めて5点が出土した。東濃型山茶碗はいずれも尾張型

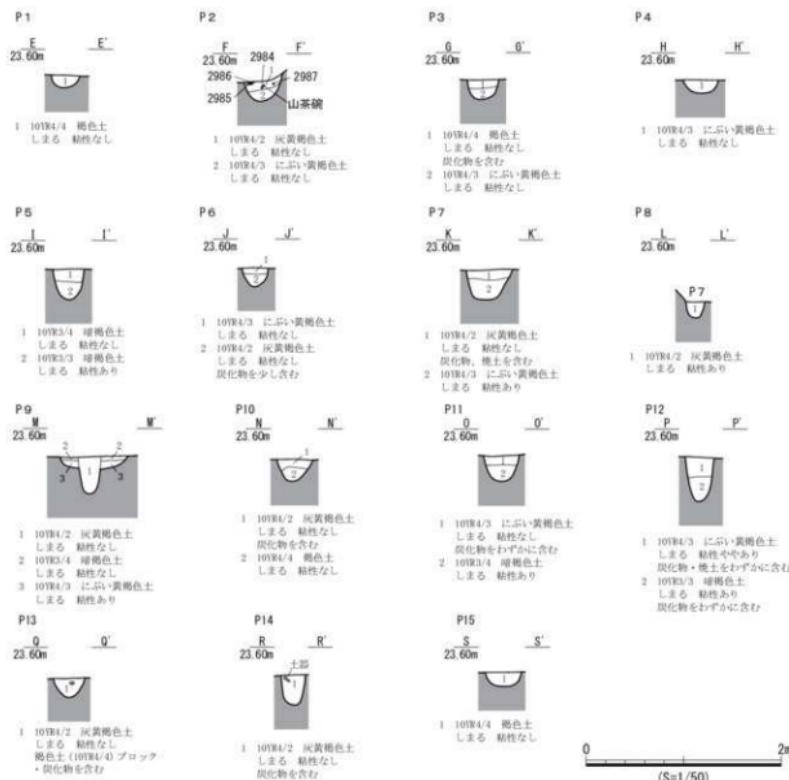


図 518 S115 遺構図（3）

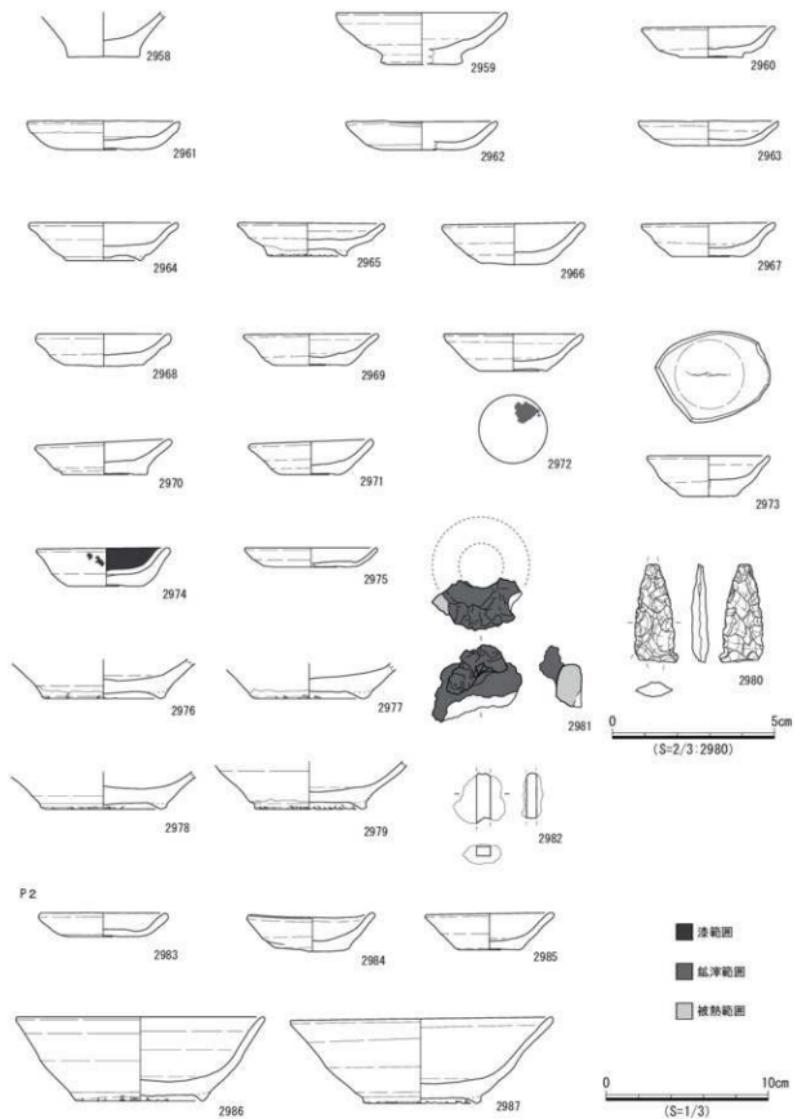


図 519 SI15 出土遺物実測図

山茶碗より型式的には新しいが、1層あるいは埋土上層からの出土に限定されるため混入と考えられる。鉄滓、輪羽口等の鍛冶関連遺物のうち、床面を覆う2層・3層から出土したのは鉄滓1点のみで、その他はb層以上から出土した。P2から土師器1点、山茶碗24点、P11から土師器1点、山茶碗2点、常滑産陶器1点、P12から土師器9点、山茶碗2点、常滑産陶器1点が出土した。P2からは遺構検出面直下の1層からまとめて出土した(2984~2987)が、いずれも破片で接合しなかった。この他、床面検出の柱穴、土坑のうち、P5から土師器3点、P7から土師器6点、山茶碗6点、P9から土師器1点、山茶碗2点、P14から山茶碗2点、常滑産陶器2点が出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 SI15から出土した土師器6点、山茶碗16点、石製品2点、鉄塊1点、P2から出土した山茶碗4点を図示した。2958~2963・2983は土師器である。2958~2960はロクロ成形の皿で2958・2959は柱状高台、2961~2963・2983はM3類の皿である。2964~2974・2976~2979は尾張型山茶碗である。2964・2965は第4型式の小碗、2966~2974・2984・2985は第5型式の小皿である。2974は内面の全面と外側の一部に黒漆が付着し、2972は底部外側の一部に鉢滓が付着する。2973は底部内面の中央に焼成前に穿たれた円形の刺突が認められる。この刺突は底部外側までは貫通せず、刺突の両側にヒビが入る。2976~2979・2986・2987は第5型式の碗である。2975は大洞東1号窯式~脇之島3号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。2980は下呂石製の有茎石罐であるが、茎部分は欠損する。2981は輪羽口の先端部で、瘤状の鉢滓が付着する。2982は鉄製品と考えられるが、器種は不明である。形状は断面が長方形で、両端は欠損するが釘の可能性がある。蛍光X線分析の結果、炭素量0.77%程度の共析鋼と考えられる結果を得た(第5章第5節)。

時期 P2から出土した2984~2987から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭に機能したと考えられる。

2 売立柱建物

SB40(図520)

検出状況 3地点 MB10~MC11 グリッド、IV b層上面で検出した。2間×2間の建物と考えられる。柱穴の平面形はP3・P4・P6・P7ではやや不明瞭で、その他は明瞭であった。

規模・形状 長軸方位はN-1°-Eである。平面形はほぼ正方形で、桁行2間(4.7m、柱間2.5m-2.2m)、梁行2間(4.6m、柱間2.0m-2.6m)、床面積21.6m²となる側柱建物である。各柱間は一定ではなく、P2は柱筋から北側にやや外れる。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形である。柱穴の埋土は单層若しくは水平に堆積し、柱痕跡は確認できなかった。P1から土師器1点、P3から土師器1点、灰釉陶器1点、山茶碗1点、P4から土師器1点、P5から山茶碗1点、P6から山茶碗1点、P7から土師器4点、釘6点、P8から土師器2点、鉄滓9点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

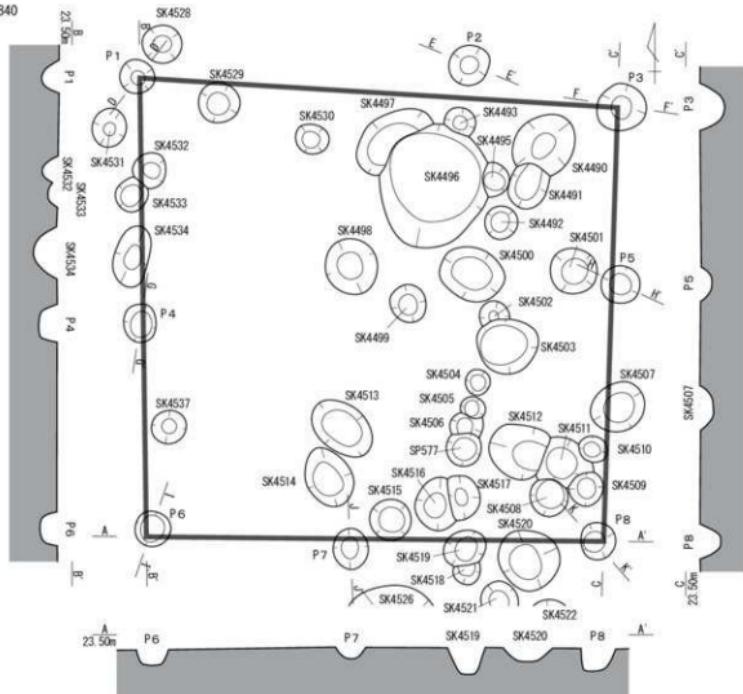
出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

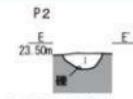
SB41(図521)

検出状況 3地点 MB12~MC13 グリッド、IV b層上面で検出した。東側の柱穴が発掘区外となるが、2間以上×1間の建物と考えられる。柱穴の平面形はP4では明瞭、P5ではやや不明瞭、その他の柱穴では検出面に疊が多く不明瞭であった。

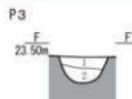
SB40



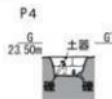
- 1 10YR3/3 にぶい黄褐色土
しまりなし 粘性なし
径 0.5 cm のマンガン斑を含む
2 10YR3/4 細粒色土
しまりなし 粘性なし
径 0.2 cm の化成物少量含む



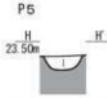
- 1 10YR3/3 希薄色土
しまりなし 粘性なし
径 1cm のにぶい黄褐色土 (10YR4/3)
をブロック状に 20% 含む
径 0.5 cm のマンガン斑を含む



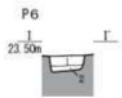
- 1 10YR3/3 細粒色土 しまりなし 粘性なし
灰黄褐色土 (10YR4/2) をブロック状に含む
径 0.2 cm のマンガン斑を含む
2 10YR3/4 細粒色土 しまりなし 粘性ややあり
径 0.2 cm の化成物 5% 含む



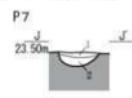
- 1 10YR3/3 細粒色土
しまりなし 粘性なし
灰黄褐色土 (10YR4/2) を
ブロック状に含む
2 10YR4/4 褐褐色土
しまりなし 粘性なし
径 1cm 以下の円錐少量含む



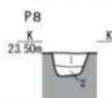
- 1 10YR3/4 細粒色土
しまりなし 粘性なし
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) を
ブロック状に含む
径 0.5 cm のマンガン斑を含む
径 low 以下の円錐少量含む



- 1 10YR3/3 希薄色土
しまりなし 粘性なし
径 2cm 以下の円錐を 5% 含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまりなし 粘性あり



- 1 10YR3/3 希薄色土
しまりなし 粘性なし
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をブロック状に
含む 径 1cm 以下の円錐 5% 含む
2 10YR4/2 灰黄褐色土
しまりなし 粘性なし
径 0.5 cm のマンガン斑を含む



- 1 10YR3/3 希薄色土 しまりなし 粘性なし
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をブロック状に
含む 径 1cm 以下の円錐 5% 含む
2 10YR4/4 褐褐色土 しまりなし 粘性なし
にぶい黄褐色土 (10YR4/3) をブロック状に
含む

0 2m
(S=1/50)

図 520 SB40 遺構図

規模・形状 長軸方位はN-86°-Wである。発掘区外に広がる可能性があるため全容は不明であるが、平面形は東西に長い長方形で、桁行2間以上(4.7m、柱間2.0m-2.7m)、梁行1間(2.7m)、床面積12.7m²以上となる側柱建物である。桁行の柱間は北側と南側で一定にならない。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。柱穴の埋土は単層若しくは水平に堆積し、柱痕跡は確認できなかった。P4から土師器1点、P5から土師器1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 他の掘立柱建物や櫛の時期と土師器が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

SB42(図522)

検出状況 4地点 JA13～JC14グリッド、IVb層上面で検出した。北側・東側の柱穴は発掘区外となるが、3間×1間以上の建物と考えられる。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P1はSK4886と、P4はSK4899と重複する。本遺構はSK4886・SK4899より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-28°-Wである。規模は発掘区外に広がるため全容は不明であるが、桁行3間(7.9m、柱間2.8m-2.5m-2.6m)、梁行1間以上(柱間2.5m)、床面積19.8m²以上である。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。断面形はP1は方形、P2は逆台形、P3・P4は半円形で、P5は発掘区外に続くが逆台形と考えられる。底面の標高は、P3・P4は他の柱穴より浅い。柱穴の埋土は、P2のみ柱痕跡が確認でき、P1は2層、P2は3層、P3・P4は2層、P5は4層に分層した。P2から土師器1点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 P2出土土師器の小片は鍋の胴部である。そのため時期決定の根拠に乏しい。同じ長軸方位を有する建物や櫛、溝などの遺構が認められず、重複するSK4886・SK4899も時期不明のため、本遺構は時期不明である。

SB43(図523)

検出状況 4地点 JE13～JJ14グリッド、IVb層上面で検出した。南西側の柱穴は発掘区外となるが、2間×1間以上の建物と考えられる。柱穴の平面形はP1・P2・P3は明瞭で、P4は不明瞭であった。P2はSK4976と、P3はSK4978と重複する。本遺構はSK4978より古く、SK4976より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-3°-Wである。規模は発掘区外に広がるため全容は不明であるが、桁行2間(4.6m、柱間2.5m-2.1m)、梁行1間以上(柱間3.1m)、床面積14.3m²以上である。側柱建物である。本遺構はSD392やSD395(図618)等の区画溝内側に位置するが、長軸方位が大きく異なるため、区画溝との関係は不明である。SA54やSA62とは長軸方位が共通する。

柱穴 柱穴の平面形はP2・P3・P4は円形で、P1は西側が発掘区外となるが円形あるいは隅丸の方形と考えられる。断面形はいずれも半円形で、底面の標高はP1が他の柱穴より深い。柱穴の埋土は、P1・P3・P4は2層、P2は3層に分層した。P1・P2は中央部が座む堆積に対し、P3・P4はほぼ水平堆積である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 柱穴からの出土遺物が無く、またその他遺構との重複関係も認められないことから、本遺構は時期不明である。

SB41

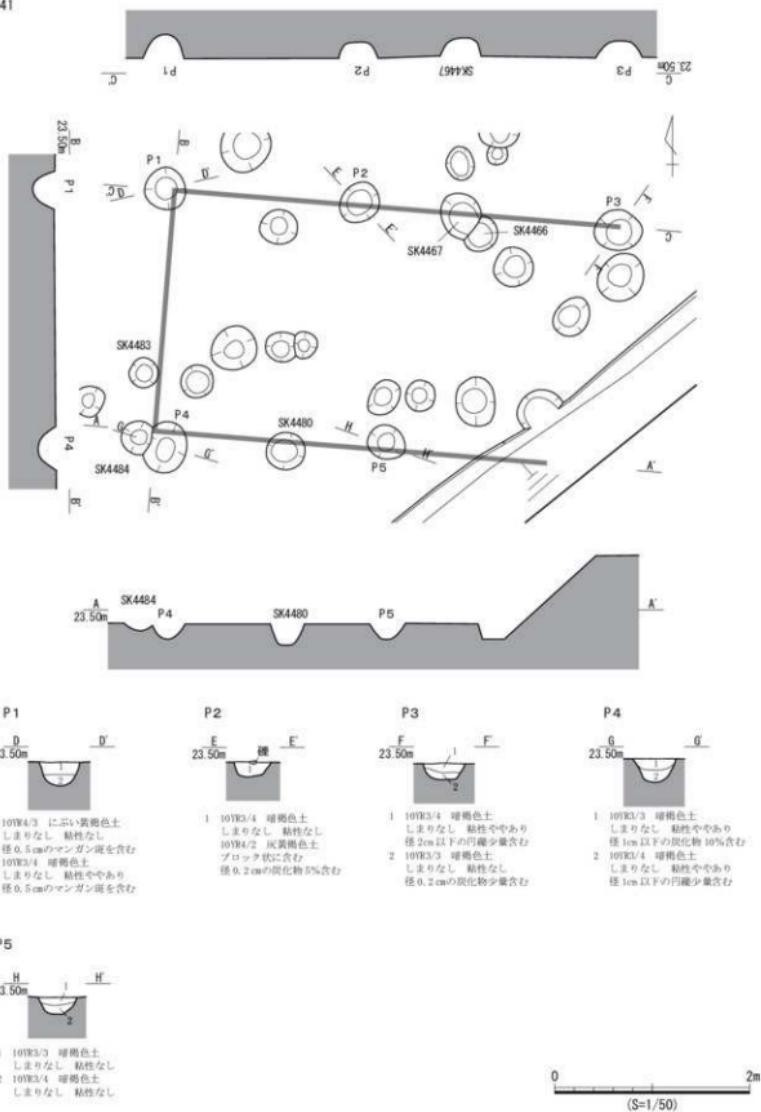


図 521 SB41 遺構図

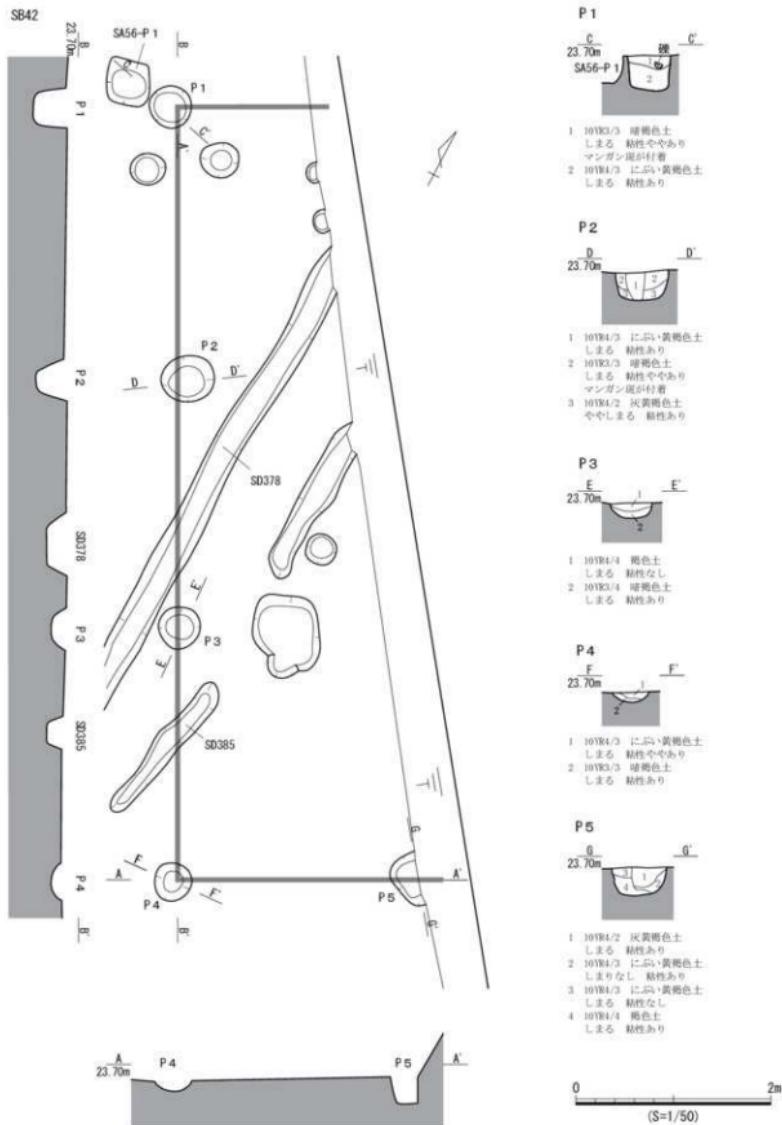


図 522 SB42 造構図

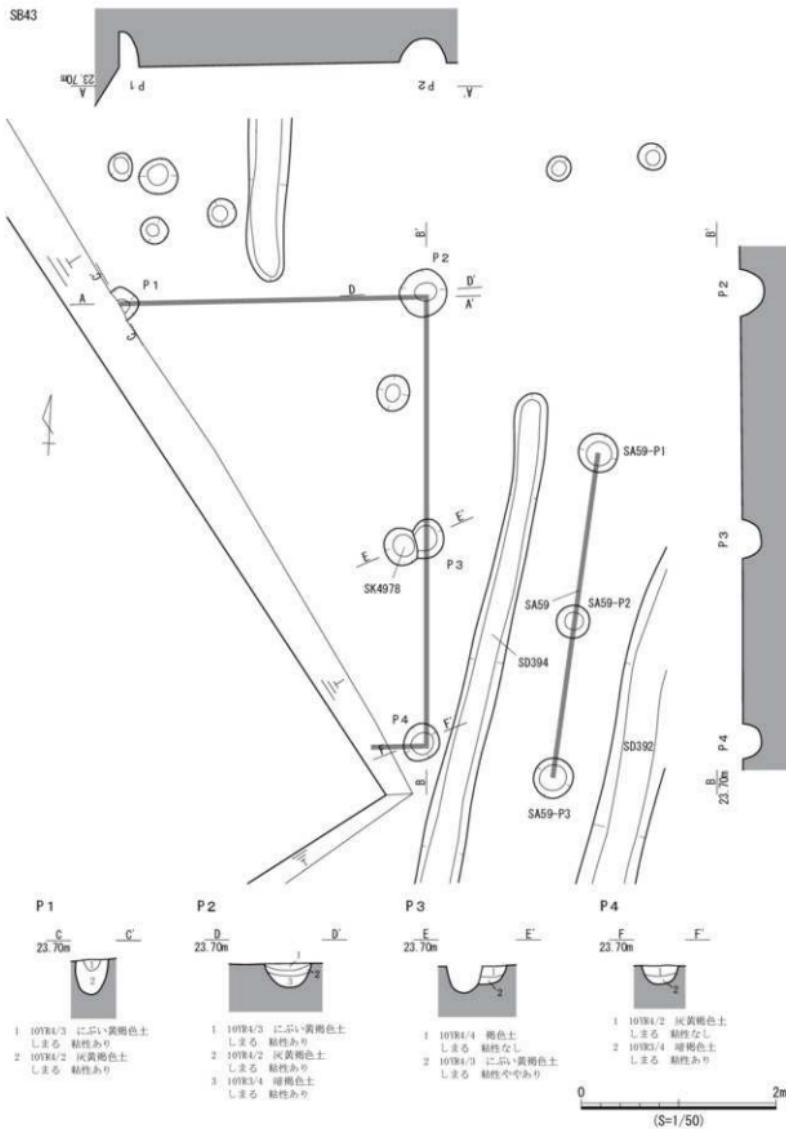


図 523 SB43 遺構図

SB44(図524)

検出状況 4地点 JH13～JI13 グリッド、IV b 層上面で検出した。南東部の柱穴は発掘区外となるが、2間以上×2間の建物と考えられる。柱穴の平面形は P2 は明瞭、P1・P3・P4・P5 は不明瞭であった。P5 は SK5071 と重複する。本遺構は SK5071 より新しい。

規模・形状 長軸方位は N-84° - W である。南東部が発掘区外となるため全容は不明であるが、規模は桁行 2 間以上 (3.7m 以上、1.9m-1.8m)、梁行 2 間 (2.5m、1.4m-1.1m)、床面積 9.3 m² 以上となる側柱建物である。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは楕円形である。柱穴の埋土はいずれも 2 層に分層し、P1・P2・P3 は水平堆積、P4・P5 は中央が壅む堆積である。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。P3 から山茶碗 1 点、P4 から山茶碗 1 点、P5 から山茶碗 2 点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 P3～P5 から尾張型山茶碗の小片が出土したことと SK5071 との重複関係から、本遺構は SK5071 の所属時期である 12 世紀後葉から 13 世紀初頭以降と考えられる。

SB44

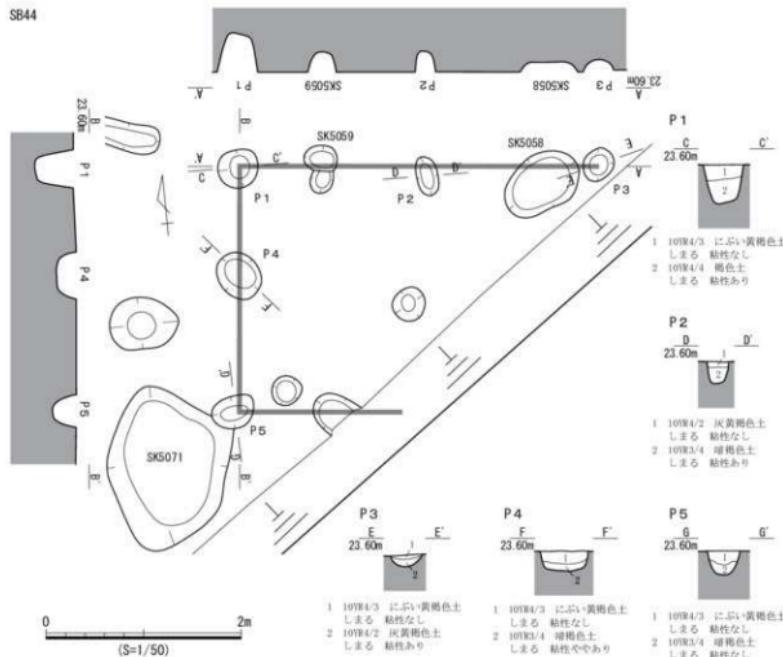


図 524 SB44 遺構図

SB45（図525）

検出状況 4地点 JJ8～JI9グリッド、IVb層上面で検出した。3間×1間の建物である。柱穴の平面形はすべて明瞭であった。P5はSD425・SD426と、P6はSK5266・SK5267と重複する。本遺構はSD426・SK5266より古く、SD425・SK5267より新しい。

規模・形状 長軸方位は、N-88°-Eである。規模は桁行3間（北面6.5m、2.1m-2.2m-2.2m、南面6.7m、2.3m-2.1m-2.4m）、梁行1間（西面2.3m、東面2.5m）、床面積16.6m²となる側柱建物である。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。柱穴の埋土はP1・P3には柱痕跡が認められる。P1・P6は3層、P2・P5は単層、P4・P7・P8は2層に分層し、P2・P4・P8は水平堆積、P6は中央が窪む堆積、P7は2段に掘り込む堆積である。P1から山茶碗1点、土師器24点、P2から山茶碗5点、土師器12点、P6から山茶碗1点、土師器4点、P7から山茶碗2点、土師器5点、中近世陶磁器1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD426との重複関係から、本遺構はSD426の所属時期である14世紀後葉以前と考えられる。

SB46（図526）

検出状況 4地点 JJ10～JK10グリッド、IVb層上面で検出した。南東部の柱穴は発掘区外となるが、2間以上×2間の建物と考えられる。柱穴の平面形はP3が明瞭の他は不明瞭であった。P3はSK5302・SK5303と、P6はSK5322と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-2°-Wである。規模は桁行2間以上（西面5.4m、3.0m-2.4m、東面3.0m）、梁行2間（北面3.3m、1.7m-1.6m）、床面積17.8m²となる側柱建物である。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。柱穴の埋土はP3が単層となる他は2層に分層した。P1のみ中央がやや窪む堆積で、その他は水平堆積である。P6のみ他の柱穴より規模が大きく、P1は他の柱穴より深い。P1から土師器8点、山茶碗2点、常滑産陶器1点、P3から山茶碗1点、P4から土師器1点、山茶碗4点、常滑産陶器1点、P5から土師器8点、山茶碗2点、P6から土師器5点、灰釉陶器1点、山茶碗2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 出土遺物に尾張型山茶碗の口縁部小片を複数含むことから、本遺構は中世と考えられる。

SB47（図527）

検出状況 4地点 JK7～JL7グリッド、IVb層上面で検出した。2間×1間の建物である。柱穴の平面形はP4以外は明瞭であった。P1はSK5503・SK5506と、P2はSK5498と、P4はSK5497・SK5514と、P5はSD449と、P6はSK5521と重複する。また、建物の南東隅とSB49の北西隅は重複する。本遺構はSK5497・SK5503・SK5506・SK5514より古く、SD449・SK5498・SK5521より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-1°-Eである。規模は桁行2間（西面4.4m、2.3m-2.1m、東面4.3m、2.3m-2.0m）、梁行1間（北面2.3m、南面2.2m）、床面積9.8m²となる側柱建物である。

柱穴 柱穴の平面形は、P1・P3～P6は円形、P2は楕円形である。柱穴の埋土は、P1・P3・P4は単層、P2は4層、P5は2層、P6は3層に分層した。P2は2層が3・4層を掘り込むような堆積であることから柱痕跡の可能性がある。1層は中央が窪む堆積である。P5は水平堆積、P6は東に偏

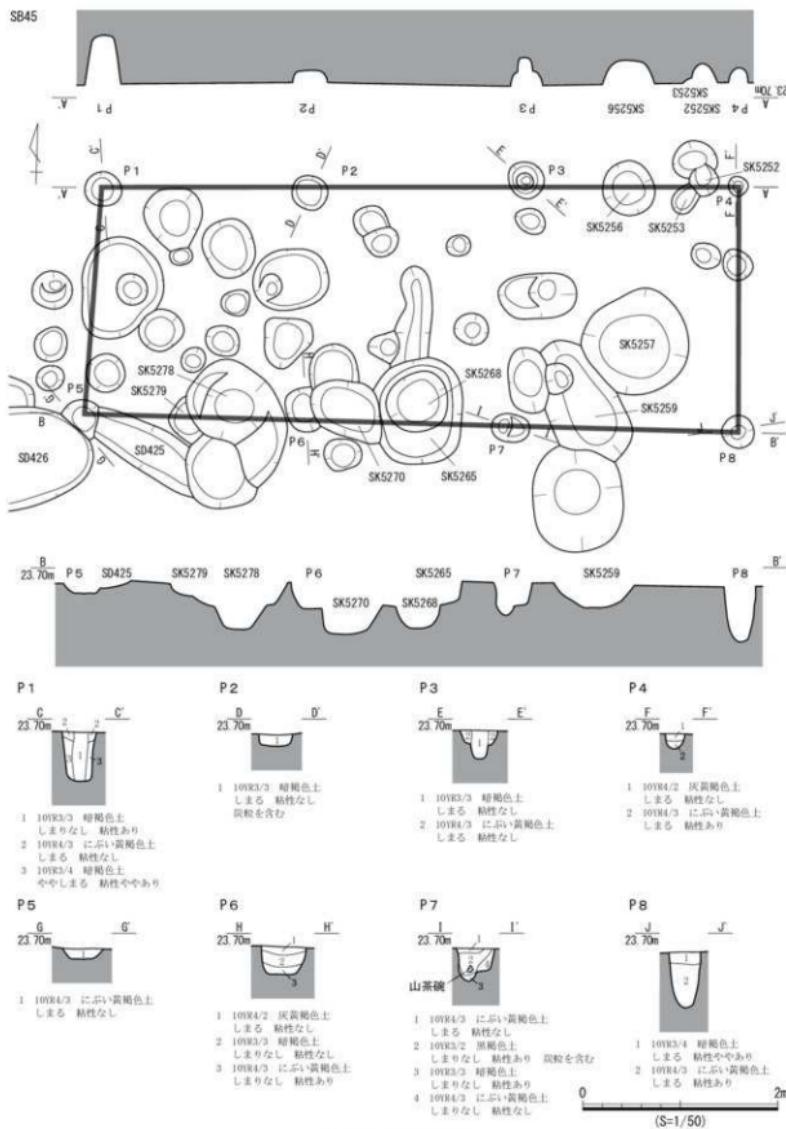


図 525 SB45 構造図

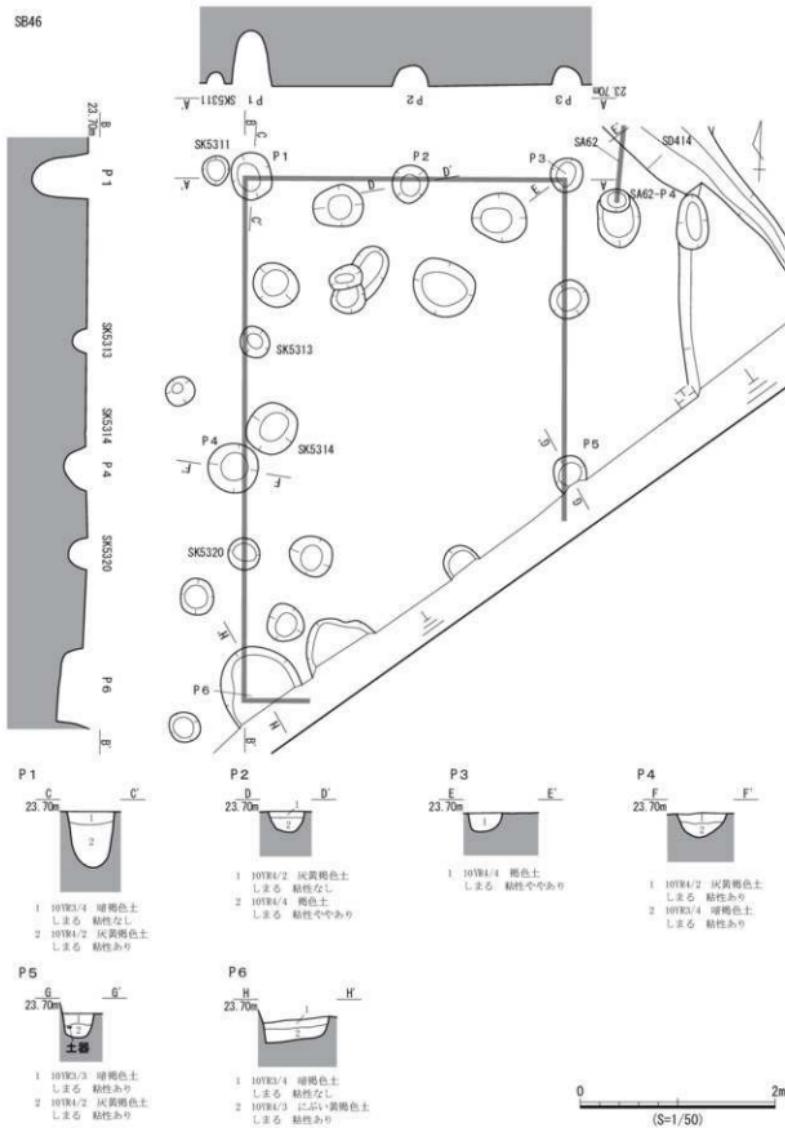


図 526 SB46 遺構図

る堆積である。P1から土師器2点、山茶碗3点、P2から土師器21点、山茶碗4点、P3から土師器1点、P5から土師器1点、山茶碗2点、輪羽口1点、P6から土師器2点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 P2から出土した山茶碗1点を図示した。2988は大畠大洞4号窯式古段階に比定した東濃型山茶碗の小皿である。

時期 図示した2988は13世紀末から14世紀初頭を示すが、SK5497との重複関係から混入と考えられ、本遺構はSK5497の所属時期である12世紀後葉から13世紀初頭より古いと考えられる。

SB48(図528)

検出状況 4地点JK7～JI8グリッド、IVb層上面で検出した。3間以上×1間の建物である。柱穴の平面形はP1・P2・P4・P6～P8は明瞭、P3・P5は不明瞭であった。P1はSK5497・SK5517と、P2はSK5416と、P3はSK5497と、P5はSD446・SK5443と、P6はSK5411と、P8はSK5406と重複する。また、建物の南部とSB49は重複する。本遺構はSK5411・SK5416・SK5497・SK5517より古く、SD446・SK5406・SK5443より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-7°～Wである。桁行3間以上(西面5.8m、2.1m-1.8m-1.9m、東面5.8m、2.3m-1.7m-1.8m)、梁行1間(北面2.9m、南面2.8m)、床面積16.5m²以上となる側柱建物である。平面形は北面より南面がやや狭く、東面と西面に長軸方位がやや歪んだ長方形である。

柱穴 柱穴の平面形状はP1・P4・P5・P6・P8は円形、P2・P7は梢円形、P3は隅丸方形である。柱穴の埋土はP2・P3は単層で、P1・P4～P8は2層に分層した。堆積状況はP1は中央が窪み、P4・P5・P7・P8は水平堆積で、P6のみ柱痕跡(2層)が認められる。P1から土師器6点、山茶碗2点、P3から土師器3点、山茶碗6点、P5から土師器12点、山茶碗14点、鉄滓2点、P6から土師器1点、山茶碗1点、P7から土師器4点、灰釉陶器1点、山茶碗5点、土製品1点、鉄滓1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD446・SK5416・SK5497の重複関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

SB49(図529)

検出状況 4地点JL7～JM7・JL8グリッド、IVb層上面で検出した。南東部の柱穴が発掘区外となるが2間以上×2間の建物と考えられる。柱穴の平面形はP2・P3は明瞭、P1・P4・P5は不明瞭であった。P1はSK5497と、P2はSK5443と、P3はSK5410・SK5453と、P4はSD446と、P5はSK5538・SD447と重複する。本遺構はSD447・SK5497より古く、SD446・SK5538・SK5410・SK5443・SK5453より新しい。

規模・形状 長軸方位はN-88°～Wである。桁行2間以上(6.4m、3.4m-3.0m)、梁行2間(5.0m、2.5m-2.5m)、床面積32.0m²以上となる側柱建物である。

柱穴 柱穴の平面形状は、P2が梢円形となる他は円形である。柱穴の埋土はP4・P5が単層で、P1・P2・P3は2層に分層した。堆積状況はP1・P2は水平堆積、P3は中央部が窪む。遺物はP1から土師器2点、山茶碗2点、P3から土師器13点、山茶碗24点、常滑産陶器1点、鉄滓11点、P4から土師器1点、P5から土師器2点、灰釉陶器1点、山茶碗3点、輪羽口8点が散在して出土した。

出土遺物 P5から出土した山茶碗1点を図示した。2989は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗

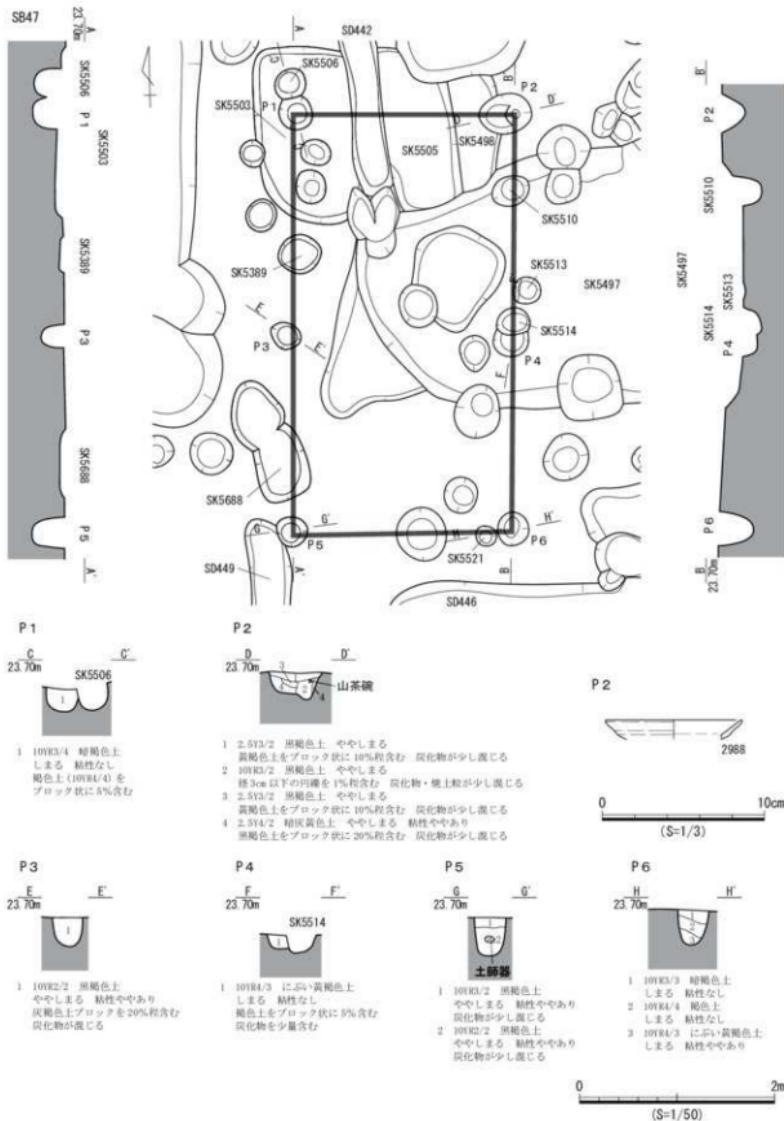


図 527 SB47 遺構図・出土遺物実測図

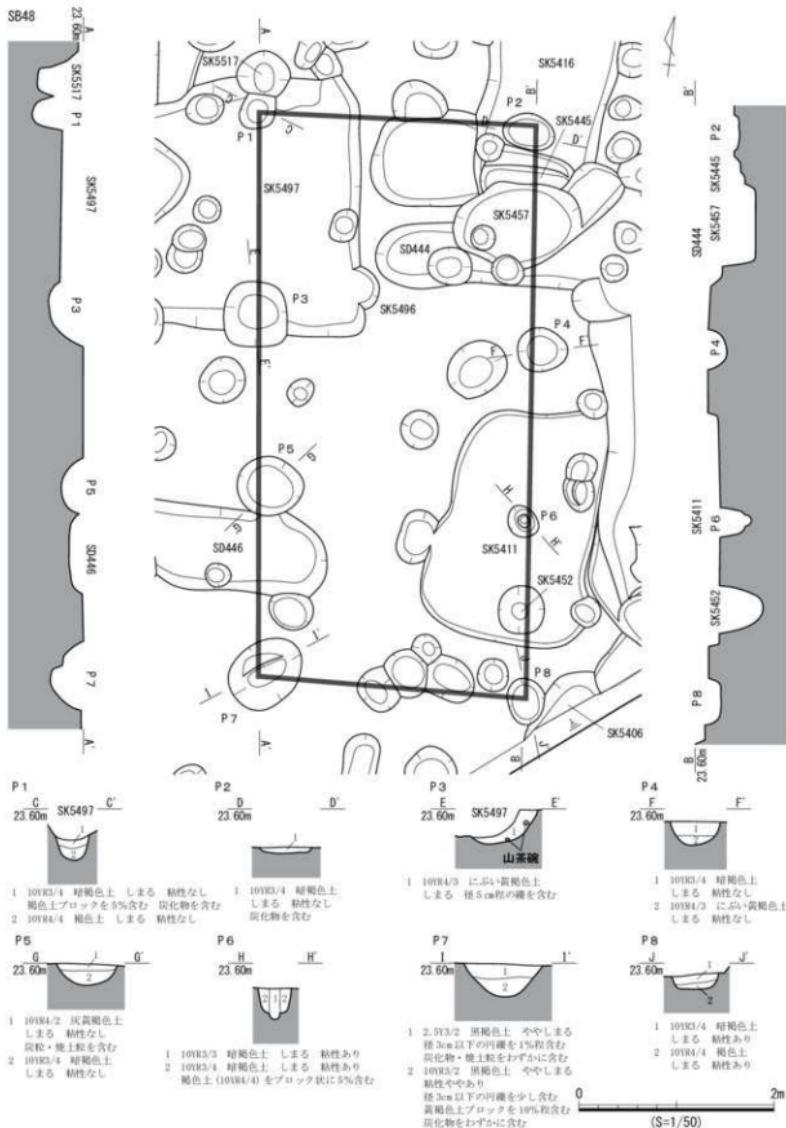


図 528 SB48 造遣図

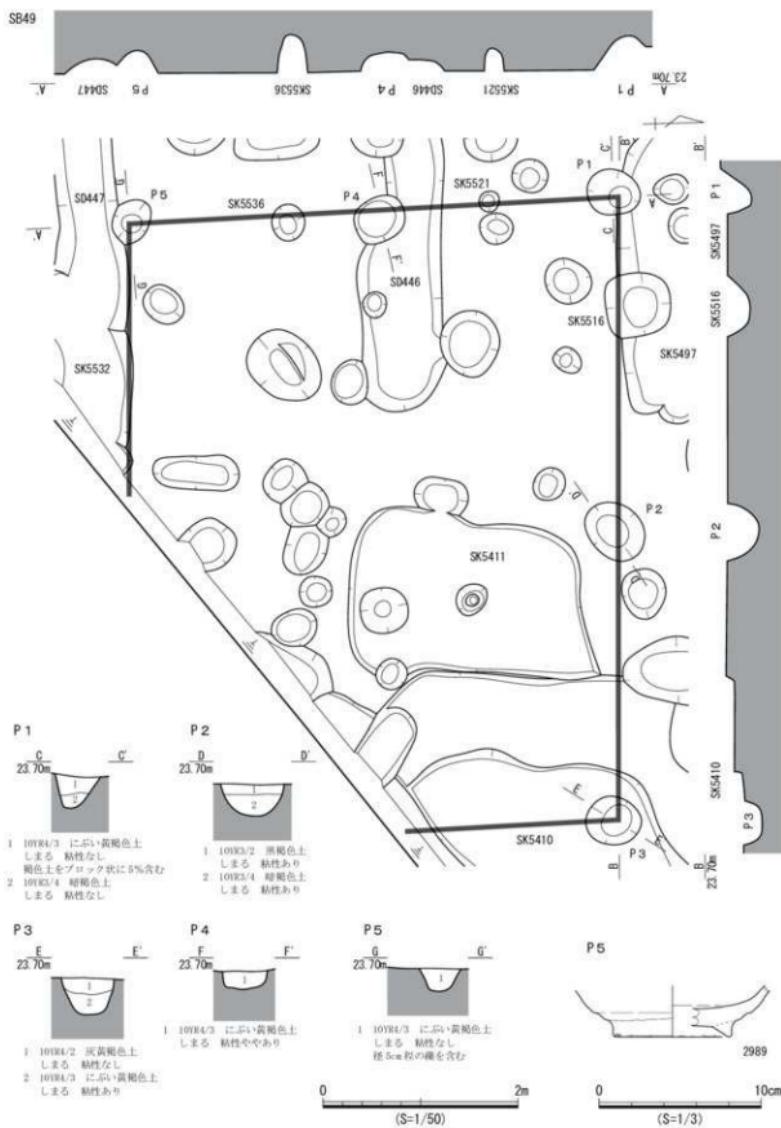


図 529 SB49 遺構図・出土遺物実測図

の碗である。

時期 図示した2988は12世紀中葉から12世紀後葉を示すが、SD446との重複関係から、SD446の所属時期である13世紀後葉から末より新しいと考えられる。

3 柱

SA50(図530)

検出状況 3地点 MA12～MA13 グリッド、IV b 層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。

規模・形状 4基の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-90° - E Wで、柱間距離は1.6m～2.2mである。南側に近接して SA51 が並行する。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。P1は他の柱穴に比べ長軸長 0.66mと大きい。柱穴の埋土は P1～P3 では単層若しくは水平に堆積し、P4 は深さが 0.47mで再掘削と考えられる堆積状況を確認した。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 SA51との位置関係から、本遺構は中世と考えられる。

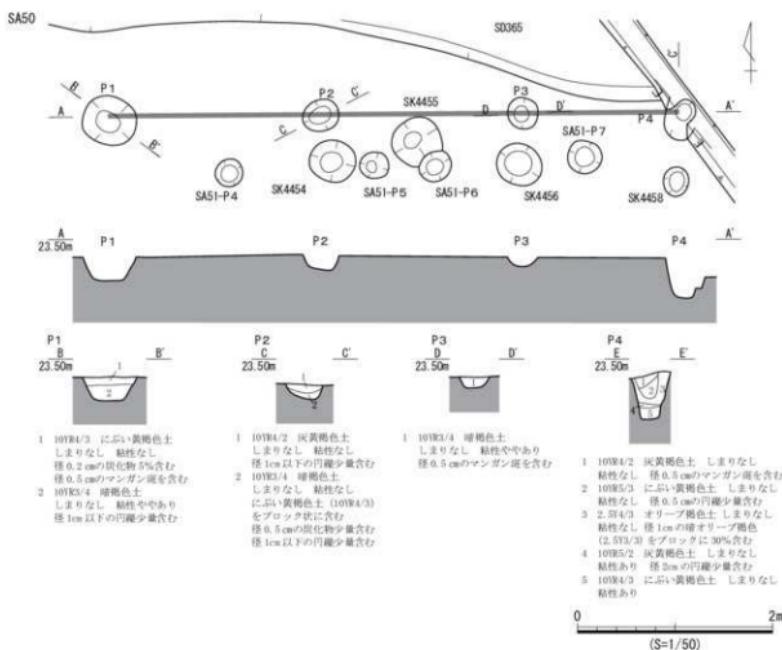


図 530 SA50 遺構図

SA51(図531)

検出状況 3地点 MA11～MA13 グリッド、IV b層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P1の西側は発掘区外となるため、柵がさらに延びる可能性がある。

規模・形状 8基の同規模の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-90°-E-Wで、柱間距離は0.7m～1.9mである。P3とP4との柱間が他の柱間に比べ広くなる。北側に近接してSA50が並行する。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは梢円形である。柱穴の埋土は単層若しくは水平に堆積し、柱痕跡は確認できなかった。P1から山茶碗1点、P4から土師器2点、P7から土師器3点、灰釉陶器1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

SA51

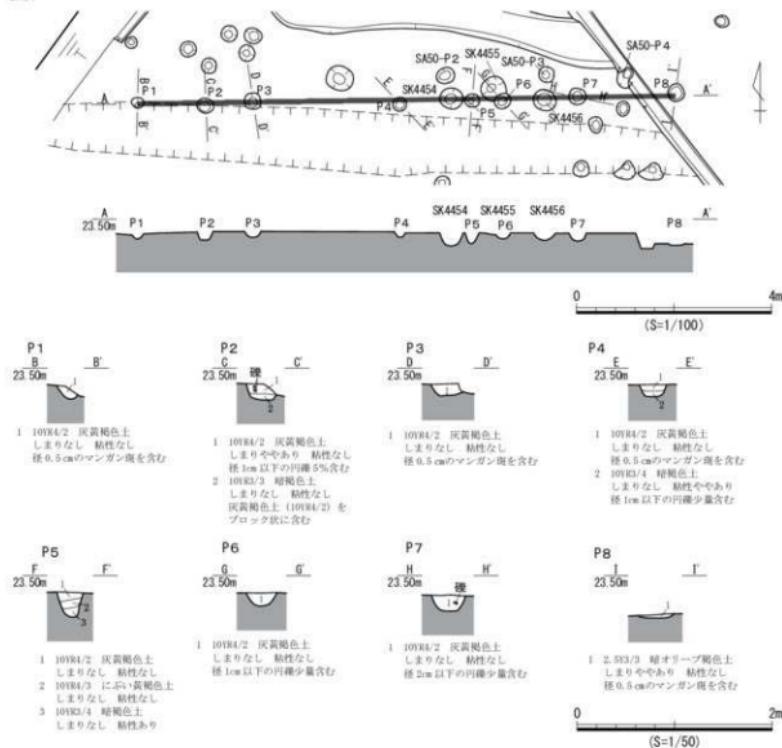


図531 SA51 遺構図

SA53(図532)

検出状況 3地点 MD10～MD11 グリッド、IV b層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P6 の東側は発掘区外となるため、柵がさらに延びる可能性がある。P1 は SD367 と重複する。本遺構は SD367 より新しい。

規模・形状 埋土が類似する6基の同規模の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-83°-Eで、柱間距離は0.9m～1.6mである。P1とP2との柱間が他の柱間に比べ広くなる。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形である。柱穴の埋土は水平に堆積し、柱痕跡は確認できなかった。P1から山茶碗1点、P2から山茶碗1点、P4から常滑産陶器1点、P5から灰釉陶器1点が出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

SA53

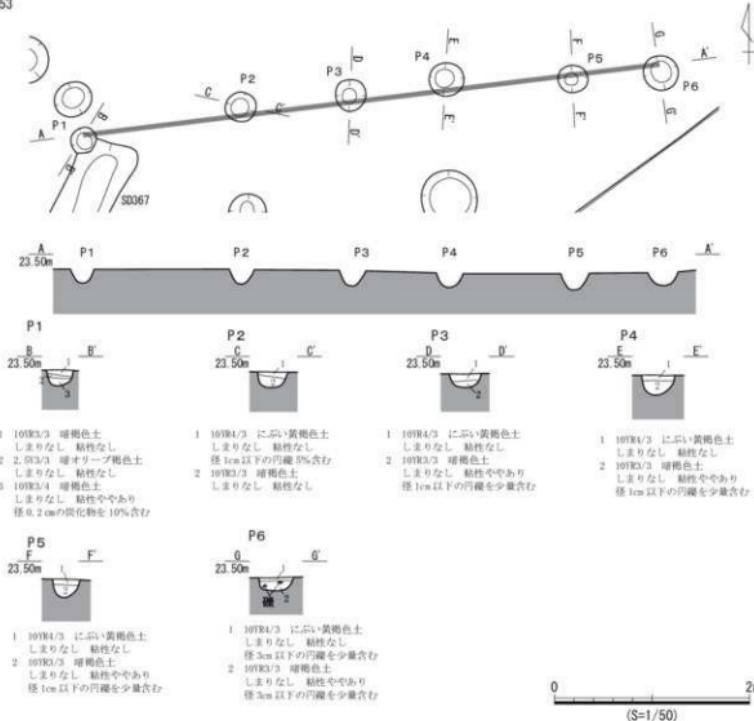


図532 SA53 遺構図

時期 SD367との重複関係と大畠大洞4号窯式～脇之島3号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したことから、本遺構は14世紀後葉から15世紀後葉と考えられる。

SA54（図533）

検出状況 4地点 JA20～JC20、KA1グリッド、IVb層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P6はSK4796と重複する。本遺構はSK4796より新しい。両端は発掘区外となるため、柵が更に南北方向に延びる可能性がある。

規模・形状 SD380の東側に並行して6基の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-3°-Eである。全長9.9m、柱間距離はP1から1.5m-1.7m-1.7m-1.7m-1.7m-1.6mと両端を除いてほぼ等間隔である。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形である。柱穴の埋土は単層で、柱痕跡は確認できなかった。P5は埋土中に暗褐色土ブロックを含む。遺物は出土しなかった。

時期 SD380との位置関係から、本遺構はSD380と同時期の中世の可能性がある。

SA55（図533）

検出状況 4地点 JC18～JC20・JD19～JD20グリッド、IVb層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。両端は発掘区外となるため、柵が更に東西方向に延びる可能性がある。

規模・形状 SD387の北側に並行して4基の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。P2・P3間の柱穴は浅かったため削平された可能性もある。方位は、N-82°-Wである。全長7.2m、柱間距離はP1から1.4m-(1.8m)-(1.8m)-2.2mと不揃いである。

柱穴 いずれの柱穴も平面形は円形である。柱穴の埋土は単層で、柱痕跡は確認できなかった。P1・P2は褐色土ブロックを含む。遺物は出土しなかった。

時期 SD387との位置関係から、本遺構はSD387の所属時期である12世紀後葉から13世紀初頭以降の可能性がある。

SA56（図534）

検出状況 4地点 JB13グリッド、IVb層上面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P1はSK4886と重複する。本遺構はSK4886より新しい。

規模・形状 3基の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-10°-Eである。全長4.2m、柱間距離はP1から2.1m-2.1mと等間隔である。

柱穴 柱穴の平面形はP1が方形、P2・P3は円形である。P1は5層、P2は4層、P3は3層に分層した。いずれも1層・2層が柱痕跡と考えられる。遺物は出土しなかった。

時期 重複するSK4886から土師器皿の小片が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

SA57（図534）

検出状況 4地点 JB12～JD12グリッド、P1～P3はIVb層上面、P4～P7は南北に延びる溝状の擾乱底面で検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。

規模・形状 7基の柱穴がほぼ直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-6°-Wである。全長8.9m、柱間距離はP1から1.4m-1.6m-1.9m-1.5m-1.5m-1.0mと不揃いで、P2・P4は柱通りの中心から外れる。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。P6が3層となる他は、2層に分層した。P1・P4は水

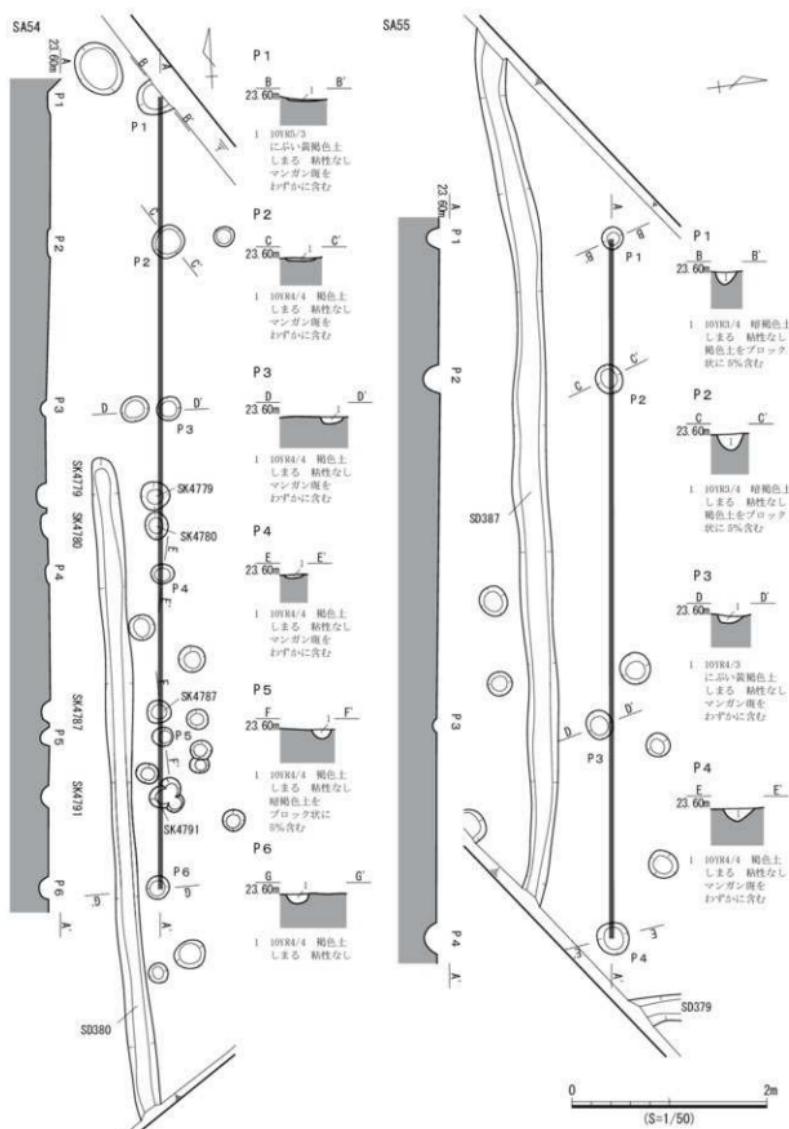


図 533 SA54・SA55 造構図

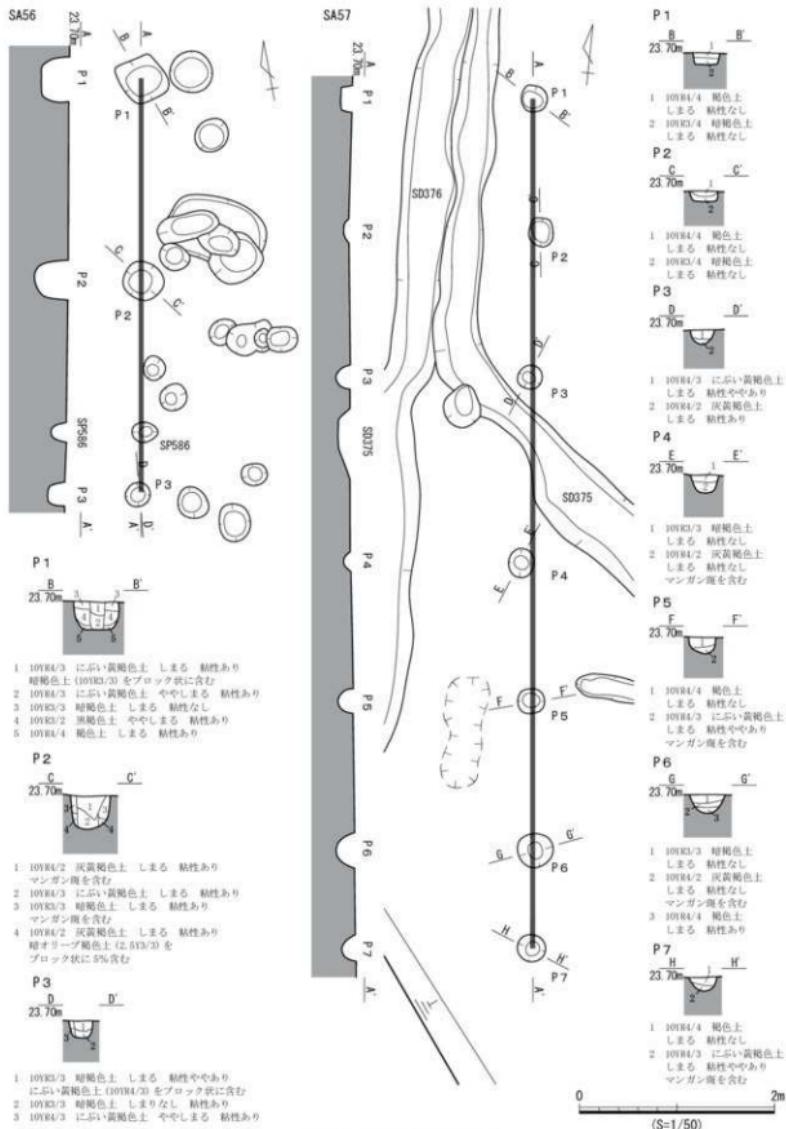


図 534 SA56・SA57 遺構図

平堆積、P2は中央が窪む堆積、その他は一方に偏る堆積である。遺物はP3から土師器1点、P4から山茶碗1点、P6から土師器3点が埋土中から散在して出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 P4から山茶碗の小片が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

SA58(図535)

検出状況 4地点 JD13～JD14グリッド、IVb層上面で検出した。柱穴の平面形はP2・P3は明瞭、P1・P5～P7は不明瞭であった。P4はSD378と重複する。本遺構はSD378より新しい。

規模・形状 7基の柱穴がほぼ直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-54°-Wである。全長6.3m、柱間距離はP1から0.7m-0.9m-1.3m-1.1m-0.8m-1.5mと不揃いで、P3・P4・P6は柱通りの中心から外れる。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。P4・P6は単層で、その他は2層に分層した。P1～P3・P7は中央が窪む堆積で、P5は1層が柱痕跡、P6は水平堆積である。遺物は出土しなかった。

時期 SD378との重複関係から、本遺構はSD378の所属時期である13世紀初頭から中葉以降の可能性がある。

SA58

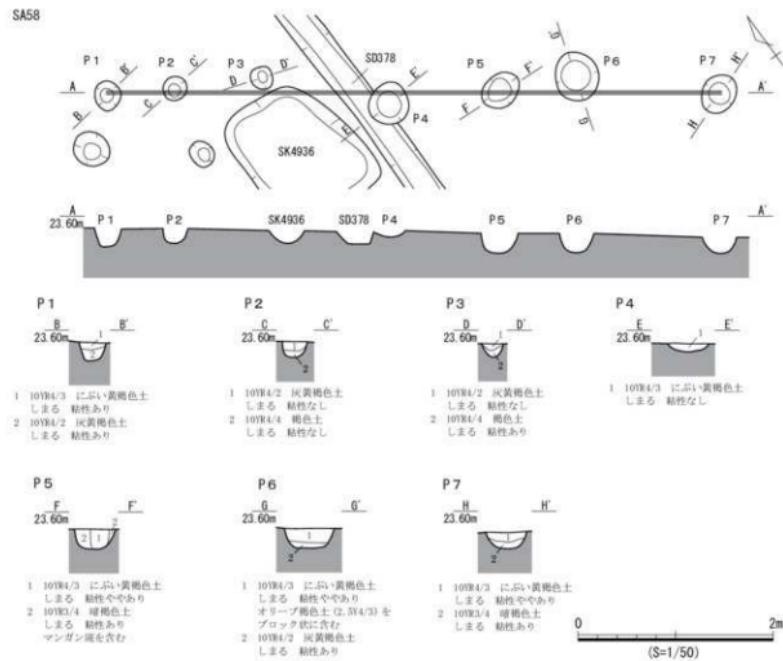


図535 SA58遺構図

SA59(図536)

検出状況 4地点 JF14 グリッド、IV b 層上面で検出した。柱穴の平面形は P1 は明瞭、P2・P3 は不明瞭であった。

規模・形状 区画溝とした SD392 東面と SD394 の間に位置し、3基の柱穴が直線的に並ぶことから構とした。方位は、N-5°-Eである。全長 3.3m、柱間距離は P1 から 1.7m-1.6m である。SD392 を挟んで東側に SA60 が位置し、本遺構とは方位が若干異なるものの同じく 2間の規模であることから、SD392 を挟んで設置された施設であった可能性もある。また、SD394 を挟んだ西側に SB43 が位置するが、本遺構が SD392 や SD394 と近似する方位に対して SB43 は異なる方位であることから、本遺構との関係は不明である。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形で、2層に分層した。水平堆積である。遺物は出土しなかった。

時期 SD392 と関連する遺構とした場合、本遺構は SD392 の所属時期である 13世紀初頭から 13世紀中葉と同じ時期の可能性がある。

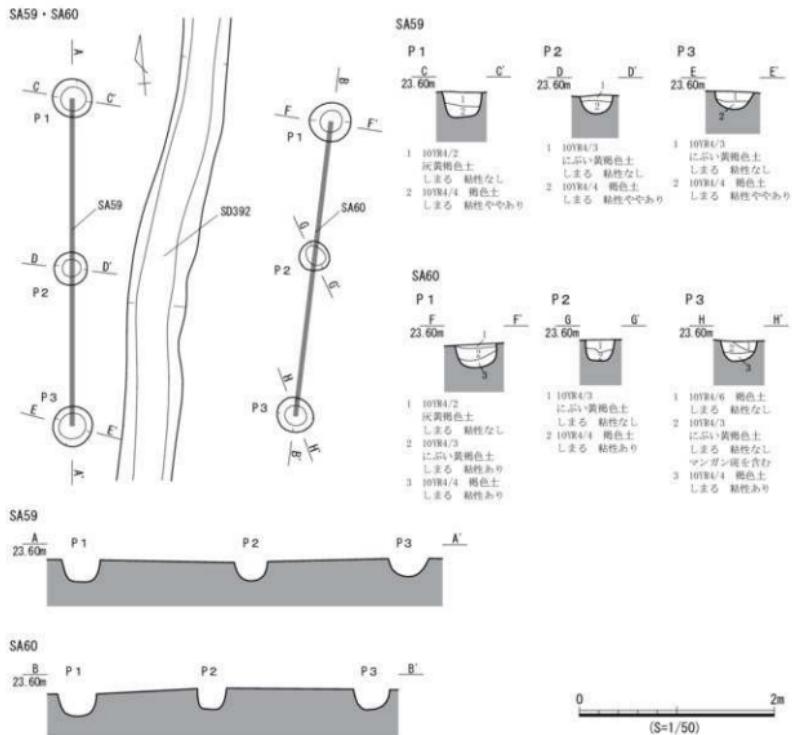


図 536 SA59・SA60 遺構図

SA60（図536）

検出状況 4地点 JF14～JF15グリッド、IV b層上面で検出した。柱穴の平面形はP1・P3は明瞭、P2は不明瞭であった。

規模・形状 区画溝としたSD392東面の長軸方向に並行し、3基の柱穴が直線的に並ぶことから構造とした。方位は、N-10°-Eである。全長3.0m、柱間距離はP1から1.4m-1.6mである。SA59と一連の施設であった可能性もある。

柱穴 柱穴の平面形はいずれも円形である。P1・P3は3層、P2は2層に分層した。P1の1層は水平堆積、2層は東に偏る堆積で、P2は中央が壅む堆積、P3は1層が南東に偏る堆積で2層は水平堆積である。遺物は出土しなかった。

時期 SA59と同様に、本構造はSD392の所属時期である13世紀初頭から中葉と同じ時期の可能性がある。

SA61（図537・539）

検出状況 4地点 JH11～JH11グリッド、IV b層上面で検出した。柱穴の平面形はP3が不明瞭な他はいずれも明瞭であった。P2はSK5102・SK5103と、P3はSK5101・SK5102と、P4及びP5はSD419と重複する。本構造は、いずれの構造より新しい。

規模・形状 SD418と並行し、5基の柱穴が直線的に並ぶことから構造とした。方位は、N-2°-Eである。全長6.8m、柱間距離はP1から1.4m-1.5m-1.5m-2.4mで、P3-P4間のみ、他より柱間隔が広い。

柱穴 柱穴の平面形は、P2・P3は橢円形、P4・P5は円形である。P1は発掘区外に延びるが円形と考えられる。P1・P5は3層、P2～P4は2層に分層した。P

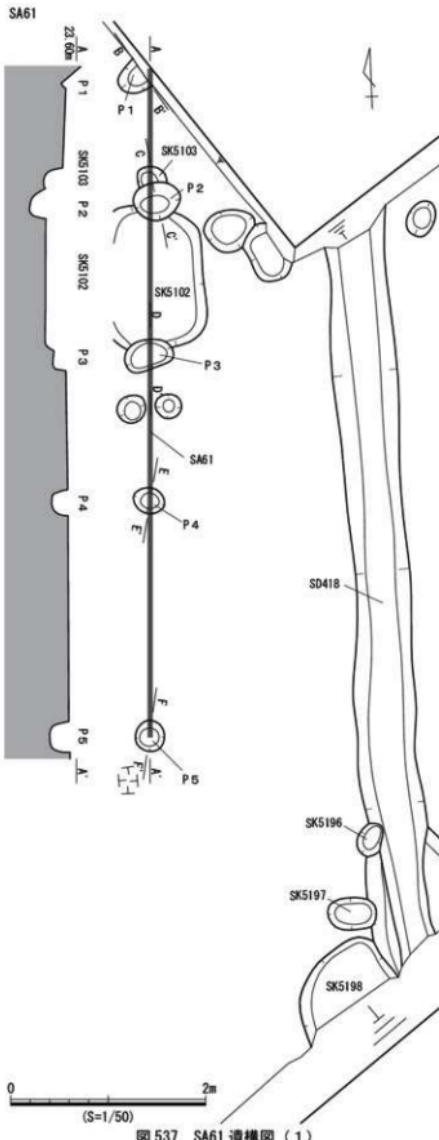


図537 SA61構造図(1)

1は1層が柱痕跡である。P2～P5は水平堆積である。遺物は出土しなかった。

時期 SD419との重複関係から、本遺構はSD419の所属時期である14世紀後葉から15世紀初頭以降と考えられる。
SA62(図538・539)

検出状況 4地点 JH10～JJ10、JH11グリッド、IV b層上面で検出した。柱穴の平面形はP1・P3・P4が明瞭、P2が不明瞭であった。P1はSK5102と、P3はSK5229・SD414と、P4はSK5300と重複する。本遺構は、SD414・SK5229・SK5300より古く、SK5102より新しい。

規模・形状 SA61と並行し、4基の柱穴が直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-3°-Eである。全長7.3m、柱間距離はP1から2.4m-2.5m-2.4mである。

柱穴 柱穴の平面形は、P1～P3は円形、P4は梢円形である。P1・P3・P4は2層に、P3は3層に分層した。P3は1層が柱痕跡である。P1・P2・P4は水平堆積である。P4の2層上面から土師器皿の破片2点が逆位で重なって出土した(2990・2991)。この他P1から土師器1点、P2から土師器13点、P3から土師器12点・山茶碗1点、P4から土師器8点・山茶碗2点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 P4出土の土師器2点を図示した。2990はM4類、2991はB1類の皿である。

時期 SK5102と重複関係から、本遺構はSA61と同時期の14世紀後葉から15世紀初頭より古いと考えられる。

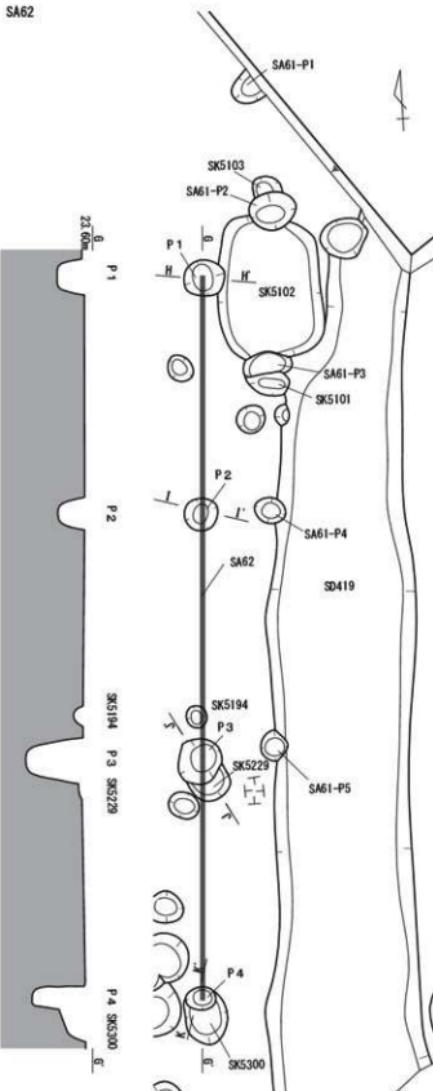
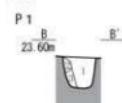
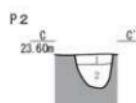


図538 SA62造構図(1)

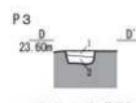
SA61



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまる 粘性あり
黒褐色土(10YR3/2)を
ブロック状に含む
2 10YR4/2 黑褐色土
しまる 粘性ややあり
にぶい黄褐色土(10YR4/3)を
ブロック状に含む
3 10YR4/4 墓褐色土
しまる 粘性なし



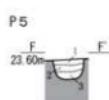
- 1 10YR4/4 棕色土
しまる 粘性ややあり
2 10YR4/2 墓褐色土
しまる 粘性あり



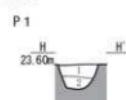
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまる 粘性あり
2 10YR4/4 棕色土
しまる 粘性あり



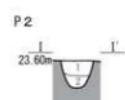
- 1 10YR4/4 棕色土
しまる 粘性ややあり
2 10YR4/2 墓褐色土
しまる 粘性あり



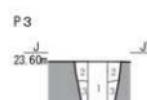
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまる 粘性なし
2 10YR4/2 棕色土
しまる 粘性ややあり
3 10YR4/4 墓褐色土
しまる 粘性ややあり



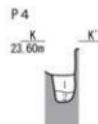
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまる 粘性ややあり
2 10YR4/4 棕色土
しまる 粘性あり



- 1 10YR4/2 墓褐色土
しまる 粘性なし
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまる 粘性あり



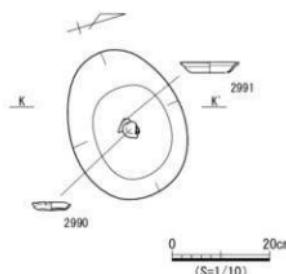
- 1 10YR4/4 棕色土
しまる 粘性あり
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土
しまる 粘性なし
3 10YR4/4 墓褐色土
しまる 粘性あり



- 1 10YR3/4 墓褐色土
しまる 粘性ややあり
2 10YR3/3 墓褐色土
しまる 粘性あり 塩化物を含む

0 2m
(S=1/50)

SA62-P4 遺物出土状況図

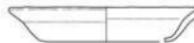


SA62

P4



2990



2991

0 10cm
(S=1/3)

図 539 SA61・SA62 遺構図(2)・出土遺物実測図

SA63(図540)

検出状況 4地点 JI8～JI10グリッド、IVb層上面で検出した。柱穴の平面形はP3を除いていずれも明瞭であった。P2はSK5227と、P4はSK5186と重複する。本遺構はSK5186・SK5227より古い。

規模・形状 5基の柱穴がほぼ直線的に並ぶことから柵とした。方位はN-83°-Wである。全長6.0m、柱間距離はP1から1.2m-1.7m-1.3m-1.8mでと不揃いで、P3は柱通りの中心から南側に外れる。本遺構の南西にSB45が位置するが、約8度の方位差があり、また建物を囲うような配置でも無いため、本遺構との関係は不明である。

柱穴 柱穴の平面形はP1・P3～P5が円形、P2が楕円形である。P1・P2・P3は単層、P4・P5は2層に分層した。P4・P5は水平堆積である。遺物はP2から土師器9点、山茶碗1点、P3から土師器1点、山茶碗1点、古瀬戸1点、P4から土師器2点、山茶碗1点、P5から土師器1点が埋土中から散在して出土したがいずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。P3から出土した山茶碗は、大畠大洞4号窯式新段階以降と考えられる小片である。

時期 P3出土の山茶碗や、重複するSK5227に古瀬戸後期鉄皿の小片を含むことから、本遺構は14世紀と考えられる。

SA63

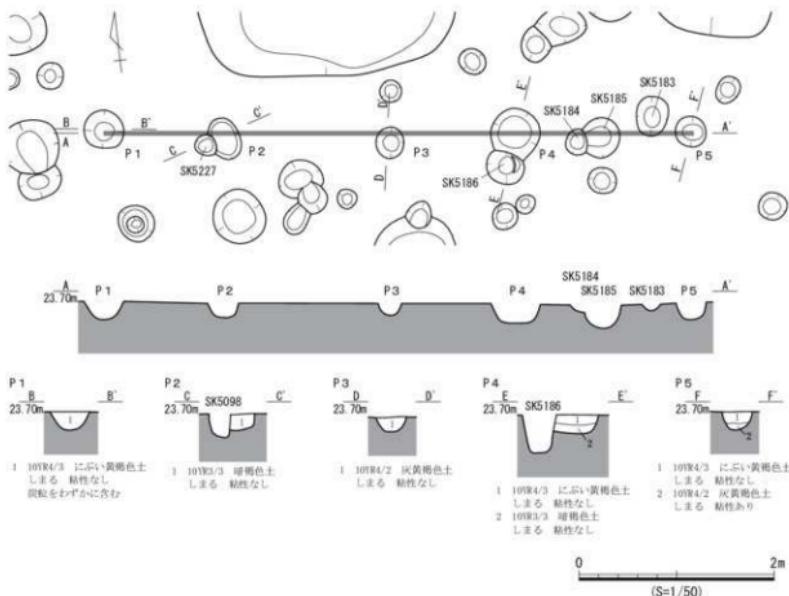


図540 SA63遺構図

4 柱穴

SP576 (図541)

検出状況 3地点 MB12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形で、断面は深い插鉢状である。形状から単独の柱穴と判断した。

埋土 2層に分層した。1層は2層を掘り込む堆積である。

遺物出土状況 2層から山茶碗1点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物はなかった。

時期 山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

SP581 (図542)

検出状況 4地点 JK 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5484 と重複する。本遺構は SK5484 より古い。

規模・形状 平面形は円形で、断面形は插鉢状である。底面は平

坦で、礎盤石と考えられる扁平な礎が柱当たりの東に偏って出土したことから、柱穴とした。

埋土 4層に分層した。3層・4層を掘り込む2層が柱痕跡である。1層は水平堆積である。3層・4層に炭化物・焼土を、4層に褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器93点、山茶碗24点、中近世陶磁器2点、金属製品4点、鉄滓2点、鉄塊1点が散在して出土した。なお、金属製品のうち2点は鉄釘であった。

出土遺物 土師器1点、山茶碗2点、青磁1点、釘1点を図示した。2992はM3類の土師器皿である。2993は第5型式、2994は第7型式の尾張型山茶碗の小皿である。2995は青磁碗の底部である。2996は釘である。断面は四角で頭部は頭巻形である。先端部は屈曲する。

時期 図示した2994から、本遺構は13世紀後葉から13世紀後葉から末である。

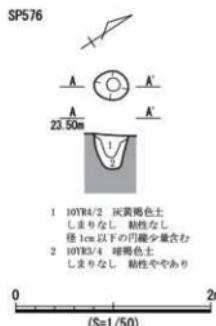


図541 SP576 遺構図

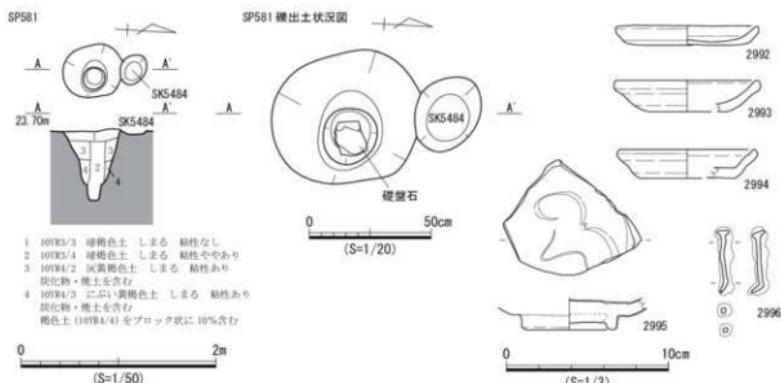


図542 SP581 遺構図・出土遺物実測図

SP595（図543）

検出状況 4地点 JJ 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5345・SK5355 と重複する。本遺構は SK5345・SK5355 より新しい。

規模・形状 平面形は円形である。柱当たりと考えられる落ち込みを底面南西部で検出した。掘方の断面形は逆台形である。

埋土 単層で炭化物を含む。

遺物出土状況 柱当たりと考えられる落ち込みの直上、遺構検出面から約 0.2m の深さから、山茶碗の完形の皿（2997）と、碗の碗片（2998）がそれぞれ正位で出土した。これらの遺物は柱当たりの位置から柱の部分に相当することから、建物廃絶後の埋納に関わる可能性がある。また、このことから、柱痕跡の埋土を認識できなかったと考えられる。この他、埋土中から土師器 7 点、山茶碗 1 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 2 点を図示した。2997・2998 は尾張型山茶碗第 5 型式の小皿と第 6 型式の碗である。

時期 図示した 2997・2998 から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉である。

SP602（図543）

検出状況 4地点 JH 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形、断面形は長方形である。

埋土 2 層に分層した。1 層は南東に偏る堆積である。炭・焼土を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 14 点、山茶碗 3 点、古瀬戸 1 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 1 点、古瀬戸 1 点を図示した。2999 は大洞東 1 号窯式～脇之島 3 号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。3000 は古瀬戸後期の縁袖小皿である。

時期 図示した 2999・3000 から、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀後葉と考えられる。

SP618（図543）

検出状況 4地点 J1 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は梢円形である。柱当たりを底面南部で検出した。掘方の断面形は逆台形である。

埋土 3 層に分層した。1 層・2 層は柱痕跡である。1 层は漏斗状に下端がしづむ。1 層には炭粒と焼土粒、2 層には焼土粒を含む。

遺物出土状況 埋土中の 1 层から土師器 9 点、山茶碗 1 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器 1 点を図示した。3001 は M 3 類の皿である。

時期 図示した 3001 から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀中葉と考えられる。

SP619（図543）

検出状況 4地点 JH 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD405・SK5232 と重複する。本遺構は SD405・SK5232 より新しい。

規模・形状 平面形は円形で、断面形は漏斗状に下端がしづむ形状である。底面は平坦である。

埋土 2 層に分層した。南東側に偏る堆積である。1 层・2 層共に炭粒を含む。2 層の上面で径約 20cm の河原石が出土した。

遺物出土状況 埋土中から土師皿 82 点、山茶碗 4 点、陶器 3 点が散在して出土した。a 層から 42 点、1 层から 32 点、2 層から 17 点と、埋土上層からの出土が多い。

出土遺物 土師器4点、山茶碗1点、陶器1点を図示した。3002～3005は土師器である。3002～3004はM4類の皿、3005はB1類の皿である。3006は大畠大洞4号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の碗である。3007は大窯第3段階の八稜皿である。

時期 図示した3007から、本遺構は16世紀後半と考えられる。

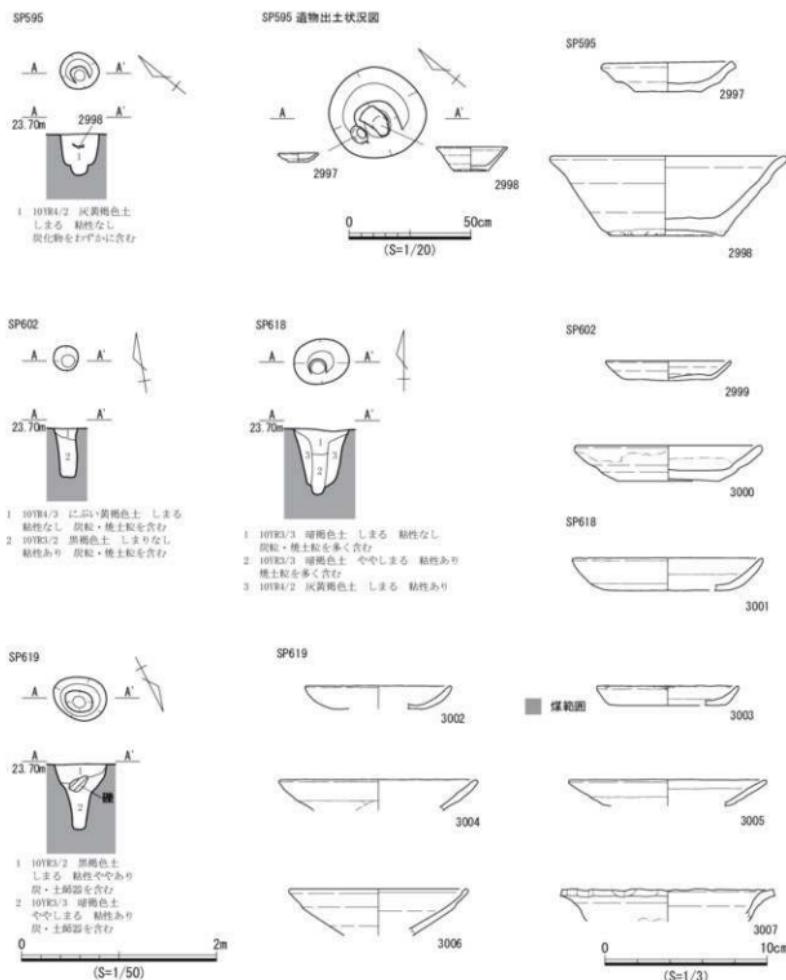


図543 SP595・SP602・SP618・SP619 遺構図・出土遺物実測図

5 土坑

SK4393 (図544)

検出状況 3地点 IR16 グリッド、IVa層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側は発掘区外に続く。

規模・形状 検出した範囲では、平面形は円形と考えられる。壁面の傾斜はやや緩やかで、底面は丸くなる。

埋土 2層に分層した。水平に堆積し、しまりのない埋土である。

遺物出土状況 埋土上層から土師器1点、須恵器1点、常滑産陶器1点が散在して出土した。

出土遺物 須恵器1点を図示した。3008は高藏寺2号窯式～折戸10号窯式に比定した圈足の円面硯である。

時期 常滑産陶器が出土したことから、本遺構は中世以降と考えられる。

SK4405 (図544)

検出状況 3地点 IS14 グリッド、IVa層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。水平に堆積する。礫を含むことから人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から古瀬戸1点が出土した。

出土遺物 古瀬戸1点を図示した。3009は後IV期新段階の擂鉢である。

時期 図示した3009から、本遺構は15世紀後葉と考えられる。

SK4393



SK4405

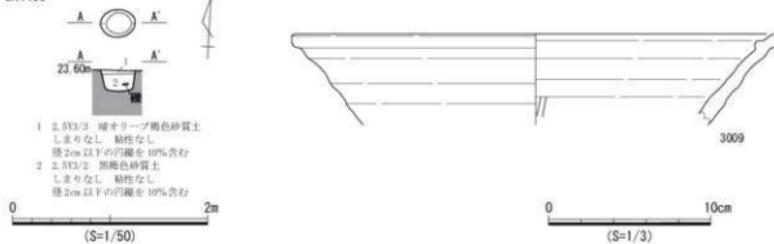


図544 SK4393・SK4405 遺構図・出土遺物実測図

SK4462 (図545)

検出状況 3地点 MB13 グリッド、IV b 層上面で検出した。検出時に土器の一部が露出し、平面形は不明瞭であった。南東側は一部消失する。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平坦である。

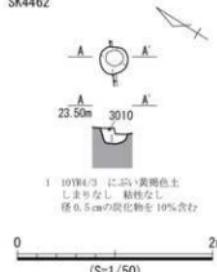
埋土 単層でしまりのない埋土である。土器の出土状況から人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土上層からS字甕の口縁部(3010)が横位で出土した。その他に埋土中から土師器5点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。3010は廻間II式のS字甕B類である。

時期 図示した3010から、本遺構は3世紀中葉から末と考えられる。

SK4462



SK4462 遺物出土状況図

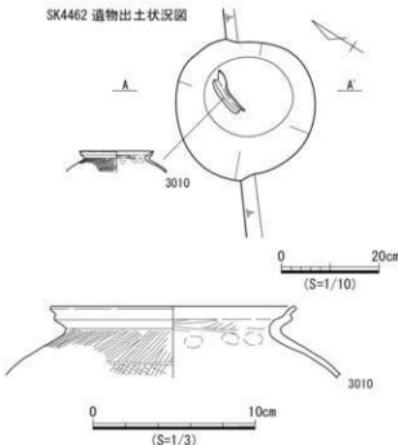


図545 SK4462 遺構図・出土遺物実測図

SK4476 (図546)

検出状況 3地点 MB12 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜はやや急で、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層でしまりのない埋土である。円碟やブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 底面付近から山茶碗1点(3011)が出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。3011は第4型式の尾張型山茶碗である。

時期 図示した3011から、本遺構は12世紀中葉から後葉と考えられる。

SK4494 (図546)

検出状況 3地点 MB11 グリッド、SK4496 埋土上面で検出した。平面形は不明瞭であった。本遺構はSK4496より新しい。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜はやや緩やかで、底面は丸い。

埋土 2層に分層した。水平に堆積する。2層は重複するSK4496の1層と酷似し、判別が困難であったため、SK4496埋土の可能性がある。1層と2層に円礫やブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層から土師器40点、2層からS字甕(3012)を含む土師器34点が散在して出土した。

2層から出土した土師器は、前述した理由からSK4496に帰属する可能性がある。

出土遺物 土師器1点を図示した。3012は廻間II式のS字甕B類である。

時期 1層と2層がともにSK4494埋土とすると、SK4496との重複関係と図示した3012から、本遺構は3世紀中葉から末と考えられる。また、2層がSK4496埋土とすると、SK4496との重複関係から、3世紀中葉以降と考えられる。

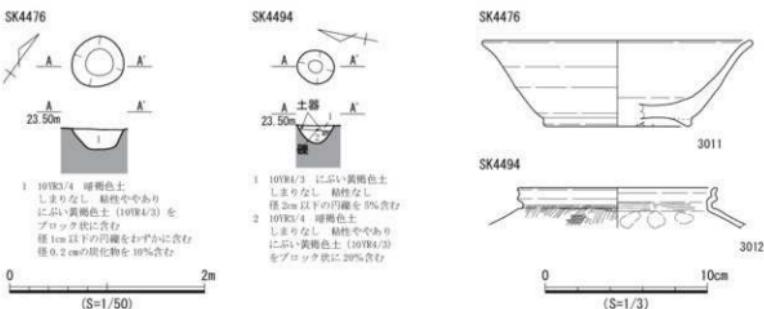


図 546 SK4476・SK4494 遺構図・出土遺物実測図

SK4496(図547)

検出状況 3地点MB11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK4494と重複する。本遺構はSK4494より古い。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は南側では緩やかで、他の側ではやや急である。底面はほぼ平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積し、1層にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層からS字甕(3019)、高坪(3014)などの土師器が疊とともに散在して出土した。これらを含め埋土中から土師器225点が散在して出土したが、1層からの出土が188点と大半を占める。

出土遺物 土師器7点を図示した。いずれも廻間II式で、3013と3014は高坪、3015は鉢、3016・3017・3018・3019はS字甕B類である。

時期 図示した3013～3019から、本遺構は3世紀中葉から末と考えられる。

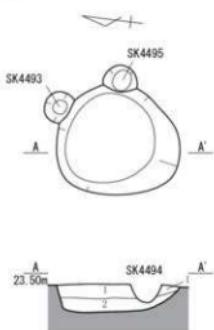
SK4500(図548)

検出状況 3地点MB11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

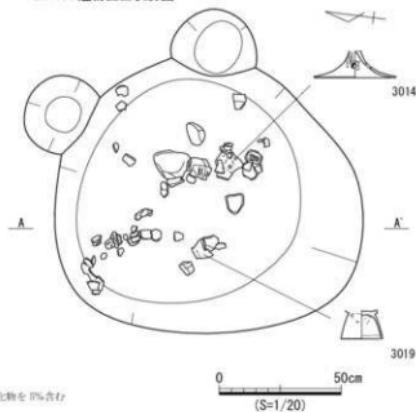
規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。

埋土 2層に分層した。1層はレンズ状に堆積する。1層にブロック土、2層に円礫を含むことから、

SK4496



SK4496 遺物出土状況図



- 1 10B3/3 塗釉色土 しまりなし 粘性なし
径 1cm のにじみ 黄褐色土 (10YR4/3) をプロトク状に含む
径 0.5cm のマンガン斑を含む 径 0.3cm の炭化物 10% 含む
2 10B3/4 塗釉色土 しまりなし 粘性なし 径 0.2cm の炭化物を 10% 含む

0 2m
(S=1/50)

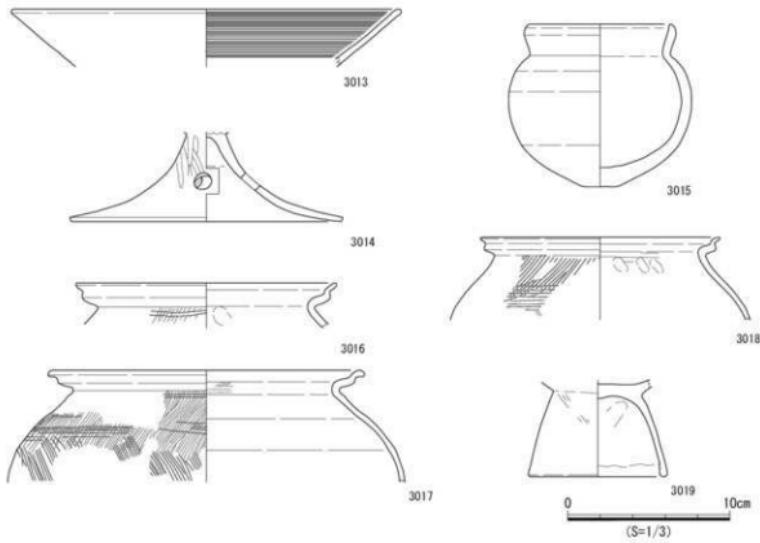


図 547 SK4496 造構図・出土遺物実測図

人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層から土師器のS字甕1点(3020)が正位でつぶれた状態でまとめて出土した。この他に1層から土師器127点と山茶碗1点が散在して出土した。なお、山茶碗は上層からの出土で混入と考えられる。

出土遺物 土師器1点を図示した。3020は廻間II式のS字甕B類である。

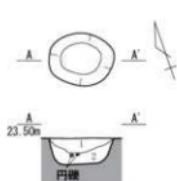
時期 図示した3020から、本遺構は3世紀中葉から末と考えられる。

SK4503 (図548)

検出状況 3地点MB11～MC11グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北側でSK4502と重複する。本遺構はSK4502より古い。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。

SK4500

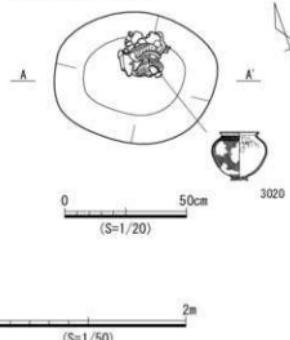


- 1 10R4/2 黄褐色土
しまりなし、粘性なし
にふく黄褐色土(10R4/3)を
プロック状に含む
- 2 10R4/4 黑褐色土
しまりなし、粘性なし
径3cm以下の円窓 10%含む

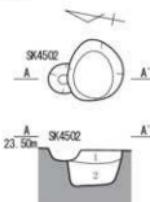
23.50m

円窓

SK4500 遺物出土状況図



SK4503



- 1 10R3/3 増粘土
しまりなし、粘性なし
径3cmの黒褐色土(10R2/3)を
プロック状に含む
- 2 10R0/4 増粘土
しまりなし、粘性なし
径0.2cmの炭化物を含む

23.50m

SK4500



SK4503

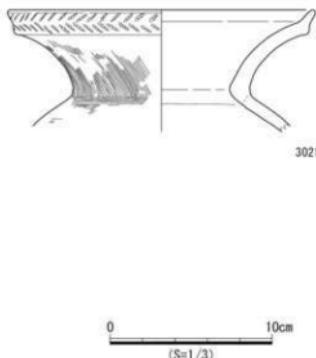


図548 SK4500・SK4503 遺構図・出土遺物実測図

埴土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積する。1層にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層から土師器9点、山茶碗1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点を図示した。3021は廻間III式の柳ヶ坪型壺である。

時期 尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は中世と考えられる。

SK4519 (図549)

検出状況 3地点 MC11 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南側でSK4518と重複する。本遺構はSK4518より古い。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

埴土 2層に分層した。水平堆積である。1層と2層に円窪やブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、須恵器1点が散在して出土した。

出土遺物 須恵器1点を図示した。3022は美濃須衛窯III期前半に比定した坏蓋A類である。

時期 図示した3022から、本遺構は7世紀中葉と考えられる。

SK4523 (図550・551)

検出状況 3地点 MC11～MC12 グリッド、IV b層上面で検出した。IV b層と本遺構の埋土上層が近似しており、平面形は不明瞭であった。

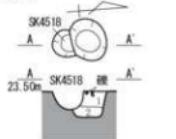
規模・形状 平面形はほぼ円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。

埴土 3層に分層した。ほぼ水平に堆積する。3層と2層の層界部分で焼土塊を確認した。また3層に円窪が多く混じる。埋土にブロック土や焼土ブロックが混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 検出面上から須恵器の坏身1点(3028)が正位で出土した。その他に1層と2層から土師器72点、灰釉陶器1点、山茶碗1点がまとまって出土した。なお、土師器の出土状況から、山茶碗は混入品と考えられる。

出土遺物 土師器など6点を図示した。3023～3027は土師器で、3023～3026は丸底甕、3027は瓶である。3028は美濃須衛窯III期前半に比定した須恵器の坏身A類である。

SK4519



1 10W3/4 塗褐色土 しまりあり 黏性なし
1C黄褐色土 (10W4/2) をブロック状に含む
径3cmの噴褐色土 (10W3/3) をブロック状に含む
径0.5cmのグレードを含む
径3cm以下の微細な土塊を含む

2 10W3/2 塗褐色土 しまりなし 黏性あり
径3cmの円窓少數含む
径0.3cmのツブリグレード 3%含む

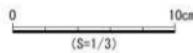
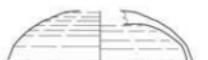
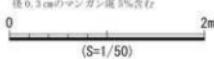


図549 SK4519遺構図・出土遺物実測図

SK4523

SK4523 遺物出土状況図

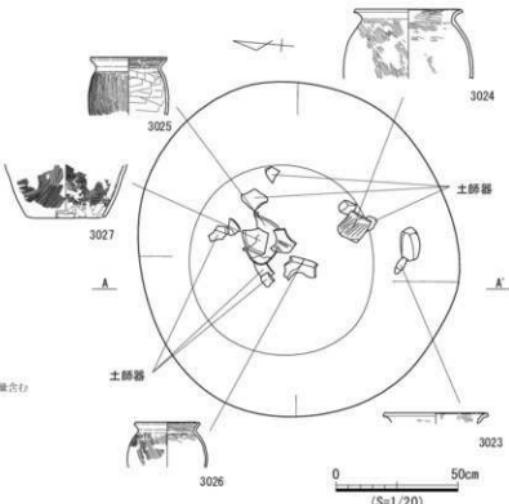
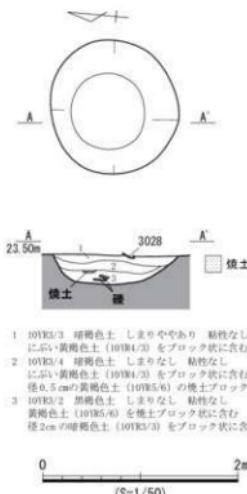


図 550 SK4523 遺構図

時期 図示した3028から、本遺構は7世紀中葉と考えられる。

SK4555 (図 552)

検出状況 3地点 MD10 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面はほぼ平坦である。

堆土 3層に分層した。1層と2層は3層を掘り込むように堆積する。2層と1層の層界で平坦面を上にした扁平な礫を確認した。

遺物出土状況 埋土下層から山茶碗6点が散在して出土した。その他に埋土中から土師器9点が散在して出土した。

出土遺物 土師器など2点を図示した。3029はC1類の土師器皿である。3030は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。

時期 図示した3030から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK4968 (図 552)

検出状況 4地点 JE14 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD391・SK4969と重複する。本遺構はSD391より古く、SK4969より新しい。

規模・形状 平面形は南側の一部がSD391に掘削されるが円形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

堆土 2層に分層した。中央がやや窪む堆積である。

遺物出土状況 2層から土師器皿が散在して出土したが、口縁部片は2個体分が接合したのみで完形

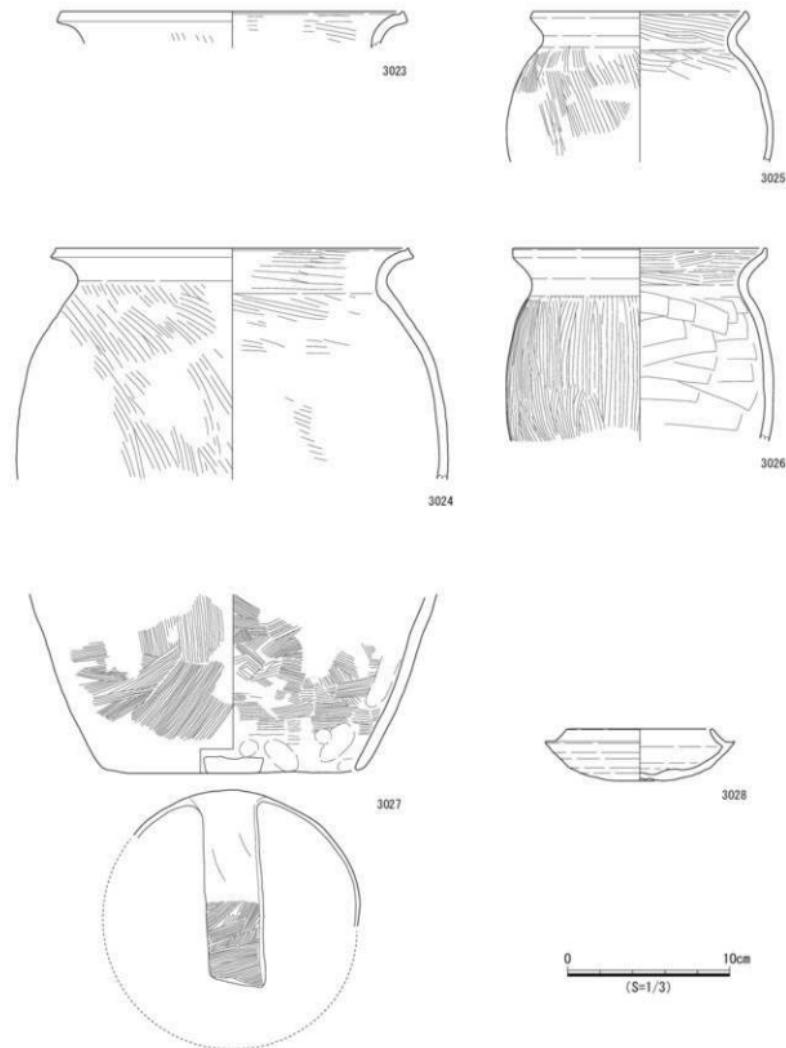


図 551 SK4523 出土遺物実測図

に復元できたものは無かった(3031・3032)。この他、埋土中から土師器6点が散在して出土した。

出土遺物 2層から出土した土師器2点を図示した。3031・3032はM2類の皿である。

時期 SD391との重複関係から、本遺構はSD391の所属時期である13世紀初頭から13世紀中葉以前と考えられる。

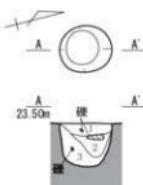
SK5071(図553)

検出状況 4地点 JI12～JI13グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。東側でSB44-P5と重複する。本遺構はSB44より古い。

規模・形状 平面形は南部がやや突出する不定な形状である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は凹凸が認められ南部がやや深くなる。

埴土 4層に分層した。1層は水平堆積である。2層は中央、3層は南部がやや壅む堆積で、3層底面の4層との層境付近から炭化物がまとまって出土した。

SK4555



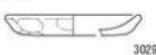
- 1 10W3/3 暗褐色土 しまりなし 黏性なし
径3cm以下の円礫を少量含む
- 2 10W4/2 暗黄褐色土 しまりなし 黏性あり
- 3 10W3/3 墓オリーブ褐色土 しまりなし 黏性あり
径1cmの小石を多く含む
ブロック状に10%含む
径2cm以下の円礫をわずかに含む

SK4968



- 1 10W4/4 暗色土 しまる 黏性なし
- 2 10W4/6 暗色土 しまる 黏性ややあり

SK4555



3029

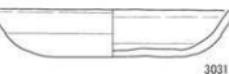
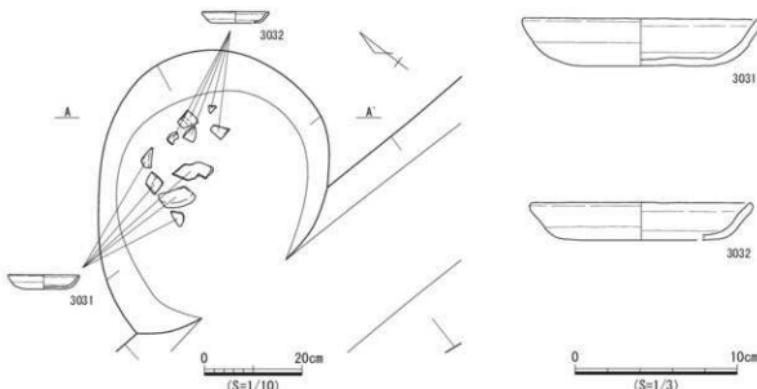


3030

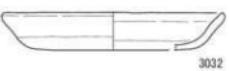
SK4968 遺物出土状況図

0 2m
(S=1/50)

SK4968



3031



3032

0 10cm
(S=1/3)

図552 SK4555・SK4968 遺構図・出土遺物実測図

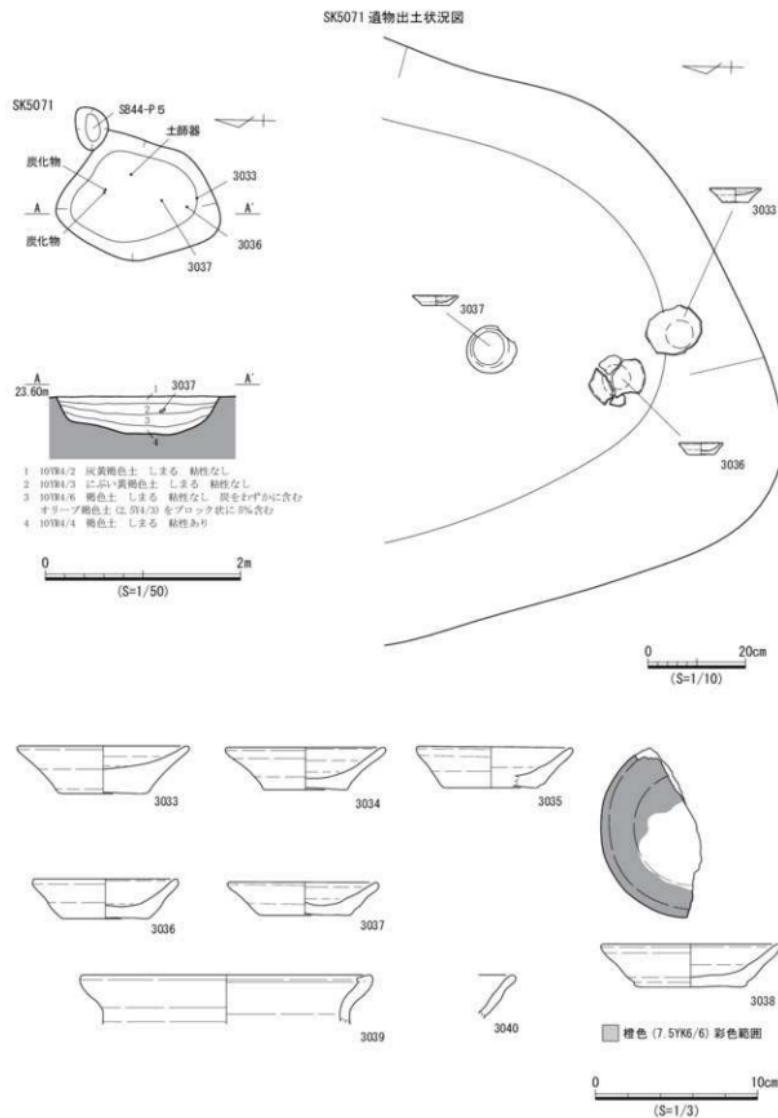


図 553 SK5071 造構図・出土遺物実測図

遺物出土状況 土坑南部の底面直上から土師器3点がまとめて出土した。いずれも破片で、3037は逆位、3033・3036は正位で出土した。この他、埋土中から土師器48点、須恵器2点、灰釉陶器2点、山茶碗2点、中近世陶磁器1点、粘土塊1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器7点を図示した。3033～3038はロクロ成形の皿である。3038は口縁部内面に橙色の彩色が認められる。3039はB類の伊勢型鍋の口縁部である。3040は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した3040から、本遺構は12世紀である。

SK5109 (図554)

検出状況 4地点JH10グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5115・SD407・SD414と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は楕円形、壁面は北部が垂直に、南部が外側に開いて立ち上がり、底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。2層は3層を掘り込む堆積で、他の層とは土色が明瞭に異なる。1層は中央が窪み堆積、3層は水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器25点、山茶碗7点、中近世陶磁器1点が散在して出土した。すべてa層からの出土である。この他、1～3層に相当する北東隅埋土中から被熱した扁平～亜円鑊が4点出土した。底面からは浮いた状態であることや、被熱痕や焼土、炭化物等も認められないことから、本遺構に直接伴うものでは無く、廃棄されたと考えられる。

出土遺物 土師器1点を図示した。3041はM3類の皿である。

時期 重複するSK5115・SD407・SD414との重複関係から、本遺構はSD414の所属時期である14世紀後葉から15世紀初頭以降と考えられる。

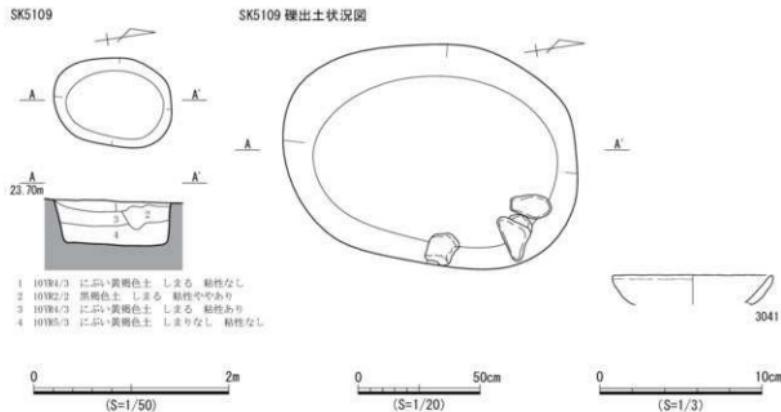


図554 SK5109遺構図・出土遺物実測図

SK5112 (図 555)

検出状況 4地点 JH9～JH10 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD407・SK5106・SK5111・SK5117・SK5122・SK5123 などと重複する。本遺構は SK5106・SK5111・SK5122・SK5123 より古く、SD407・SK5117 より新しい。

規模・形状 平面形は長方形、壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。底面はやや硬化する。

埋土 4層に分層した。2層は中央部が窪み堆積で、1層は人頭大の円窪や被熱した縫を多く含む。1層から3層に炭灰を含む。1層は2層・3層を掘り込むように堆積することから、別遺構であった可能性もある。中央北西寄りの底面で炭化物がまとまって出土した。

遺物出土状況 埋土中から土師器 469点、須恵器 3点、山茶碗 86点、中近世陶磁器 22点、鉄滓 2点、土鍾 1点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち 13点は古瀬戸であった。西部からは出土せず、北東部から 148点、南東部から 48点と東部から多く出土した。A-A'断面より北部の炭化物が多く出土する部分から、木胎部分が腐朽した赤色漆の塗膜 1点が出土し、これについて自然科学分析を行った結果、柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地に透明漆層と赤色漆層をそれぞれ 1層重ねたものであった（第5章第9節参照）。

出土遺物 土師器 2点、山茶碗 3点、古瀬戸 2点、青磁 1点を図示した。3042 はM3類、3043 はC1類の土師器皿である。3044 は大洞東 1号窯式～脇之島 3号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。3045 は大畑大洞 4号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の碗、3046 は大洞東 1号窯式に比定した

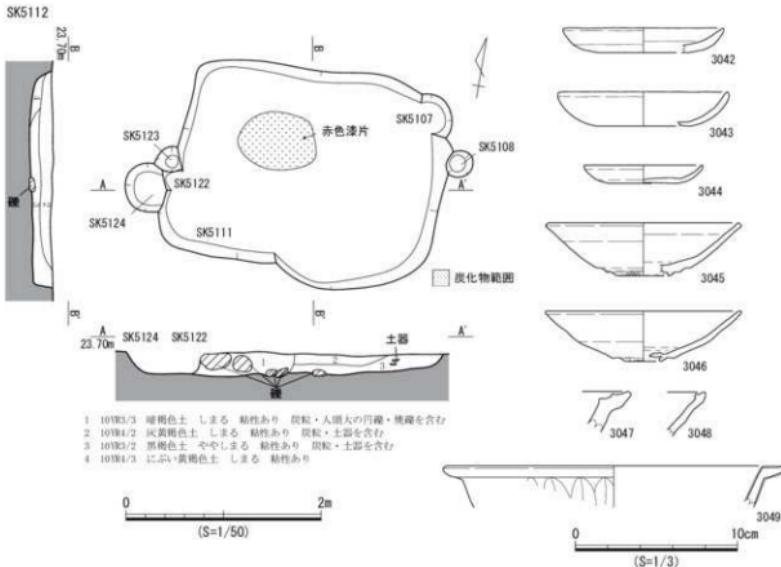


図 555 SK5112 遺構図・出土遺物実測図

東濃型山茶碗の碗である。3047は後II期の古瀬戸折縁深皿、3048は後III期の古瀬戸卸皿である。3049は太宰府分類青磁III類と考えられる壺である。

時期 図示した3048から、本遺構は15世紀前葉である。

SK5115(図556)

検出状況 4地点 JH10グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD414・SK5109・SK5112・SK5114・SK5116～SK5119と重複する。本遺構はSK5109・SK5112・SK5114・SK5117より古く、SD414・SK5118・SK5119より新しい。

規模・形状 北西部はSK5112、南東部はSD414と重複するため全体は不明であるが、残存する部分から平面形は方形と考えられる。壁面は残存部分で緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。底面はやや硬化しているが、土坑の内外に柱穴等が確認できないため土坑とした。

埴土 2層に分層した。水平堆積である。1層・2層共に炭粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器262点、須恵器1点、山茶碗68点、古瀬戸8点、常滑産陶器6点が散在して出土した。

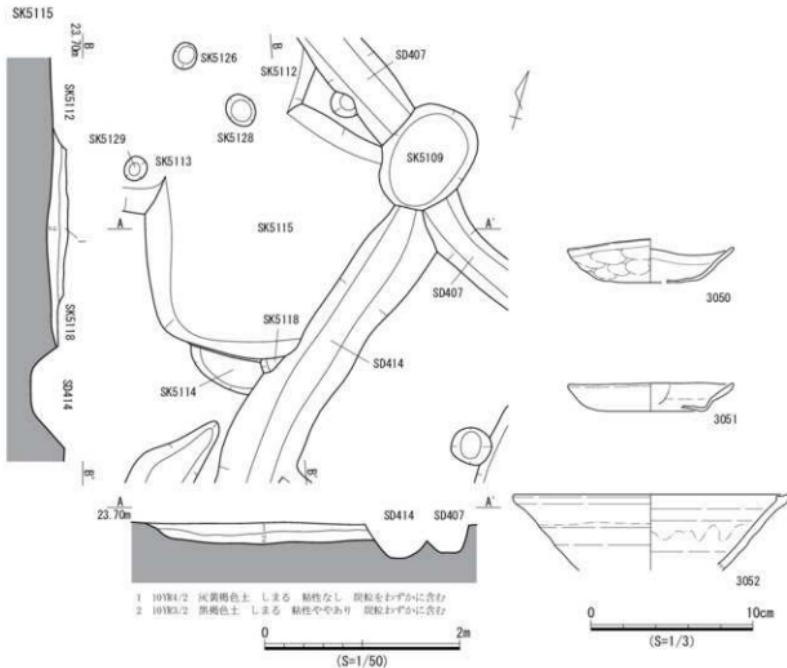


図556 SK5115遺構・出土遺物実測図

出土遺物 土師器2点、古瀬戸1点を図示した。3050・3051はM4類の土師器皿である。3052は後III期の古瀬戸播鉢形小鉢である。

時期 図示した3052は15世紀前葉を示すが、SK5112との重複関係から、本遺構はSK5112の所属時期である15世紀前葉以前と考えられる。

SK5134(図557)

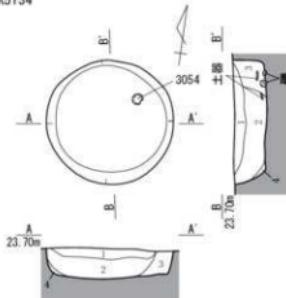
検出状況 4地点JH9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形で、壁面は垂直に立ち上がる。底面には平坦で河床礫層に由来する円礫が多く認められる。

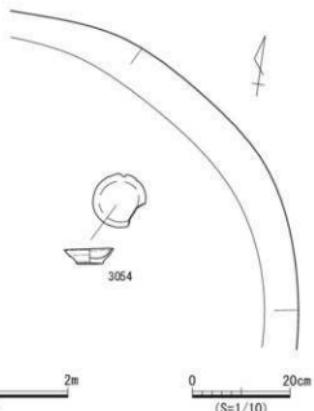
埋土 4層に分層した。1層は中央部がやや窪む堆積で、1層・2層が3層を掘り込むように堆積する。2層・3層にはにぶい黄褐色土ブロックを含み、2層は炭化物を、3層は炭粒を含む。

遺物出土状況 北東部の底面から約10cm浮いた状態の正位で山茶碗の小碗(3054)が出土した。この他、埋土中から土師器21点、須恵器1点、山茶碗10点が散在して出土した。2層以下からの出土が大半である。土師器は図示した3053の9点を除いて他は接合せず、山茶碗は図示した3055に7点が接合した。

SK5134



SK5134 遺物出土状況図



1 10W4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし 土器片をわずかに含む

2 10W3/3 塙褐色土 しまる 粘性ややあり
にぶい黄褐色土(10W4/3)をブロック状に多く含む

炭化物を多く含む 塙土粒をわずかに含む 土器片をわずかに含む
底面には河床礫層の円礫

3 10W3/4 塙褐色土 しまる 粘性ややあり
にぶい黄褐色土(10W4/3)をブロック状に多く含む

炭化物を多く含む 山茶碗を含む 底面には河床礫層の円礫

4 10W4/4 黒色土 しまる 粘性あり

0 2m
(S=1/50)

0 20cm
(S=1/10)

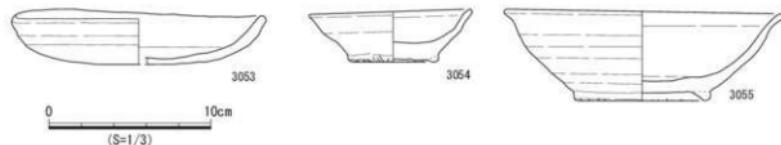


図557 SK5134遺構図・出土遺物実測図

出土遺物 1層から出土した土師器1点、2層から出土した山茶碗2点を図示した。3053はM2類の土師器皿、3054は第4型式の尾張型山茶碗の小碗である。3055は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した3054・3055から、本遺構は12世紀中葉から12世紀後葉である。

SK5163 (図558)

検出状況 4地点 JH9グリ

ッド、IVb層上面で検出した。

SK5161・SK5162と重複する。

平面形は明瞭であった。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は隅丸方形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埴土 2層に分層した。ほぼ水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から

土師器20点、山茶碗10点、古瀬戸1点、常滑産陶器1点が散在して出土した。

出土遺物 2層から出土した山茶碗1点、古瀬戸1点を図示した。3056は大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗で内面に漆が付着する。3057は後II期の古瀬戸天目茶碗である。

時期 図示した3056から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭と考えられる。

SK5169 (図559)

検出状況 4地点 JH9～JH10グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5168と重複する。本遺構はSK5168より古い。

規模・形状 平面形は長方形、壁面の傾斜は西側は緩やかで、その他は急である。底面はやや凹凸があり南側が深くなる。

埴土 3層に分層した。中央が窪む堆積である。各層に炭粒を含み、1層に焼土粒を多量に含む。

遺物出土状況 2層から山茶碗の底部片(3060)が底面が上向きとなる斜位で出土した。この他、埋土中から土師器28点、山茶碗50点、貿易陶磁器1点、古瀬戸1点が各層から散在して出土した。

出土遺物 土師器1点、山茶碗2点、貿易陶磁器1点を図示した。3058はa層、3059は1層、3060・3061はf層からの出土で2層に含まれていたと考えられる。3058はA類の伊勢型鍋、3059は第5型式の尾張型山茶碗の小皿、3060は同型式の碗である。3061は太宰府分類白磁IV類の碗口縁部である。

時期 図示した3059・3060から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK5212 (図560)

検出状況 4地点 JI9～JJ9グリッドで検出した。平面形は不明瞭であった。北東隅でSK5211と重複する。本遺構はSK5211より新しい。

規模・形状 平面形は西部が突出する不定な形状である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦で南東

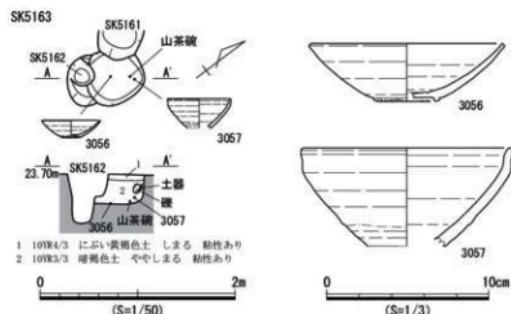


図558 SK5163 遺構図・出土遺物実測図

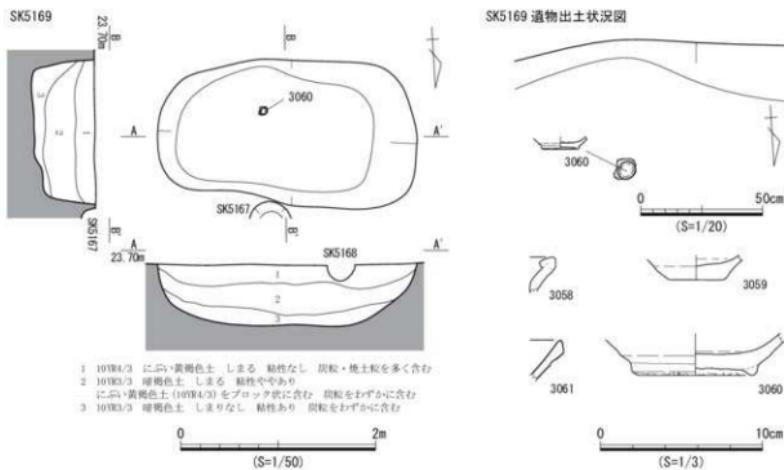


図 559 SK5169 遺構図・出土遺物実測図

隅と北面の一部が一段落ち込む。床面はやや硬化する。

埋土 2層に分層した。中央がやや塗む堆積である。

遺物出土状況 北西隅の1層下面からほぼ完形の土師器皿1点(3065)が正位で出土した。この他、埋土中から土師器127点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗147点、磁器25点、石3点、金属製品1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器6点、須恵器1点、山茶碗3点、古漬戸2点、石製品1点を図示した。3062はM3類、3063～3065はM4類の土師器皿である。3066はA類の伊勢型鍋、3067は羽釜である。3068は8世紀前半と考えられる須恵器甕の口縁部である。3069は第5型式の尾張型山茶碗の碗、3070は大畠大洞4号窯式新段階、3071は大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。3072は後II期の古漬戸平碗である。3073は後IV期古段階の古漬戸播鉢形小鉢である。3074は表面と左側面を砥面とした仕上げ砥である。

時期 図示した3070から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭である。

SK5243 (図 561)

検出状況 4地点 JH7～JI7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5244と重複する。本遺構はSK5244より新しい。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸い。

埋土 4層に分層した。1～3層が東に偏る堆積である。1層に炭粒、2層に炭粒と焼土を含む。2層は焼土をブロック状に含むが、底面に被熱や硬化面は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土師器23点、山茶碗8点、鉄滓1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器2点を図示した。3075はB1類、3076はB2類の土師器皿である。

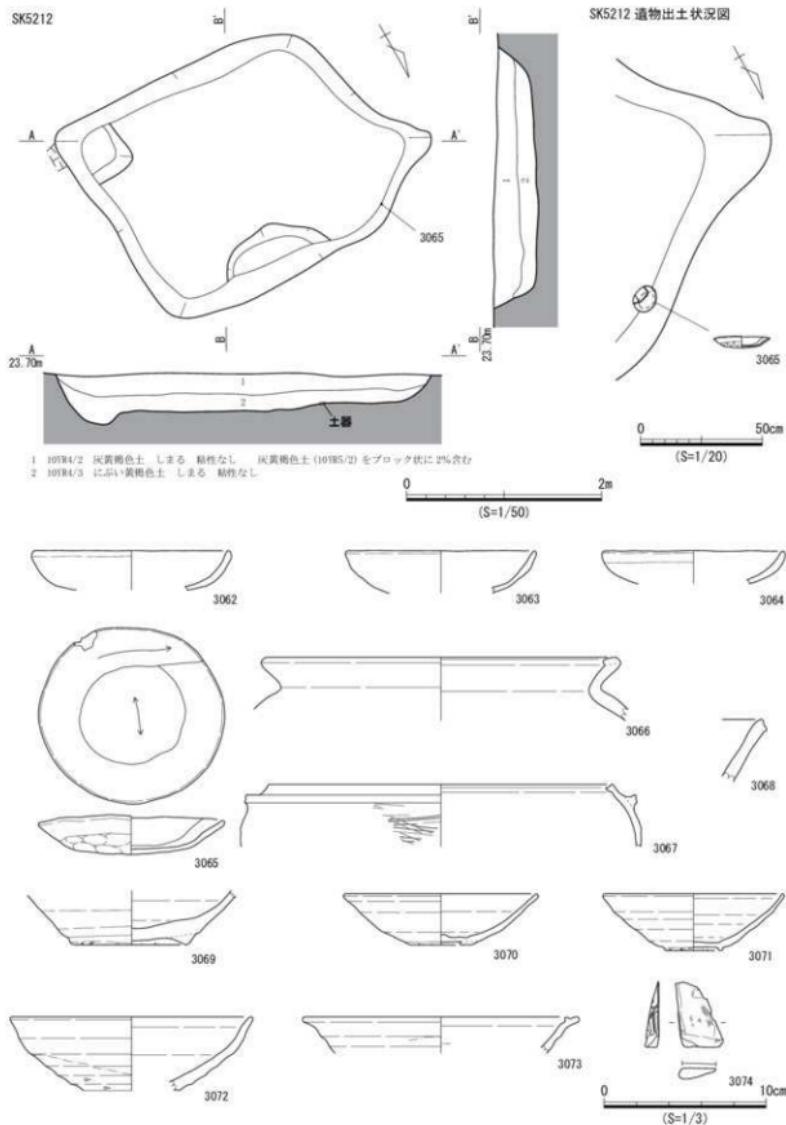


図 560 SK5212 遺構図・出土遺物実測図

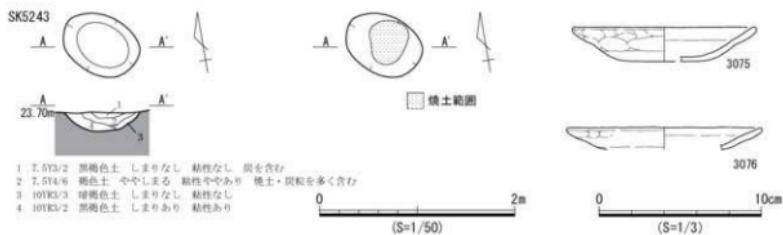


図 561 SK5243 遺構図・出土遺物実測図

時期 図示した 3075・3076 から、本遺構は 15 世紀以降と考えられる。

SK5258 (図 562)

検出状況 4 地点 JI 8 ~ JI 9 グリッドで検出した。平面形は明瞭であった。北側で SK5259 と重複する。本遺構は SK5259 より新しい。

規模・形状 平面形は梢円形、壁面の傾斜は緩やかで、底面はやや丸みを帯びる。

埴土 3 層に分層した。3 層埋没後に 2 層の掘り込みがある。1 層は水平堆積である。

遺物出土状況 1 層からほぼ完形品の山茶碗の碗 (3082) が逆位で出土した。また、3082 の下から山茶碗の小皿小片 (3080) が出土した。この他、埋土中から土師器 52 点、山茶碗 29 点、古瀬戸 3 点、粘土塊 2 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器 2 点、山茶碗 7 点、古瀬戸 1 点を図示した。3077 は M4 類、3078 は M3 類の土師器皿である。3079 は第 6 型式の尾張型山茶碗の小皿、3080 は大畑大洞 4 号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の小皿である。3081・3082 は大洞東 1 号窯式、3083 は駒之島 3 号窯式にそれぞれ比定した東濃型山茶碗の碗、3084 は第 10 型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。3085 は前 II 期の古瀬戸入子、3086 は後 II 期の古瀬戸平碗である。

時期 図示した 3083 から、本遺構は 15 世紀初頭から後葉である。

SK5265 (図 562)

検出状況 4 地点 JI 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD422・SK5267・SK5268 と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は西辺がやや突出する方形に近い形状で、壁面の傾斜は急である。底面は平坦である。

埴土 5 層に分層した。中央が窪む堆積である。1 層・2 層には炭粒、3 層には焼土を含む。

遺物出土状況 南西隅の 2 層から古瀬戸天目茶碗の破片 (3088) が正位で出土した。この他、埋土中から土師器 84 点、須恵器 1 点、山茶碗 29 点、古瀬戸 1 点が散在して出土した。

出土遺物 2 層から出土した土師器 1 点、古瀬戸 1 点を図示した。3087 は M3 類の土師器皿である。3088 は後 II 期の古瀬戸天目茶碗である。

時期 図示した 3088 から、本遺構は 14 世紀末から 15 世紀初頭である。

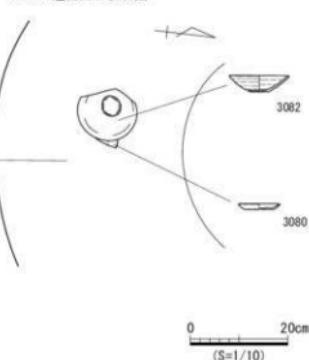
SK5266 (図 563)

検出状況 4 地点 JI 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB45-P6・SK5267

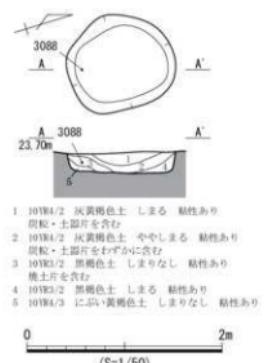
SK5258



SK5258 遺物出土状況図



SK5265



SK5265 遺物出土状況図

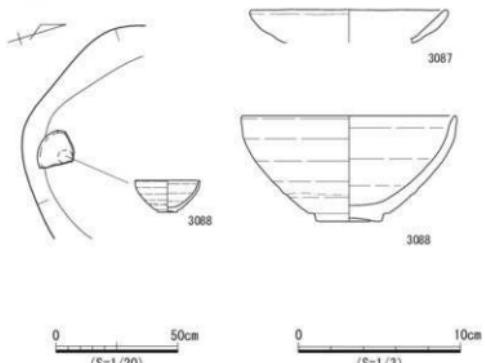


図 562 SK5258・SK5265 遺構図・出土遺物実測図

と重複する。本遺構はSB45・SK5267より新しい。

規模・形状 平面形は楕円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層である。炭粒を多く含む。

遺物出土状況 底面付近の中央から東部にかけて、土師器3個体(3091・3092・3095)と山茶碗1個体(3096)がまとまって出土した。正位、逆位が混在して規則的な配置は認められず、完形となる個体は無かった。この他、埋土中から土師器31点、山茶碗4点、常滑産陶器1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器7点、山茶碗1点を図示した。3089～3095は土師器皿である。3089～3092はC1類の皿、3093・3094はM4類の皿である。3095はB1類の皿である。3096は脇之島3号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した3096から、本遺構は15世紀である。

SK5278(図563)

検出状況 4地点J18グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5277・SK5279と重複し、いずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は西辺がSK5277・SK5279と重複するため全体の形状は不明であるが、長楕円形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸い。北西部と南東部にテラスを設け、やや北西より一段落ち込む。落ち込んだ部分に径約20cmの円礫が入り込んでいた。

埋土 3層に分層した。3層は掘方北壁に堆積し、その他は中央が窪む堆積である。

遺物出土状況 一段落ち込んだ2層中の東部から土師器皿の破片(3098)が正位で出土した。この他、埋土中から土師器29点、山茶碗9点、常滑産陶器3点、古瀬戸1点、土錐1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器2点、古瀬戸1点を図示した。3097はM4類、3098はA1類の土師器皿である。3099は後III期の古瀬戸縁釉小皿である。

時期 図示した3099から、本遺構は15世紀前葉である。

SK5297(図564)

検出状況 4地点J17グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD423・SK5298と重複する。本遺構はSD423より古く、SK5298より新しい。

規模・形状 平面形は東部がSD403と重複しており、また南東部でSK5298の一部を調査時の誤認により掘り下げたため全体は不明であるが、西部が短辺となる台形状と考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は北部が低くなる。本遺構の底面北部で3層が堆積する窪みを検出した。

埋土 3層に分層した。1層は中央部がやや窪む堆積である。2層に炭粒、焼土粒を多量に含む。3層の窪みは1層・2層とは埋土の色調が大きく異なることから、別遺構であった可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器276点、山茶碗72点、陶器8点、土錐1点、刀子1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点、山茶碗2点、古瀬戸1点、刀子1点を図示した。3100はC1類の土師器皿、3101は第6型式の尾張型山茶碗の小皿、3102は大洞東1号窯式～脇之島3号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿である。3103は後III期の古瀬戸小鉢である。3104は刀子で茎部分が屈曲し、端部が欠損する。

時期 図示した3103から、本遺構は15世紀前葉と考えられる。

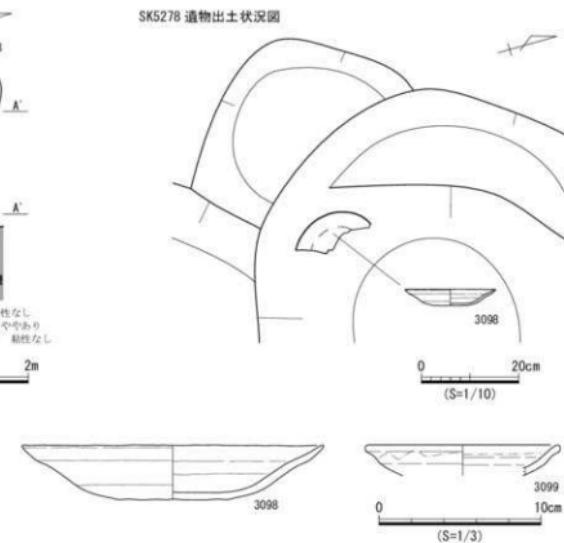
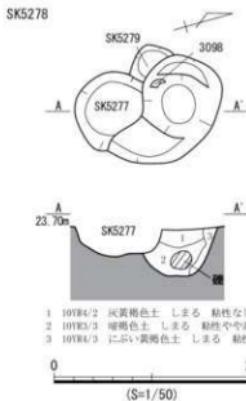
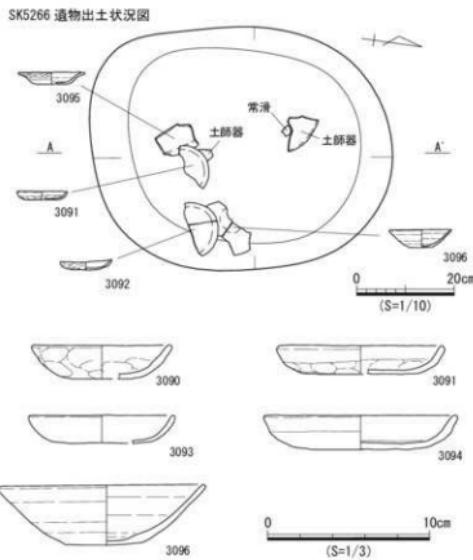


図 563 SK5266・SK5278 遺構図・出土遺物実測図

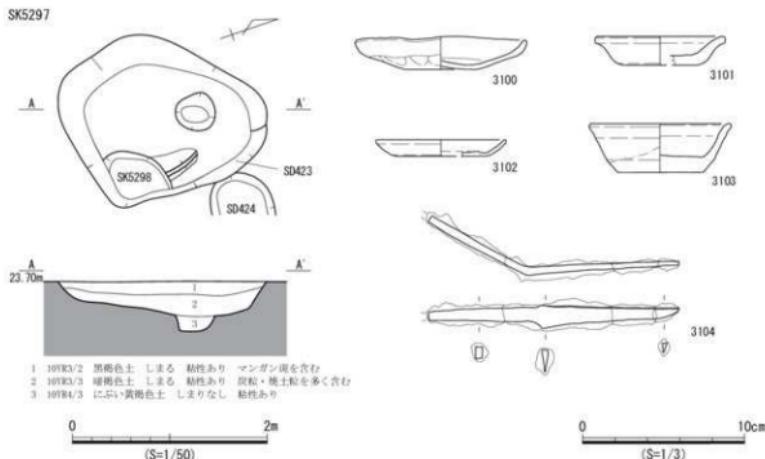


図 564 SK5297 遺構図・出土遺物実測図

SK5306 (図 565)

検出状況 4地点 JJ10 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は楕円形である。壁面は急に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 遺構検出面の中央付近から山茶碗の碗破片 (3106) が正位で、1層中の西部から完形の山茶碗の小皿 (3105) が逆位で出土した。この他、埋土中から土師器 5点、山茶碗 3点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 2点を図示した。第5型式の尾張型山茶碗で 3105 は小皿、3106 は碗である。

時期 図示した 3105・3106 から、本遺構は 12世紀後葉から 13世紀初頭である。

SK5331 (図 565)

検出状況 4地点 JJ9 グリッド、SD429 の東端底面で検出した。平面形は明瞭であった。SI15-P2 と重複し、本遺構は SD429・SI15 より古い。

規模・形状 平面形は東側が狭くなる半円状の不定な形状である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はすり鉢状である。

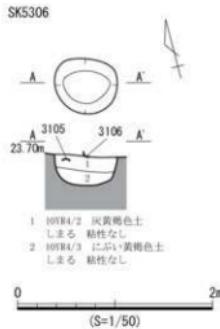
埋土 2層に分層した。中央が座む堆積である。

遺物出土状況 底面の北西隅から完形の土師器皿 (3107) の他、山茶碗の碗 (3110) と皿 (3108) が正位で、南東部の底面から完形の山茶碗皿 (3109) が逆位で出土した。この他、埋土中からは土師器 1点、山茶碗 4点が散在して出土した。

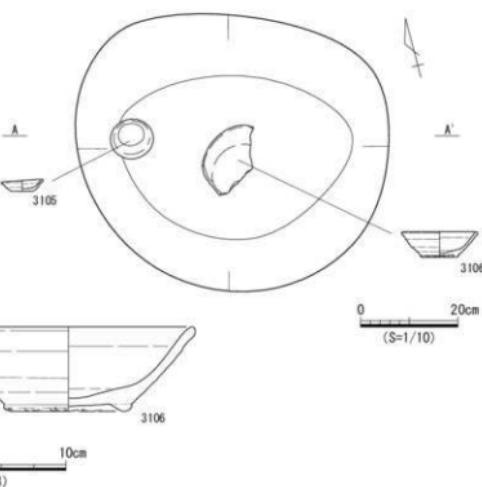
出土遺物 土師器 1点、山茶碗 3点を図示した。3107 はM3類の土師器皿である。3108・3109 は第5型式の尾張型山茶碗の小皿、3110 は同型式の碗である。

時期 図示した 3108~3110 から、本遺構は 12世紀後葉から 13世紀初頭である。

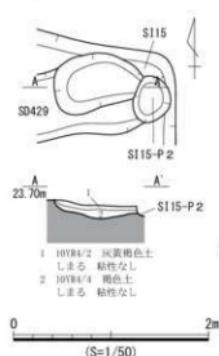
SK5306



SK5306 遺物出土状況図



SK5331



SK5331 遺物出土状況図

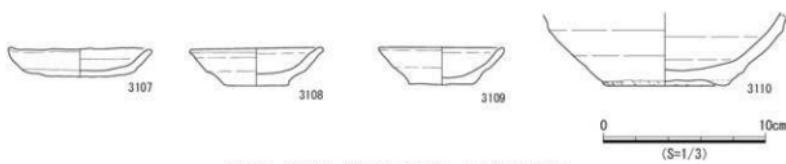
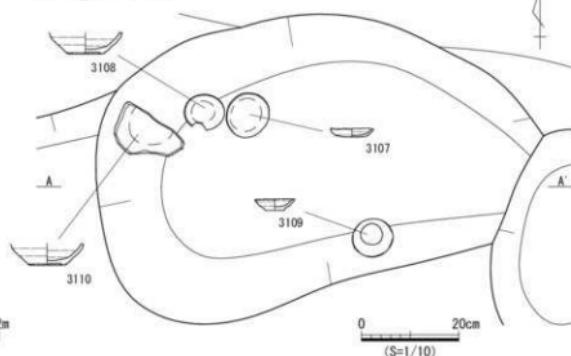


図 565 SK5306・SK5331 遺構図・出土遺物実測図

SK5347 (図566)

検出状況 4地点 JK9 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は隅丸方形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 2層上面から比較的の良い土師器皿 (3111・3112) と山茶碗の碗 (3114) と小皿 (3113) が散在して出土した。土師器皿は2点共逆位、山茶碗は正位であった。この他、埋土中からは土師器45点、山茶碗22点、常滑産陶器2点、砥石1点、金属製品3点が散在して出土した。金属製品は、鉄釘の可能性がある棒状の小片である。

出土遺物 土師器2点、山茶碗2点、石製品1点を図示した。3111・3112はM3類の土師器皿、3113・3114は尾張型山茶碗で、3113は第5型式の小皿、3114は第6型式の碗である。3115は1面が残存する仕上げ砥である。

時期 図示した3114から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5347



SK5347 遺物出土状況図

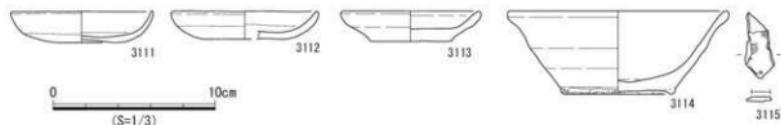
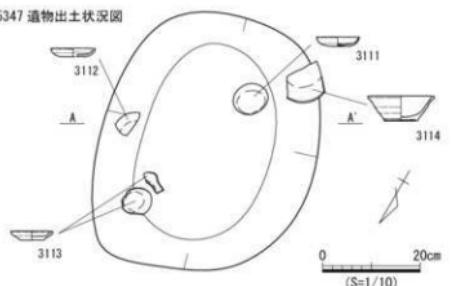


図566 SK5347 遺構図・出土遺物実測図

SK5365 (図567)

検出状況 4地点 JJ8 グリッド、SD429・SD431 埋土上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5364・SK5378と重複する。本遺構はSK5364より古く、SK5378より新しい。

規模・形状 平面形は西部がSK5364との重複により消失するが、残存部の形状はやや南に張り出した梢円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層で炭化物を含む。

遺物出土状況 北東隔壁面付近の埋土中位から、山茶碗の小皿 (3118) が正位で出土した。この他埋土中から土師器12点、山茶碗16点、常滑産陶器1点、粘土塊1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器2点、山茶碗1点を図示した。3116はロクロ成形の土師器皿である。3117はM3

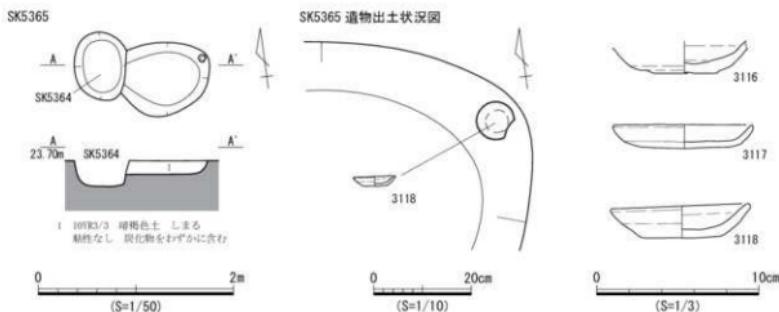


図567 SK5365 遺構図・出土遺物実測図

類の土師器皿である。3118は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した3118から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

SK5371(図568)

検出状況 4地点 JJ7～JJ8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD429・SK5370・SK6065などと重複する。本遺構はSK5370より古く、SD429・SK5378・SK6065より新しい。

規模・形状 平面形は方形に近いが、東部に丸みがある不定な形状である。壁面の傾斜は急で、底面は西に向かって低くなる。

埋土 2層に分層した。西部に崖みが偏った堆積である。1層に炭化物、焼土を多く含む。

遺物出土状況 1層中の北西部から土師器(3119～3122)と山茶碗(3124・3127・3130・3131)がまとまって出土したが、完形に復元できた遺物は無かった。この他、埋土中から土師器91点、灰釉陶器1点、山茶碗67点、中近世陶磁器3点、鉄滓1点、輪羽口1点、粘土塊5点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち2点は常滑産陶器で、そのうち1層から出土した常滑産陶器の壺胴部は、SD429の1層及びSK5378のa層から出土した破片と接合したが、小片であった。

出土遺物 土師器4点、山茶碗9点を図示した。3119～3122はM3類の土師器皿である。3123～3129・3131は尾張型山茶碗である。3123・3124は第5型式の小皿、3125・3126は第5型式、3127～3129は第6型式の碗、3131は第6型式の片口鉢である。3130は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した3127～3129・3131とSD429・SK5378との重複関係から、本遺構は13世紀初頭から中期である。

SK5376(図569)

検出状況 4地点 JJ8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5371・SK5378・SD429などと重複する。本遺構はSK5371より古く、SK5378・SD429より新しい。

規模・形状 平面形は西部をSK5371との重複によって消失するが楕円形と考えられ、壁面の傾斜は緩やかである。底面は丸みをもつ。

埋土 単層である。炭粒や焼土粒を含む。

SK5371

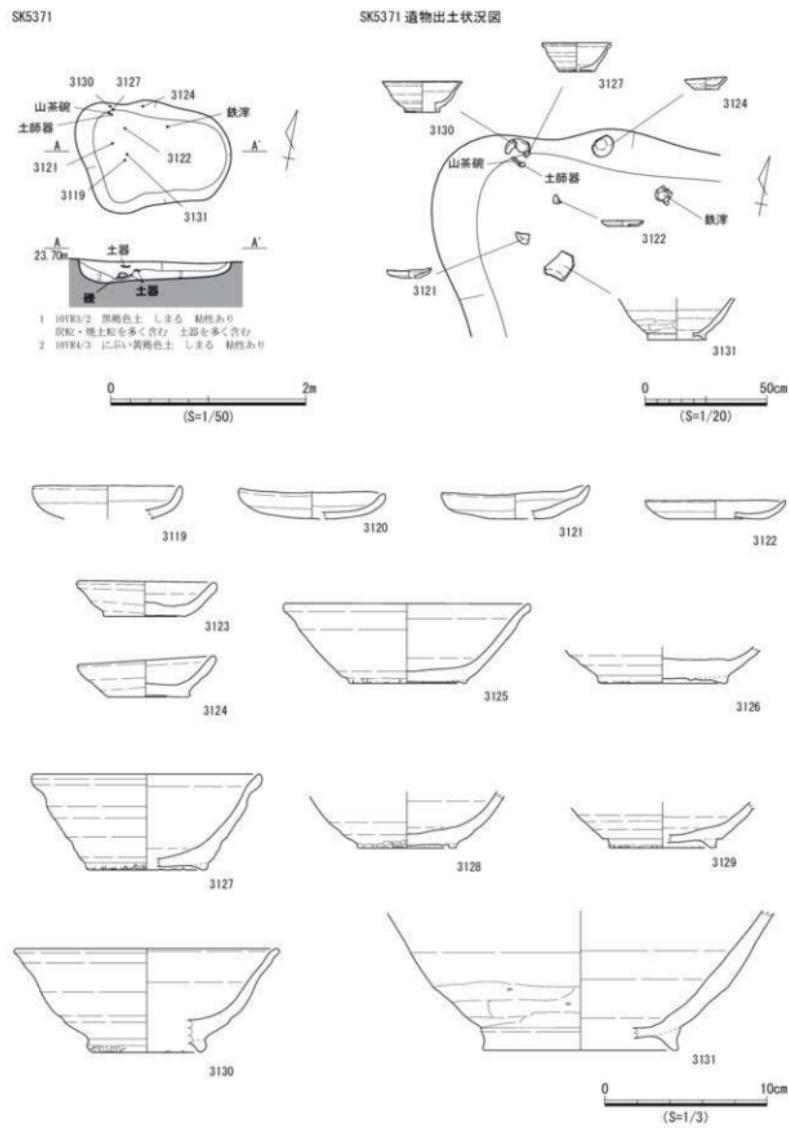


図 568 SK5371 遺構図・出土遺物実測図

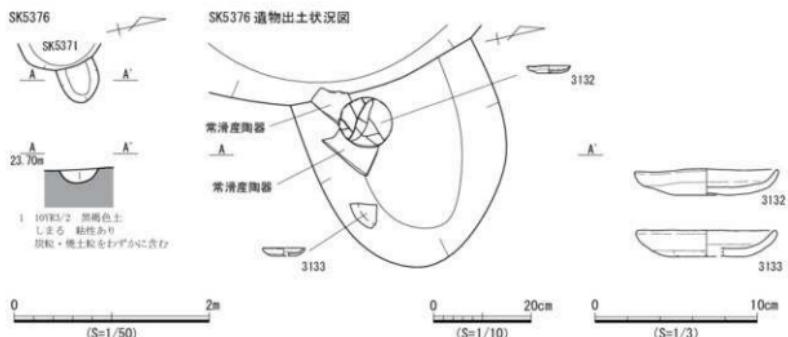


図 569 SK5376 遺構図・出土遺物実測図

遺物出土状況 土坑南部の遺構検出面付近から完形の土師器皿（3132）が正位で、東に少し離れて土師器皿の破片（3133）が逆位で出土した。また、3132 の下からは常滑産陶器の壺破片が 2 点出土し、それ以外の遺物は出土しなかった。なお、常滑産陶器の壺は、本遺構と重複する SK5371・SK5378 の破片と接合した。

出土遺物 土師器 2 点を図示した。3132・3133 は M3 類の皿である。

時期 図示した 3132・3133 と重複する SK5371・SK5378 の所属時期から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀中葉に機能したと考えられる。

SK5377 (図 570)

検出状況 4 地点 JJ8 グリッド、SK5378 埋土上面で検出し、検出時点では山茶碗（3134）の一部を確認した。平面形は明瞭であった。SK5370・SK5371・SK5376 と重複し、本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は北面と西面が重複により消失するため、全体の形状は不明である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層である。

遺物出土状況 残存部北端の遺構検出面付近から、口縁部の一部が欠損した山茶碗の小皿 1 点（3134）が正位で出土した。この他埋土中から土師器 1 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 4 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 1 点を図示した。3134 は第 5 型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した 3134 から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭である。

SK5378 (図 570)

検出状況 4 地点 JJ7～JJ8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD429・SD430・SK5363・SK5365・SK5370・SK5371・SK5372・SK5376・SK6066 などと重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 SD429・SD430 等と重複するため平面形は不定な形状である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層である。炭化物を含む。

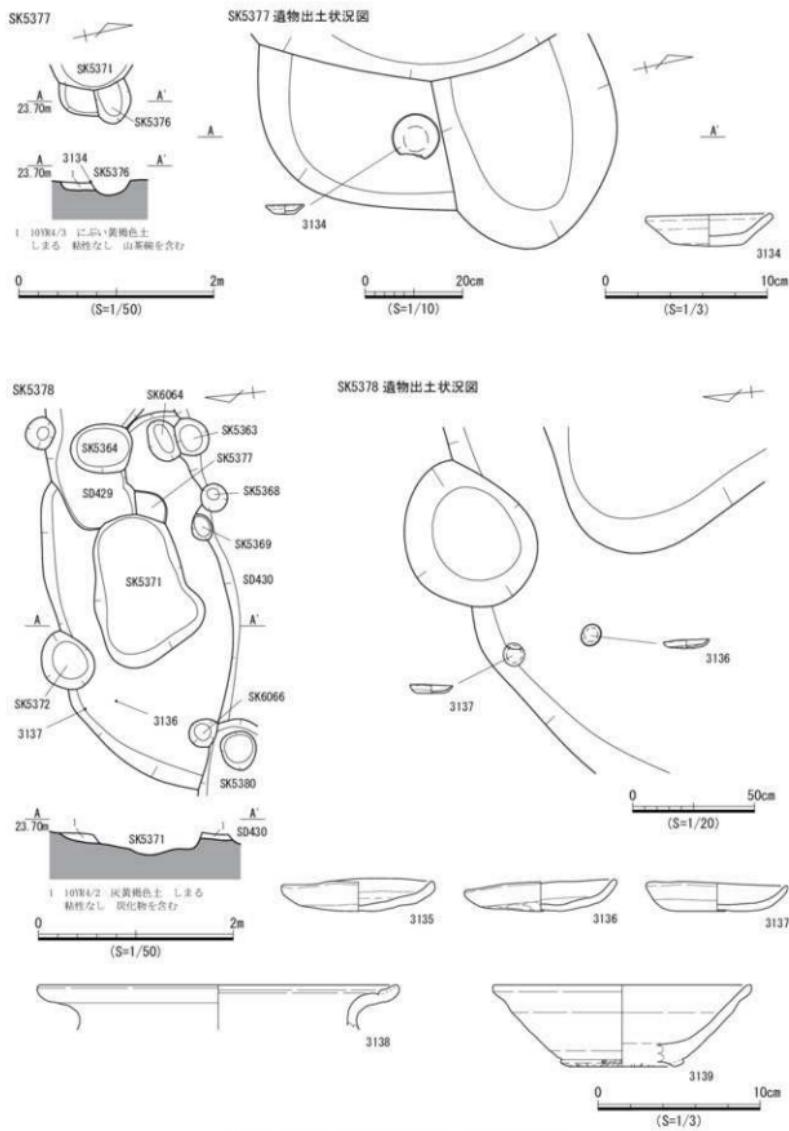


図 570 SK5377・SK5378 遺構図・出土遺物実測図

遺物出土状況 北西部の底面付近から完形の土師器皿2点(3136・3137)が正位で出土した。この他、埋土中から土師器34点、山茶碗23点、貿易陶磁器1点、常滑産陶器1点、鉄滓1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器4点と山茶碗1点を図示した。3135～3137はM3類の土師器皿である。3138はD類の伊勢型鍋である。3139は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。

時期 図示した3139とSK5371との重複関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SK5380(図571)

検出状況 4地点JJ7～JK7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SP607・SD440・SK5367・SK5373・SK5375・SK5387・SK5395など重複する。本遺構はSP607・SK5367・SK5373・SK5375より古く、SD440・SK5387・SK5395より新しい。

規模・形状 平面形は西部が狭く東部が広い台形に近い形状である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。2層が中央及び南端壁際に堆積する。1層に円碟と炭化物を、2層に灰色土ブロックを含む。

遺物出土状況 中央東部の底面から、礫と石製品(3141)がまとまって出土した。この他、埋土中から土師器92点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗62点、常滑産陶器3点、古瀬戸3点、貿易陶磁器1点、石製品2点、鉄製品1点が出土した。このうち常滑産陶器は、SK5387の2層の破片と接合した。

出土遺物 古瀬戸1点、石製品1点、鉄製品1点を図示した。3140は後III期の古瀬戸平碗である。3141は円形の磨石で、一端が欠損する。側縁は自然面を残し、表裏面の平坦部を磨面として利用する。敲打痕が認められる。3142は用途不明の板状鉄製品である。断面の厚みは一定で、端部は台形状で一方がやや広くなる。

時期 図示した3140とSD430との重複関係から、本遺構は15世紀前葉と考えられる。

SK5387(図571)

検出状況 4地点JK7グリッド、SK5380の底面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5386・SK5388・SK5395と重複する。本遺構はSK5380より古く、SK5386・SK5388・SK5395より新しい。

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面は南部が一段低くなつて丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。窪みがやや南に偏る堆積である。1層には炭化物を含む。2層は円碟を多く含むが、基盤層に由来する礫と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器11点、山茶碗8点、中近世陶磁器3点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗2点を図示した。3143は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の小碗である。3144は第7型式の尾張型山茶碗の碗である。

時期 図示した3144とSK5380との重複関係から、本遺構は13世紀後葉から末である。

SK5395(図572)

検出状況 4地点JJ7グリッド、SK5380の底面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5384・SK5385・SK5387と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

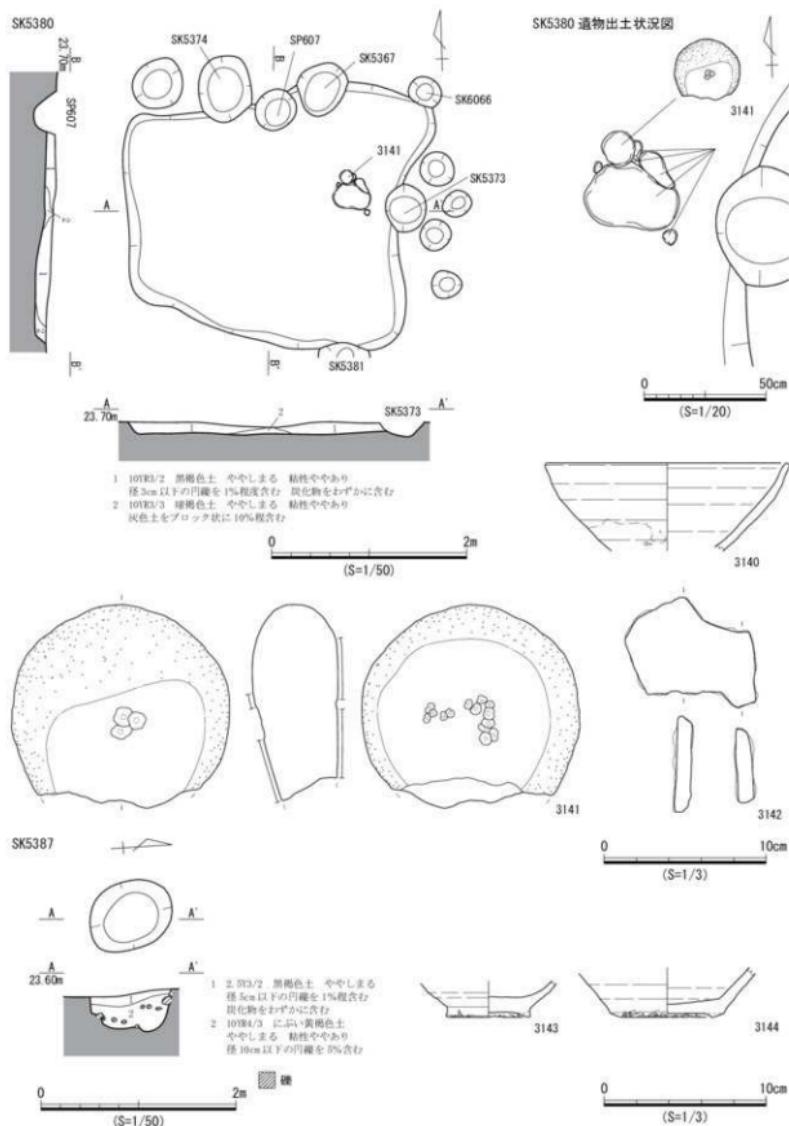


図 571 SK5380・SK5387 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 平面形は複数の遺構と重複するが、円形と考えられる。壁面の立ち上がりは急で、北部にテラスを有する。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。窪みが西に偏る堆積である。2層には炭化物、焼土を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器29点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗19点、鉄製品1点、鉄錠2点が散在して出土した。鉄錠のうち1点(3149)は蛍光X線分析を実施した(第5章第5節)。

出土遺物 山茶碗4点、金属製品2点を図示した。3145は谷迫間2号窯式に比定されると考えられる東濃型山茶碗の小碗、3146は第4型式、3147・3148は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。3149・3150は鉄錠である。3149の断面形は方形で側縁の一部が欠損するが、ほぼ完形である。分析の結果、亜共析鋼と考えられるとの結果を得た。3150の断面形は方形で一端は折れ曲がり、もう一端は段を設けて幅狭となる。

時期 図示した3147・3148とSK5380・SK5387との重複関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

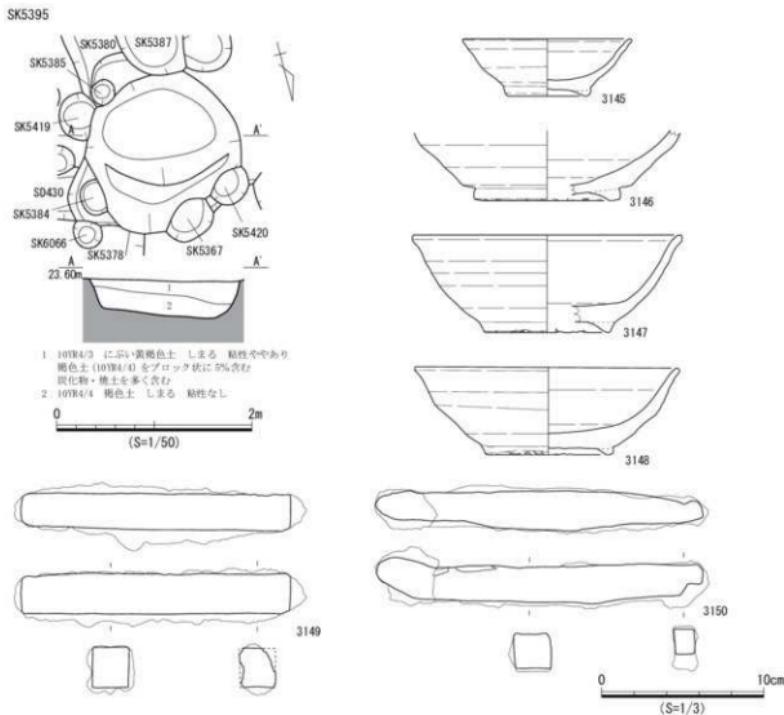


図572 SK5395 遺構図・出土遺物実測図

SK5410 (図 573~576)

検出状況 4地点 JL 8 ~ JL 9 グリッド、SK5422・SK5424 の埋土上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB49-P 3・SK5397・SK5400・SK5403・SK5404・SK5411・SK5413・SK5422・SK5448・SD445 などと重複する。本遺構は SB49・SK5397・SK5400・SK5403・SK5404・SK5413・SD445 より古く、SK5411・SK5422・SK5448 より新しい。南東部は発掘区外に続く。

規模・形状 平面形は北部が SD445 と重複し、東部及び南部が発掘区外に続くが、西部が直線的で、南西部は SK5404 に向かって折れる。また北部は SD445 を挟んだ北側で続きを確認できないことから SD445 と直線的に並行すると考えられ、隅丸方形に近い形状であったと考えられる。土坑内の西部から北西部は 2段の掘り込みとなる。落ち込んだ部分の平面形は直線的な部分が無い不定な形状である。壁面の形状は、北部と西部及び西部の一段落ち込む部分で共通し、立ち上がりは急である。

埴土 2層に分層した。1層は西部から北西部にかけての2段の掘り込みを層境とする水平堆積である。2層は褐色土ブロックと炭化物を含む。2段の掘り込みを層境として堆積が分かれ、また検出面と落ち込んだ部分の平面形が大きく異なることから、それぞれ別遺構であった可能性がある。当初、2層下面を本遺構の底面としたが、b層出土遺物の取り上げた時点では底面が基盤層に達しておらず、また底面で遺物を確認したことから、落ち込んだ部分全体を「SK5410 最下層」として約 0.2m 再掘削した(図 581 の SK5424 斜線網掛け部分)。しかし結果的に、検出した底面が重複する SK5424 の底面と一致することから、重複する SK5424 の埋土を誤認して掘り過ぎたと考えられる。なお、この部分については記録が無いため堆積状況は不明である。

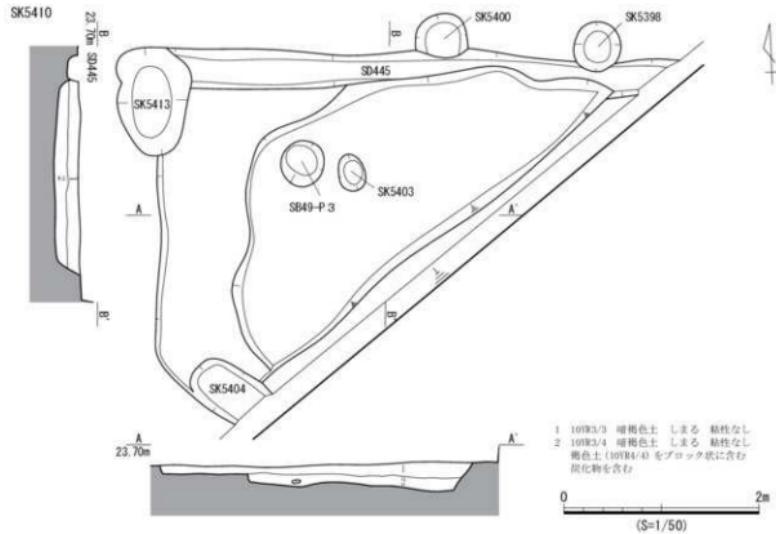


図 573 SK5410 遺構図 (1)

SK5410 遺物出土状況図

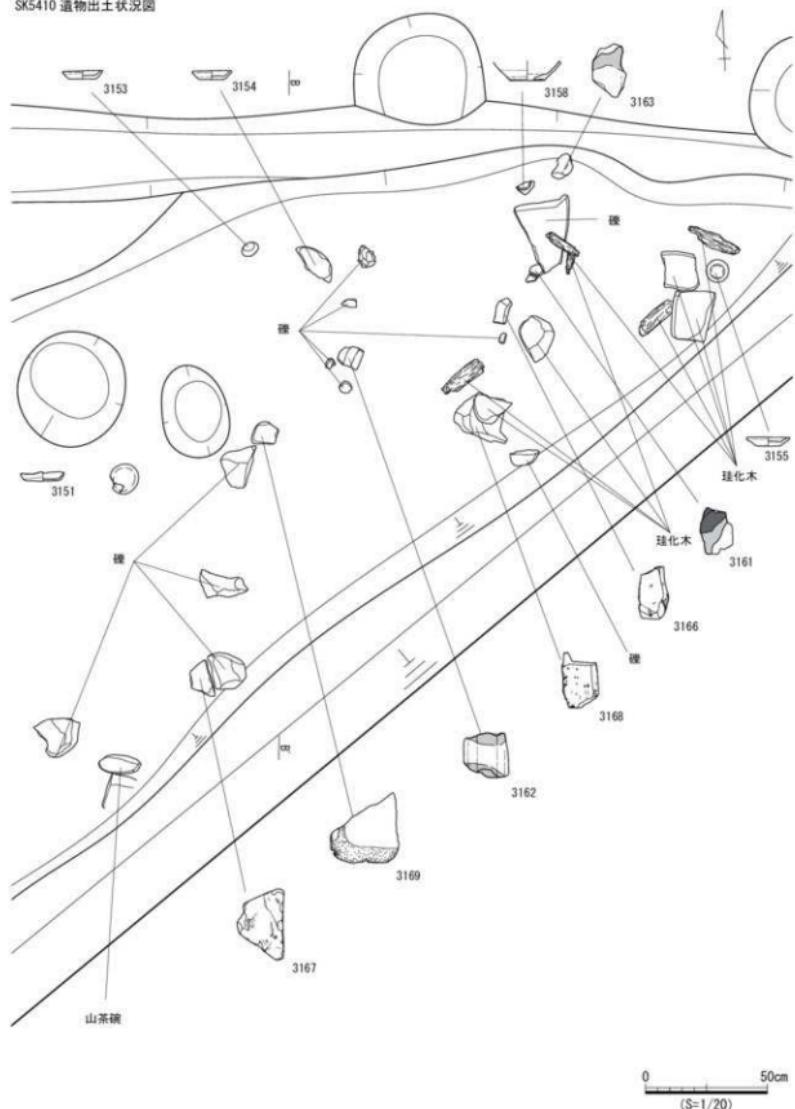


図 574 SK5410 遺構図 (2)

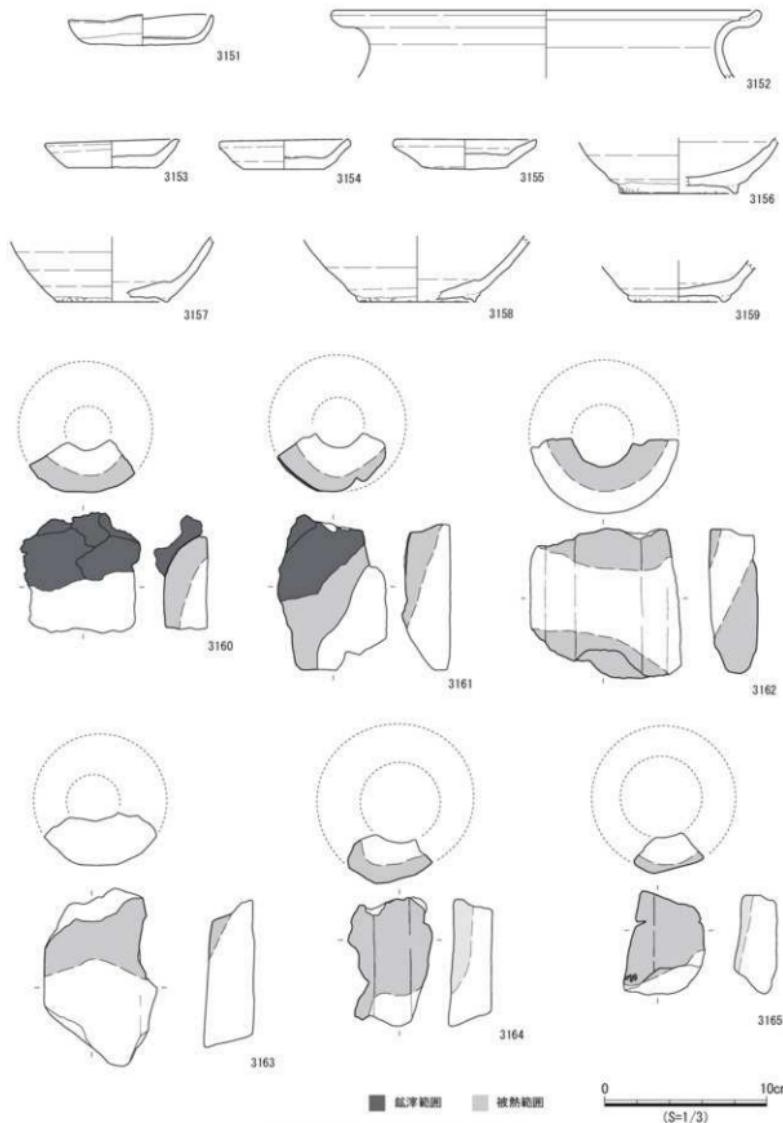


図 575 SK5410 出土遺物実測図（1）

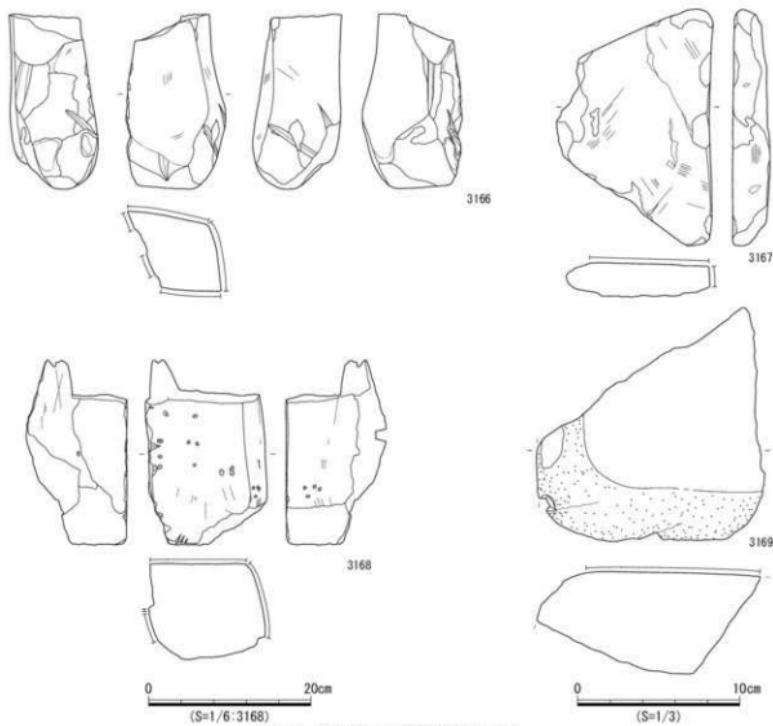


図 576 SK5410 出土遺物実測図（2）

遺物出土状況 珪化木や被熱した礫と共に、b層から山茶碗（3153～3155・3158）、輪羽口（3160～3165）、砥石（3166～3168）、石皿（3169）が散在して出土した。規則的な配置は認められず、廃棄されたと考えられる。なお、3158はSK5422のc層、SK5411のb層の破片と接合した。この他、埋土中から土師器169点、須恵器2点、山茶碗123点、中近世陶磁器12点、輪羽口23点、砥石3点、石皿2点、鉄製品1点、鉄塊2点、鉄滓33点、銅滓1点が散在して出土した。なお、「SK5410最下層」から出土した遺物については、前述の経緯によりSK5424に掲載した。出土層位は1層から224点、2層から98点、a層から37点、b層から20点、c層から66点であり上層から多く出土した。

出土遺物 土師器2点、山茶碗10点、輪羽口8点、砥石3点、石皿1点を図示した。3151・3152は土師器である。3151はM3類の皿、3152はD類の伊勢型鍋の口縁部である。3153～3159は尾張型山茶碗である。3153～3155は第6型式の小皿、3156は第5型式、3157・3158は第6型式、3159は第7型式の碗である。3160～3165は砂岩製の輪羽口である。3160は先端部で、滓が付着する。3161～3165は胴部片で、3162・3165は外面に面を有する。3166～3168は砥石である。いずれも中砥で複数の底面

がある。3166は4面を砥面として用い、表面と右側面は使用による湾曲が顕著である。3167は上下及び左側面が欠損し、裏面は板状に剥離したと考えられ、残存部のうち表面と右側面の2面を砥面として用いる。最も大型の3168は破片資料であるが、残存部で重さ5kgを超える大型の砥石で、3面を砥面として用いる。表面の残存部下端に3条の鋭い切れ込みをもつ。3169は石皿である。側面は自然面を残し扁平な面全体を磨き面として用いる。扁平な面と側面の一部を除いて欠損する。

時期 図示した3159は13世紀後葉から末を示すが同時期の遺物は1点に限られることから混入したと考えられ、3153～3155・3157・3158やSK5422やSK5424との重複関係から、本遺構は13世紀初頭から中葉の短期間に存続したと考えられる。

SK5411(図577)

検出状況 4地点 JL8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SL18・SK5408・

SK5410・SB64-P6などと重複する。本遺構は

SK5408・SK5410より古く、SB48・SL18より新しい。

規模・形状 平面形は、東側をSK5410との重複により消失するが隅丸の長方形と考えられる。壁面の傾斜は垂直で、底面は平坦である。

埋土 単層である。褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 埋土中から、土師器168点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗157点、常滑産陶器6点、輪羽口2点、鉄製品2点、鐵滓14点が散在して出土した。

出土遺物 小片のため図示できた遺物は無かつた。

時期 SK5410とSL18との重複関係から、本遺構は13世紀初頭から中葉の短期間に機能したと考えられる。

SK5416(図578)

検出状況 4地点 JK8グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SB48-P2・SK5421・SD444などと重複する。本遺構はいざれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は、隅丸の長方形で、北西隅がやや突出する。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。水平堆積で、1層に炭化物・焼土を含む。

遺物出土状況 埋土中から、土師器110点、須恵器1点、山茶碗111点、中近世陶磁器17点、鐵滓1点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち11点は常滑産陶器で、4点は青磁であった。出土層位は、a層から159点、1層から53点、2層から28点であり、埋土上層が多い。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。3170は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した3170は12世紀後葉から13世紀初頭を示すが、重複するSK5421に第6型式の尾張型

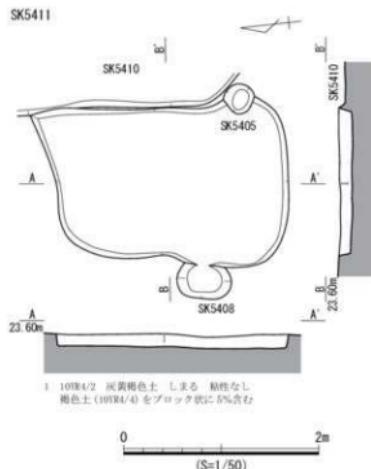


図577 SK5411遺構図

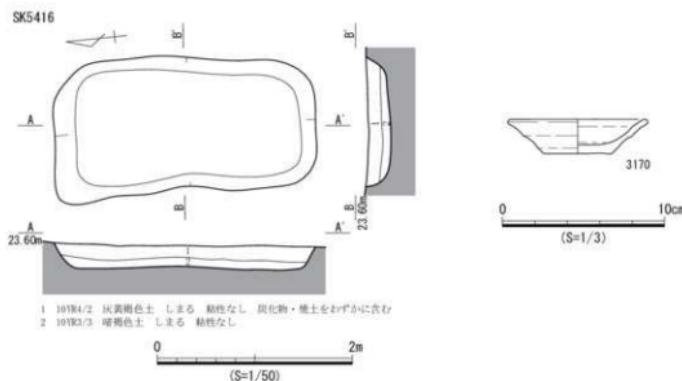


図 578 SK5416 遺構図・出土遺物実測図

山茶碗を複数含むことから、本遺構はSK5421の所属する13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

SK5421 (図 579)

検出状況 4地点 JK 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SP608・SK5416・SK5422・SK5457などと重複する。本遺構はSK5416より古く、SP608・SK5422・SK5457より新しい。

規模・形状 平面形は南部は直線的にし、北部から東部にかけて弧状に膨らんだ形状である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。底面で複数の遺構を確認したが、建物の主柱穴などの規則的な配置が認められず別遺構と判断した。

埋土 単層である。暗褐色土ブロックや炭化物・焼土を含む。

遺物出土状況 埋土中から、土師器113点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗160点、陶磁器9点が散在して出土した。平面的には平面を4分割した北西部から48点、北東部から108点、南西部から33点、南東部から85点と東部が多い。出土層位は1点がc層の他は、いずれも1層及びa層の埋土上層であった。このうち、a層から出土した常滑産陶器の壺胴部の破片は、SK5733の2層から出土した破片と接合した。

出土遺物 山茶碗5点を図示した。いずれも尾張型山茶碗で、3171・3172は第6型式の小皿、3173は第5型式の碗、3174・3175は第6型式の碗である。

時期 図示した3171などから、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5422 (図 580)

検出状況 4地点 JK 8 ~ JL 9 グリッド、北部をSK5421底面、南西部をSK5424・SL18埋土上面、東部をIV b 層上面で検出した。平面形は東西を除いて重複のため不明である。SK5410・SK5416・SK5421・SK5424・SD445などと重複する。本遺構はSK5410・SK5416・SK5421・SD445より古く、SK5424・SL18より新しい。

SK5421

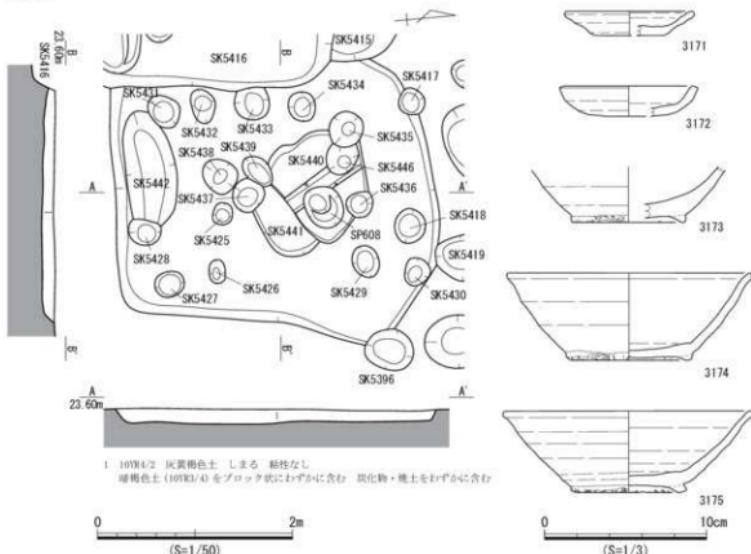


図 579 SK5421 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 複数の遺構と重複するため東部を除いて壁面が残存しないことや、SK5410 や SK5421 と底面の標高の差が無いことから、本来の規模は不明である。東部の壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は南西に向かって低くなる。

埋土 3層に分層した。水平堆積である。2層に褐色土ブロックと炭化物・焼土を含む。A-A' 断面の北側破線部分は、記録が無いため堆積状況は不明である。また、A-A' 断面の南側は SK5410 と重複のため埋土が消失するが、底面の高さに差が無いことから、掘削時に何らかの誤認があった可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土師器 664 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 3 点、山茶碗 541 点、中近世陶磁器 20 点、輪羽口 9 点、石皿 1 点、鉄製品 5 点、鉄塊 2 点、鐵滓 81 点、粘土塊 1 点が散在して出土した。なお、a 層出土の常滑産陶器の壊破片は、SK5411 の c 層、SK5683 の 1 層の破片と接合した。

出土遺物 土師器 2 点、山茶碗 9 点、輪羽口 1 点、石皿 1 点を図示した。3176 は M3 類の土師器皿、3177 は D 類の伊勢型鍋である。3178~3186 は尾張型山茶碗である。3178 は第 5 型式の小皿、3179~3181 は第 6 型式の小皿、3182~3185 は第 5 型式の碗、3186 は第 6 型式の碗である。3187 は石皿である。花崗岩の河原石を用い表面に摩耗部が残る。側面は 1 面に自然面を残すがその他の面は欠損する。3188 は砂岩製の輪羽口体部片である。表面は被熱により赤変する。

時期 図示した 3186 と SL18・SK5410 との重複関係から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉の短期間に存続したと考えられる。

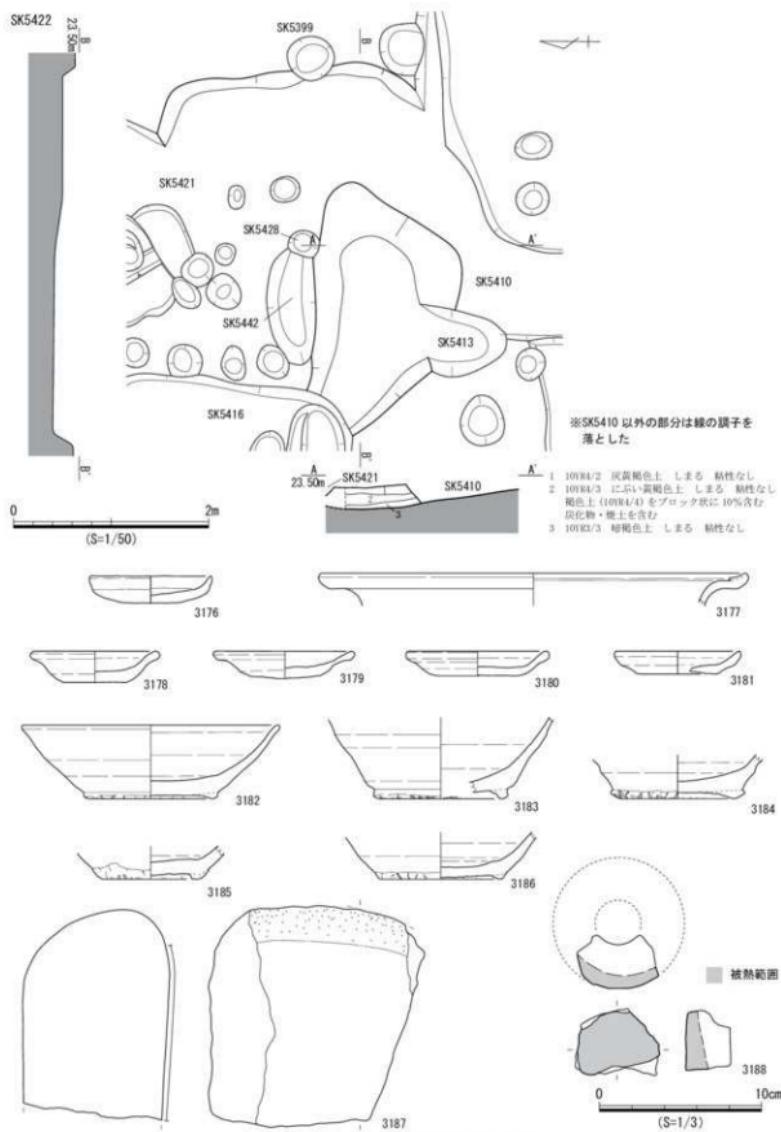


図 580 SK5422 遺構図・出土遺物実測図

SK5424・SL18（図 581～584）

検出状況 4地点 JK8～JL9 グリッド、SK5410・SK5422 の底面と、また北東の一部を IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5399・SK5410・SK5411・SK5457・SK5462 などと重複する。本遺構は SK5399・SK5410・SK5411 より古く、SK5457・SK5462 より新しい。南東部は発掘区外に続く。SK5424 は位置の重複する SK5410 の断面と同じ位置で土層観察用ベルトを設定して掘削を進めたが（図 581 A-A' 断面・B-B' 断面）、北西隅突出部の検出面で被熱部分を確認したため、この部分を SL18 として新たに土層観察用ベルトを設定し（図 582 C-C' 断面・D-D' 断面）、以後 SK5424 とは遺物を分けた。なお、SL18 底面では 3 基の小規模な落ち込み（SL18-P1～P3）を検出した。

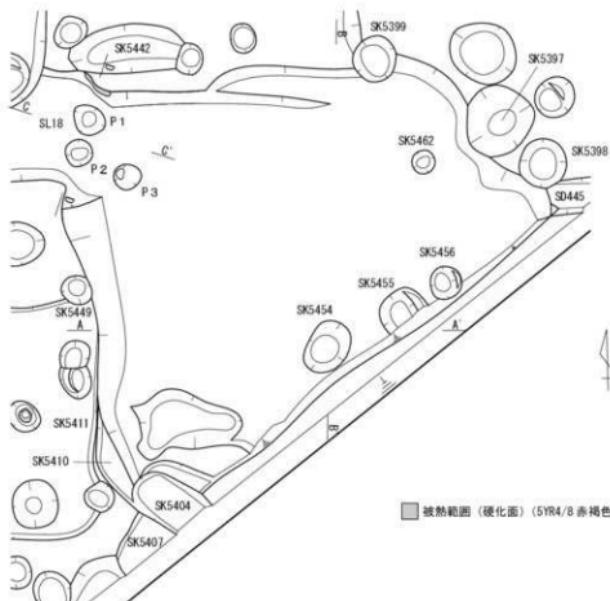
規模・形状 SK5424 の平面形は SK5410 や SK5422 との重複や南東部が発掘区外に及ぶため本来の形状は不明である。残存部の形状は北辺と西辺は直線的で北西隅が突出する不定な形状である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は概ね平坦である。SL18 の平面形は周囲を遺構の重複により消失するため、本来の形状は不明である。壁面の立ち上がりは急で、北壁の一部は被熱により変色（図 581・582 被熱部分）する。底面は SK5424 の概ね平坦な底面から続き、SL18-P1・P2 の東側あたりから西に向かって傾斜する（図 582 C-C' 断面の 3・4 層）。SL18 の被熱痕跡と SK5424 から鉄滓や輪羽口など鍛冶関連遺物が多量に出土したことから SL18 を鍛冶炉とする鍛冶関連遺構と判断した。SK5424 が作業場の可能性があるが具体的な構造は不明である。

埋土 SK5424 の A-A' 断面で 4 層、B-B' 断面で 2 層に分層した。なお、「SK5410 最下層」として掘削した部分（図 581 斜線網掛け部分）は記録が無く堆積状況は不明であるが、SK5410 の項目で述べた理由により本遺構に伴う埋土と判断した。A-A' 断面の 1 層と B-B' 断面の 1 層は埋土が共通することから、中央が窪む堆積であったと考えられる。1 层に黒褐色土ブロック、A-A' 断面の 3 層に灰黄褐色土ブロック、B-B' 断面の 2 層に黄褐色土ブロックを含むほか、各層に炭化物や焼土粒を含む。SL18 の C-C' 断面と D-D' 断面は 9 層に分層した。1～6 層は SL18 埋土、7 層は SK5424 埋土、8 層は SL18-P1 埋土で、9 層は被熱によって変色・硬化した基盤土である。2 層・5 層を除いて灰褐色土ブロックを含み、炭化物を 1 层～8 層に、焼土粒を 1 层・4 層・7 層に含む。

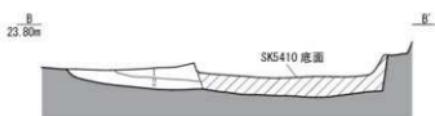
遺物出土状況 SL18-P1 から輪羽口（3209）が出土した。この他、SK5424 の埋土中から土師器 247 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 4 点、山茶碗 394 点、中近世陶磁器 16 点、輪羽口 26 点、火打石 1 点、鉄滓 59 点、粘土塊 3 点が、SL18 から土師器 2 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 2 点が散在して出土した。また、「SK5410 最下層」からは、土師器 78 点、山茶碗 198 点、中近世陶磁器 8 点、輪羽口 15 点、砥石 2 点、鉄製品 1 点、鉄滓 60 点が散在して出土した。また、SK5424 の 2 層・4 層の一部（土嚢袋 36 袋 : 0.4728 m³）を持ち帰り水洗選別を実施した結果、輪羽口の破片 215 g、鉄滓 7695.5 g（鉄滓 5267.9 g、銅滓 1393.3 g、碗形滓 824.9 g、板状剥片 38.6 g、粒状滓 17.7 g、微細剥片 978 g）が出土した。このうち、粒状滓 2 点（3211・3212）と板状剥片 2 点（3213・3214）は螢光 X 線分析を行った結果、結果、一部の試料が鍛造鍛冶に伴うことを確認した（第 5 章第 5 節）。

出土遺物 SK5424 から土師器 2 点、山茶碗 14 点、貿易陶磁器 2 点、輪羽口 3 点、火打石 1 点、鍛冶滓 4 点（3211～3214）を、SL18-P1 から輪羽口 1 点（3209）を図示した。3189・3190 は M3 類の土師器皿である。3191～3204 は尾張型山茶碗である。3191 は第 5 型式の小皿である。3192 は第 3 型式の耳皿で、内側に折り返す部分の一部が残る。3193 は第 4 型式の碗、3194～3198 は第 5 型式の碗、3199

SK5424・SL18



- 1 2. SY3/3 増ナリープ薄色土 しまる 黒褐色土をブロック状に2%程含む 硬化物・堆土粒を多く含む
2 10YR3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 固化物・堆浮状粒子を多く含む
3 10YR3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 固化薄色土をブロック状に10%程含む 硬化物・堆土粒をわずかに含む
4 10YR3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 固化物をわずかに含む



- 1 2. SY3/3 増ナリープ薄色土 しまる 黒褐色土をブロック状に3%程含む 硬化物・堆土粒をわずかに含む
2 10YR3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 黄褐色土をブロック状に5%程含む
固化物を多く含む 堆土粒をわずかに含む

■ SK5410 最下層



図 581 SK5424・SL18 遺構図（1）

SL18

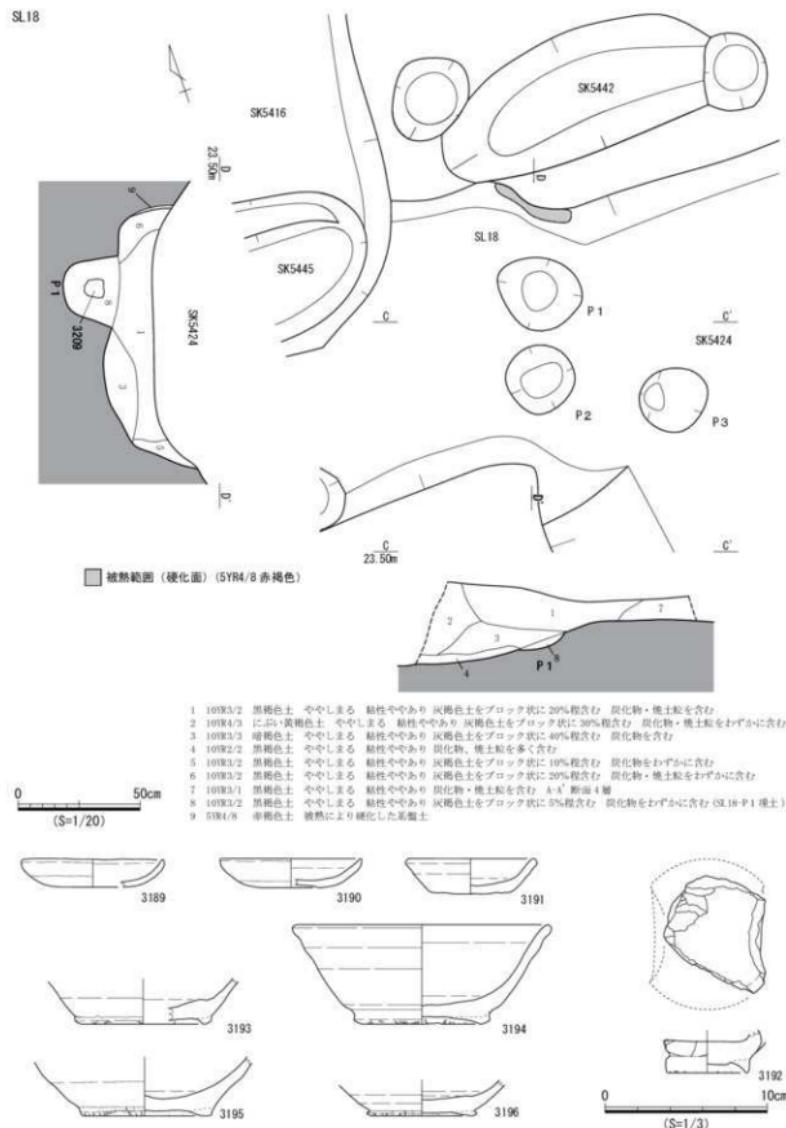


図582 SL18 造構図 (2)・SK5424 出土遺物実測図 (1)

SK5424

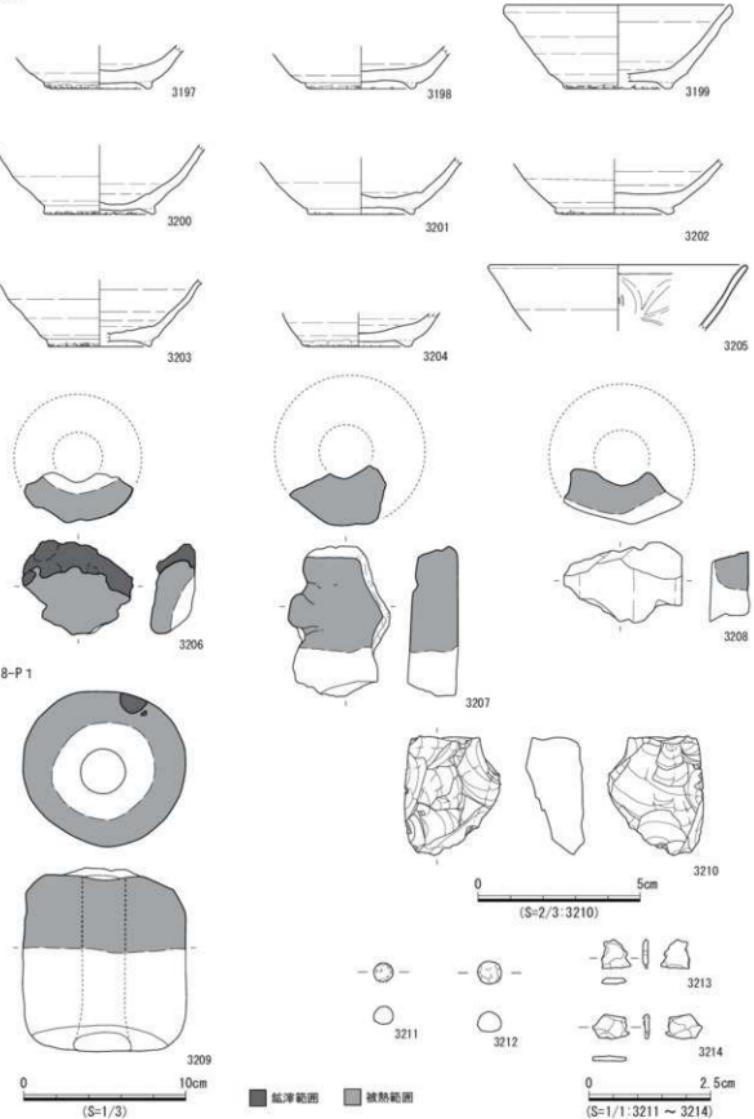


図 583 SK5424・SL18-P1 出土遺物実測図 (2)

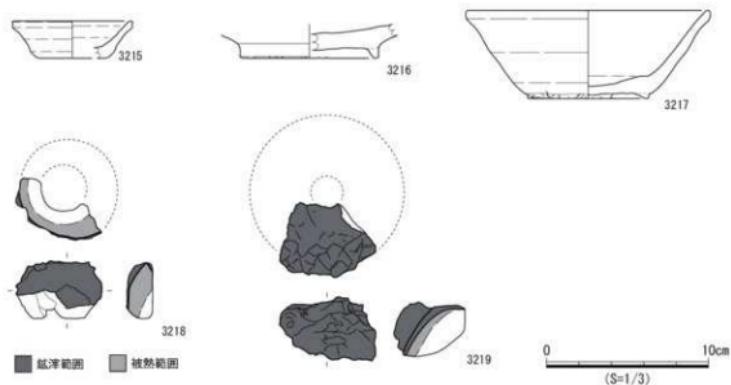


図 584 SK5410 最下層出土遺物実測図

~3204は第6型式の碗である。3205は太宰府分類龍泉窯系青磁III類と考えられる碗で外面に割花文を描く。高台が欠損する。3206~3209は砂岩製の輪羽口である。3206は先端部でガラス質の澤が付着する。3207・3208は胴部片で、3208は表面に明瞭な面取り痕を残す。3209は基部で基部側の孔径は広がる。3210は火打石である。連続する不定方向の剥離痕が残る。3211~3214は分析結果により、3211・3212は鍛練鍛冶に伴う粒状澤、3213は鍛造剥片か鍛冶澤の破片か判断できず、3214は鍛冶澤の微細な破片であり鍛造剥片では無い。3215~3219はSK5410 最下層から出土した遺物である。3215~3217は尾張型山茶碗である。3215は第5型式の小皿、3216は第4型式の碗、3217は第6型式の碗である。3218・3219は砂岩製の輪羽口先端部で澤が付着する。3218は残存部から復元した孔径が3219の約1.5倍ある。

時期 図示した尾張型山茶碗は第4型式から第6型式までの時期幅が認められるが、第6型式に属する山茶碗は全て1層あるいはa層からの出土で埋土上層に限定されることから、本遺構は第5型式の尾張型山茶碗が主体となる12世紀後葉から13世紀初頭に機能し、13世紀中葉を下限として埋没したと考えられる。

SK5457 (図585)

検出状況 4地点 JK8 グリッド、IV b層上面で検出した。SL18・SK5423・SK5445・SK5460などと重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 残存する平面形は南西部が椿円形で、北東部に長方形に近い形状の張り出しがある。南西部壁面の傾斜は急で、張り出し部分は一段高くなっているが、いずれの底面も平坦である。平面形状から判断すると北東部と南西部は別遺構の可能性もある。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平な堆積である。1層に灰黄褐色土ブロックや炭化物・焼土粒を、2層に黄褐色土ブロックや炭化物を含む。張り出し部分の堆積は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土師器6点、灰釉陶器2点、山茶碗23点、常滑産陶器1点、砥石4点、

鉄滓3点が散在して出土した。

出土遺物 灰釉陶器1点、山茶碗3点を図示した。3220は明和27号窯式に比定した灰釉陶器碗である。3221～3223は尾張型山茶碗である。3221は第5型式の小皿、3222は同型式の碗、3223は第6型式の碗である。

時期 図示した3223は13世紀初頭から13世紀中葉であるが、SL18との重複関係から、SL18の機能した時期である12世紀後葉から13世紀初頭以前と考えられる。

SK5457

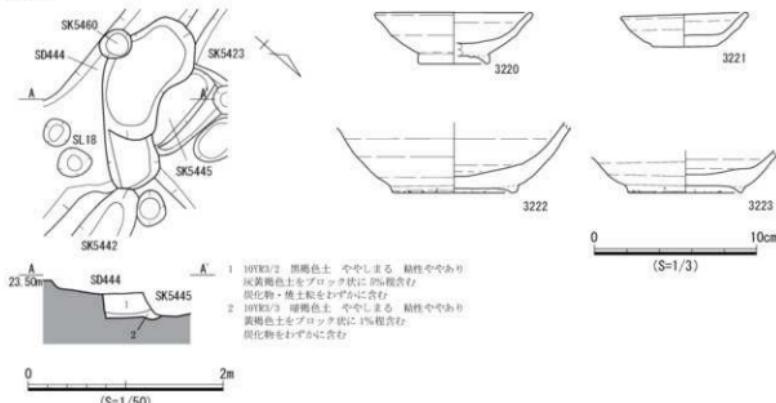


図 585 SK5457 遺構図・出土遺物実測図

SK5464(図586)

検出状況 4地点JJ8グリッド、SD430埋土上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平な堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器25点、須恵器1点、山茶碗23点、中近世陶器3点、鉄塊1点が散在して出土した。このうち鉄塊(3230)は蛍光X線分析を実施した(第5章第5節)。

出土遺物 土師器3点、山茶碗2点、陶器1点、鉄塊1点を図示した。3224～3226はM3類の土師器皿である。3227は第5型式、3228は第6型式の尾張型山茶碗の碗である。3229は信楽焼と考えられる壺の口縁部である。頸部は直線的に立ち上がり、頸部と肩部の境が不明瞭である。口縁部は内傾する面を有する。3230は鉄塊である。表面の中央に窪みがあり、側面に山茶碗の体部片と炭化物が融着する。分析の結果、炭素量0.77%未満の亜共析鋼と考えられる結果を得た(第5章第5節)。

時期 図示した3228から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5465(図587)

検出状況 4地点JJ8グリッド、IVb層上面で検出し、検出時点では山茶碗(3232)の一部を確認した。平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

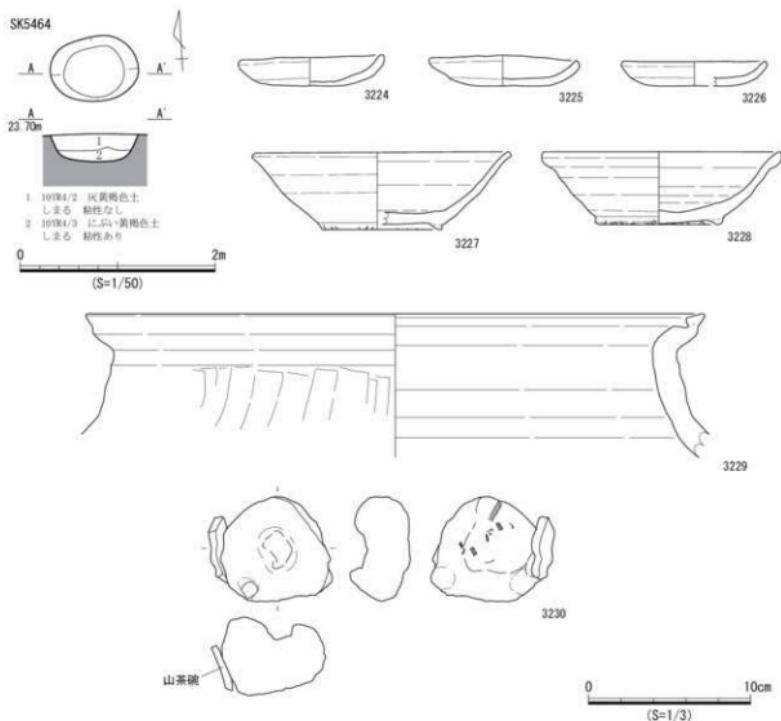


図 586 SK5464 造構図・出土遺物実測図

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土上位から完形の土師器皿（3231）が正位で、また山茶碗の破片（3232）が内面を上向きにして傾いた状態で出土した。また、南端の底面付近から拳大の礎2点が出土した。この他埋土中から土師器2点、山茶碗9点、瓦1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点と山茶碗1点を図示した。3231はM3類の土師器皿である。3232は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。

時期 図示した3232から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

SK5497 (図 588)

検出状況 4地点 JK7～JL7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB47-P4・SB48-P1・SB48-P3・SK5498・SK5512・SD441などと重複する。本遺構はSK5498・SD441より古く、SB47・SB48・SK5512より新しい。

規模・形状 平面形は南西の隅に丸みがある不整方形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

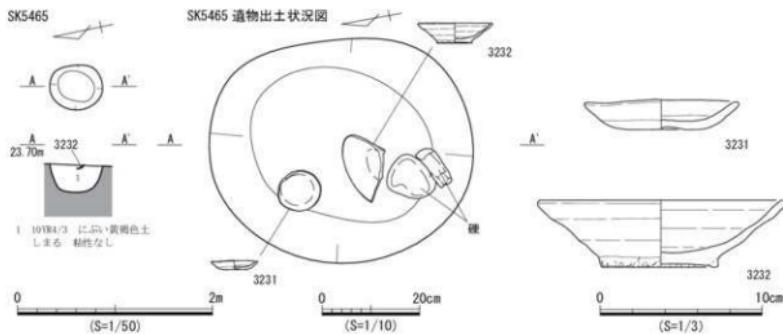


図 587 SK5465 遺構図・出土遺物実測図

埋土 3層に分層した。2層は3層を掘り込む堆積である。1層に褐色土ブロックや炭化物・焼土を、2層・3層に炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から、土師器85点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗74点、中近世陶磁器11点、鉄滓5点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち4点は常滑産陶器で、4点は青磁であった。

出土遺物 土師器1点、山茶碗1点、短頸壺1点、青磁1点を図示した。3233はM3類の土師器皿である。3234は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。3235は太宰府分類龍泉窯系青磁I類の可能性がある碗の口縁部で、内面に割花文を配する。3236は中世象投窯産の短頸壺である。

時期 図示した3234から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

SK5532 (図 589)

検出状況 4地点 JM7～JM8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD447・SK5533・SK5534と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。南東部は発掘区外へ延びる。

規模・形状 平面形は南東部が発掘区外に延びるために全体の形状は不明であるが、本来の形状は北辺と東辺が直線的であることから、隅丸の方形であったと考えられる。壁面の立ち上がりは緩やかである。底面は中央が窪む形状で、南端の発掘区際は若干高まりが認められる。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。2層に褐色土ブロックと炭化物を含む。

遺物出土状況 1層下位から、鉄滓と炭化物がまとまって出土した。この他、埋土中から土師器32点、山茶碗24点、輪羽口16点、鉄製品2点、鉄滓62点、粘土塊5点、土錐1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点、山茶碗1点、輪羽口2点を図示した。3237はM3類の土師器皿である。3238は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。3239・3240は輪羽口である。3239は胴部で先端部側に鉱滓が付着する。3240は胴部～基部で、表面の面取りが明瞭に残る。

時期 図示した3238から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

SK5552 (図 589)

検出状況 4地点 JG6グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5555と重複する。本遺構はSK5555より新しい。

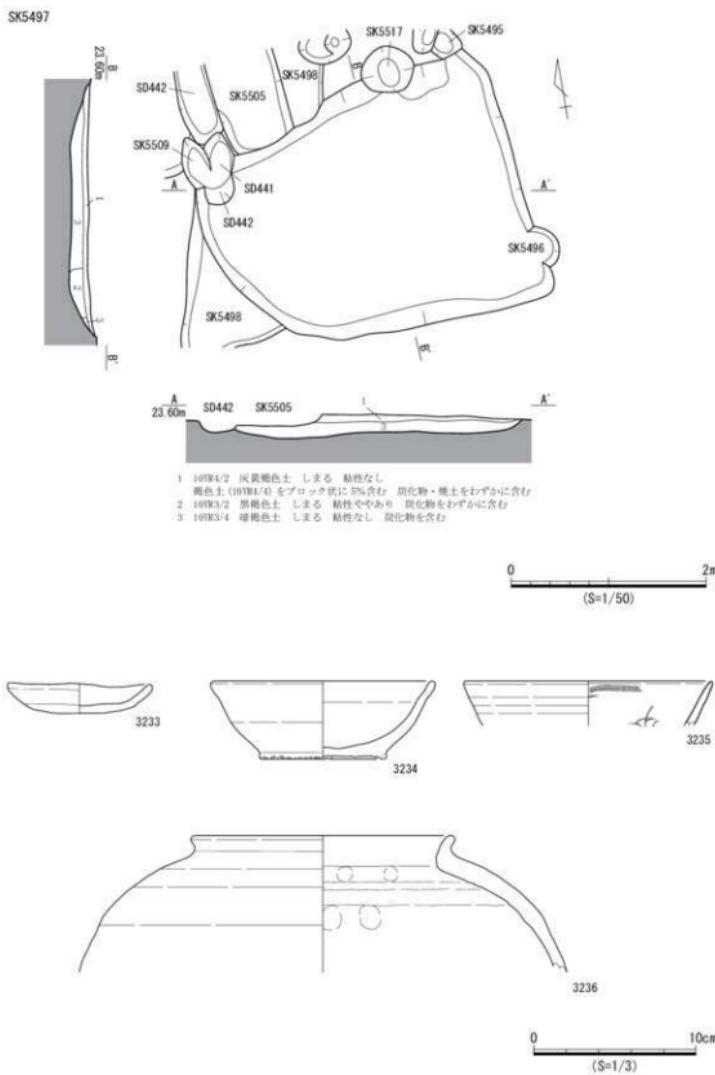


図 588 SK5497 遺構図・出土遺物実測図

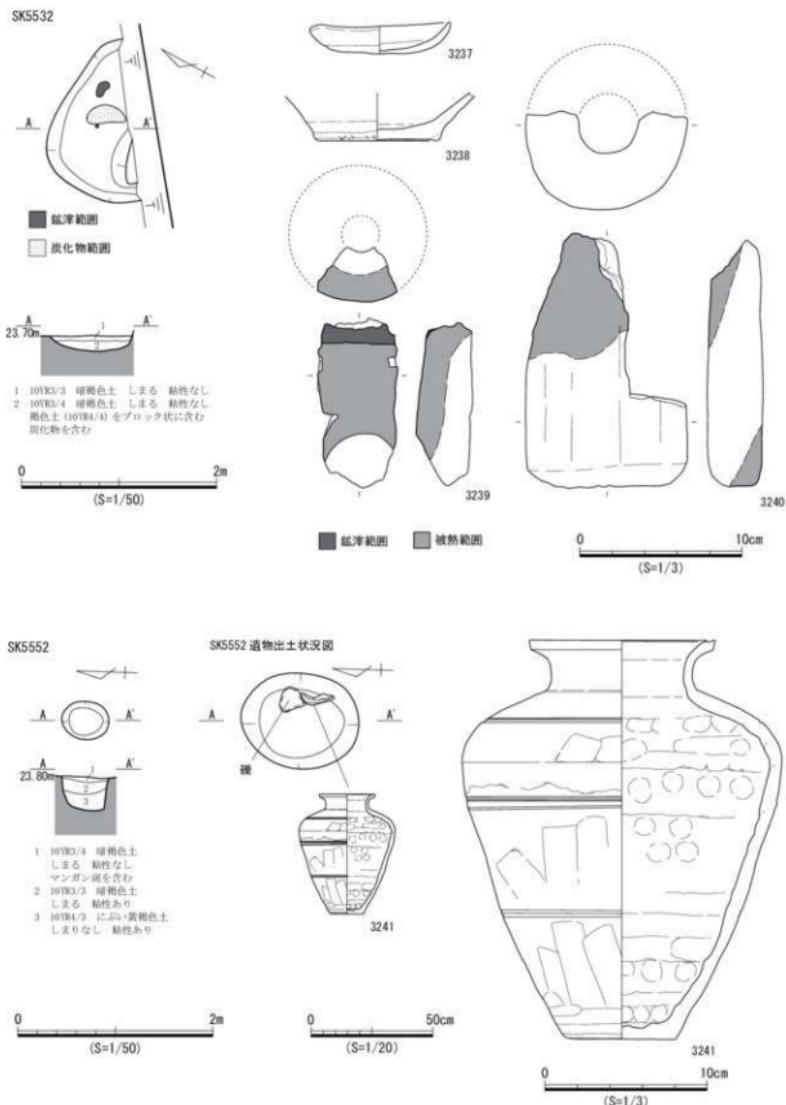


図 589 SK5532・SK5552 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 平面形は梢円形である。壁面の傾斜は急で、底面は南部がやや深い。

埴土 3層に分層した。中央部がやや窪む堆積である。

遺物出土状況 埋土中から山茶碗2点、常滑産陶器1点（3241）が出土した。3241は2層から斜位で出土した底部の破片で、重複するSK5555から出土した破片と接合した。SK5552の掘削や埋没の過程で遺物が移動したと考えられる。

出土遺物 常滑産陶器1点を図示した。3241は第1段階第3型式の三筋壺である。

時期 SK5555との重複関係より、本遺構はSK5555の所属時期である13世紀後葉から末以降と考えられる。

SK5555（図590・591）

検出状況 4地点 JG6グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北部でSK5552・南部でSK5554と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は南部が膨らんだ不定な形状である。埋没と再掘削を繰り返す過程で平面形は南に広がったと考えられる。壁面の傾斜は急である。底面は北に向かって低くなる。遺構検出面から底面までの深さは約0.9mと、IV b層を深く掘り込むことから、井戸あるいは溜め井として機能した可能性がある。

埴土 8層に分層した。堆積状況は中央が窪む堆積で、複数回に亘り掘削と埋没を繰り返したと考えられる。7層・8層の埋没後に6層が掘削され、その後6層埋没後に4層・5層部分が再度掘削される。また4層埋没後に2層・3層部分が掘削されたと考えられる。1層～3層は本遺構の最終段階に伴う堆積である。2層・5層～7層には炭化物が混じり、1層～4層には5cm大、5層には2cm大の円礫を含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物出土状況 1層・2層から山茶碗4点、常滑産陶器1点が確認4点と共に出土した。山茶碗はいずれも底部片（3253～3255・3257）で、3253は斜位、その他は逆位であった。この他、埋土中から土師器66点、須恵器3点、灰釉陶器2点、山茶碗118点、中近世陶磁器32点、輪羽口3点、鉄製品4点、鉄滓4点、粘土塊1点が散在して出土した。なお、鉄製品のうち2点は刀子であった。そのうち、6層～8層からは土師器1点、山茶茶碗25点、青磁1点、常滑産陶器4点、釘1点、粘土塊1点と、全238点中33点が出土した。この他、SK5552から出土した常滑産陶器の壺（3241）と、本遺構1層～3層・6層・7層出土の破片が接合した。

出土遺物 土師器3点、灰釉陶器1点、山茶碗16点、古瀬戸1点、輪羽口2点を図示した。3242～3244は土師器である。3242・3243はM3類、3244はM2類の皿である。3245は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。3246～3260は尾張型山茶碗である。3246～3249は第5型式の小皿、3250～3257は第5型式の碗である。3257は外面底部に六曜と考えられる墨書きが認められる¹⁾。3258は第6型式の碗である。3259は第7型式の碗で、内面に漆と考えられる付着物が認められる。3260は第5型式の片口鉢で、内面は平滑である。3261は2段階2b型式の渥美・湖西型山茶碗の片口鉢である。3262は古瀬戸の片口小瓶である。胴部下半に最大径を持つ。3263は白磁碗の底部で削り出し高台が認められる。3264・3265は輪羽口の先端部で、ガラス質の津が薄く付着する。

時期 7層から出土した山茶碗は第5型式に限定されることから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭以前に機能し、2層から出土した3259から13世紀後葉から末には埋没したと考えられる。

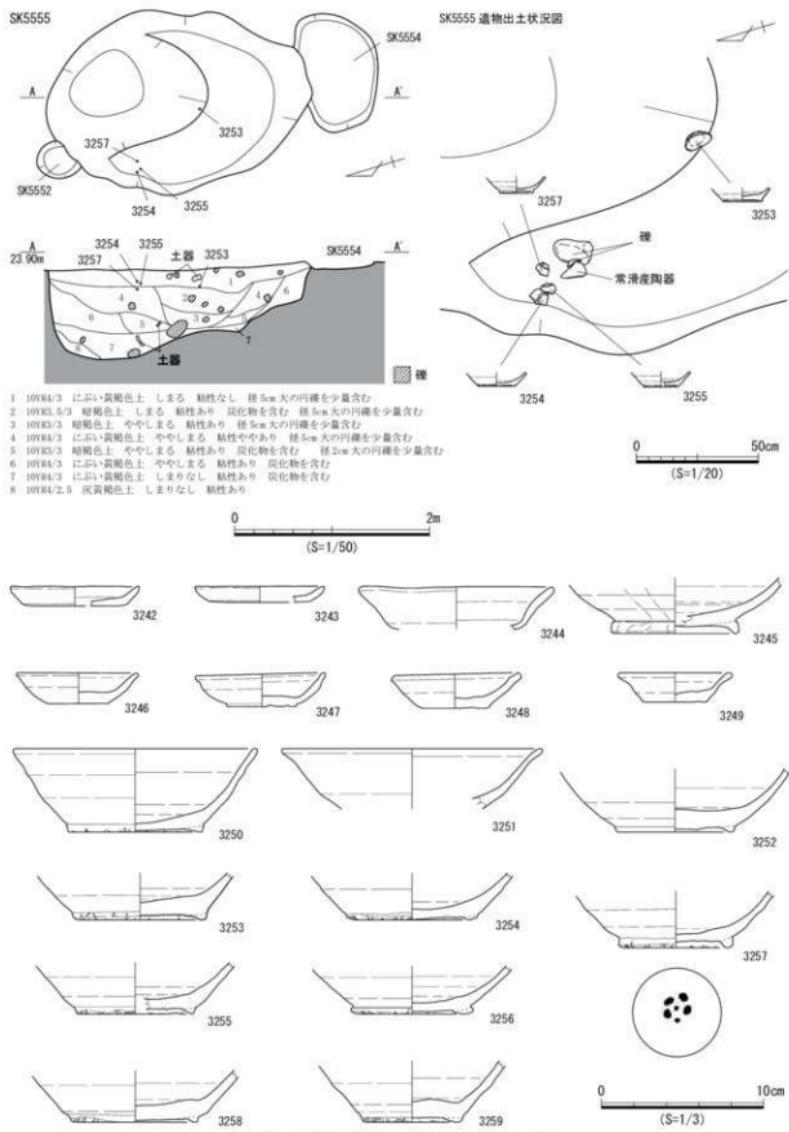


図 590 SK5555 遺構図・出土遺物実測図 (1)

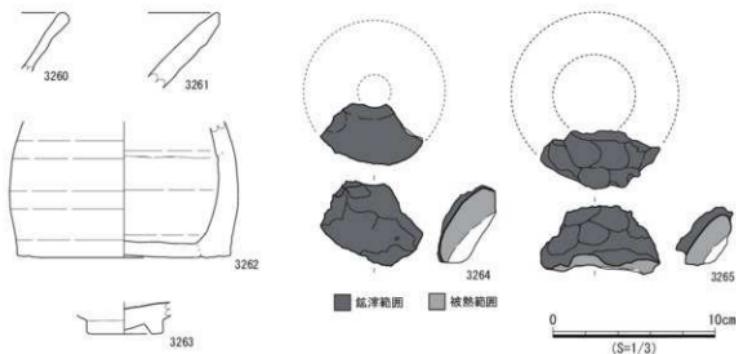


図 591 SK5555 出土遺物実測図（2）

SK5620（図 592）

検出状況 4地点 J1 6～JJ 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5621 と重複する。本遺構は SK5621 より新しい。

規模・形状 平面形は楕円形に近い不整橢円形で、壁面は南西部は緩やかに、北東部は急に立ち上がる。底面は中央が若干窪むがほぼ平坦である。

埴土 単層で、炭化物を含む。

遺物出土状況 土坑中央付近の底面から山茶碗4個体がまとまって出土した。完形の皿（3266）は斜位で、碗はいずれも破片で正位、逆位が混在する。碗の破片は接合したが、完形にはならなかった。この他、埋土中から土師器5点、山茶碗7点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗4点を図示した。3266～3269は尾張型山茶碗である。3266は第5型式の小皿、3267は第5型式の碗、3268・3269は第6型式の碗である。

時期 図示した3268・3269から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5651（図 593）

検出状況 4地点 JK 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。SK5648・SK5651・SK5650 と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は西面を除いて重複するため本来の形状は不明であるが、残存部の形状は不定形である。南西部の底面に、平面形が円形の一段深い掘り込みがある。上部壁面の傾斜は緩やかで底面は南に向かって傾斜する。一段深い掘り込み部分の壁面は急で、底面はいずれも平坦である。堆積状況から掘り込みの上下が別遺構の可能性がある。

埴土 2層に分層した。1層は南東部に窪みが偏る形状である。1層に灰褐色土ブロックと炭化物を、2層に灰黄褐色土と炭化物を含む。

遺物出土状況 1層から土師器皿17個体（3272～3277・3279～3283）と山茶碗小皿1点（3286）が、口縁を上に向けた状態で重なって出土した。埋土中層で詰め込むようにして出土したことから、土師

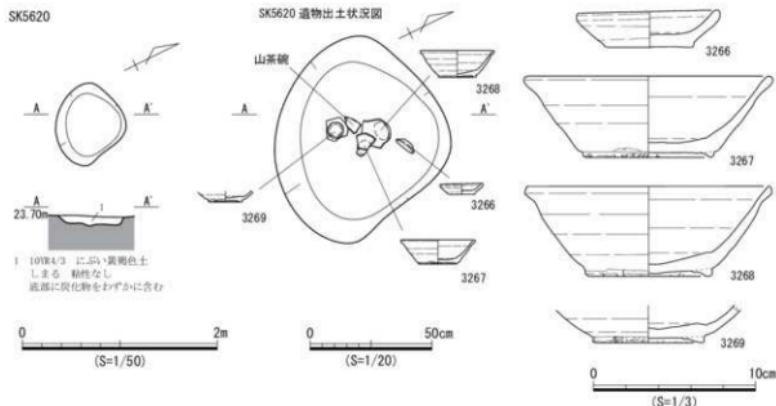


図 592 SK5620 遺構図・出土遺物実測図

器皿の埋納遺構と考えられる。これらの土師器皿は1層とa層から出土した破片が複数接合し、2層に相当するe層から出土した破片とは接合しなかった。この他、1層及びa層の埋土中から土師器201点、山茶碗6点、常滑産陶器1点が、e層からは土師器106点、山茶碗6点、常滑産陶器1点、鉄滓1点がそれぞれ散在して出土した。

出土遺物 土師器21点、山茶碗3点を図示した。1層及びa層と、e層から出土した遺物で挿図を分けた。3270～3287は1層及びa層からの出土である。3270～3285は土師器皿である。3270～3274・3281～3285はM3類、3275～3278はM4類、3279・3280はM2類の皿である。3286・3287は尾張型山茶碗である。3286は第5型式の小皿、3287は第6型式の碗である。3288～3293はe層からの出土である。3288～3292は土師器皿である。3288・3291・3292はM3類の皿、3289はM4類の皿、3290はM2類の皿である。3293は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。なお、1層とa層から出土した土師器皿は第5～第6型式の尾張型山茶碗、e層から出土した土師器皿には第5型式の尾張型山茶碗が伴うが、形態差は認められなかった。

時期 図示した3287から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5655 (図594)

検出状況 4地点JK6～JL6グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5653・SK5659・SK5664・SK5680・SK5683・SD443などと重複する。本遺構はSK5653・SK5659より古く、SK5664・SK5680・SK5683・SD443より新しい。

規模・形状 平面形は北東部を除いて隅丸の方形である。壁面の立ち上がりは急で、底面は北部を除いて平坦である。

埋土 3層に分層した。1層は遺構全体に堆積するが、2層・3層は南半のみに認められる。2層に炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器94点、須恵器1点、灰釉陶器3点、山茶碗79点、中近世陶磁器22

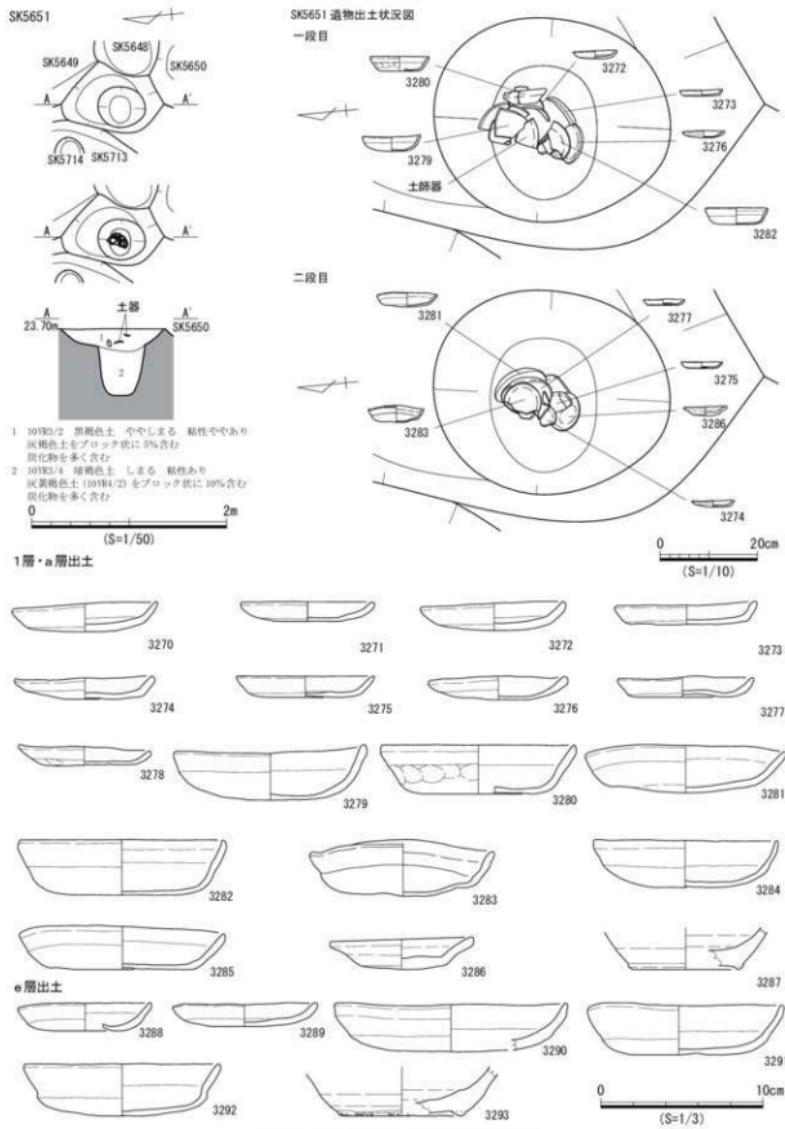


図593 SK5651 遺構図・出土遺物実測図

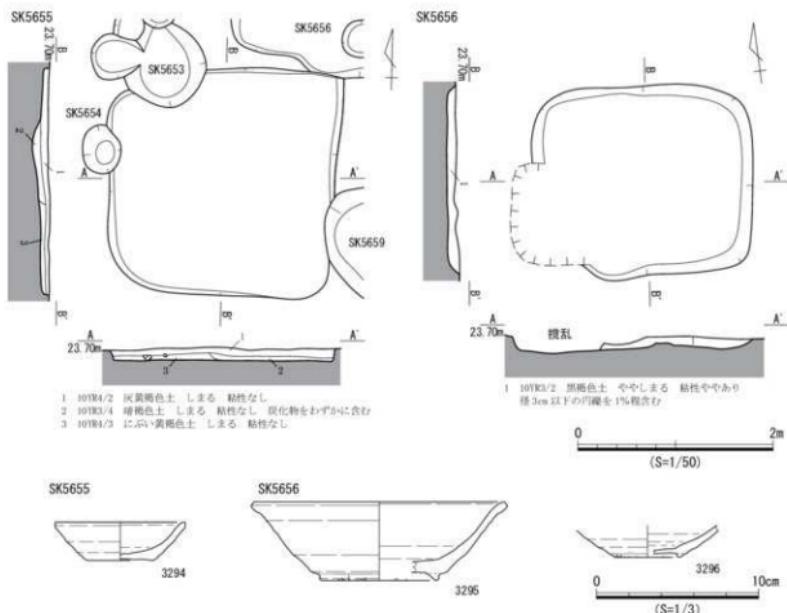


図 594 SK5655・SK5656 遺構図・出土遺物実測図

点、輪羽口 2 点、鉄滓 3 点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち 21 点は常滑産陶器であった。出土層位は北東部の a 層から多く出土した。

出土遺物 山茶碗 1 点を図示した。3294 は第 5 型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した 3294 から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭である。

SK5656 (図 594)

検出状況 4 地点 JK 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5655・SK5671・SK5657 などと重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は南西部が搅乱によって消失するが、隅丸方形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は一部基盤層が盛り上がる部分があるがほぼ平坦である。

埋土 単層で、円礫を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 137 点、灰釉陶器 3 点、山茶碗 103 点、中近世陶磁器 12 点が散在して出土した。大半の遺物は、北東部から出土した。

出土遺物 山茶碗 2 点を図示した。3295 は第 5 型式の尾張型山茶碗の碗、3296 は大畠大洞 4 号窯新段階に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した 3296 から、本遺構は 14 世紀と考えられる。

SK5667 (図 595)

検出状況 4 地点 JK 6 グリッド、SK5657 の底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜はほぼ垂直で、底面は平坦である。

埋土 2 層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 1 層下部の中央付近から山茶碗の小皿 (3298) の完形が正位で、3298 の東側の約 2 cm 下位から土師器皿 (3297) の破片が逆位で出土した。この他、埋土中から土師器 1 点、山茶碗 1 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器 1 点、山茶碗 1 点を図示した。3297 はロクロ成形の土師器皿、3298 は第 5 型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した 3298 から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭である。

SK5673 (図 595)

検出状況 4 地点 JJ 6 グリッド、SK5644 底面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5674 と重複し、本遺構はこれより新しい。

規模・形状 平面形は円形で、壁面の傾斜は急である。底面は北東に偏り丸みを帯びる。

埋土 単層である。炭粒・焼土粒を含む。

遺物出土状況 北東隅の埋土中位付近から、土師器皿 5 個体 (3299～3303) と青磁碗 1 点 (3306) が狭い範囲に集中して出土した。このうち、完形の土師器皿 2 点 (3300・3301) は逆位の青磁碗の上に正位で重なって出土した。破片で出土した土師器皿のうち 2 個体 (3302・3303) は、同じ遺構内から出土した破片と接合したが完形とはならず、残る 1 個体 (3299) は接合しなかった。出土状況から埋納と思われる。この他、埋土中から土師器 37 点、山茶碗 4 点、青磁 1 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器 6 点、青磁 1 点を図示した。3299～3305 は M 3 類の土師器皿である。3306 は太宰府分類龍泉窯系青磁 I 類の碗である。内面に櫛書きとヘラ書きによる割花文を配する。

時期 図示した 3299～3305 と SK5644 との重複関係から、本遺構は 12 世紀後葉以降で SK5644 の所属時期である 13 世紀初頭から 13 世紀中葉以前と考えられる。

SK5709 (図 596)

検出状況 4 地点 JJ 5～JK 6、JK 5～JK 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

SK5710・SK5711・SK5712 と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は楕円形に近い不整な形状である。西部壁面から半円形の一段高まりが認められる。壁面の立ち上がりは緩やかである。底面は中央付近の一部が窪む他はほぼ平坦である。

埋土 2 層に分層した。2 層は北部のみに堆積する。1 層に炭粒と焼土粒を、2 層に炭粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 15 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 11 点、常滑産陶器 1 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 1 点を図示した。3307 は第 6 型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した 3307 から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉である。

SK5728 (図 596)

検出状況 4 地点 JJ 5～JK 5 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5726・SK5733 と重複する。本遺構は SK5726 より古く、SK5733 より新しい。

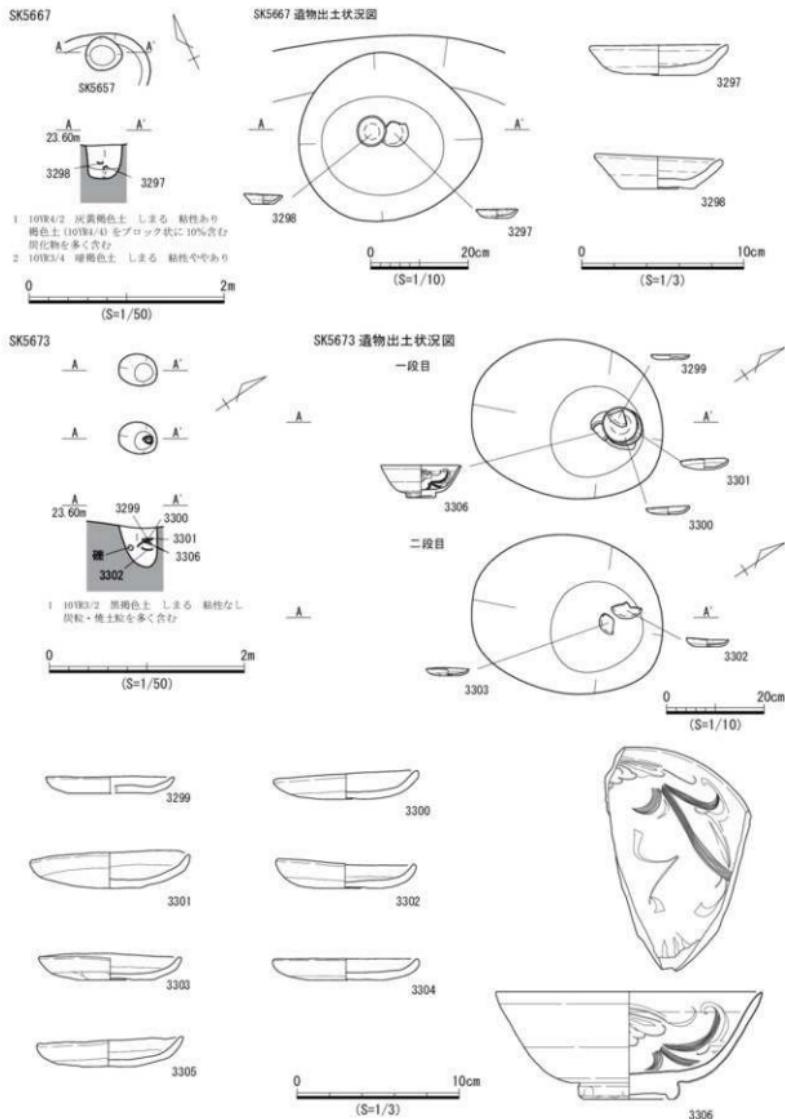


図 595 SK5667・SK5673 遺構図・出土遺物実測図

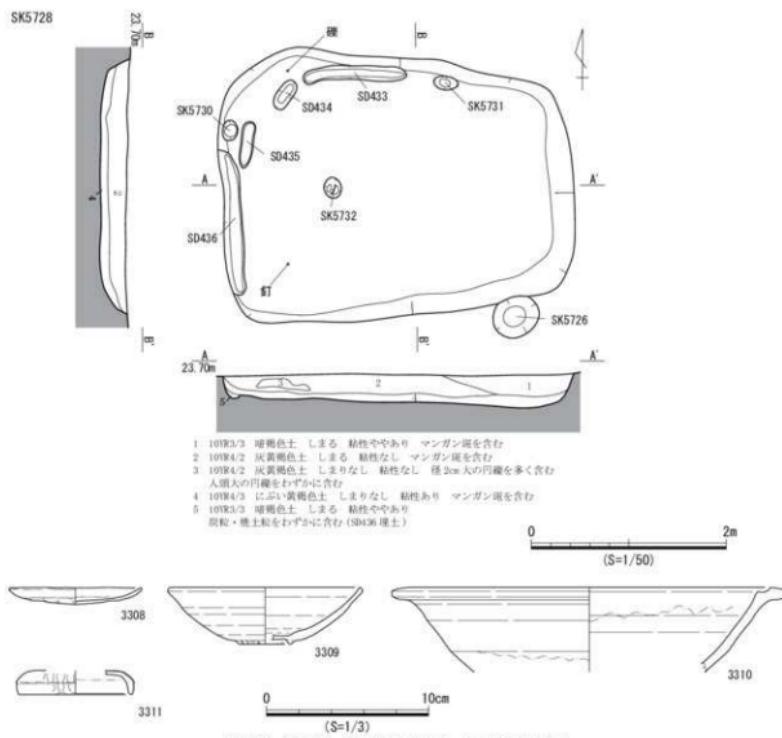
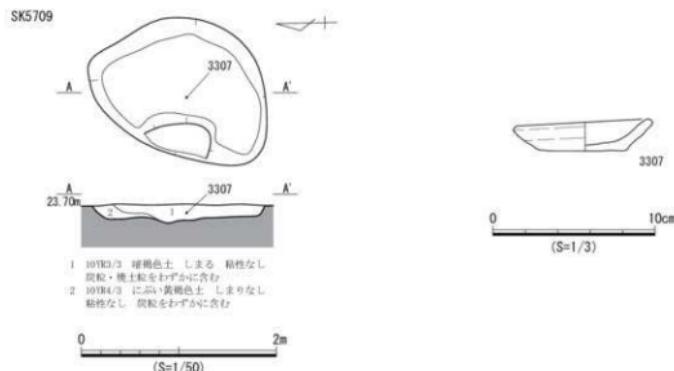


図 596 SK5709・SK5728 遺構図・出土遺物実測図

規模・形状 平面形は東部が西部より幅がやや狭い長方形である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。北西部底面の壁面付近でL字状に断続的に続く小規模な溝（SD433～SD436）を検出した。遺構の壁際に沿って設置された溝の可能性もあるが、SD434・SD435が壁面から離れることや部分的な検出にとどまるため本遺構に伴う遺構とはしなかった。骨片や鉄釘が出土したことから、本遺構は墓の可能性がある。

埋土 5層に分層した。中央が崖む堆積で、3層は円礫を多く含むブロックである。5層はSD436埋土で炭粒・焼土粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器154点、須恵器4点、灰釉陶器6点、山茶碗168点、中近世陶磁器41点、鉄釘5点、鉄滓9点、骨片1点が出土した。中近世陶磁器のうち2点が古瀬戸、27点が常滑産陶器、3点が白磁、3点が青磁、2点が青白磁であった。なお本遺構のc層から出土した灰釉陶器碗の小片は、SK5656のa層出土の破片と接合した。

出土遺物 土師器1点、山茶碗1点、古瀬戸1点、青白磁1点を図示した。3308はM4類の土師器皿である。3309は大烟大洞4号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の碗である。3310は後I期の古瀬戸折縁深皿である。3311は青白磁合子の蓋である。

時期 図示した3309・3310から、本遺構は14世紀後葉である。

SK5733（図597）

検出状況 4地点JJ4～JK5グリッド、IVb層上面で検出した。SK5725・SK5728・SK5729と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 平面形は東部がSK5728と重複して消失し、残存部の形状は不整形である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は丸みをおびる。

埋土 2層に分層した。中央が若干崖む堆積で、1層に炭粒と焼土粒を、2層に炭粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器47点、灰釉陶器2点、山茶碗57点、中近世陶磁器7点、鉄塊1点、鉄滓2点が散在して出土した。中近世陶磁器のうち5点は常滑産陶器であった。なお、2層から出土した常滑産陶器の甕の破片と、本遺構から約20m東に位置するSK5421のa層から出土した破片と接合した。

出土遺物 土師器2点と山茶碗2点を図示した。3312・3113はM4類の土師器皿である。3314は第5型式の尾張型山茶碗の碗、3315は大烟大洞4号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した3315から、本遺構は14世紀である。

SK5734（図598）

検出状況 4地点JK5～JK6グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5736・SK5738と重複し、本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は円形で、壁面の傾斜は緩やかである。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層と2層の層境は凹凸のある形状である。

遺物出土状況 埋土中から土師器6点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗18点、常滑産陶器1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。3316は第6型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した3316から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5733

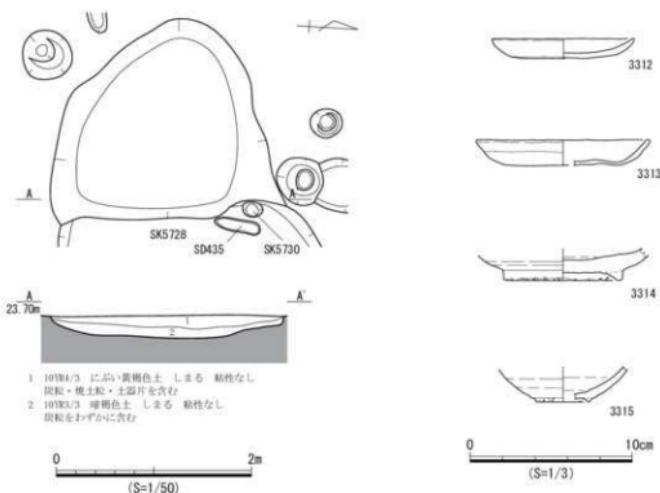


図 597 SK5733 遺構図・出土遺物実測図

SK5736 (図 598)

検出状況 4地点 JK5・6～JL5・6グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5734・SK5737・SK5738などと重複する。本遺構はSK5734より古く、SK5737・SK5738より新しい。

規模・形状 平面形は北東隅を重複により消失するが、残存部の形状から長方形と考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は中央部が北東から南西に向かって2段に掘り込まれる。検出面の平面形と下段の掘り込みとは長軸方位が異なり土層も分かれることから、別遺構の可能性がある。

埋土 3層に分層した。1層に炭粒を、3層に炭粒・焼土粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器39点、須恵器1点、山茶碗89点、常滑産陶器5点、輪羽口4点、鉄滓5点が散在して出土したがいずれも小片であった。出土位置は北西から68点、北東から26点、南西から37点、南東から12点と北西から多く出土した。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 山茶碗や常滑産陶器を含むことやSK5734との重複関係から、本遺構はSK5734の所属時期である13世紀初頭から中葉以前と考えられる。

SK5743 (図 599)

検出状況 4地点 JL5～JL6グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5746・SK5752・SK5760・SK5761などと重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は方形に近い形状で、北部がやや丸みを帯びる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。1層は水平堆積であるが、2～4層の堆積過程は不明である。1層・3層・

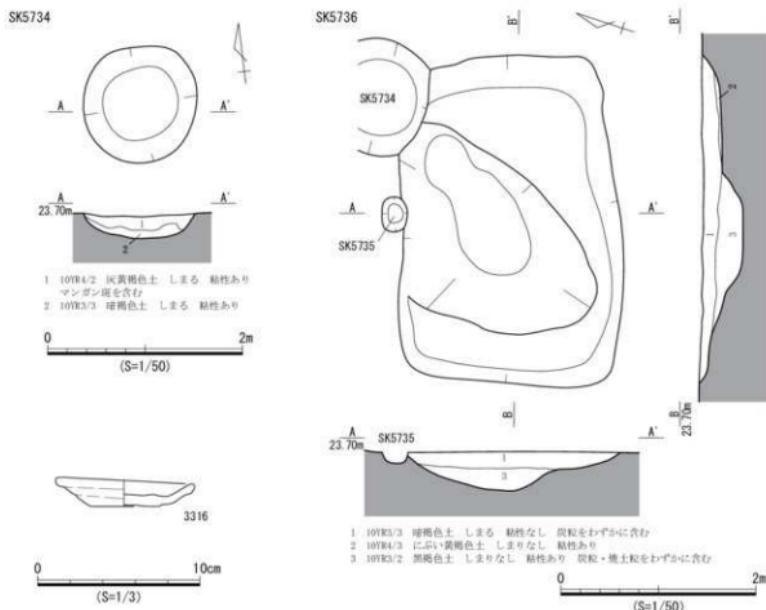


図 598 SK5734・SK5736 遺構図・出土遺物実測図

4層に炭化物、2層に褐色土ブロックと小砾を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器59点、灰釉陶器3点、山茶碗106点、常滑産陶器1点、青磁3点、輪羽口1点、鉄滓1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗2点を図示した。3317・3318は第6型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した3317・3318から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SK5760 (図599)

検出状況 4地点 JL.5～JL.6グリッド、SK5743底面で検出した。平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形はSK5743との重複により上端が消失しており、残存部の形状は不整円形である。

壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土中から土師器2点、山茶碗7点、輪羽口4点、鉄滓5点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点、山茶碗2点、輪羽口3点を図示した。3319はM3類の土師器皿である。3320・3321は第6型式の尾張型山茶碗の小皿と碗である。3322～3324は輪羽口である。3322は先端部で滓が薄く付着する。3323・3324は胴部片で、3323は面取りが認められる。

時期 図示した3320・3321から、本遺構は13世紀初頭から中葉である。重複するSK5743とは同時期であることから、短時間で埋没したと考えられる。

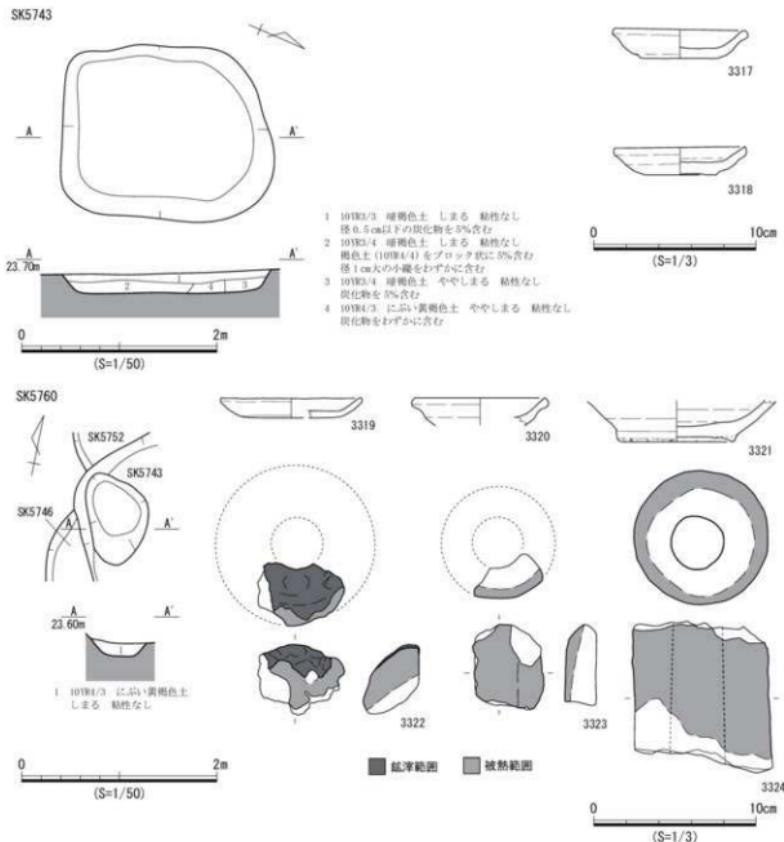


図 599 SK5743・SK5760 造構図・出土遺物実測図

SK5805 (図 600)

検出状況 4地点 JJ4～JK4 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5804 と重複し、本造構はこれより古い。ただし、平面形や遺物の出土状況から、所属年代の異なる複数造構の重複を見落とした可能性が高い。

規模・形状 造構検出時の平面形は円形であったが、出土遺物が掘方の壁面に食い込んでいたことから再度精査し造構の範囲を北側に広げた。広げた部分の形状は当初の平面形より一回り大きな椭円形となり、先に掘削した南部より浅くなっている。この結果により、本造構の平面形は二つの大小の円形が重複したような不整な形状となったが、先述のとおり複数の造構である可能性が高く、本来の形状は不明である。

SK5805



SK5805 遺物出土状況図

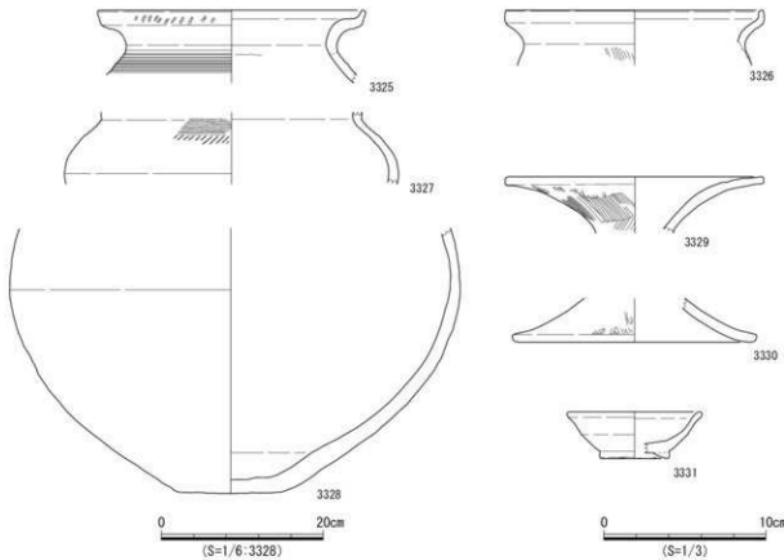
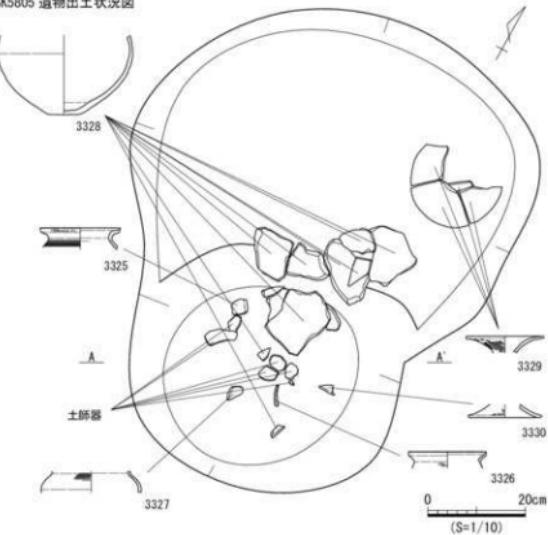


図 600 SK5805 遺構図・出土遺物実測図

埴土 2層に分層した。北部の一段高いテラス状部分の堆積は不明である。

遺物出土状況 先に掘削した部分の2層上位の全体と北部に広げた部分の東側から古墳時代前期の土師器壺(3325~3328)や器台(3329・3330)の破片がまとまって出土した。3328は壺の底部から胴部下半の破片で正位で出土した。3329は器台の口縁部で逆位で出土した。この他埋土中から、土師器69点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗14点が散在して出土した。なお、須恵器1点と山茶碗14点は古墳時代前期の土師器と同じ2層から出土した。

出土遺物 土師器6点、山茶碗1点を図示した。3325~3330は土師器である。3325は壺で口縁部に連続する斜め方向の刺突痕と、肩に8条の沈線を配する。3326は壺で短い直立する口縁端部を有する。3327は壺の頸部から胴部で、6条の沈線の下に斜め方向の刺突文を配する。3328は壺の胴部から底部で、外面の全体に薄く煤が付着する。3329は器台の口縁部で、外面に縱方向の連続するミガキを施す。3330は器台の脚部で、外面の一部に縱方向のミガキを施す。図示した土師器はいずれも廻間I式と考えられる。3331は第4型式の尾張型山茶碗の小碗である。

時期 図示した3325~3330と、3331の2時期が認められ、本遺構は2世紀末から3世紀中葉と、12世紀中葉から後葉の2時期の遺構が重複すると考えられる。

SK5809 (図601)

検出状況 4地点JK4~JK5グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は丸みを帯びて中央が窪む。

埴土 2層に分層した。1層は中央が窪む堆積である。1層に炭粒・焼土粒を含む。

遺物出土状況 2層下位から常滑産陶器の壺破片がまとまって出土した(3334~3336)。口縁部、底部、胴部の破片で、胴部は2層から出土した複数の破片が接合した。接点が無いため別々に図示したが、同一個体の可能性がある。この他、埋土中から土師器22点、須恵器1点、山茶碗18点、中近世陶磁器37点が出土した。なお、中近世陶磁器のうち、常滑産陶器は26点、白磁1点であった。出土層位は1層から7点、2層から22点、d層から49点と、下層から多く出土した。なお、3335は、本遺構の北側約1.5mに位置するSK5807のa層から出土した破片と接合した。

出土遺物 須恵器1点、山茶碗1点、常滑産陶器3点を図示した。3332は8世紀前半の美濃須衛窯産の鉢である。3333は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。3334~3336は第1段階2~3型式の常滑産陶器の甕である。

時期 図示した3333~3336から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭である。

SK5830 (図602・603)

検出状況 4地点JL5グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5831と重複し、本遺構はこれより古い。

規模・形状 平面形は円形で西部がやや膨らむ形状である。西部の膨らむ部分には三日月状で幅の狭いテラスをもつ。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。

埴土 8層に分層した。1層・2層は水平堆積で、3層~8層は北から順に南に偏った堆積である。1層・3層・5層・8層に炭粒を、3層・5層・7層に焼土を含む。1層・2層と3層~8層で堆積状況が異なることから、2つの遺構が重なっていた可能性がある。

遺物出土状況 東部の3層~5層中の底面から少し浮いた状態で山茶碗の破片が出土した。3338は正

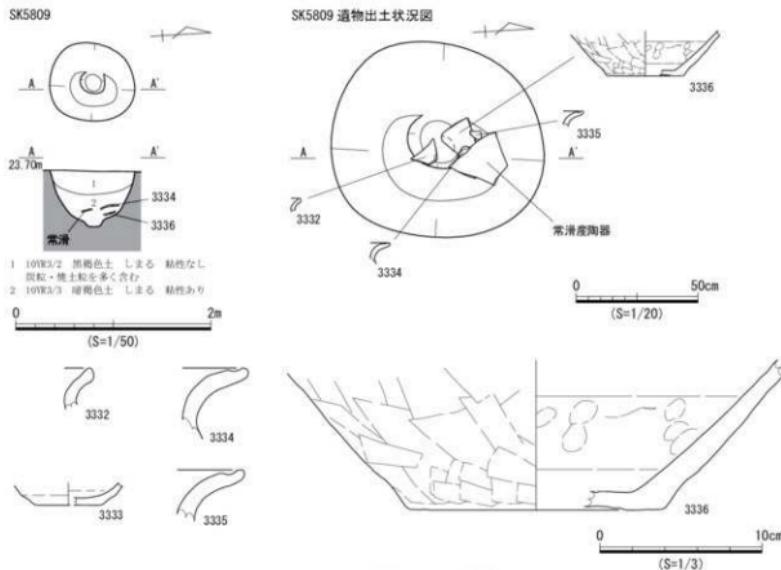


図 601 SK5809 遺構図・出土遺物実測図

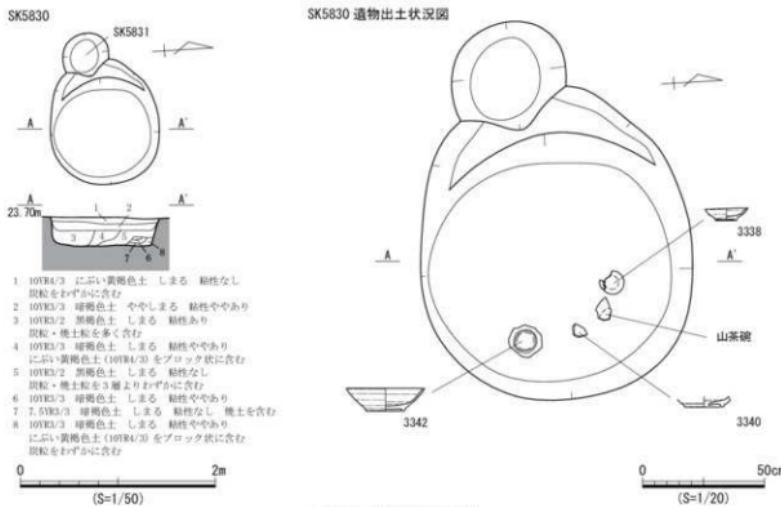


図 602 SK5830 遺構図

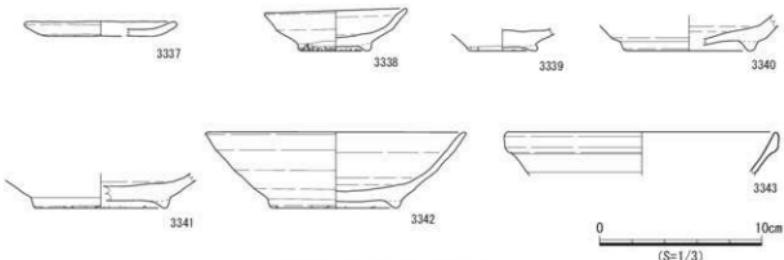


図 603 SK5830 出土遺物実測図

位で出土し 3 層と 2 層の破片と接合した。また、3342 は逆位で出土し a 層と 3 層の破片と接合した。この他埋土中から土師器 99 点、灰釉陶器 4 点、山茶碗 103 点、中近世陶磁器 7 点、輪羽口 1 点、鉄滓 9 点が出土した。出土層位は 1 層 8 点、2 層 12 点、3 層 41 点、a 層 22 点、c 層 150 点であり埋土下層から多く出土した。

出土遺物 土師器 1 点、山茶碗 5 点、白磁 1 点を図示した。3337 は M3 類の土師器皿である。3338～3342 は尾張型山茶碗である。3338・3339 は第4型式の小皿、3340・3341 は第4型式の碗、3342 は第5型式の碗である。3343 は太宰府分類白磁IV類の碗である。

時期 図示した 3342 から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭と考えられる。

SK5886 (図 604)

検出状況 4 地点 JM5 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5887・SK5897・SK5898 などと重複し、いずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は北面より南面がやや狭くなるが、ほぼ方形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は南西部が若干高くなるもののほぼ平坦である。

埋土 2 層に分層した。水平堆積で、2 層に炭化物を含む。

遺物出土状況 西部の底面より、1 点の山茶碗の破(3346)が出土した。この他埋土中から、土師器 252 点、須恵器 5 点、灰釉陶器 7 点、山茶碗 225 点、中近世陶磁器 15 点、輪羽口 6 点、鉄滓 19 点が出土した。中近世陶磁器のうち 10 点は常滑産陶器であった。出土位置は北西から 347 点、北東から 68 点、南西から 43 点、南東から 72 点と北西から多く出土した。なお、b 層から出土した常滑産陶器の破片は、約 10m 北に位置する SK5655 の a 層から出土した破片と接合した。

出土遺物 土師器 1 点と山茶碗 4 点を図示した。3344 は M3 類の土師器皿である。3345～3348 は尾張型山茶碗で、3345 は第5型式の小皿、3346 は同型式の碗、3347・3348 は第6型式の片口鉢である。

時期 SK5897 や SK5898 との重複関係から、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀初頭と考えられる。

SK5897 (図 605)

検出状況 4 地点 JM4～JM5 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5886・SK5898・SK5899 などと重複する。本遺構は SK5886 より古く、SK5898・SK5899 より新しい。

規模・形状 平面形は東面より西面がやや狭くなるが、ほぼ方形である。壁面の傾斜は緩やかで、底

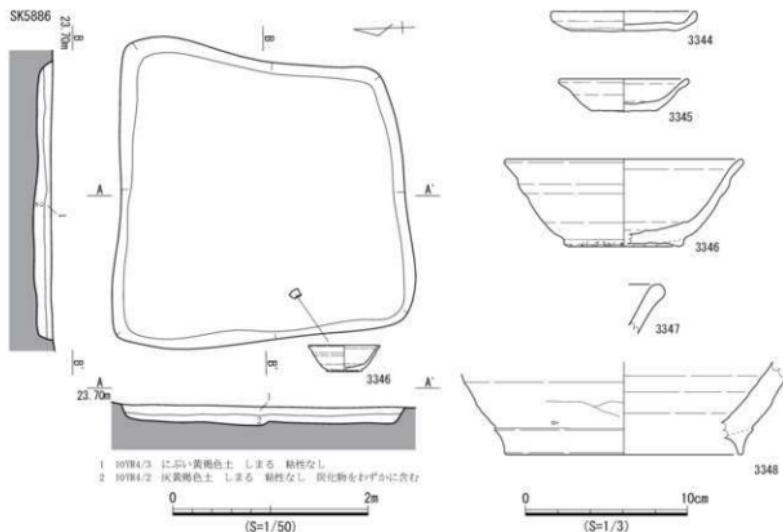


図 604 SK5886 遺構図・出土遺物実測図

面は平坦である。

埋土 3層に分層した。3層は西部にのみ認められ、1層・2層は水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器92点、須恵器4点、灰釉陶器3点、山茶碗86点、常滑産陶器12点、古瀬戸3点、石製品(剥片)1点、鉄製品2点、鐵滓6点、瓦1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器1点、山茶碗8点、古瀬戸1点を図示した。3349は土師器の羽釜である。3350は第5型式の尾張型山茶碗の小皿、3351は同型式の碗である。3352は明和1号窯式、3353・3354は大畑大洞4号窯式新段階、3355～3357は大洞東1号窯式にそれぞれ比定した東濃型山茶碗の碗である。3358は後I期～後II期の古瀬戸小壺である。

時期 図示した3355～3357から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭である。

SK5919 (図606)

検出状況 4地点 JN4～JN5グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5920・SK5921・SK5926・SK5927などと重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 平面形は方形で、壁面の傾斜は緩やかである。底面は南西部が低くなるが概ね平坦である。

埋土 3層に分層した。1層は東部に向かってわずかに崖み、2層は南西部、3層は北部にのみ認められる。1層・2層には炭粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器134点、須恵器3点、灰釉陶器2点、山茶碗260点、中近世陶磁器25点、輪羽口2点、鉄製品1点、鐵滓10点が散在して出土した。中近世陶磁器のうち、18点は常滑産陶器、1点は白磁であった。常滑産陶器(3361)はSK5653・SK6555から出土した破片と接合した。

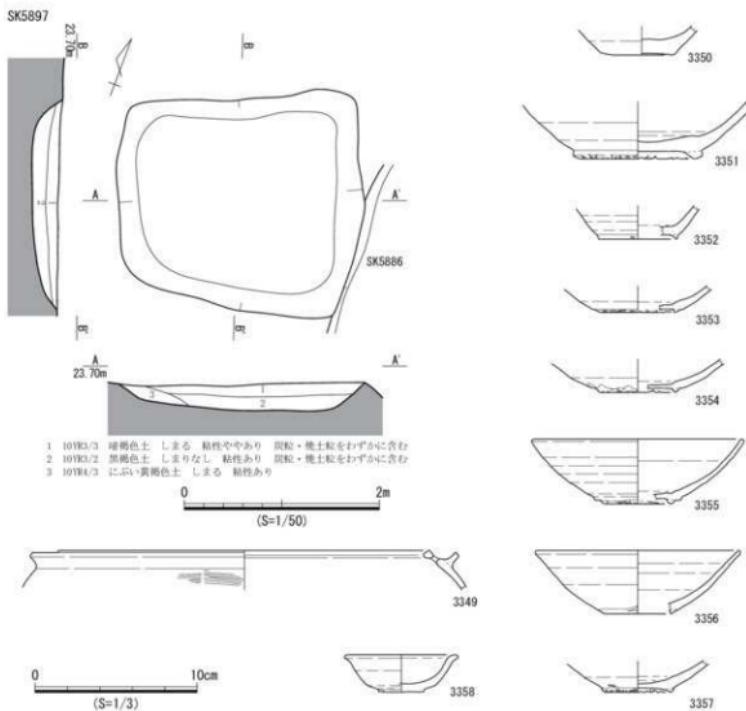


図 605 SK5897 遺構図・出土遺物実測図

出土遺物 山茶碗 2 点、常滑産陶器 1 点、白磁 1 点、石製品 1 点を図示した。3359 は第 6 型式の尾張型山茶碗の碗である。3360 は第 9 型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。3361 は第 1 段階第 3 型式の常滑産陶器三筋壺である。3362 は太宰府分類白磁 V 類の碗である。3363 は輪羽口の先端部片で済が薄く付着する。

時期 図示した 3360 は 14 世紀初頭から後葉を示すが、SK5920 との重複関係から、本遺構は SK5920 の所属時期である 14 世紀後葉から 15 世紀初頭以降と考えられる。

SK5920 (図 607)

検出状況 4 地点 JN4 ~ JN5 グリッド、東部は SK5919 底面で、西面を IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5924・SK5926 などと重複する。本遺構は SK5924 より古く、SK5926 より新しい。

規模・形状 平面形は、東部の上端部を SK5919 との重複により消失するが、残存部の形状は隅丸方形に近い。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埴土 3 層に分層した。1 層は中央がやや窪み、3 層は南部にのみ堆積する。1 層に炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 80 点、灰釉陶器 4 点、山茶碗 97 点、常滑産陶器 3 点、古瀬戸 1 点、

SK5919

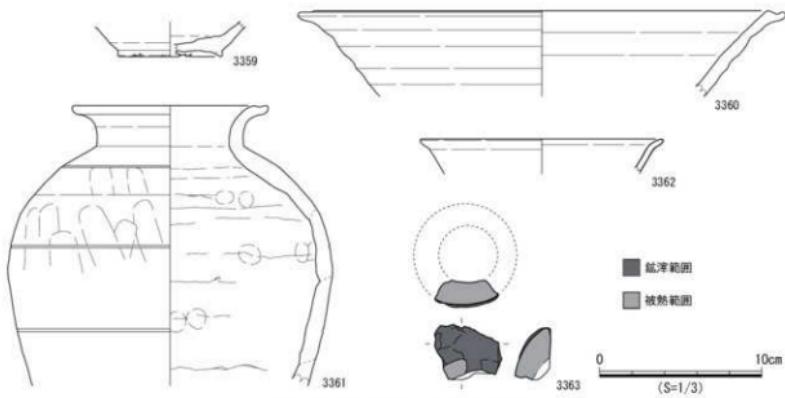
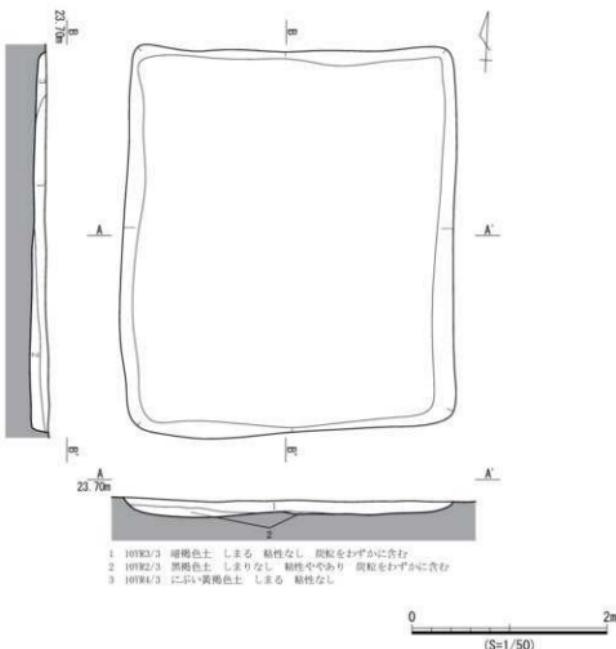


図 606 SK5919 遺構図・出土遺物実測図

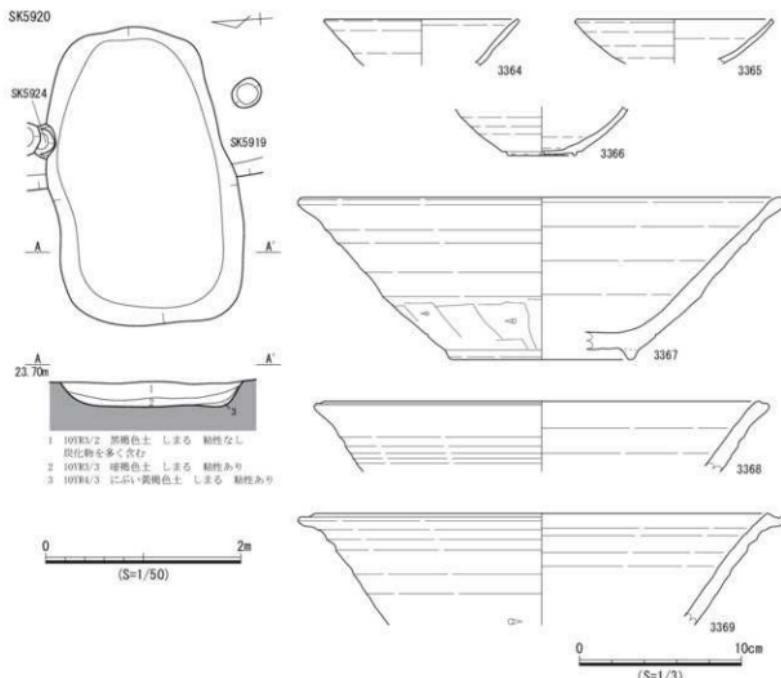


図 607 SK5920 造構図・出土遺物実測図

青磁 1 点、白磁 1 点、鉄製品 1 点、鉄滓 10 点が散在して出土した。なお、本造構出土の 3367・3369・3368 は、SK5919 から出土した破片と接合した。SK5919 の掘削等により SK5920 の遺物が混入したと考えられる。

出土遺物 山茶碗 6 点を図示した。3364～3366 は大洞東 1 号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

3367 は第 6 型式、3368 は第 7 型式、3369 は第 9 型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。

時期 図示した 3364～3366 から、本造構は 14 世紀後葉から 15 世紀初頭である。

SK5926 (図 608)

検出状況 4 地点 JN5 グリッド、SK5919 底面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5921・SK5920・SK5927 などと重複し、本造構はいずれより古い。

規模・形状 周囲に造構が重複するため上部を消失し、全体の平面形は不明である。南西部にテラス状の平坦面がある。壁面の傾斜や底面の形状は不明である。

埋土 3 層に分層した。西部に偏る堆積である。1 層に炭粒を含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器 25 点、灰釉陶器 3 点、山茶碗 37 点、鉄滓 6 点が散在して出土した。鉄滓 (3370) は、断面観察及び蛍光 X 線分析を実施した (第 5 章第 5 節)。

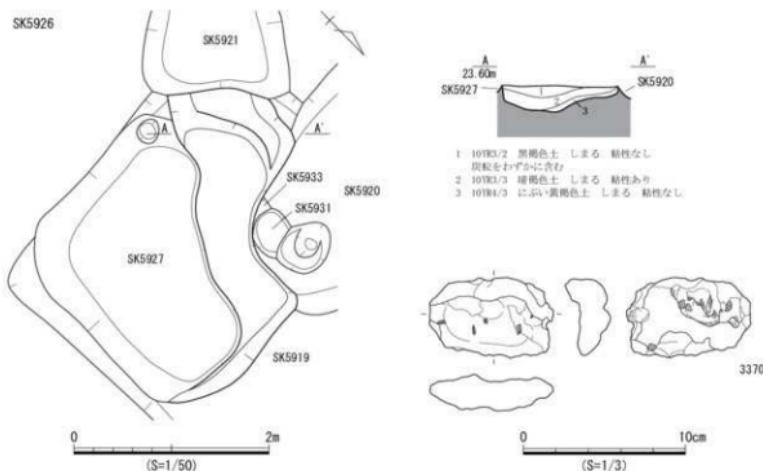


図 608 SK5926 遺構図・出土遺物実測図

出土遺物 3370 は楕円形である。平面形は不整梢円形で、表面には炭化物を多く含む。底面には炭化物と共にシルト質土粒を含む。分析の結果、銅 (Cu) やスズ (Sn)、鉛 (Pb) などの成分が確認されたことから銅鋳の可能性がある（第5章第5節）。

時期 SK5290 との重複関係から、本遺構は SK5920 の所属時期である 14 世紀後葉から 15 世紀初頭以前と考えられる。

SK5948 (図 609)

検出状況 4 地点 JM3・4～JN3・4 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭で、北西部で検出時に礫や常滑産陶器が確認できた。SK5954 などと重複し、本遺構はいざれより新しい。

規模・形状 平面形は北辺より南辺がやや狭くなるが、ほぼ方形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面は中央部がやや窪む形状である。本遺構の底面で小規模な土坑を複数検出したが不規則な配置で上屋を支える構造では無いことから本遺構より古い別遺構と判断した。

埋土 3 層に分層した。2 層・3 層は中央付近にのみ堆積するが、本遺構の底面で検出した SK5954 の 1 層と位置が重なり、また土色も近似することから SK5954 埋土を誤認した可能性がある。1 層に炭粒・焼土粒を、2 層に焼土を含む。

遺物出土状況 1 層中の北部から、拳大ほどの円礫や角礫に混じって常滑産陶器（3375）を含む 2 個体が出土した。礫や土器は南北方向で直線的にまとまるところから、SK5948 を掘り込む溝状の遺構を見落とした可能性がある。この他埋土中から土器 36 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 59 点、中近世陶磁器 7 点、輪羽口 1 点、鉄鋤 7 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 4 点、常滑産陶器 1 点を図示した。3371～3373 は尾張型山茶碗で、3371 は第 5 型式、3372・3373 は第 6 型式の碗である。3374 は大畠大洞 4 号窯新段階に比定した東濃型山茶碗の碗である。3375 は常滑産陶器甕の頭部から肩部の破片である。頭部の肩の張りは弱い。第 1 段階 2～3

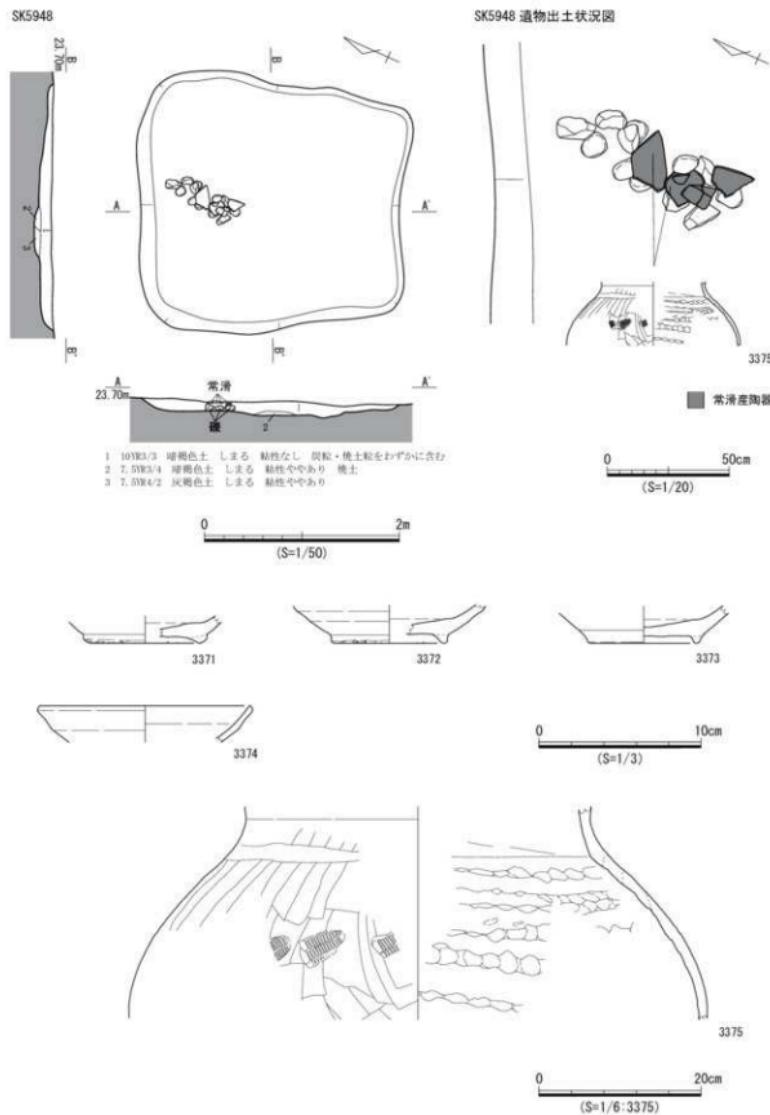


図 609 SK5948 遺構図・出土遺物実測図

型式と考えられる。

時期 図示した3374から、本遺構は14世紀初頭から後葉である。

SK5977(図610)

検出状況 4地点 JI 1 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5978と重複し、本遺構はこれより新しい。北西部は発掘区外に続く。

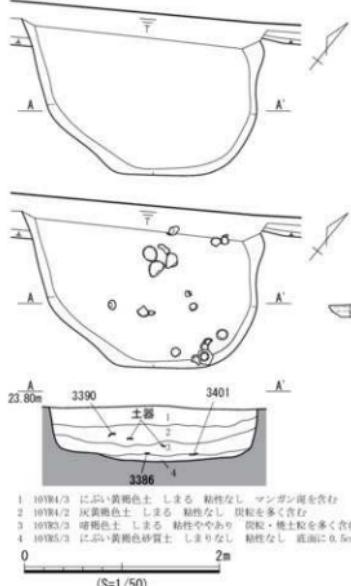
規模・形状 残存部の平面形は半円形に近い不整な形状である。壁面の傾斜は急で、底面は中央がやや窪む形状である。

埋土 4層に分層した。4層は底面の中央部から東部にかけて堆積し、1層・2層は中央がやや窪む堆積である。2層に炭粒、3層に炭粒・焼土粒、4層の底面に炭層を含む。

遺物出土状況 2層から3層にかけて、遺存状況の良い土師器(3378・3386)や山茶碗(3388～3390・3401)等が疊と共に出土した。正位と逆位が混在し、また意図的に重ねた状況も認められないことから、2層・3層の埋没過程で遺物が混入したと考えられる。この他埋土中から土師器162点、須恵器1点、灰釉陶器11点、山茶碗341点、常滑産陶器3点、古瀬戸1点、青磁1点、砥石1点、鉄釘2点、鉄滓2点が散在して出土した。

出土遺物 土師器11点、山茶碗20点、古瀬戸1点、砥石1点を図示した。3376はロクロ成形の土師器皿で柱状高台である。3376～3386は土師器である。3377～3384はM3類、3385・3386はM2類の

SK5977



SK5977 遺物出土状況図

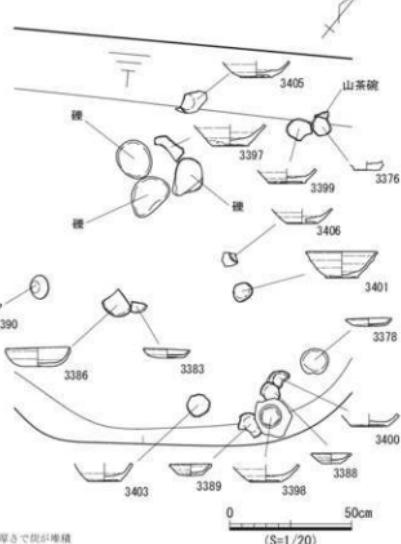


図610 SK5977 遺構図

- 1 10W4/3 に3374 黄褐色土 しまる 粘性なし マンガン斑を含む
- 2 10W4/2 灰黄褐色土 しまる 粘性なし 炭粒を多く含む
- 3 10W3/3 硫褐色土 しまる 粘性ややあり 同上、燒土粒を多く含む
- 4 10W5/3 に3374 黄褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 底面に0.5cmの厚さで炭が堆積

0 2m
(S=1/50)

0 50cm
(S=1/20)

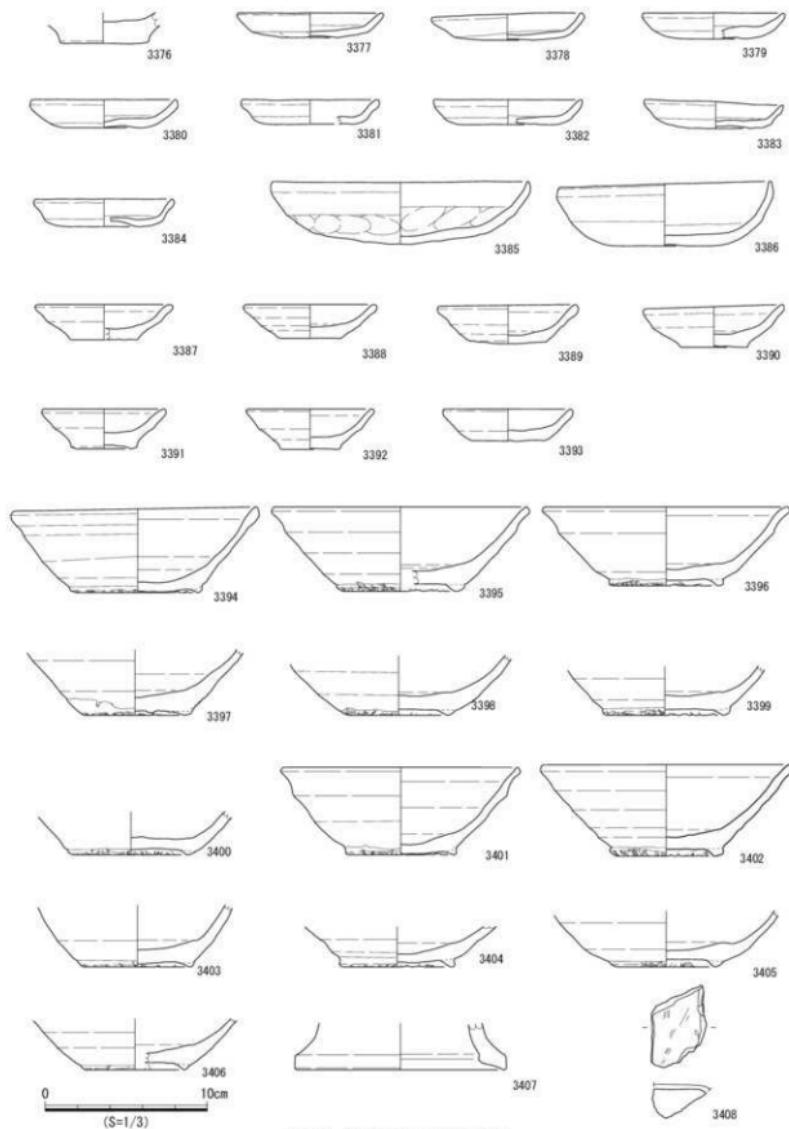


図 611 SK5977 出土遺物実測図

皿である。3387～3406は尾張型山茶碗である。3387～3392は第5型式の小皿、3393は第6型式の小皿である。3394～3400は第5型式の碗、3401～3406は第6型式の碗である。3407は後III期～後IV期古段階の古瀬戸瓶子III類である。3408は中砥～仕上げ砥で表面の一部が残存する。

時期 図示した3407は15世紀前葉から中葉であるが、本遺物を除いて12世紀後葉から中葉の山茶碗や土師器皿が主体となることから混入と考えられ、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SK6063 (図612)

検出状況 4地点JJ8グリッド、SD431埋土上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

規模・形状 平面形は円形である。平面の傾斜は急で、底面は半円形である。

埋土 2層に分層した。南に偏る堆積である。

遺物出土状況 底面の北隅から土師器皿(3409)が正位で出土した。この他土師器19点、灰釉陶器1点、山茶碗18点、中近世陶磁器2点が散在して出土した。

出土遺物 土師器2点を図示した。3409・3410はM3類の皿である。

時期 図示した3409・3410は12世紀後葉から13世紀中葉を示すが、SD431との重複関係から、本遺構はSD431の所属時期である12世紀後葉から13世紀初頭以前である。

SK6063

SK6063 遺物出土状況図

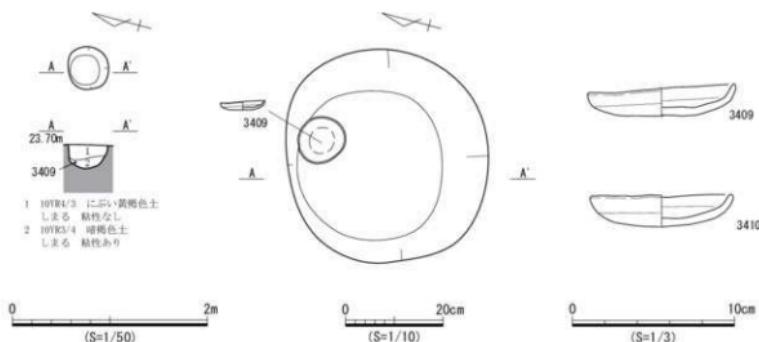


図612 SK6063 遺構図・出土遺物実測図

6 溝状遺構

SD361 (図613)

検出状況 3地点IS13～IT16グリッド、IVa層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西端は発掘区外に延びる。IS13グリッドでSK4430と重複し、東部と西部とに分断されるが、平面形から同一遺構と考えた。

規模・形状 検出した範囲では、東西方向に延びる溝状遺構と考えられる。東端はわずかに北側へ湾曲する。断面形はおよそ半円形である。SK4430を挟み、東側と西側とでは深さに約0.2mの差があるが、地形が西側に向けて下がっているためであり、底面の標高差はほとんどない。

埋土 A-A' 断面は6層、B-B' 断面とC-C' 断面は4層に分層した。D-D' 断面は単層の埋土であった。A-A' 断面の2層、4層、5層、6層はB-B' 断面とC-C' 断面の1層、2層、3層、4層にそれぞれ対応し、D-D' 断面の埋土はA-A' 断面の2層に対応する。埋土は微粒砂土若しくはシルト質土・砂質土が主で円窓やブロック土を含むことから、人為堆積の可能性がある。また A-A' 断面の3層は再掘削された可能性がある。

遺物出土状況 1層から土器8点、須恵器4点、山茶碗8点、陶器2点、釘2点が散在して出土したが、特に東部からの出土が多かった。

出土遺物 須恵器1点を図示した。3411は美濃須衛窯III期後半に比定した高坏である。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したことから、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

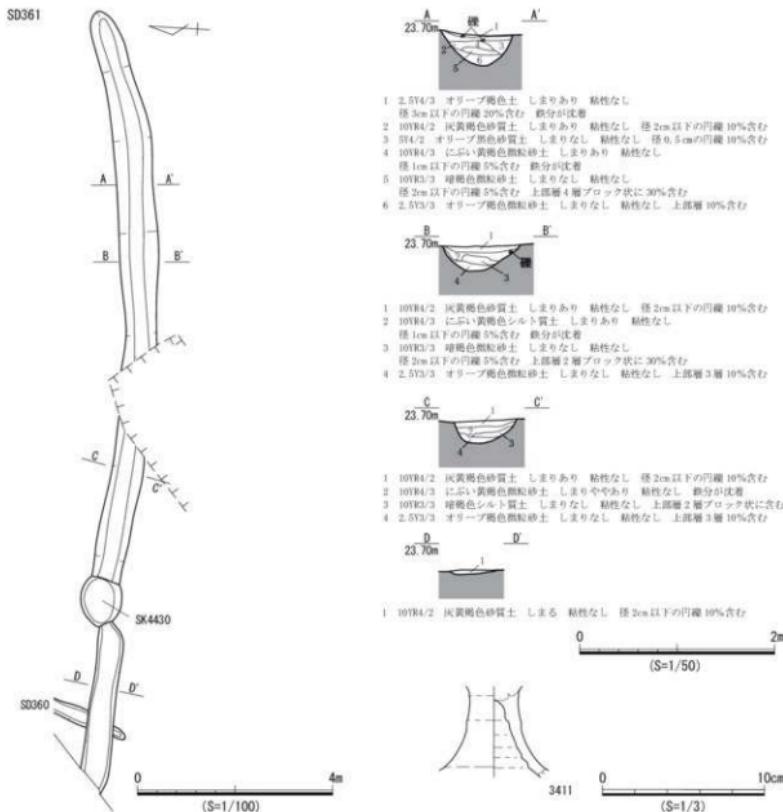


図613 SD361遺構図・出土遺物実測図

SD366・SD367（図614）

検出状況 3地点 MC10～ME10 グリッド、IV b 層上面で検出した。SD366・SD367 とも径 3cm 以下の円礫を含む類似した埋土で、平面形は明瞭であった。SD366 の北西側と SD367 の南西端は発掘区外に延びる。SD367 は北側で SA53-P1 と重複する。本遺構は SA53 より古い。

規模・形状 SD366 が北側にあり、SD367 が南側にあるが、SD367 の東端が北に向かって屈曲することから、両溝で方形の区画を作り出しているように見えるため、区画溝と判断した。区画内外にある小土坑との関連は不明である。SD366 は南東から北西に向けて延びる。壁面の傾斜はやや緩やかで、底面はほぼ平坦である。SD367 は南西から北東に延び、その後北に向かってやや屈曲する。壁面の傾斜はやや緩やかで、底面はほぼ平坦である。深さと底面の標高は両溝ともほぼ同じである。

埴土 いずれも 2 層に分層した。ほぼ水平に堆積する。いざれの層にも円礫やブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 SD366 埋土中から土師器 2 点、山茶碗 2 点、古瀬戸 1 点、SD367 埋土中から土師器 42 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 6 点、陶器 3 点が散在して出土した。

出土遺物 灰釉陶器 1 点を図示した。3412 は丸石 2 号窯式に比定した輪花段皿である。

時期 古瀬戸後期の縁軸小皿が出土したことから、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀後葉と考えられる。

SD375（図615）

検出状況 4 地点 JA11～JA12～JC12 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。北端は南北方向に延びる溝状の搅乱の底面で検出した。北端は発掘区外に延びる。SD376 と重複する。本遺構は SD376 より古い。

規模・形状 やや蛇行して南北に延びる溝状遺構で、JB12 グリッドで南東に折れて「く」字形となる。断面形は半円形である。溝底面の標高は北端で 23.57m、南東端で 23.40m と南東に向かって低くなり、底面は丸みを帯びる。

埴土 A-A' 断面で 3 層に分層した。2 層堆積後の再掘削により、1 層は中央が窪む堆積である。B-B' 断面は単層である。A-A' 断面と B-B' 断面の 1 層は共通する埋土で、オリーブ褐色土ブロックを多く含む。

遺物出土状況 土師器 6 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 6 点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD376 との重複関係から、12 世紀後葉から 13 世紀中葉以前と考えられる。

SD376（図615）

検出状況 4 地点 JA11～JC12 グリッド、IVb 層上面で検出した。北部は南北方向に延びる搅乱の底面で検出した。平面形は明瞭であった。両端は発掘区外に延びる。SD375 と重複する。本遺構は SD375 より新しい。

規模・形状 やや蛇行して南北に延びる溝状遺構で、南端で南西に緩やかに屈曲する。断面形は半円形である。溝底面の標高は北端で 23.50m、南端で 23.55m とやや北に向かって低くなり、底面は丸みを帯びる。

SD366・SD367

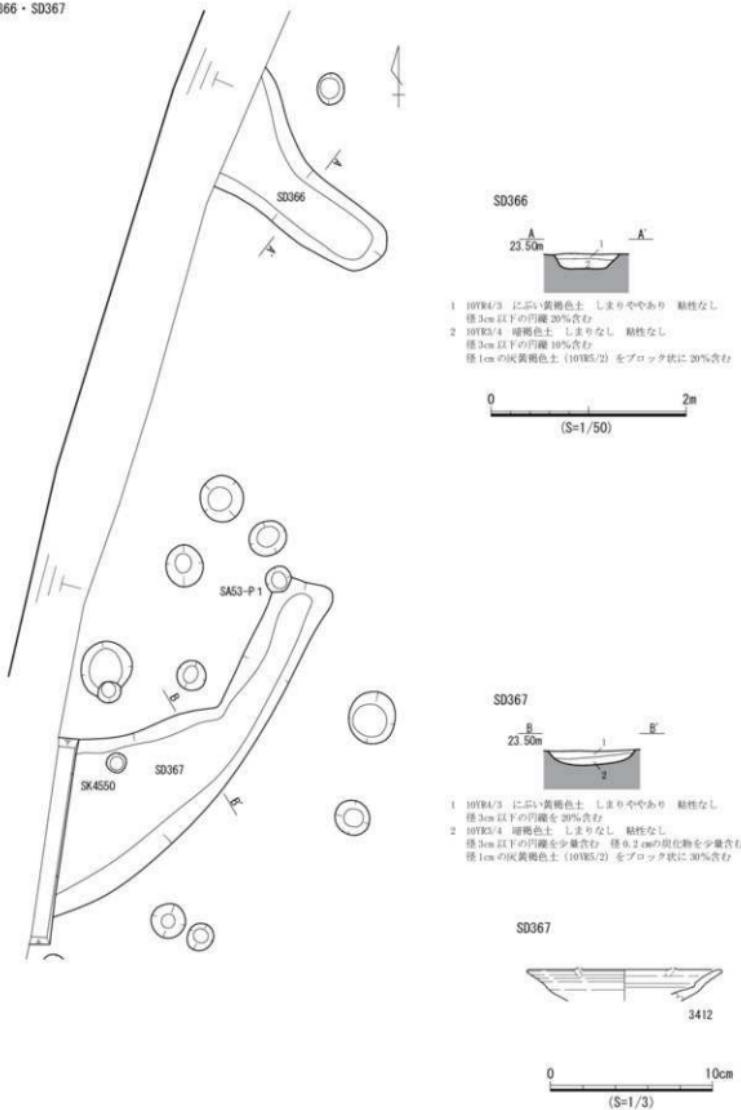


図 614 SD366・SD367 遺構図・出土遺物実測図

埴土 A-A'断面で3層に分層した。西側に偏った堆積である、B-B'断面は単層である。A-A'断面1層にはオリーブ褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器8点、須恵器9点、灰釉陶器4点、山茶碗31点、常滑産陶器1点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 第5型式か第6型式と考えられる尾張型山茶碗の碗底部小片を含むことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀中葉と考えられる。

SD378（図615）

検出状況 4地点JB13～JE13グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SA58-P4・SD389・SD391と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。北端は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は方形である。溝底面の標高は北端で23.40m、南端で23.28mと南に向かって低くなり、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N-0°～E-Wである。本遺構の約1.0m東に位置するSD381とは同一の長軸方位である。FT13グリッドの発掘区で延長部分を検出できず、発掘区外で消失すると考えられる。

埴土 2層に分層した。A-A'断面・B-B'断面共に共通する埋土で、2層にぶい黄褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 山茶碗1点が出土したが、小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD389・SD391との重複関係から、本遺構は13世紀初頭から中葉以前と考えられる。

SD379（図616）

検出状況 4地点JB20～JC20グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK4810と重複する。本遺構はSK4810より新しい。南端は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は逆台形である。溝底面の標高は北端で23.41m、南端で23.41mと水平で、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N-2°～Wである。本遺構の東側約3mの位置にあるSD380とは、北端で途切れる状況や断面形状、埋土が共通することから同時に機能した遺構の可能性がある。また、本遺構の南西側に位置し、東西に延びるSD387とは発掘区外で重複或いはL字に折れると考えられる。本遺構とSD380は長軸方位が類似することから、同時期の溝となる可能性がある。

埴土 単層である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構及び重複する遺構から遺物が出土しなかったため、本遺構の帰属時期を判断する根拠に欠ける。SD387が12世紀後葉から13世紀初頭以降であることから、本遺構も中世の可能性がある。

SD380（図616）

検出状況 4地点JB20～JC20グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK4796と重複する。本遺構はSK4796より新しい。南端は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は方形である。溝底面の標高は北端で23.39m、南端で23.33mとやや南が低くなり、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N-1°～Wである。

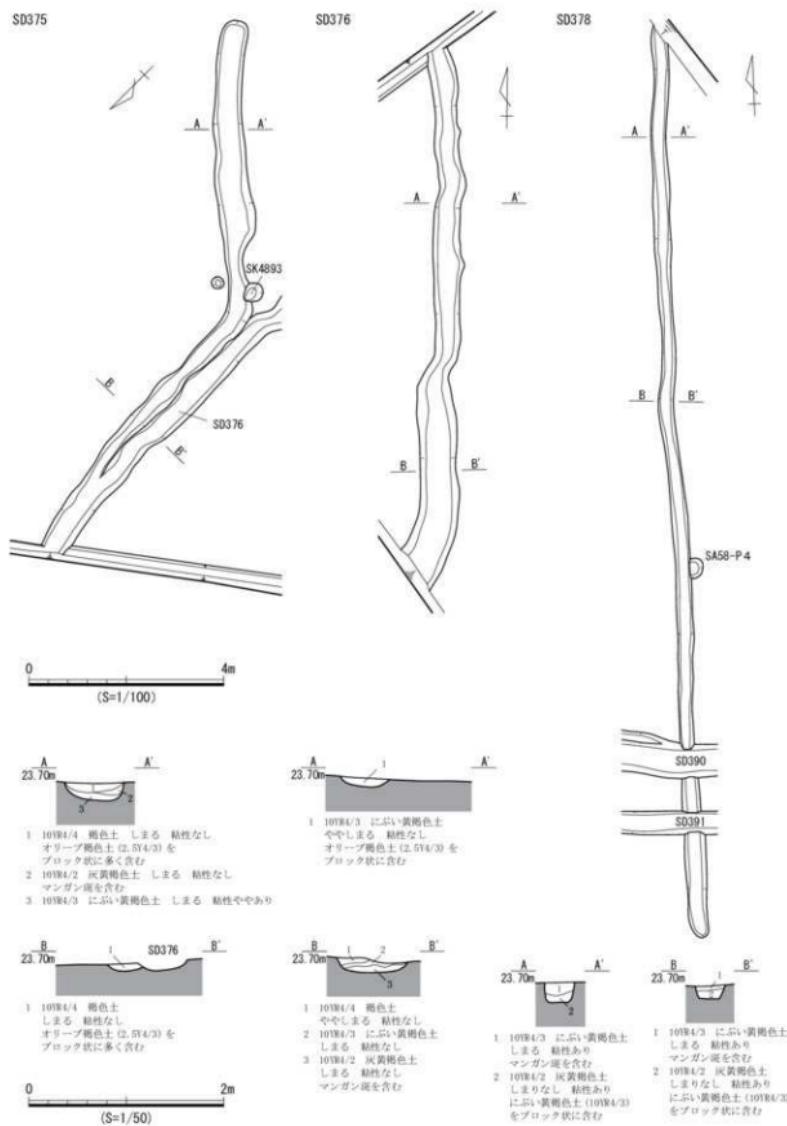


図 615 SD375・SD376・SD378 遺構図

塙土 単層である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構及び重複する遺構から遺物が出土しなかったため、直接本遺構の帰属時期を判断する根拠に欠ける。SD379と同様に本遺構も中世の可能性がある。

SD387(図616)

検出状況 4地点 JC18～JD19グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK4818と重複する。本遺構はSK4818より新しい。溝の両端は発掘区外に延びる。

規模・形状 やや蛇行するが東西に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は東端で23.41m、西端で23.42mと水平で、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N-85°-Eである。本遺構の北側にSA55が並行して位置することから、区画目的で設置された溝と考えられる。

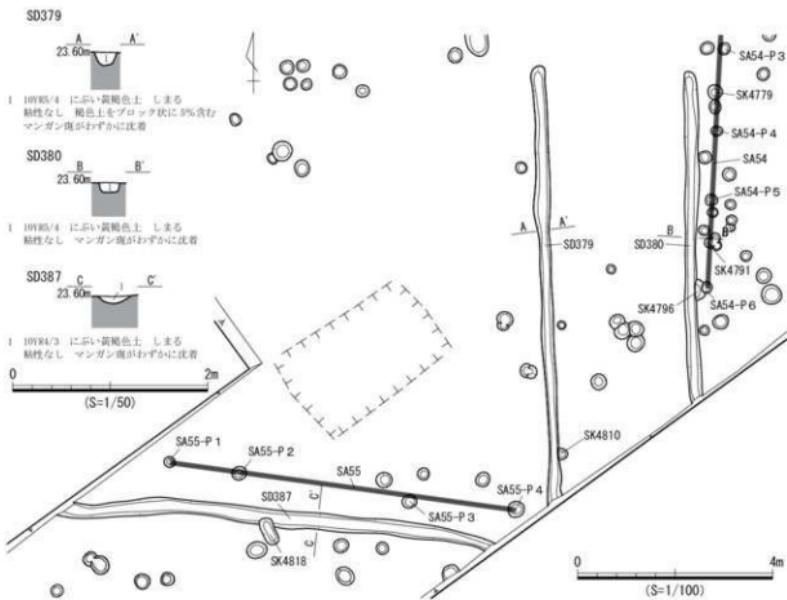
塙土 単層である。

遺物出土状況 土師器1点、山茶碗1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 第5型式の尾張型山茶碗の底部小片が出土したSK4818より新しいことから、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭以降と考えられる。

SD379・SD380・SD387



SD389（図617）

検出状況 4地点 JE12～JE14 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD378・SD390・SD392 と重複する。本遺構は SD378・SD390・SD392 より新しい。西端は発掘区外に延びる。

規模・形状 やや蛇行して東西に延びる溝状遺構で、断面形は一部で溝の北にテラス状の段が認められる他は半円形である。溝底面の標高は西端で 23.32m、東端で 23.34m と水平で、底面は平坦である。本遺構の南側に同じく東西に延びる SD391 が位置し、溝間距離は約 1.3m で並行する。SD389 の収束する東端で重複して、やや南東方向に長軸方位を変えて SD390 が位置する。

埋土 2層に分層した。中央部が窪む堆積である。

遺物出土状況 土師器 6点、須恵器 1点、山茶碗 10点、常滑産陶器 1点、古瀬戸 1点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土した SD392 より新しいことから、本遺構は 13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

SD390（図617）

検出状況 4地点 JE14～JE17 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD389・SK4838・SK4850・SK4852・SK4853・SK4969・SK4970 と重複する、本遺構は SD389・SK4852・SK4853・SK4969・SK4970 より古く、SK4838・SK4850 より新しい。溝の西端は SD389 と重複して途切れ、東端は発掘区外に延びる。

規模・形状 やや蛇行して東西に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は SD389 と接する西端で 23.33m、発掘区と接する東端で 23.19m と東に向かって低くなり、底面は平坦である。本遺構の南側に東西に延びる SD391 が位置するが、東端で溝間距離約 3.1m に対して西端で約 1.3m と西に至るほど溝間距離は狭くなる。

埋土 2層に分層した。中央部が若干窪む堆積である。

遺物出土状況 土師器 6点、須恵器 3点、山茶碗 22点、青磁 1点、常滑産陶器 2点が散在して出土した。すべて 1層若しくは a 層から出土した。

出土遺物 山茶碗 3点を図示した。3413・3414 は第5型式の尾張型山茶碗の小皿である。3415 は同型式の碗である。

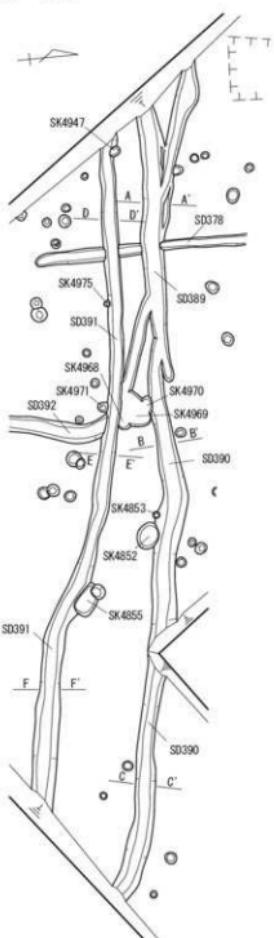
時期 図示した 3413～3415 は 12世紀後葉から 13世紀初頭であるが、溝底面からの出土では無いことや、同じく東西に延びる SD391 が第6型式の尾張型山茶碗を含む SD392 より新しいことから、本遺構も 13世紀初頭から中葉以降の可能性がある。

SD391（図617）

検出状況 4地点 JE13～JE15・JF15～JF17 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD378・SD392・SK4855・SK4947・SK4968・SK4971・SK4975・SK4969 と重複する。本遺構は、SK4855・SK4947・SK4975 より古く、SD378・SD392・SK4968・SK4969・SK4971 より新しい。溝の両端は発掘区外に延びる。

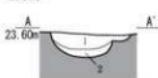
規模・形状 やや蛇行して東西に延びる溝状遺構で、断面形は方形である。SD389 と並行するが、SD389 の東端付近でやや南に振る。溝底面の標高は西端で 23.30m、東端で 22.99m と東に向かって低くなり、

SD389～SD391



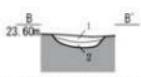
0
(S=1/150)

SD389



- 1 10YR 4/4 黄褐色土 しまる 粘性なし
2 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性あり

SD390



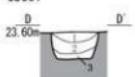
- 1 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし
2 10YR 4/2 反黄褐色土 しまる 粘性あり

23.60m



- 1 10YR 4/2 反黄褐色土 しまる 粘性なし
褐色土をブロック状に5%含む
マガニン斑が沈着
2 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし

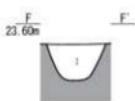
SD391



- 1 10YR 4/6 黄褐色土 しまる 粘性なし
2 10YR 4/4 黄褐色土 しまる 粘性ややあり
3 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性あり



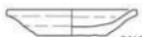
- 1 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし
2 10YR 4/4 黄褐色土 しまる 粘性ややあり



- 1 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性なし
褐色土をブロック状に10%含む

0
(S=1/50)

SD390



SD391



0
(S=1/3)

図 617 SD389～SD391 遺構・出土遺物実測図

底面は平坦である。

埴土 A-A' 断面は3層、B-B' 断面は2層に分層し、いずれも中央部がやや窪む。C-C' 断面は単層で褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器5点、須恵器6点、灰釉陶器1点、山茶碗15点が散在して出土した。大半はJE15グリッドより東部から出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。3416は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。

時期 第6型式の尾張型山茶碗が出土したSD392より新しいことから、本遺構はSD392の所属時期である13世紀初頭から中葉以降と考えられる。

SD392(図618~620)

検出状況 4地点 JD12・JD13・JE13・JE14～JH14・JG13グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD389・SD391・SD393・SK4946・SK4969・SK4999・SK5016と重複する。本遺構はSD389・SD391より古く、SD393・SK4946・SK4969・SK4999・SK5016より新しい。西端は発掘区外に延びる。

規模・形状 L字に折れる溝状遺構で、直線的に延びる北面と東面を検出した。北東隅は直角では無くやや丸みを持って折れ、東面南端は南西に屈曲して直線的に延びて消失する。断面形は半円形から逆台形である。溝底面の標高は北西端で23.38m、北東隅で23.26m、南端で23.27mと北面から東面向かって低くなる。それぞれ直線的に延びる部分の長軸方位は、北面はN-74°-W、東面はN-14°-Eで、ほぼ垂直である。溝の南西端から2.4m南西に東西に延びるSD395が位置し、本遺構の北面と概ね並行することから、同時期に機能した遺構と判断した。SD395と本遺構北面の溝間距離は約15.5mで、発掘区外のため未検出の西面を正方形の区画を想定した場合、面積約240m²となる。重複するSD393や並行するSD394も本遺構と同様に南側で南西に屈曲し、またSD395とは重複せず空閑地を挟むことから、意図的に構を途切れさせた可能性がある。

埴土 すべての断面で2層に分層した。いずれも中央部がやや窪む堆積である。A-A' 断面の2層とB-B' 断面・C-C' 断面の1層、B-B' 断面・C-C' 断面・D-D' 断面の2層が共通する。A-A' 断面の色調はその他の2層と共通するが、土質とマンガン斑の沈着状況が異なる。

遺物出土状況 土師器7点、須恵器3点、灰釉陶器2点、山茶碗18点が出土した。北面から出土した遺物は3点で、その他は北東隅～東面から出土した。3417がc層、その他はa～b層から出土した。3417はSD389のa層から出土した山茶碗の小片と接合した。

出土遺物 山茶碗2点を図示した。3417は第6型式の尾張型山茶碗の小皿、3418は同型式の碗である。

時期 図示した3417・3418から本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD393(図618~620)

検出状況 4地点 JG14・JH13・JH14グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD392・SK4999と重複する。本遺構はSD392・SK4999より古い。

規模・形状 東部にやや膨らみ緩やかな弧状に南北に延びる溝状遺構で、南端で南西に屈曲して、北端はSD392と重複して消失する。断面形は逆台形である。溝底面の標高は北端で23.31m、南端で23.33mと水平で、底面は平坦である。

埴土 2層に分層した。水平堆積である。重複するSD392より浅い。

遺物出土状況 土師器16点、山茶碗25点が散在して出土した。3419～3421は1層から、その他の遺物は2層から出土した。

出土遺物 山茶碗3点を図示した。3419は第5型式の尾張型山茶碗の小皿、3420は第6型式の尾張型山茶碗の碗、3421は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 SD392との重複関係と図示した3420から本遺構は13世紀初頭から中葉である。

SD394（図618～620）

検出状況 4地点 JF14・JG14 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK4998・SK5004・SK5014・SK5015と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、SD392・SD393と同様に南端で南西に屈曲して消失する。断面形は逆台形である。溝底面の標高は北端で23.27m、南端で23.25mと水平で、底面は平坦である。直線的に延びる部分の長軸方位は、N-10°-Eで、SD392の東面と並行する。

埋土 2層に分層した。中央がやや壅む堆積である。

遺物出土状況 土師器3点、灰釉陶器1点、山茶碗7点、常滑産陶器1点、石製品1点が出土した。B-B'断面より南側から出土した。土器は全て小片であった。

出土遺物 叩石1点を図示した。3422は叩石である。表裏面と頂部に1から2回、一方の側面に連続する敲打痕が認められる。土器は小片で図示できる遺物は無かった。

時期 大畠大洞4号窯型式以降の可能性がある東濃型山茶碗の碗口縁部小片が出土したことから、本遺構は13世紀末以降と考えられる。

SD395（図618～620）

検出状況 4地点 JH12～JH13 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。西端は発掘区外に延びる。SK5064・SK6065と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 SD392と一連の遺構と判断した直線的に東西に延びる溝状遺構である。断面形は逆台形である。溝底面の標高は西端で23.26m、東端で23.20mとほぼ水平で、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N-76°-Wである。

埋土 2層に分層した。北部がやや壅む堆積である。

遺物出土状況 土師器7点、灰釉陶器3点、山茶碗31点、石製品2点、鉄滓1点の他、径0.15m～0.4mの円碟や亜円碟が1層と2層の層界付近から出土した。これらの遺物や自然石は溝底面から0.05m～0.1m浮いた状況のため、2層堆積後に投棄された可能性がある。

出土遺物 山茶碗5点、石製品2点を図示した。3423～3427は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。3428は砥石である。連続使用による研磨面は1面のみで擦痕が認められる。研磨面と側面の1面には鋭い傷状の擦痕が残る。3429は叩石で、長軸の一端に連続する敲打痕が認められる。

時期 図示した3423～3427から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD397（図621）

検出状況 4地点 JC8～JD9 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SP597・SK5020・SK5021・SK5022と重複する。本遺構はSK5021より古く、SP597・SK5020・SK5022より新しい。遺構の両端共発掘区外に延びる。

規模・形状 東西に延びる溝状遺構である。溝幅は一定せず、断面形は不定形で南北方向に複数の段

SD392 ~ SD395

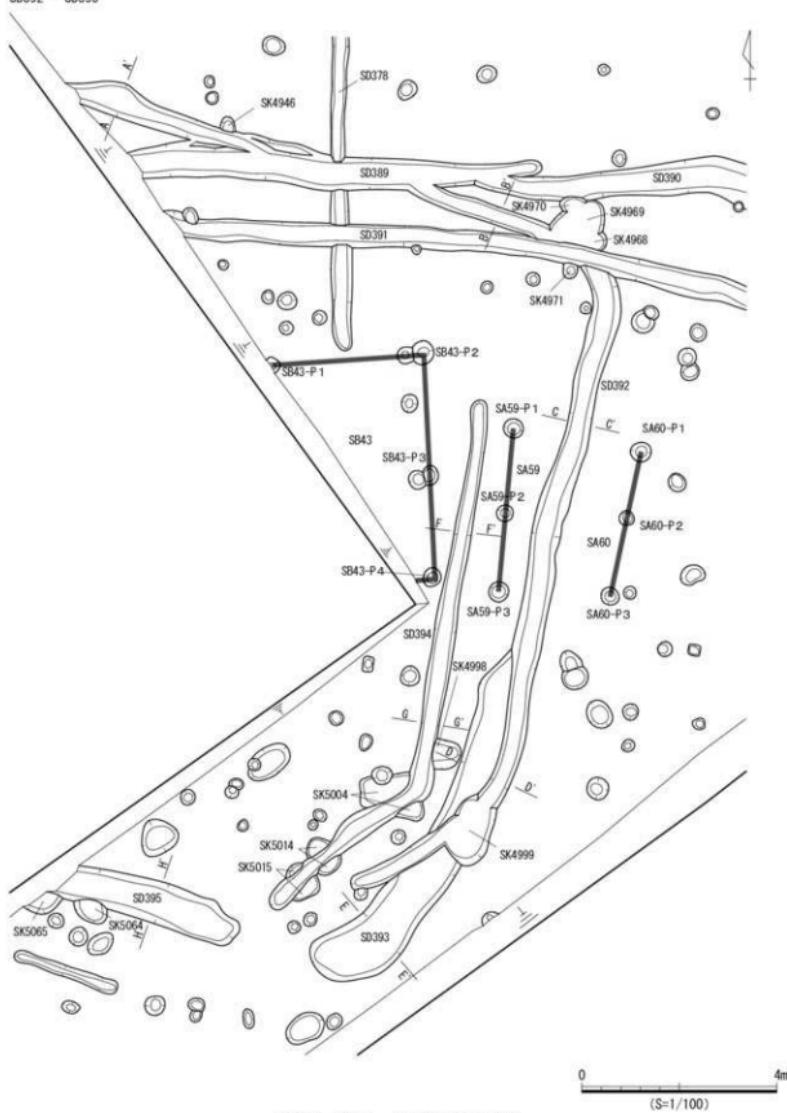
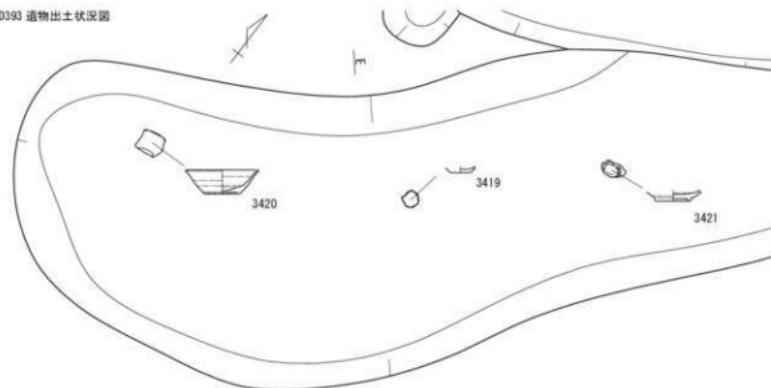
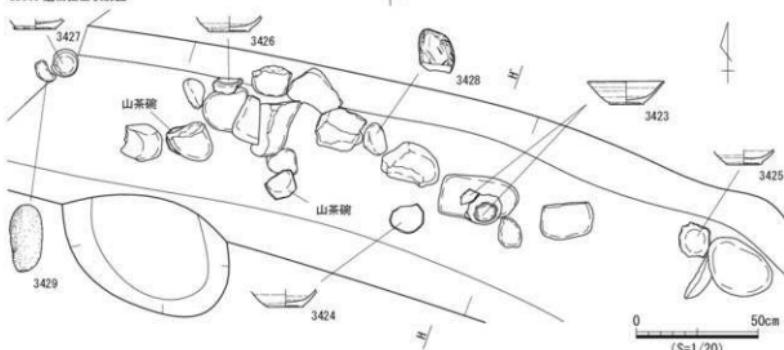


図 618 SD392 ~ SD395 造構図 (1)

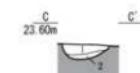
SD393 遺物出土状況図



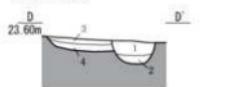
SD395 遺物出土状況図



SD392



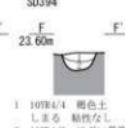
SD392・SD393



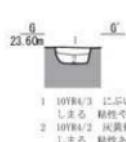
SD393



SD394



SD395



SD395

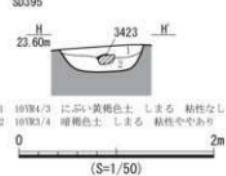
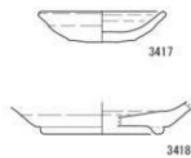
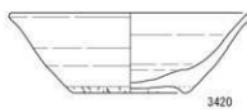
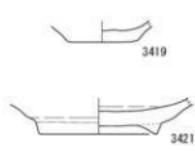


図 619 SD392～SD395 遺構図（2）

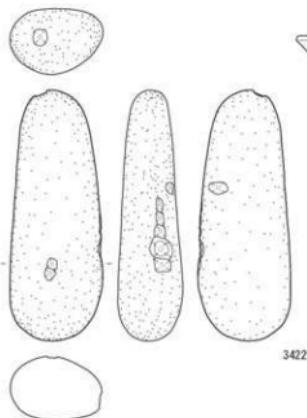
SD392



SD393



SD394



SD395

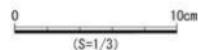
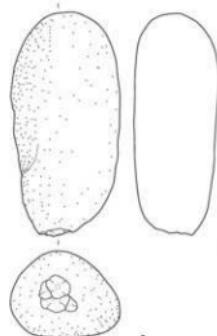
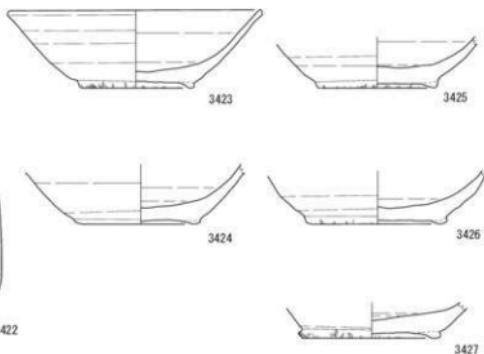


図 620 SD392 ~ SD395 出土遺物実測図

が認められる。溝底面の標高は、西端で 23.78m、東端で 23.72m とやや東に向かって低くなり、底面は凹凸があり東西に細い 2 本の溝が並ぶ。埋土が共通することから同一の遺構と判断したが、複数の溝が概ね同じ位置を踏襲して幾度も掘削された可能性がある。溝の長軸方位は N-88° - Wである。

埋土 2 層に分層した。A-A' 断面では 2 層埋土の重複は認められず、1 層はほぼ水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器 8 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 68 点、中近世陶磁器 15 点、砥石 1 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗、古瀬戸、常滑産陶器、砥石をそれぞれ 1 点図示した。図示した遺物はすべて 2 層からの出土である。3430 は第 4 型式の尾張型山茶碗の碗である。3431 は第一段階 2 ~ 3 型式の常滑産陶器の羽釜、3432 は前二期の古瀬戸四耳壺である。3433 は表裏面を利用した中砥で、側面は欠損する。

時期 図示した 3432 から、本遺構は 13 世紀前葉から中葉である。

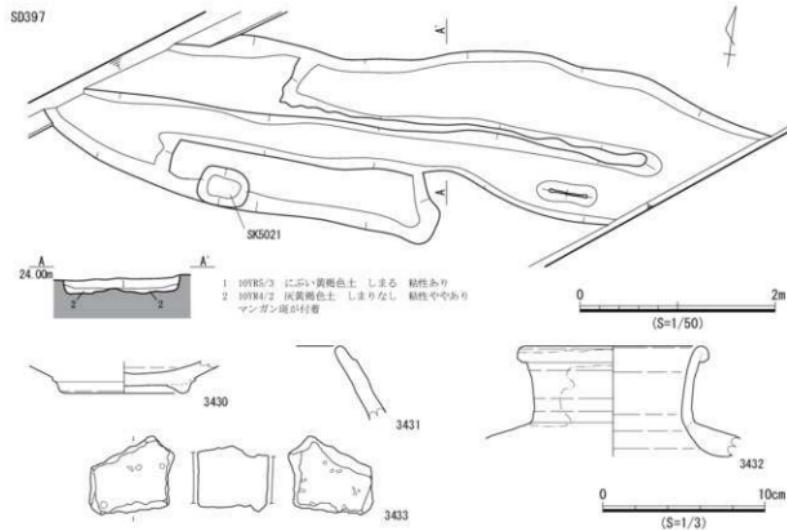


図 621 SD397 遺構図・出土遺物実測図

SD402 (図 622)

検出状況 4 地点 JF 7 ~ JF 9 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD405・SD409・SK5035・SK5044・SK5045 などと重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。東端は発掘区外に延びる。

規模・形状 東西に延びる溝状遺構で、西から東に向かって溝幅は広がる。断面形は逆台形である。

SD409 の西には続かないことや、SD409 の H-H' 断面の 2 層と埋土が共通することから、SD409H-H' 断面の 3 層埋没後に掘削され同時に機能した時期があり、SD409 より先に埋没したと考えられる。溝底面の標高は、西端で 23.67m、東端で 23.63m と水平で、底面は平坦である。

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土中から土師器21点、山茶碗54点、中近世陶磁器4点が散在して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗が出土したSD409との重複関係から、本遺構は14世紀末から15世紀前葉以前と考えられる。

SD405（図622）

検出状況 4地点JF8～JH8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD402・SD406・SP619などと重複する。本遺構はSP619より古く、SD402・SD406より新しい。

規模・形状 南北に延びる溝状遺構で、断面形は方形や逆台形である。溝底面の標高は北端で23.37m、南端で23.58mと北に向かって低くなり、底面は平坦である。溝の長軸方向は、N-O°～EWである。

埴土 B-B'断面、C-C'断面とも2層に分層した。中央がやや壅む堆積で、B-B'断面の1層にぶい黄褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 埋土中から土師器14点、須恵器2点、山茶碗14点、鉄滓1点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD402との重複関係から、本遺構は14世紀末から15世紀前葉以降の可能性がある。

SD406（図622）

検出状況 4地点JG8～JG9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD405・SK5140・SK5141などと重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 西西南西から東北東に延びる溝状遺構で、東北東側で東に屈曲する。断面形は半円形である。溝底面の標高は、西南西端で23.52m、東端で23.53mと水平で、底面は北がやや低くなる。本遺構の東側に位置するSD407とは、本遺構東端とSD407西端とは約0.2mの空閑地を挟んで続くことや、本遺構のD-D'断面の1層とSD407のE-E'断面の2層が共通することから、同時期に機能したと考えられる。

埴土 2層に分層した。やや北部が壅む堆積である。

遺物出土状況 土師器7点、山茶碗7点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD405との重複関係やSD407との位置関係から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭以前の可能性がある。

SD407（図622）

検出状況 4地点JG9～JH11グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD414・SK5109・SK5112・SK5131などと重複する。本遺構はSK5109・SK5112・SK5131より古く、SD414・SK5115より新しい。東端は発掘区外へ延びる。

規模・形状 SD406東端からわずかに間隔を空けるが、湾曲してその後直線的に南東に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は北西端で23.48m、東端で23.27mと東に向かって低くなる。溝底面は北西部が平坦（E-E'断面）、南東部が丸みを帯びる（F-F'断面）。JH11グリッド

ドSD418の東側では本遺構の延長部分は確認できず、発掘区外で消失するか北東に折れると考えられる。SK5109の東でSD414と接続する。本遺構のE-E'断面とSD414(図625 A-A'断面)断面形状は異なるが埋土は1層・2層共に共通し、接続部分の標高も近似することから、同時期に機能したと考えられる。また、E-E'断面とF-F'断面は断面形状や埋土も異なり、SK5109以東は南にやや膨らんで屈曲することから、別の遺構であった可能性がある。

埋土 E-E'断面は2層、F-F'断面は4層に分層した。E-E'断面の1層とF-F'断面の1層・2層は再掘削に伴う堆積と考えられ、F-F'断面の4層は暗褐色土と黒褐色土のブロックを含む。E-E'断面の1層・2層と、接続するSD414A-A'断面の1層・2層の埋土の土色は共通する。

遺物出土状況 埋土中から土師器23点、灰釉陶器1点、山茶碗15点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SK5112・SK5115との重複関係やSD414との位置関係から、本遺構は14世紀後葉から15世紀初頭以前と考えられる。

SD408(図622・623)

検出状況 4地点 JG7～JH7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD409・SK5549・SK5550と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 南北に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は北端で23.72m、南端で23.68mと水平で、底面は丸みを帯びる。溝の長軸方位は、N-7°-Eである。本遺構の北東に重複するSD409はI-I'断面の1層と埋土がマンガン斑の沈着状況を除いて共通する。

埋土 単層である。

遺物出土状況 G-G'断面より南側の埋土中から土師器9点、山茶碗10点、常滑産陶器1点、古瀬戸1点が集中して出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 古瀬戸1点を図示した。3434は後Ⅰ期の古瀬戸折縁深皿である。

時期 図示した3434から、本遺構は14世紀後葉である。

SD409(図622・623)

検出状況 4地点 JD7～JH7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD402・SD408と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。北端は発掘区外に延びる。

規模・形状 やや蛇行して南北に延びる溝状遺構で、断面形はSD402より北では西部の底面が一段深くなるのに対し、SD402と接続する部分から南側は中央部がやや深くなり、底面は逆三角形となる。

溝底面の標高は北端で23.64m、SD402と接続する部分で23.62m、南端の最も深い部分で23.49mと南に向かって低くなる。重複するSD402とは、埋土の共通性から本遺構の3層埋没後にSD402が掘削され、その後SD402が先に埋没したと考えられる。

埋土 H-H'断面は4層、I-I'断面は2層に分層した。H-H'断面は、西側が一段深くなつて3層・4層が堆積する。H-H'断面の1層とI-I'断面の1層、H-H'断面の3層とI-I'断面の2層の埋土は共通する。

遺物出土状況 土師器196点、須恵器5点、灰釉陶器9点、山茶碗346点、中近世陶磁器65点、輪

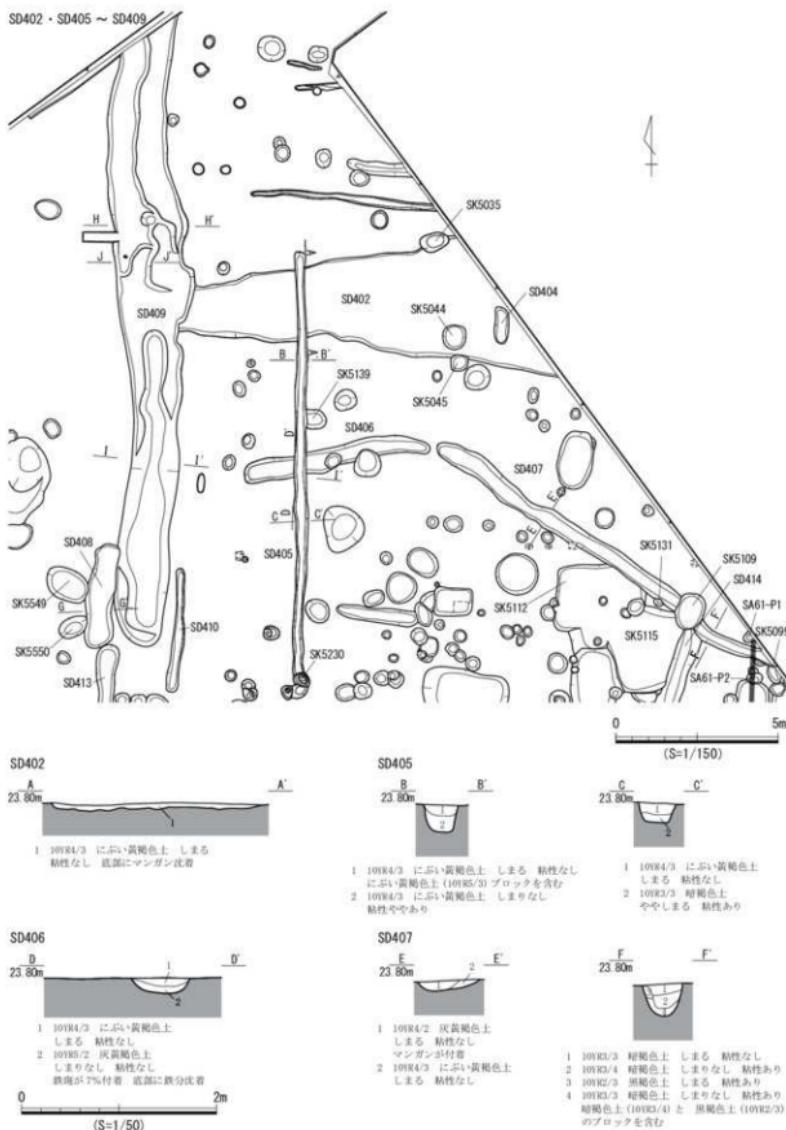


図 622 SD402 - SD405 ~ SD409 遺構図 (1)

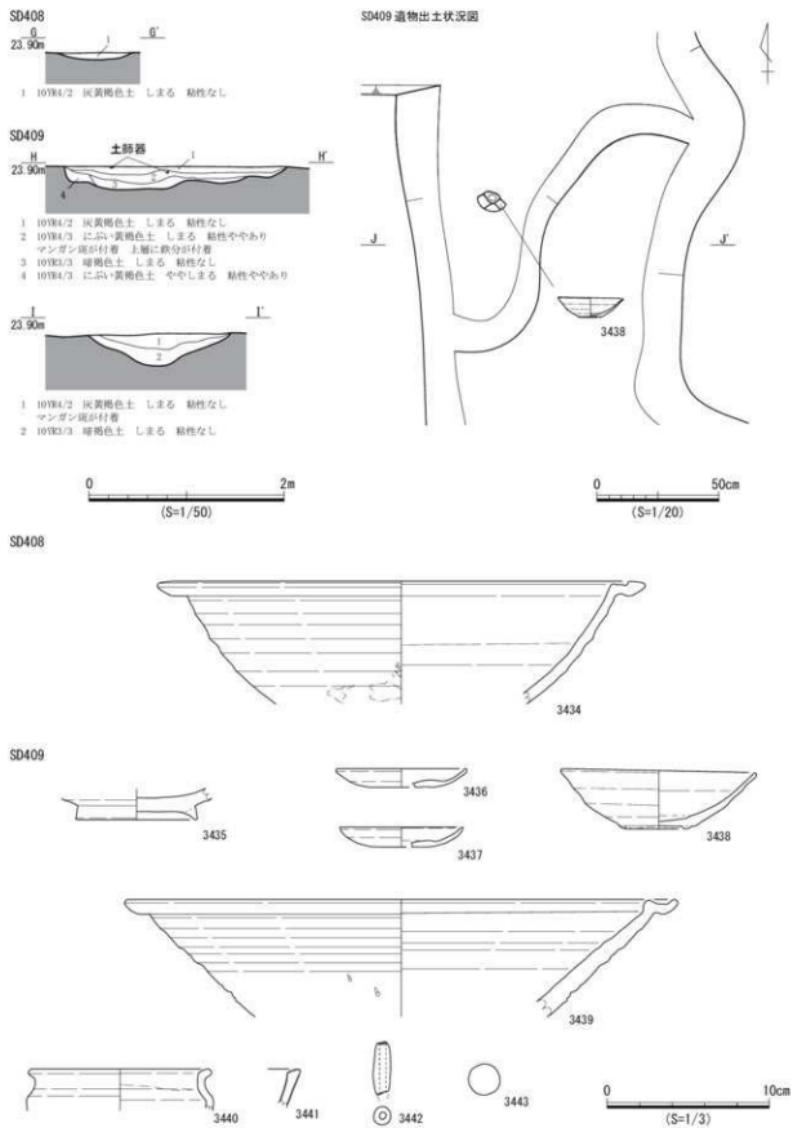


図 623 SD408・SD409 遺構図(2)・出土遺物実測図

羽口 1 点、土錐 1 点、土玉 1 点、鉄釘 3 点、鉄滓 1 点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち、常滑産陶器 41 点、古瀬戸 16 点であった。また、H-H' 断面の南側からは、山茶碗（3438）が正位で出土した。

出土遺物 山茶碗 4 点、灰釉陶器 1 点、古瀬戸 1 点、青磁 1 点を図示した。3435 は西坂 1 号窯式に比定した灰釉陶器の碗である。3436・3437 は大畑大洞 4 号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の小皿、3438 は同型式の碗、3439 は第 10 型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。3440 は後 II 期の古瀬戸持腰形香炉で、胴部内面は露胎する。3441 は青磁の盤・鉢かの口縁部と考えられる。3442 は長胴形の土錐、3443 は重さ 7.11 g の土玉である。

時期 図示した 3439・3440 や SD408 との重複関係から、本遺構は 14 世紀末から 15 世紀前葉である。

SD414（図 624・625）

検出状況 4 地点 JH10～JJ11 グリッド、IVb 層上面で検出した。また、SD419 との重複部分では、SD419 の底面で検出した。平面形は明瞭であった。SA62-P3・SD407・SD419・SD420・SK5109・SK5115・SK5119・SK5199・SK5204 などと重複する。本遺構は SD407・SD419・SD420・SK5109・SK5115・SK5119・SK5199・より古く、SK5204 より新しい。北部は埋土と接続部分の標高が類似する SD407 と同時期に機能したと考えられ、南端は SD420 と重複して消失する。

規模・形状 北から南東へ湾曲して延びる溝状遺構である。JJ10 グリッドで 2 条に分かれ、東側の 1 条は南へ L 字に折れ再び合流し 1 条となる。平面上で重複関係が認められず、埋土も共通することから同一遺構と判断した。断面形は半円形である。西側の一部でテラス状となる。溝底面の標高は北端で 23.18m、南端で 23.22m と水平で、2 条に分かれて L 字に折れる部分は北端で 23.28m、中央付近で 23.12m、南端で 23.23m と中央に向かって低くなる。溝底面は平坦である。

埋土 2 層に分層した。A-A' 断面と B-B' 断面の埋土は共通し、A-A' 断面は中央がやや壅み、B-B' 断面は僅かに西側に偏る堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器 142 点、須恵器 2 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 231 点、中近世陶磁器 36 点、砥石 1 点、粘土塊 1 点、鉄製品 3 点、鉄滓 5 点が散在して出土した。なお、中近世陶磁器のうち 32 点は常滑産陶器であった。また、鉄鍋のうち 1 点（3454）は蛍光 X 線分析を実施した（第 5 章第 5 節）。a 層から出土した遺物が大半を占める。

出土遺物 土師器 4 点、須恵器 1 点、山茶碗 2 点、常滑産陶器 1 点、砥石 1 点、鉄製品 1 点を図示した。図示した遺物のうち、3451 のみが b 層から出土したほかは a 層から出土した。3444～3447 は土師器である。3444・3445 は M4 類の皿である。3446 は受け口状の小型鉢、3447 は C 類の伊勢型鍋である。3448 は 8 世紀前半と考えられる須恵器壺である。3449 は第 5 型式の尾張型山茶碗の小皿、3450 は同型式の碗である。3451 は大洞東 1 号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。3452 は第 3 型式の中世猿投窯産短頸壺、3453 は 1 側面のみが残存する仕上げ砥である。3454 は鉄鍋の胴部片と考えられる。厚さは一定で、下部に向かって湾曲する。分析の結果、腐食が進んでおり金属組織は確認できなかつた（第 5 章第 5 節）。

時期 図示した 3451 と SK5115 との重複関係から、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀初頭以前と考えられる。

SD418（図 624・625）

検出状況 4地点 JH11～JJ11 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD417・SK5195・SK5196 と重複する。本遺構は SK5195・SK5196 より古く、SD417 より新しい。溝の両端は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は逆台形である。溝底面の標高は北端で 23.22m、南端で 23.34m と水平で、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N - 3° - W である。本遺構の西側に SA61・SA62 や SD419 が並行して位置することから、区画を目的として設置された溝と考えられる。また、坪境溝の可能性がある（第2章第1節図4 参照）。

埴土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点、山茶碗3点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 第5型式の尾張型山茶碗が出土した SK5195 との重複関係から、本遺構は 12世紀後葉から 13世紀初頭以前と考えられる。

SD419（図 624・625）

検出状況 4地点 JH11～JJ11 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SA61-P3～P5・SD414・SD420・SK5097・SK5098・SK5192・SK5299 と重複する。本遺構は SA61・SK5097・SK5098 より古く、SD414・SD420・SK5192・SK5299 より新しい。溝の両端は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、遺構北部で SK5102 を避けるように溝幅が狭くなる。断面形は逆台形である。溝底面の標高は北端で 23.20m、南端で 23.24m と水平で、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N - 3° - E である。本遺構の西側に SA62 が並行して位置することから、区画目的で設置された溝と考えられる。また、SD418 と同様に坪境溝の可能性がある（第2章第1節図4 参照）が所属する年代は異なる。

埴土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器45点、灰釉陶器3点、山茶碗39点、常滑産陶器12点、鉄滓1点が散在して出土した。D-D' 断面の北側から12点、南側から88点と南側から多く出土し、北側からは鉄滓1点が b 層から出土した他は a 層及び 1 層から、南側からはすべて a 層から出土した。

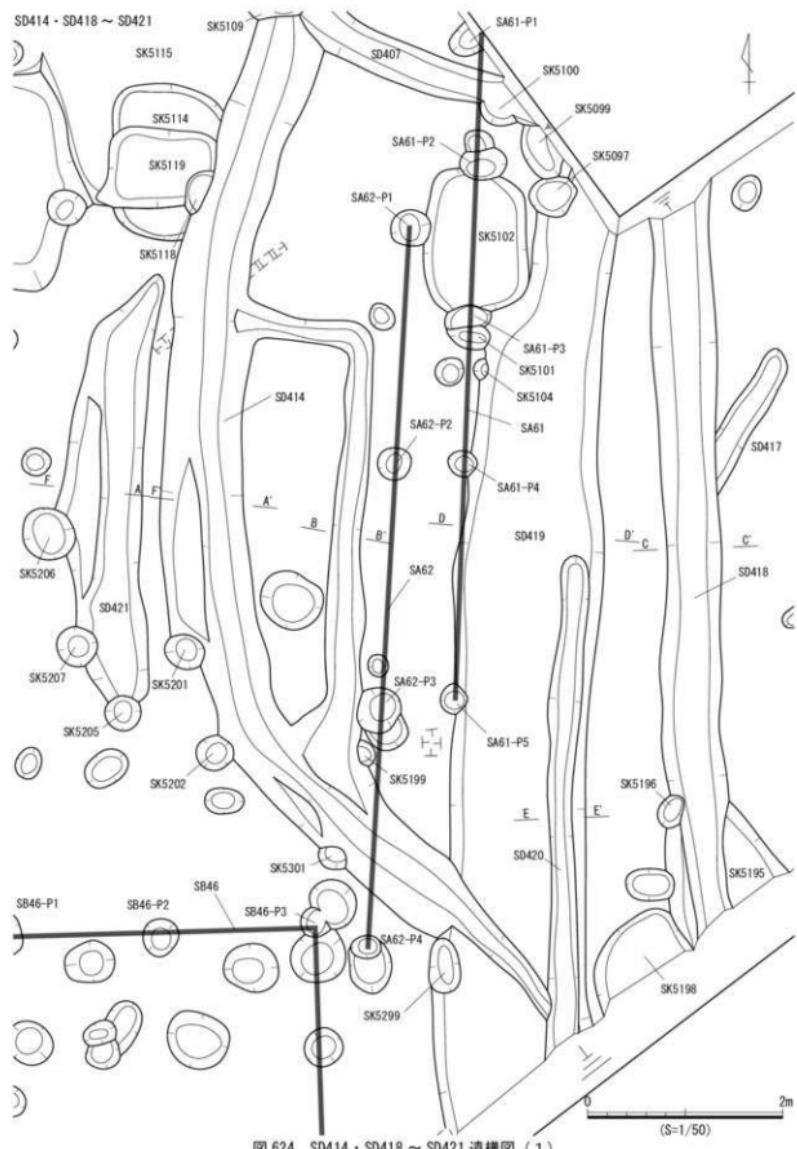
出土遺物 土師器、灰釉陶器、山茶碗それぞれ1点を図示した。3455はC1類と考えられる土師器皿、3456は丸石2号窯式に比定した灰釉陶器段皿、3457は大洞東1号窯式～脇之島3号窯式と考えられる東濃型山茶碗の小皿で、薄手の底部片である。

時期 図示した 3457 や SD414 との重複関係から、本遺構は 14世紀後葉から 15世紀初頭以降と考えられる。

SD420（図 624・625）

検出状況 4地点 JI11～JJ11 グリッド、SD419 底面で検出した。平面形は明瞭で、南端付近で SD414 と重複する。本遺構は SD419 より古く、SD414 より新しい。南端は発掘区外へ延びる。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は北端で 23.22m、南端で 23.18m と水平で、底面は平坦である。溝の長軸方位は、N - 2° - E である。SD418・SD419 と同様に区画目的で設置された溝と考えられる。



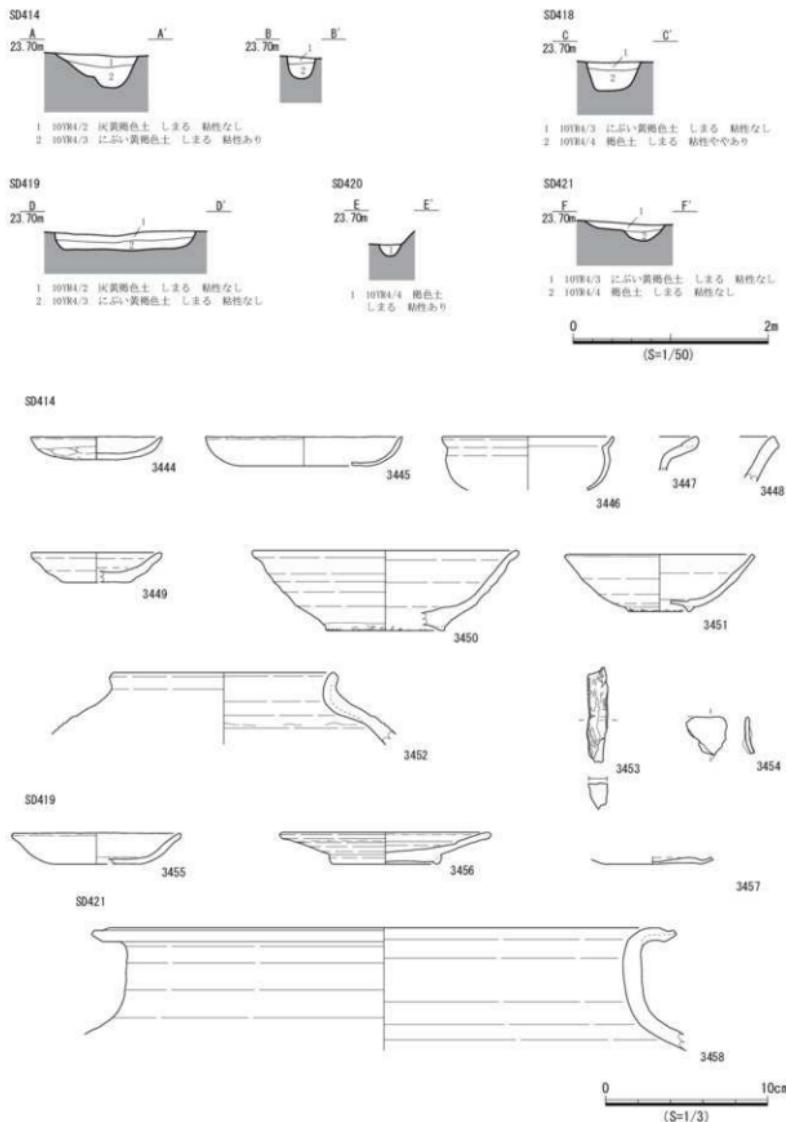


図 625 SD414・SD418～SD421 遺構図（2）・出土遺物実測図

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土中から土師器 10 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 6 点、中近世陶磁器 2 点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できた遺物は無かった。

時期 SD414 との重複関係から、本遺構は 14 世紀後葉から 15 世紀初頭以降と考えられる。

SD421（図 624・625）

検出状況 4 地点 JI10 グリッド、IVb 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5205～SK5207 と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 SD414 と同様にやや湾曲して北端が東へ曲がる溝状遺構で、断面形は西側にテラス状の平坦面があり、東部が一段深くなる。底面は平坦である。SD414 とは約 0.2m の間隔で並行することから、同時期に機能した可能性がある。

埋土 2 層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器 12 点、須恵器 2 点、山茶碗 23 点、常滑産陶器 6 点が散在して出土した。

出土遺物 常滑産陶器 1 点を図示した。3458 は第 1 段階 4 型式の甕口縁部である。頭部は直立し、口縁部は外反する。

時期 図示した 3458 は 12 世紀中葉から後葉であるが、第 5 型式の尾張型山茶碗（3616）が出土した SK5207 との重複関係から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭以前と考えられる。

SD424（図 626・627・629）

検出状況 4 地点 JI 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD426・SK5293・SK5294 と重複する。本遺構は SD426・SK5293・SK5294 より古い。

規模・形状 やや蛇行して東西に延びる溝状遺構で、断面形は逆台形である。溝底面の標高は、両端共に 23.50m と水平で、底面は平坦である。

埋土 単層である。炭粒・焼土粒を多く含む。

遺物出土状況 A-A' 断面の東側から、8 個体の土師器皿と山茶碗の破片 1 個体が底面からまとまって出土した。いずれも底面から浮いた状態出土し、正位と逆位が混在する。3462 のみ完形で、その他は同じ溝から出土した破片と接合したが完形とはならなかった。出土状況から、意図的に配置されたというよりもまとめて廃棄されたと考えられる。この他、埋土中から土師器 11 点、山茶碗 5 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器皿 8 点、山茶碗 1 点を図示した。3459～3466 は M3 類の土師器皿である。3467 は美濃須衛窯Ⅷ期後半の瓶子である。肩部の張りは無く、精製された緻密な胎土である。

時期 図示した 3459～3466 と SD426 との重複関係から、本遺構は SD426 の所属時期である 14 世紀と考えられる。

SD426（図 626・629）

検出状況 4 地点 JI 7 ～ JI 8 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB45-P5・SD424・SK5290 と重複する。本遺構はいずれの遺構より新しい。

規模・形状 西端から溝幅が広がって東西に延びる溝状遺構で、断面形は方形である。溝底面の標高

は西端が 23.42m、東端が 23.39m と水平で、底面は平坦である。

埴土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器 29 点、須恵器 1 点、山茶碗 25 点、中近世陶磁器 2 点、砥石 1 点が出土した。A-A' 断面から東側からの出土が多い。

出土遺物 土師器 1 点、山茶碗 1 点、古瀬戸 1 点、砥石 1 点を図示した。3468 は M 4 類の土師器皿である。3469 は大洞東 1 号窯式～脇之島 3 号窯式に比定した東濃型山茶碗の小皿、3470 は大洞大畑 4 号窯式新段階に比定した東濃型山茶碗の碗である。3471 は後 I 期の古瀬戸平碗である。3472 は短辺側面も砥面として使用した仕上げ砥石である。

時期 図示した 3470・3471 から、本遺構は 14 世紀後葉と考えられる。

SD428 (図 626・627・629)

検出状況 4 地点 JJ8～JJ9 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5351・SK5352・SK5353 などと重複する。本遺構は SK5352・SK5353 より古く、SK5351 より新しい。

規模・形状 東西に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は西端が 23.47 m、東端が 23.41m で東に向かってやや低くなる。溝の長軸方位は、N-85°-W で、底面は平坦である。

埴土 単層である。

遺物出土状況 東端の遺構検出面直下から山茶碗の小皿（3473）が正位で出土した。この他、埋土中から土師器 25 点、山茶碗 21 点、中近世陶磁器 1 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 1 点を図示した。3473 は第 5 型式の尾張型山茶碗の小皿である。

時期 図示した 3473 と第 5 型式の尾張型山茶碗（3599）が出土した SK5352 との重複関係から、本遺構は 12 世紀後葉から 13 世紀初頭の短期間機能したと考えられる。

SD429 (図 626・627・629)

検出状況 4 地点 JJ8～JJ9 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は東側が明瞭で、西側に至るほど不明瞭であった。SI15・SD431・SK5331・SK5361・SK5365・SK5371・SK5376 などと重複する。本遺構は SI15・SK5361・SK5365・SK5371・SK5376 より古く、SD431・SK5331 より新しい。

規模・形状 やや蛇行して東西に延びる溝状遺構で、東部は SI15 底面で検出した。断面形は逆台形である。溝底面の標高は西端で 23.43m、東端で 23.26m と東に向かって低くなり、底面は平坦である。

埴土 2 層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 C-C' 断面を挟んだ両側の南肩から底面にかけて、完形及び完形に近い土師器皿と山茶碗がまとまって出土した。正位から内面を上向きにした斜位での出土が多く、3475・3476 のみ逆位である。この他、埋土中から土師器 139 点、山茶碗 170 点、常滑産陶器 12 点、青磁 2 点、鉄滓 3 点が出土した。

出土遺物 土師器 6 点、山茶碗 11 点を図示した。3474～3479 は土師器である。3474 はロクロ成形の皿、3475～3478 は M 3 類、3479 は M 4 類の皿である。3480～3489 は尾張型山茶碗である。3480～3485 は第 5 型式、3486 は第 6 型式の小皿である。3487・3488 は第 5 型式、3489 は第 6 型式の碗である。3490 は脇之島 3 号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 図示した 3486・3489・3490 は 1 層からの出土で SI15 との重複関係から混入と考えられ、本遺

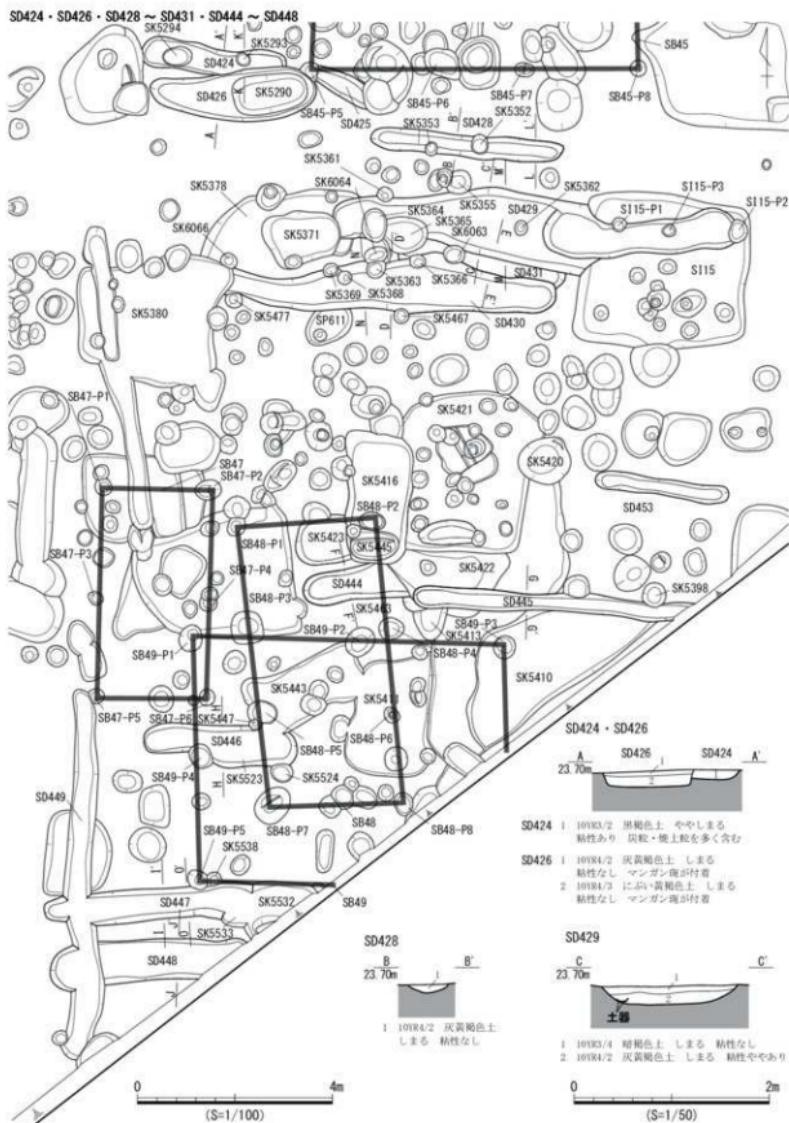


図 626 SD424 • SD426 • SD428 ~ SD431 • SD444 ~ SD448 造構図 (1)

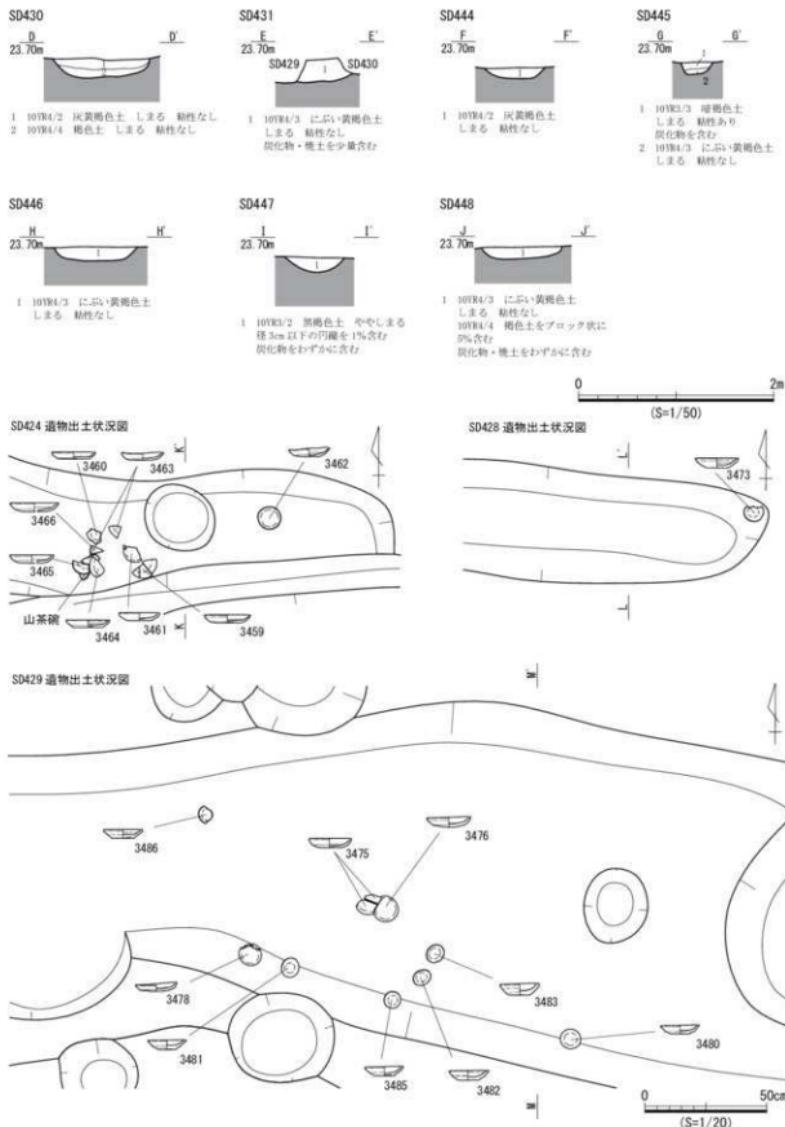


図 627 SD424・SD428～SD431・SD444～SD448 遺構図（2）

構はSI15の所属時期である12世紀後葉から13世紀初頭以前と考えられる。

SD430（図626～628・630）

検出状況 4地点JJ7～JJ9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD431・SK5363・SK5368・SK5369・SK5380・SK5464・SK5467・SK5477などと重複する。本遺構はSK5363・SK5368・SK5369・SK5380・SK5464・SK5467・SK5477より古く、SD431より新しい。

規模・形状 やや蛇行して東西に延びる溝状遺構で、断面形は逆台形である。溝底面の標高は西端で23.44m、東端で23.37mと東に向かってやや低くなる。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 土師器50点、須恵器1点、山茶碗112点、中世陶磁器6点、鉄滓4点が散在して出土した。なお、中世陶磁器のうち2点は青磁であった。すべて1層あるいはa層から出土した。

出土遺物 土師器皿2点、山茶碗11点を図示した。3491・3492は土師器である。3491はロクロ成形の皿、3492はM3類の皿である。3493～3500は第5型式の尾張型山茶碗の小皿、3501・3502は同型式の碗、3503は第6型式の碗である。

時期 図示した3503は13世紀初頭から13世紀中葉を示すが1点のみで混入と考えられ、主体となる3943～3502から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD431（図626・627・630）

検出状況 4地点JJ8～JJ9グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD429・SD430・SK5365・SK5366と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 東西に延びる溝状遺構で、SD429・SD430完堀後に検出した。そのため、南北方向の断面形は不明である。底面は平坦である。

埋土 単層である。炭化物・焼土を含む。

遺物出土状況 土師器54点、山茶碗53点、陶器3点、青磁1点が散在して出土した。

出土遺物 土師器2点、山茶碗3点を図示した。3504・3505はM3類の土師器皿である。3506は第3型式の尾張型山茶碗の小碗、3507は第6型式の尾張型山茶碗の小皿、3508は同型式の碗である。

時期 図示した3507・3508は13世紀初頭から13世紀中葉を示すが、a層からの出土で混入の可能性があり、SD429との重複関係から、本遺構はSD429の所属時期である12世紀後葉から13世紀初頭以前と考えられる。

SD440（図631）

検出状況 4地点JJ7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5375・SK5380・SK5389・SK5390・SK5391と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。本遺構の南側に同じ長軸方位でSD442が位置するが、SD440底面がSK5380の底面より深く、SD442との接続が確認できなかつたため、別遺構として調査した。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構である。断面形は方形である。長軸方向はN-9°-Wで、底面は平坦である。本遺構を北端として、南部に南北に延びるSD442やSD449が位置し、これらの溝の西側にはSD443・SD450・SD451が約3.5m～4.0mの間隔を挟んで位置する。JL6グリッドより南では両溝群間の遺構が希薄であることから、本遺構を含む南北に延びる溝群は道路側溝の可能性がある。また、遺構検出時にはこの部分に基盤とは異なる堆積が認められたため、これらの溝の間に整

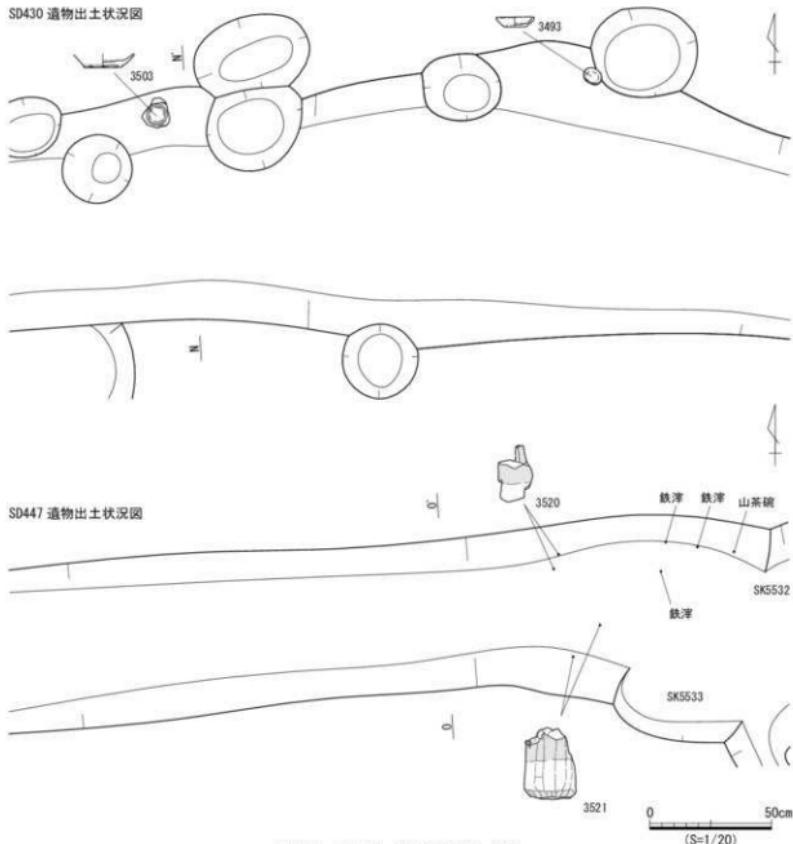


図 628 SD430・SD447 遺構図（3）

地土が存在した可能性もある。

埴土 単層である。褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器 15 点、山茶碗 9 点、中近世陶磁器 2 点、鵜羽口 1 点が散在して出土したが、すべて小片であった。

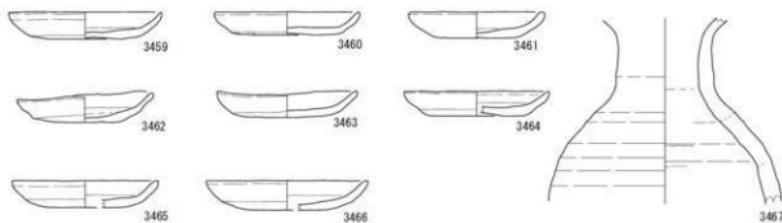
出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SK5380 との重複関係、また、SD442 と同一遺構であれば、13 世紀末から 14 世紀中葉に機能した可能性がある。

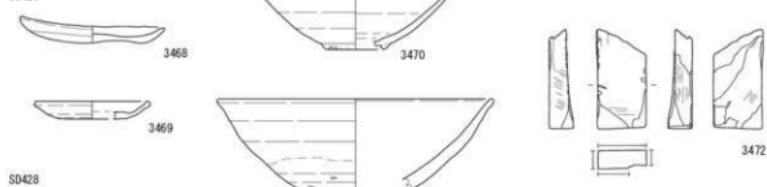
SD441 (図 631)

検出状況 4 地点 JK 7 グリッド、SK5498 底面で検出した。平面形は明瞭であった。SD442・SK5497・

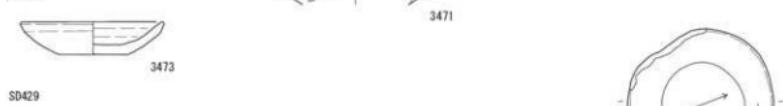
SD424



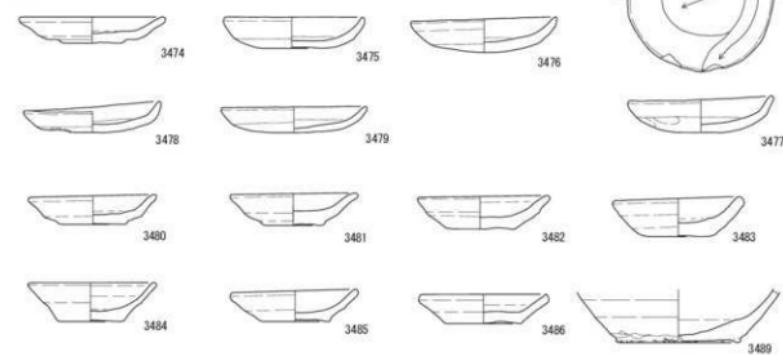
SD426



SD428



SD429



0
(S=1/3)
10cm

図 629 SD424・SD426・SD428・SD429 出土遺物実測図

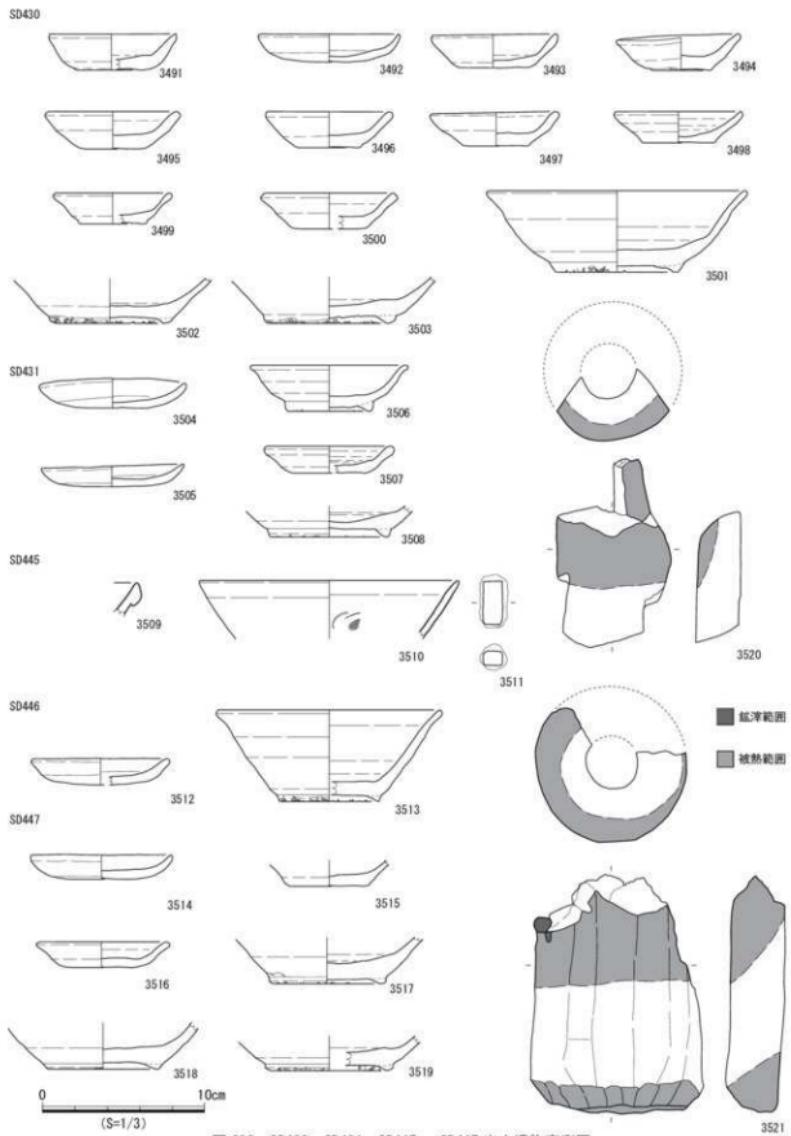


図 630 SD430・SD431・SD445～SD447 出土遺物実測図

SK5498・SK5505・SK5509などと重複する。本遺構は、SD442・SK5498より古く、SK5497・SK5505・SK5509より新しい。

規模・形状 やや屈曲して南北に延びる溝状遺構である。断面形は逆台形である。底面は平坦である。SD440やSD442と同じ長軸方位で、道路側溝の可能性がある。

埋土 単層である。円礫と炭化物を含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 SD442・SK5498との重複関係から、本遺構はSK5497の所属時期である12世紀後葉から13世紀初頭と、SD442の所属時期である13世紀末から14世紀中葉の間に機能した可能性がある。

SD442（図631・634）

検出状況 4地点JJ7～JK7グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD441・SK5380・SK5503・SK5505・SK5507などと重複する。本遺構はSK5380より古く、SD441・SK5503・SK5505・SK5507より新しい。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構である。断面形は逆台形である。北部はSK5380と重複して消失する。長軸方向は、N-8°-Wで、底面は平坦である。SD440の南側延長部分に位置することから、道路側溝の可能性がある。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。1層に炭化物・焼土を含む。

遺物出土状況 土師器13点、灰釉陶器1点、山茶碗16点、中近世陶磁器2点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点を図示した。3522は谷迫間2号窯に比定した東濃型山茶碗の碗である。

時期 大畑大洞4号窯式以降と考えられる東濃型山茶碗の口縁部小片を含むことや、SK5380との重複関係から、本遺構は13世紀末から14世紀中葉に機能したと考えられる。

SD443（図631・632・634）

検出状況 4地点JK6～JL6グリッド、SK5655・SK5664底面で検出した。平面形は明瞭であった。SK5653・SK5655・SK5664・SK5681と重複し、いずれの遺構より古い。

規模・形状 南北に直線的に延びる溝状遺構で、北部はSK5653と重複して消失する。断面形は2段の掘り込みである。溝底面の標高は、北端が23.40m、南端が23.42mと水平である。溝の長軸方向は、N-3°-Eである。D-D'断面では東部が一段低くなるが、SK5665より南では平坦である。SD451の北部と同じ長軸方位であることから、本遺構は道路側溝の可能性がある。

埋土 単層である。褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 山茶碗9点、中近世陶磁器2点、砥石1点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗1点、砥石1点を図示した。3523は第5型式の尾張型山茶碗の碗である。3524は4面を砥面として用いた仕上砥である。

時期 図示した3523とSK5655との重複関係から、本遺構は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

SD444（図626・627）

検出状況 4地点JK8グリッド、IVb層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5422・SK5416・SK5457・SK5460・SK5461と重複する。本遺構はSK5416・SK5422より古く、SK5457・SK5460・SK5461より新しい。

規模・形状 東西方向に直線的に延びる溝状遺構で、東端は SK5422 と重複して消失する。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 単層である。

遺物出土状況 土師器 33 点、山茶碗 30 点、青磁 1 点、石製品 6 点が散在して出土したが、いずれも小片であった。石製品はいずれも輪羽口である。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SK5416 との重複関係から、本遺構は SK5416 の所属時期である 13 世紀初頭から中葉以前に機能したと考えられる。

SD445 (図 626・627・630)

検出状況 4 地点 JK8・JK9～JL9 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SK5398・SK5400・SK5410・SK5413・SK5422・SK5462 と重複する。本遺構は SK5398 より古く、SK5400・SK5410・SK5413・SK5422・SK5462 より新しい。東側は発掘区外に延びる。

規模・形状 東西に直線的に延びる溝状遺構で、東側は発掘区外へ延びる。断面形は逆台形である。溝底面の標高は西端が 23.30m、東端が 23.30m と西に向かって低くなる。溝の長軸方位は N-86° - W° で、底面は平坦である。

埋土 2 層に分層した。水平堆積である。1 層には炭化物を含む。

遺物出土状況 土師器 64 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 65 点、常滑産陶器 1 点、白磁 2 点、青磁 1 点、石製品 2 点、鉄製品 1 点、鉄滓 2 点が散在して出土した。石製品はいずれも砂岩製の輪羽口の小片である。

出土遺物 白磁 1 点、青磁 1 点を図示した。3509 は太宰府分類白磁碗 IV 類の口縁部、3510 は太宰府分類龍泉窯系青磁 I 類か III 類と考えられる碗である。3511 は鉄製品で器種は不明である。平面形は長方形で、上下端は欠損の可能性がある。蛍光 X 線分析の結果、炭素量が 0.77% より多い過共析鋼と考えられるとの結果を得た（第 5 章第 5 節）。

時期 SK5410 との重複関係により、本遺構は SK5410 の帰属時期である 13 世紀初頭から中葉以降に埋没したと考えられる。

SD446 (図 626・627・630)

検出状況 4 地点 JL7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SB48-P5・SB49-P4・SK5443・SK5447・SK5523・SK5524・SK5535 と重複する。本遺構は SB48・SB49・SK5524 より古く、SK5443・SK5447・SK5523・SK5535 より新しい。

規模・形状 東西に延びる溝状遺構で、SB49-P4 と重複する部分から西側では溝幅は狭くなる。断面形は逆台形である。底面は西端が 23.42m、東端が 23.36m と東に向かってやや低くなる。溝の長軸方位は N-88° - E° で、底面は平坦である。

埋土 単層である。

遺物出土状況 土師器 37 点、山茶碗 41 点、常滑産陶器 2 点、白磁 1 点、石製品 11 点、鉄滓 1 点が散在して出土した。

出土遺物 土師器 1 点、山茶碗 1 点を図示した。3512 は M3 類の土師器皿である。3513 は第 7 型式の尾張型山茶碗の碗である。

時期 図示した 3513 から、本遺構は 13 世紀後葉から末と考えられる。

SD447（図 626～628・630）

検出状況 4 地点 JM 6～JM 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB49-P 5・SD449・SK5532・SK5533・SK5538・SK5543 と重複する。本遺構は SD449・SK5532・SK5533 より古く、SB49-P 5・SK5538・SK5543 より新しい。

規模・形状 東西に直線的に延びる溝状遺構で、東部は SK5532・SK5533 と重複して消失する。断面形は半円形で、溝底面の標高は西端で 23.41m、東端で 23.36m と東に向かってやや低くなる。溝の長軸方位は N-87°-E である。南に位置する SD448 とは 0.3m～0.5m の溝間距離で並行する。

埋土 単層である。径 3cm 以下の円礫と炭化物が混じる。

遺物出土状況 土師器 38 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 48 点、白磁 1 点、輪羽口 11 点、鉄滓 110 点が散在して出土した。O-O' 断面より東から多く出土した。

出土遺物 土師器皿 1 点、山茶碗 5 点、輪羽口 2 点を図示した。3514 は M 3 類の土師器皿である。3515～3519 は尾張型山茶碗で、3515 は第 5 型式の小皿、3516 は第 6 型式の小皿である。3517～3519 は第 5 型式の碗である。3520・3521 は輪羽口である。3520 は表面が被熱により灰色化する。3521 は胴部から基部にかけて 2.0cm～2.5cm を一単位とする面取が明瞭に認められる。

時期 図示した 3516 と SD449・SK5532 との重複関係から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉に埋没したと考えられる。

SD448（図 626・627）

検出状況 4 地点 JM 6～JM 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD449 と重複する。本遺構は SD449 より古い。東側は発掘区外に延びる。

規模・形状 東西に直線的に延びる溝状遺構で、断面形は半円形である。溝底面の標高は西端が 23.43m、東端が 23.43m と水平である。溝の長軸方位は N-87°-E で、底面は平坦である。

埋土 単層である。褐色土ブロックや炭化物、焼土を含む。

遺物出土状況 土師器 33 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 23 点、陶器 2 点、白磁 1 点、石製品 1 点、鉄釘 1 点、鉄塊 1 点、鉄滓 11 点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 小片のため図示できる遺物は無かった。

時期 SD449 との重複関係と SD447 との位置関係より、本遺構は SD449 の所属時期である 15 世紀以前に埋没したと考えられる。

SD449（図 631・634）

検出状況 4 地点 JL 7～JM 7 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SB47-P 5・SD447・SD448・SK5542・SK5546・SK5547 などと重複する。本遺構は SB47・SK5546・SK5547 より古く、SD447・SD448・SK5542 より新しい。

規模・形状 直線的に南北に延びる溝状遺構で、SK5547 と重複する部分で収束する。断面形は逆台形である。底面は北端が 23.40m、南端が 23.34m で、やや東側が低くなる。溝の長軸方位は、N-2°-E で、底面は平坦である。本遺構と SD451 との間に遺構の希薄な空閑地を挟み、両溝が道路側溝の可能性がある。

埋土 E-E' 断面、F-F' 断面は埋土が共通し、単層である。褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器 36 点、山茶碗 39 点、常滑産陶器 2 点、輪羽口 1 点、鉄滓 10 点が散在して出土したが、すべて小片であった。

出土遺物 山茶碗 1 点を図示した。3525 は第 10 型式の尾張型山茶碗の片口鉢口縁部である。この他、大畠大洞 4 号窯式以降と考えられる東濃型山茶碗の口縁部小片を含む。

時期 SD447 との重複関係から、本遺構は SD447 の所属時期である 13 世紀初頭から中葉以降で、図示した 3525 から 15 世紀代に埋没したと考えられる。

SD450（図 631・634）

検出状況 4 地点 JN 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は明瞭であった。SD451・SK5912 と重複する。本遺構は SD451 より古く、SK5912 より新しい。南端は発掘区外に延びる。

規模・形状 やや西に膨らんで湾曲し、南北に延びる溝状遺構である。断面は逆台形である。溝底面の標高は南端が 23.42m、東端が 23.37m と北に向かってやや低くなり、底面は平坦である。

埋土 単層である。炭粒・焼土粒を含む。

遺物出土状況 土師器 6 点、山茶碗 19 点、常滑産陶器 2 点、青磁 2 点、白磁 1 点、輪羽口 6 点、鉄釘 1 点、鉄滓 5 点が散在して出土した。

出土遺物 山茶碗 1 点、輪羽口 1 点を図示した。3526 は第 6 型式の尾張型山茶碗の碗である。3527 は輪羽口の胴部である。孔径の半分以下の厚みで薄手である。

時期 図示した 3526 と SD451 との重複関係から、本遺構は 13 世紀初頭から中葉に比較的短期間機能したと考えられる。

SD451（図 631～636）

検出状況 4 地点 JL 6 ～ JN 6 グリッド、IV b 層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。SD450・SK5773・SK5775・SK5776・SK5910 などと重複する。本遺構は SK5773・SK5775・SK5776・SK5910 より古く、SD450 より新しい。南端は発掘区外に延びる。

規模・形状 南北方向にやや蛇行して延びる溝状遺構である。SK5773・SK5776 と重複する部分で互い違いとなり北に延びる。埋土が共通することから同遺構としたが、接続部分は重複のため確認していない。JM 6 グリッドでは溝の幅が広がり、断面は一段落ち込む。本遺構北端の長軸 0.7m、短軸 0.25m ～ 0.3m の範囲で埋土掘削中に焼土の広がりを確認した。溝底面の標高は、北端で 23.38m、南端で 23.39m と平坦である。直線的に延びる部分の長軸方位は N-0° - E で、底面は平坦である。

埋土 H-H' 断面、I-I' 断面は埋土が共通し、2 層に分層した。H-H' 断面はほぼ水平堆積、I-I' 断面は西にやや偏る堆積である。1 層には炭化物と焼土を、2 層には褐色土ブロックと炭化物を含む。SD449 と同様の理由により、本遺構は道路側溝の可能性がある。

遺物出土状況 JM 6 グリッドで山茶碗（3530～3533・3536・3538・3540～3544）、輪羽口（3546・3548～3550・3554）、石皿（3555）、砥石（3556～3560）などが被熱した自然石と混在して出土した。完形で出土した山茶碗の小皿（3530）を除いて、接合により完形に復元できた遺物は無かった。また、山茶碗のうち、3540 は SK5774 の a 層及び 1 層と、3543 は SK5746 の 1 層から出土した破片と接合した。この他、JM 6 グリッドを中心に、土師器 55 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 114 点、常滑産陶器 4 点、青磁 2 点、輪羽口 70 点、鉄釘 3 点、不明鉄製品 2 点、鉄塊 1 点、鉄滓 192 点が出土した。大半の遺物は 1 層あるいは a 層から出土し、2 層から出土した遺物は全 555 点中 34 点とわずかであることや、1 層あ

SD440 ~ SD443・SD449 ~ SD451

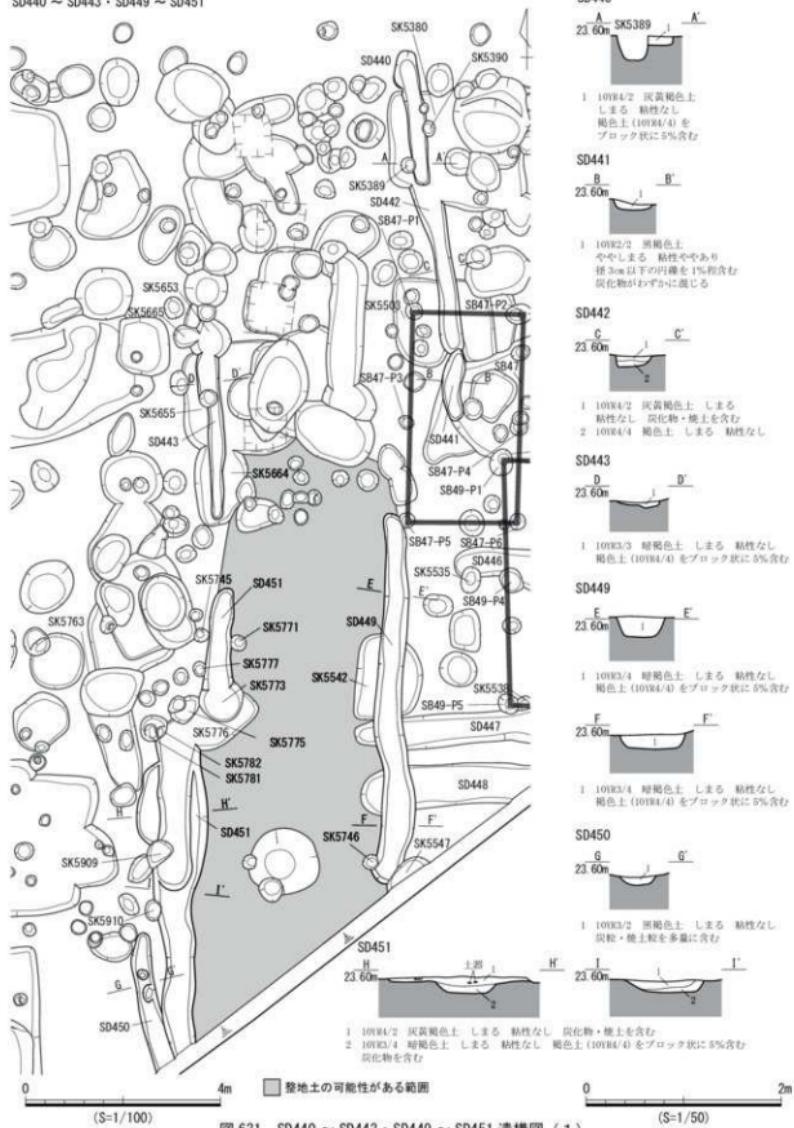


図 631 SD440 ~ SD443・SD449 ~ SD451 遺構図 (1)

SD443

SD451 棟出時の焼土

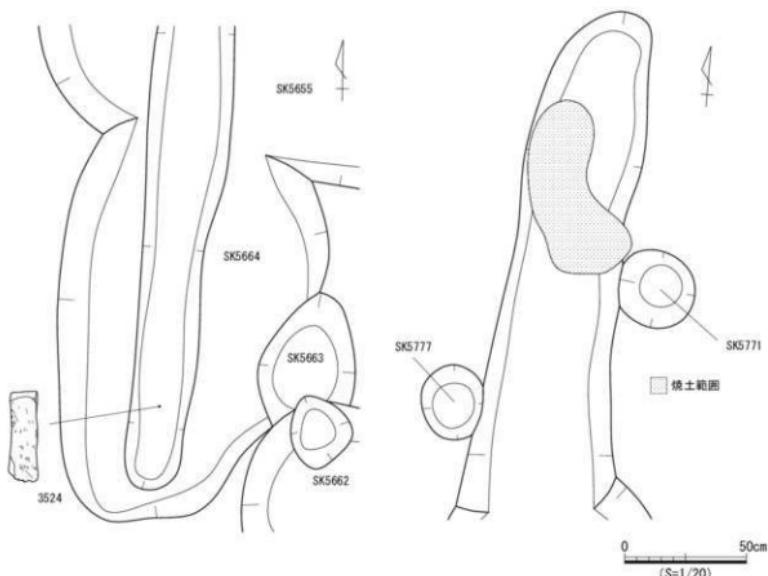


図 632 SD443・SD451 遺構図 (2)

るいはa層と2層との層位間接合も3点に限られ、出土状況に規則性も認められないことから、溝の機能消失以降にまとめて廃棄された可能性がある。

出土遺物 土師器2点、山茶碗15点、青磁1点、輪羽口9点、砥石5点、石皿1点を図示した。3528・3529はM3類の土師器皿である。3530～3544は尾張型山茶碗である。3530・3531は第6型式の小皿、3532は第4型式の碗、3533～3539は第5型式の碗、3540～3544は第6型式の碗である。3545は太宰府分類龍泉窯系青磁O類と考えられる碗である。劃花文と櫛先による点描文を描く。3546～3554は輪羽口である。3546～3553は先端部にガラス質の萍が付着する。3554は胴部片である。3555は石皿の破片である。表面全体に摩耗部が残り、周囲は欠損する。3556～3560は砥石である。3555は表面と一側面を砥面として使用した中砥である。3557は4面を砥面として使用した中砥で、側面には散在的な敲打痕が残る。3558は表面から両側面を砥面として使用した中砥で、側面には散在的な敲打痕が残る。3559は4面を砥面として使用した粗砥、3560は2面を砥面として使用した中砥の小片である。

時期 図示した3540～3544から、本遺構は13世紀初頭から中葉と考えられる。

SD458 (図 637)

検出状況 4地点 IM19～I020 グリッド、IV b層上面で検出した。平面形は明瞭であった。南部は発掘区外に延びる。

SD451 遺物出土状況図

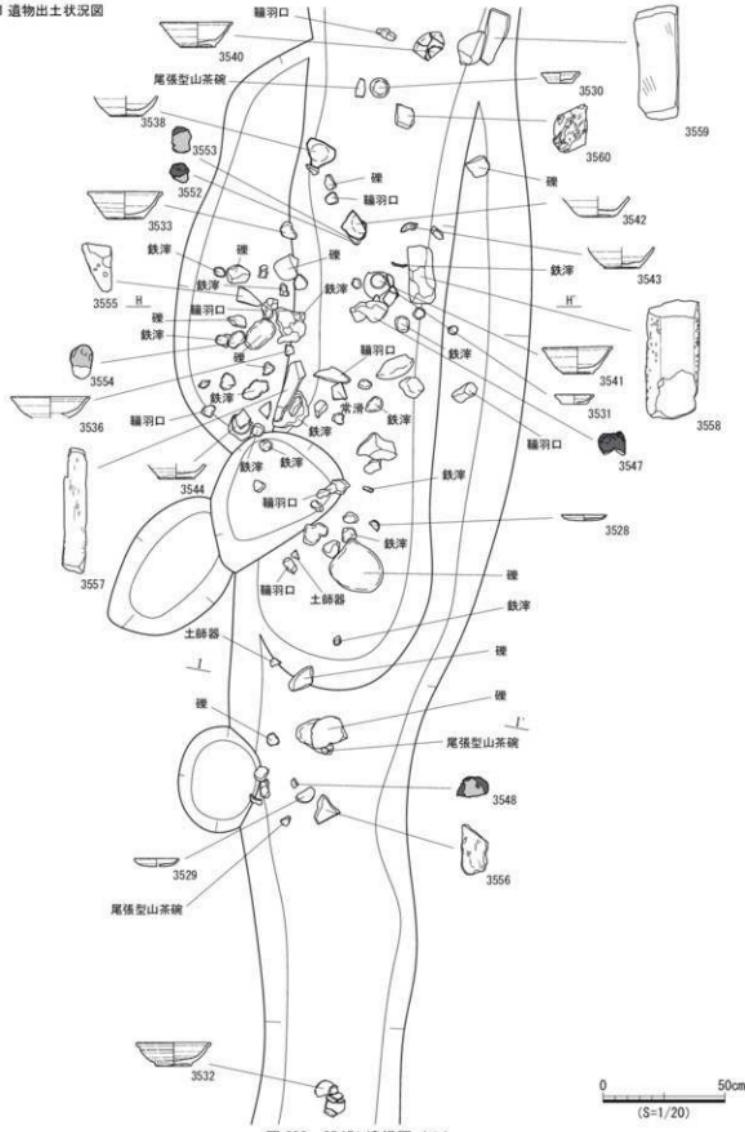


図 633 SD451 遺構図 (3)

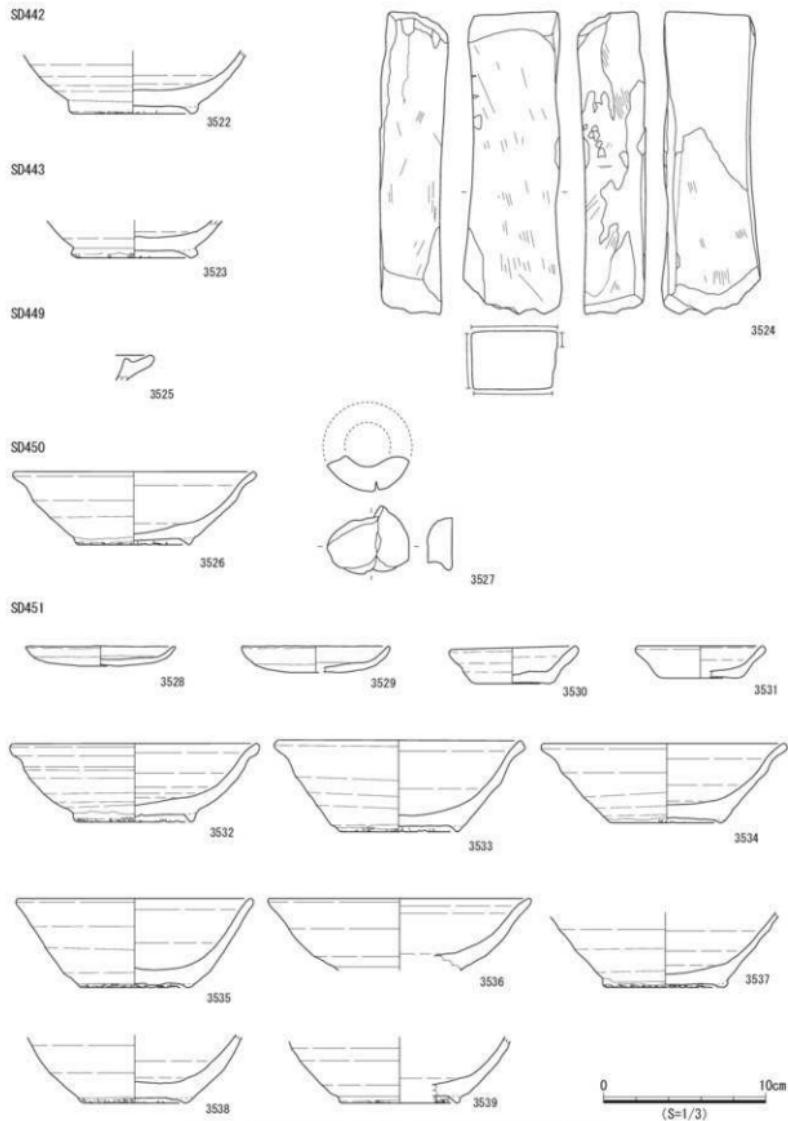


図 634 SD442・SD443・SD449～SD451 出土遺物実測図（1）

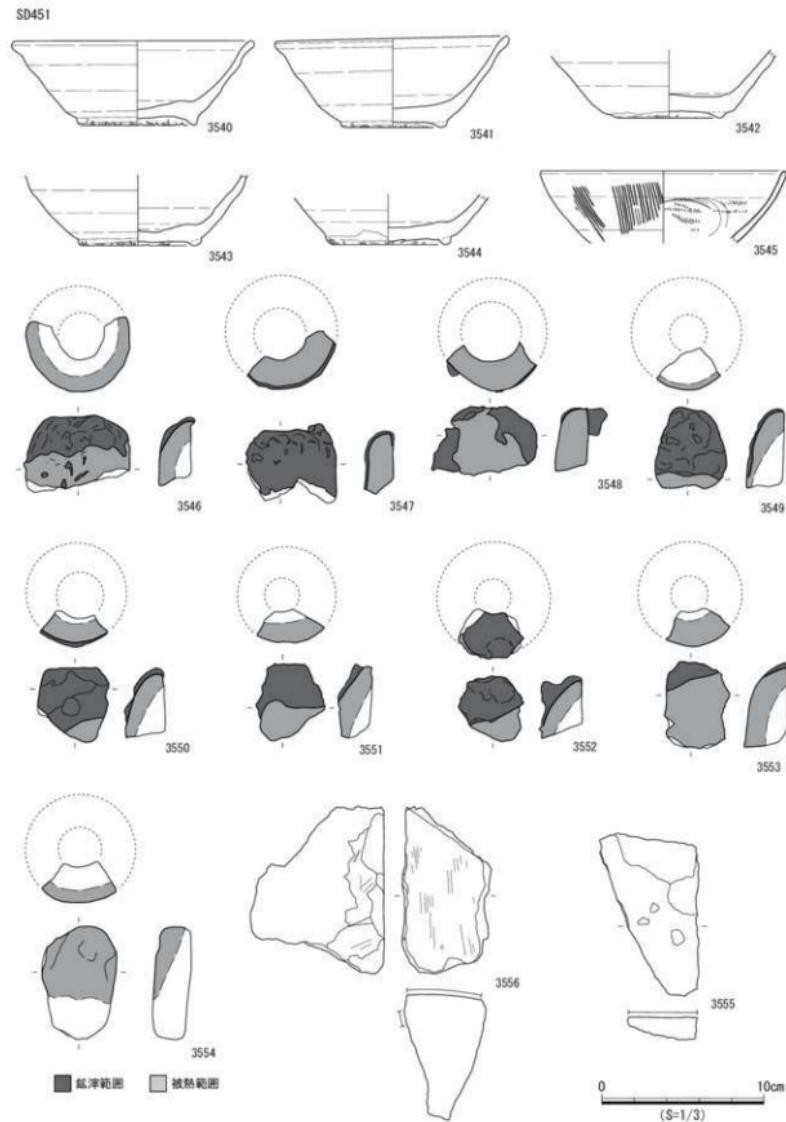
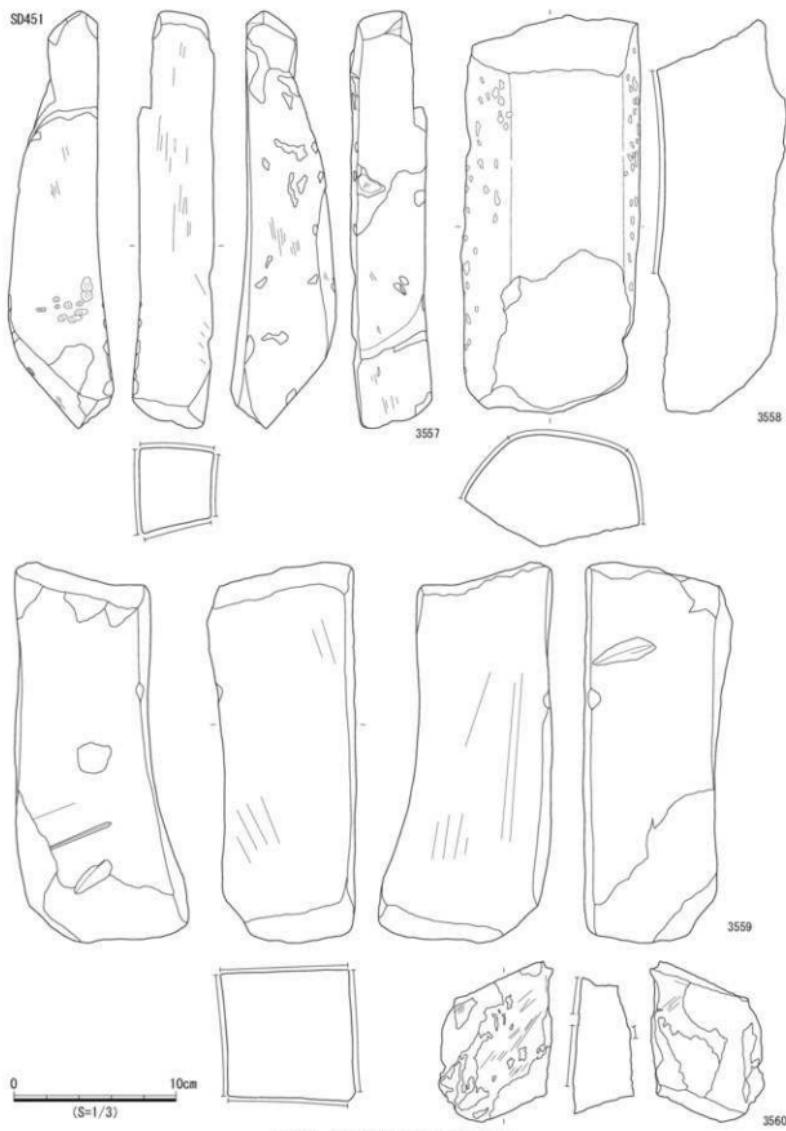


図 635 SD451 出土遺物実測図 (2)



規模・形状 南北に延びる溝状遺構で、北端部がやや東に湾曲する。断面形は半円形である。溝底面の標高は、北端で 23.11m、南端で 23.08 mと水平で、底面は平坦である。

埴土 3 層に分層した。水平堆積である。2 層に褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器 85 点、須恵器 7 点、灰釉陶器 13 点、山茶碗 92 点、常滑産陶器 3 点、古瀬戸 5 点、輪羽口 1 点、鉄釘 2 点、鉄滓 1 点が散在して出土した。出土位置は A-A' 断面の北から 32 点、南から 177 点で南部から多く出土した。

出土遺物 土師器 1 点、須恵器 1 点、山茶碗 1 点、古瀬戸 3 点を図示した。

3561 は C 1 類の土師器皿である。

3562 は須恵器の甕である。3563 は谷迫間 2 号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。3564 は後 III 期の古瀬戸縁釉小皿、3565 は後 III 期の古瀬戸平碗、3566 は後 III 期か IV 期古段階の古瀬戸瓶子皿である。

時期 図示した 3564・3565 より、本遺構は 15 世紀前葉から中葉と考えられる。

7 その他の遺構出土遺物（図 638～642）

前記した 1～5 以外の遺構で出土した遺物のうち 93 点を図示した。

3567～3592 は土師器である。3567～

3575・3584 は M 3 類、3576～3580・

3585～3587 は M 4 類、3581・3582 は C 1 類、3583 は M 2 類の皿である。

3578 は外面の粘土縫目が明瞭に残る。3582 は口縁部の 2 個所に煤が付着することから、灯明皿として用

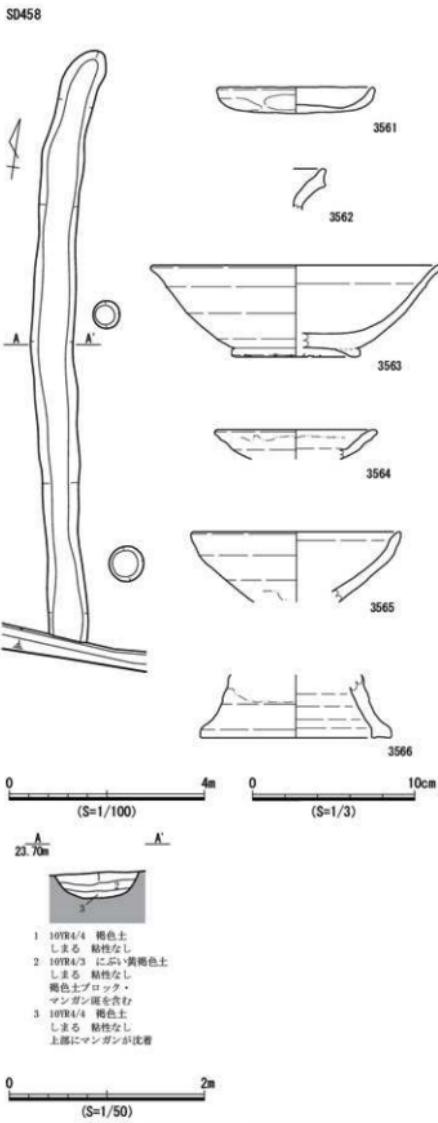


図 637 SD458 遺構図・出土遺物実測図

いられたと考えられる。3580・3586はM4類に含めたが、口縁部が外側に開き口縁部外面に連続するオサエを施すことからM4類よりも新しい形態の可能性がある。3587は内面に右回りのナデ調整が明瞭に認められる。3588はB類の清郷型鍋である。3589はA類、3590はD類の伊勢型鍋である。3591・3592はA3類の羽釜で、外表面は鋸よりも下に煤が付着する。3591は口縁部に径0.4cmの穿孔が認められる。3593・3594は灰釉陶器である。いずれも丸石2号窯式に比定した碗である。3595～3630は山茶碗である。3595は第4型式の尾張型山茶碗の小皿、3596は谷迫間2号窯式に比定されると考えられる東濃型山茶碗の小皿である。3597～3604は第5型式、3605～3609は第6型式の尾張型山茶碗の小皿である。3601は底部に回転糸切り後にナデ調整を施す。3610は大烟大洞4号窯式古段階、3611は大烟大洞4号窯式新段階、3612・3613は大洞東1号窯式から脇之島3号窯式にそれぞれ比定した東濃型山茶碗の小皿である。3611は底部外面に「又」の可能性がある墨書が認められる。3614は第4型式、3615～3618は第5型式、3619～3623は第6型式、3624は第7型式の尾張型山茶碗の碗である。3616は底部外面に「一」と考えられる墨書が認められる。3625・3626は大烟大洞4号窯式新段階、3627～3629は大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。3628は底部内面に初穀痕が認められる。3630は美濃須衛窯第Ⅷ期の美濃須衛型山茶碗の片口鉢で、他の山茶碗とは異なりにぶい褐色～ぶい橙色の色調である。3631は第2段階5型式の常滑産陶器甕口縁部である。外反する口縁部で、端部は上方に短く突出する。3632は後Ⅲ期の古瀬戸御皿で、内面の一部に御目が残る。3633～3635は青磁である。3633は太宰府分類同安窯系青磁皿I類で、底部外面の釉を掻き取り内面に櫛目文を配する。3634・3635は太宰府分類龍泉窯系青磁碗I類で、内面に劃花文を配する。3636～3638は白磁碗である。3636・3637は太宰府分類白磁碗IV類で玉縁状の口縁部である。3638は碗底部で、高台を中心から外側に向かって意図的に打ち欠く。3639は平瓦である。凹面に布目、凸面に繩目が認められ、繩目の一部はナデ消しを行う。3640～3642は土鍤である。3640・3641は細身で中央が膨らむ樽型で、3642は厚さがほぼ一定の長胴型である。3643～3650は砥石である。3643・3644は荒砥～中砥である。3643は大型で表面の全体を砥面として利用し、裏面が凹凸を残すことから置砥石として用いたと考えられる。3644は4面を砥面として用い、表面は断面「V」字状の鋭い切れ込みが認められる。また、側面の一方には連続する敲打痕が認められる。3645～3647は中砥である。3645は4面を砥面として用い、表面には斜め方向の擦痕が顕著に認められる。3646は3面、3647は4面を砥面として用いる。3648～3650は仕上げ砥でいずれも4面を砥面として用いる。3648は裏面は剥離した部分も砥面として再利用し、3650は側面の一方に断面「V」字状の抉りが認められる。3651・3652は叩石・磨石である。いずれも表面の一部を磨面として利用し、側面の上端部と下端部に連続する敲打痕が認められる。3653は石皿である。表面の扁平部全体を磨面として利用し、側面や裏面は未使用で自然面を残す。3654～3659は金属製品である。3654は鉄製品と考えられるが、器種は不明である。形状は、断面形が方形から長方形で、一方は端部に向かって細くなり、もう一方は湾曲する。3655は鉄製の釘の可能性がある。形状は断面形が方形～長方形で、頂部に至るほど幅広となる。3656は鉄製の火打金である。扁平な三角形状の形状で、両端は上部に反る。頂部には径約5mmの円形の孔が認められる。3657は鉄製の刀子である。柄部分の断面形は長方形で、刃部の断面形は三角形で、刃先は欠損する。3658は鉄製の刀子刃部の一部で、刃先と柄は欠損する。3659は銅製の錢貨で熙寧元寶（初鑄1068年）である。「元」の下部が欠損するがほかの文字は可読できる。

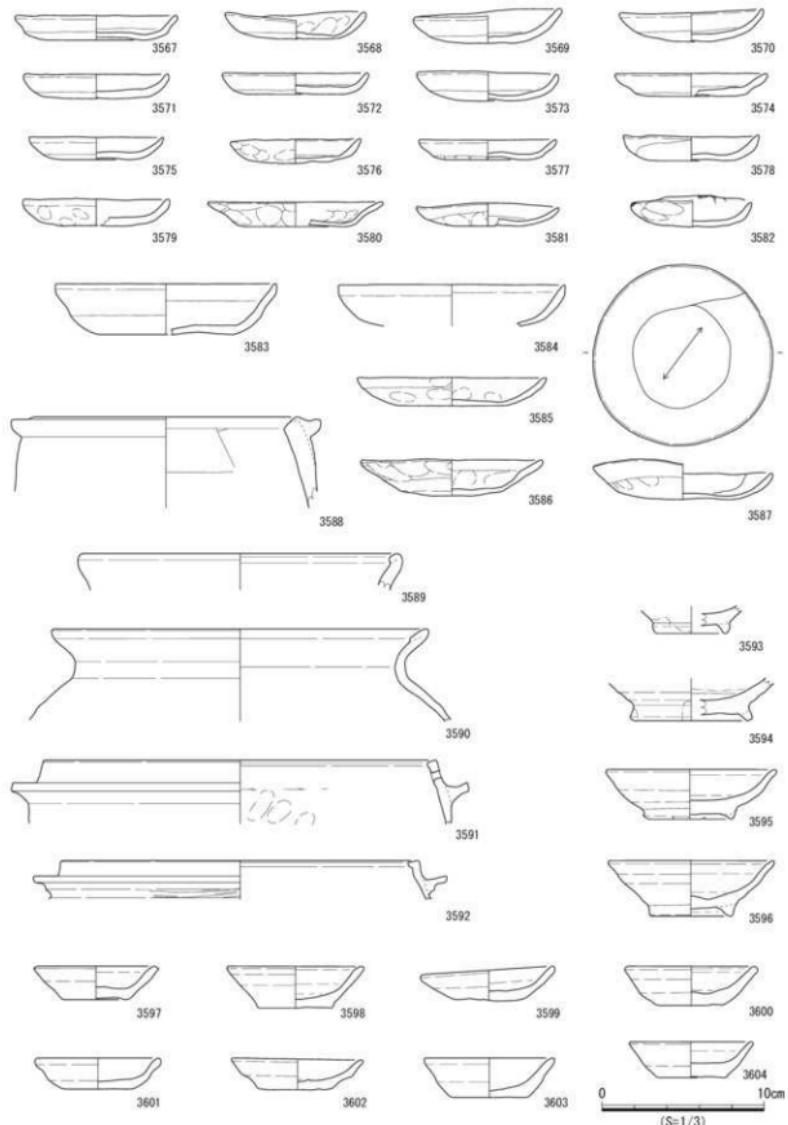


図 638 その他の造構出土遺物実測図（1）

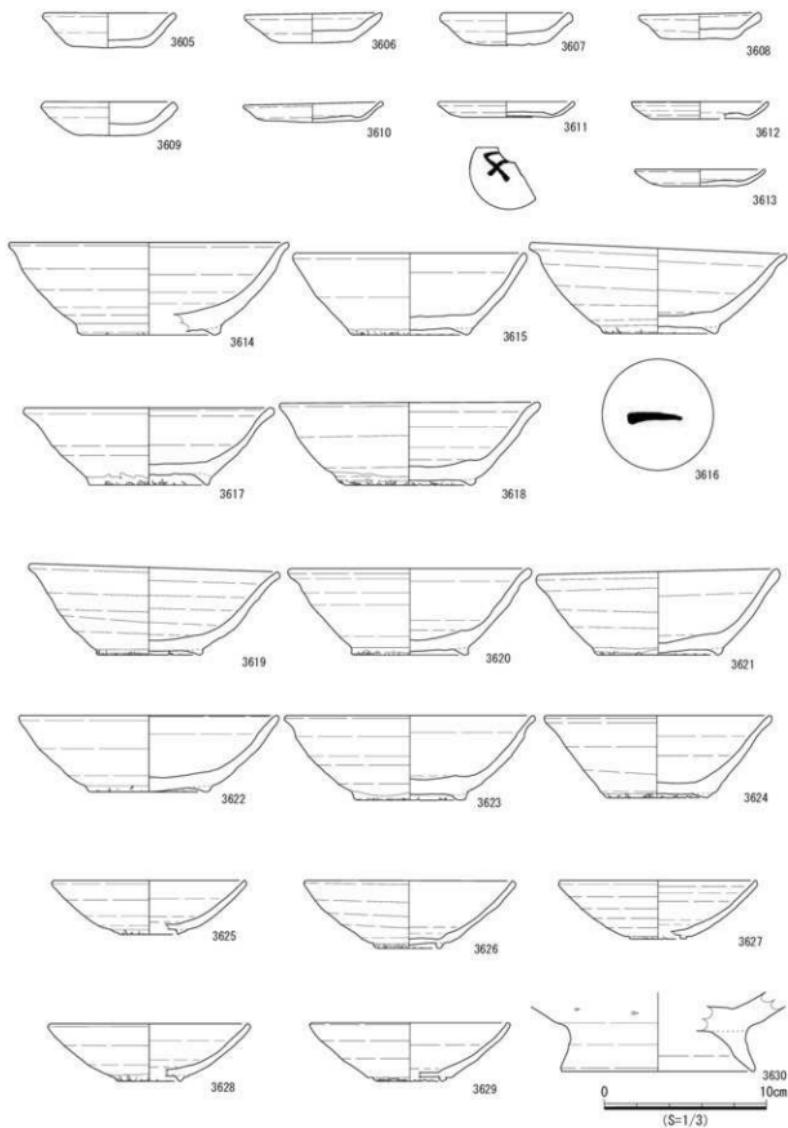


図 639 その他の遺構出土遺物実測図（2）

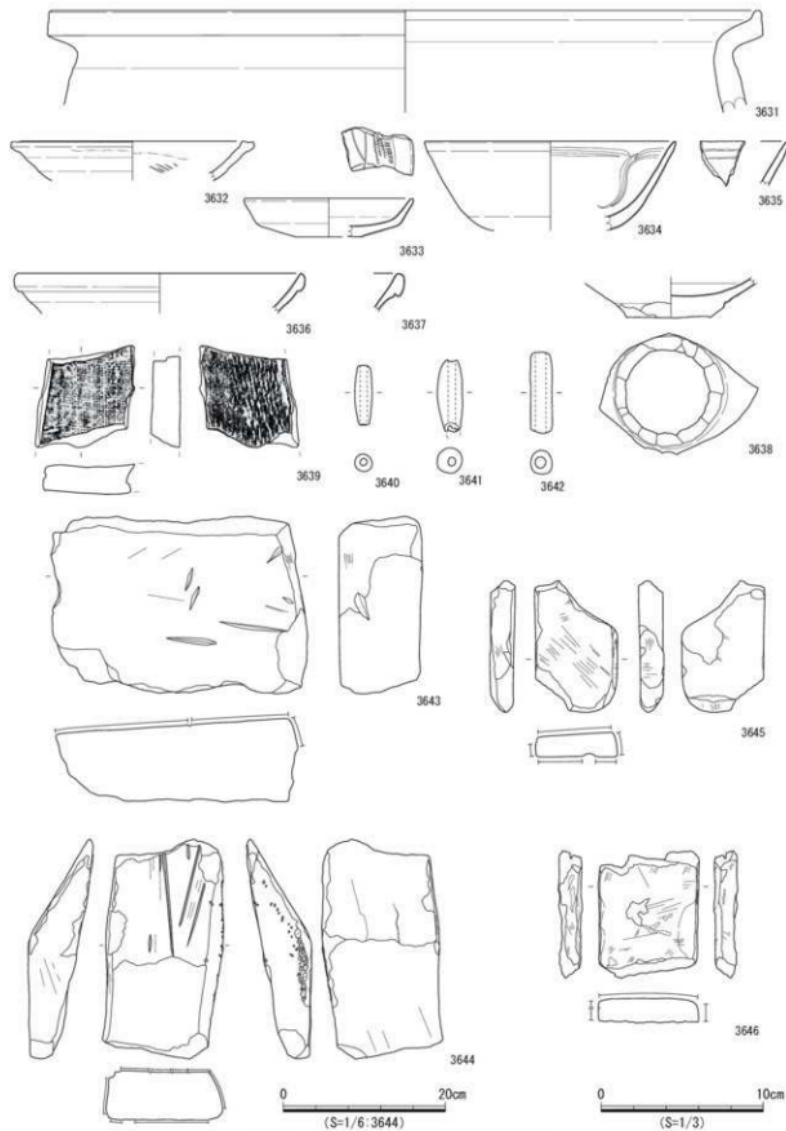


図 640 その他の造構出土遺物実測図（3）

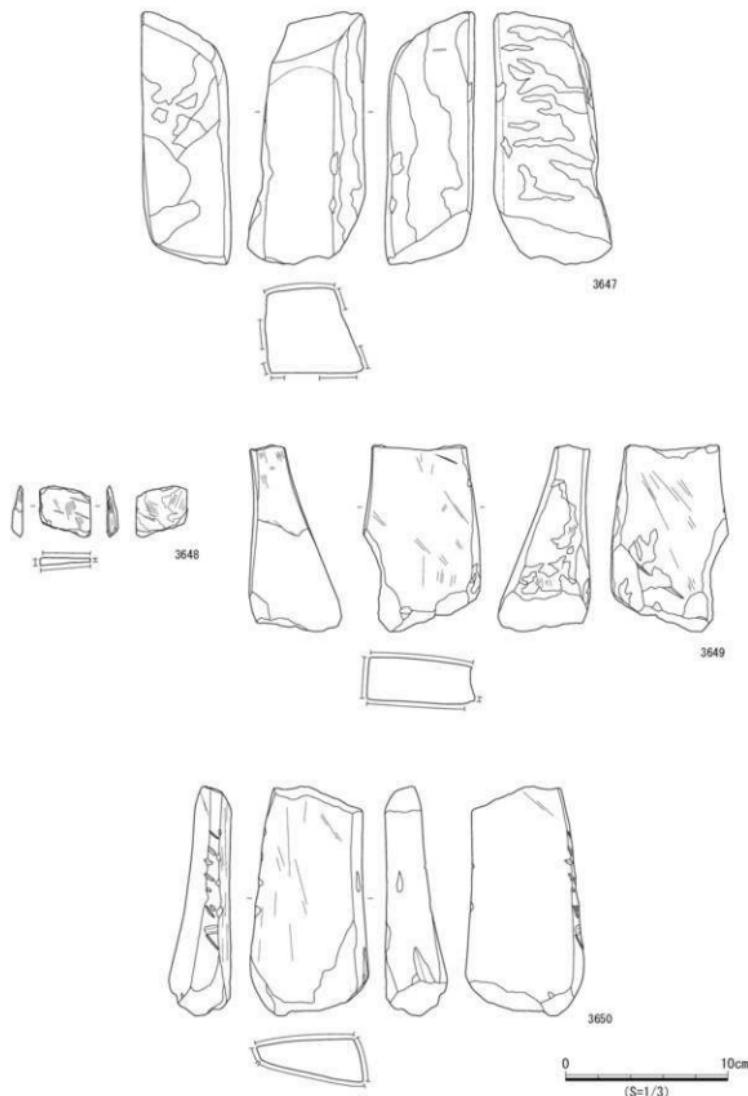


図 641 その他の遺構出土遺物実測図 (4)

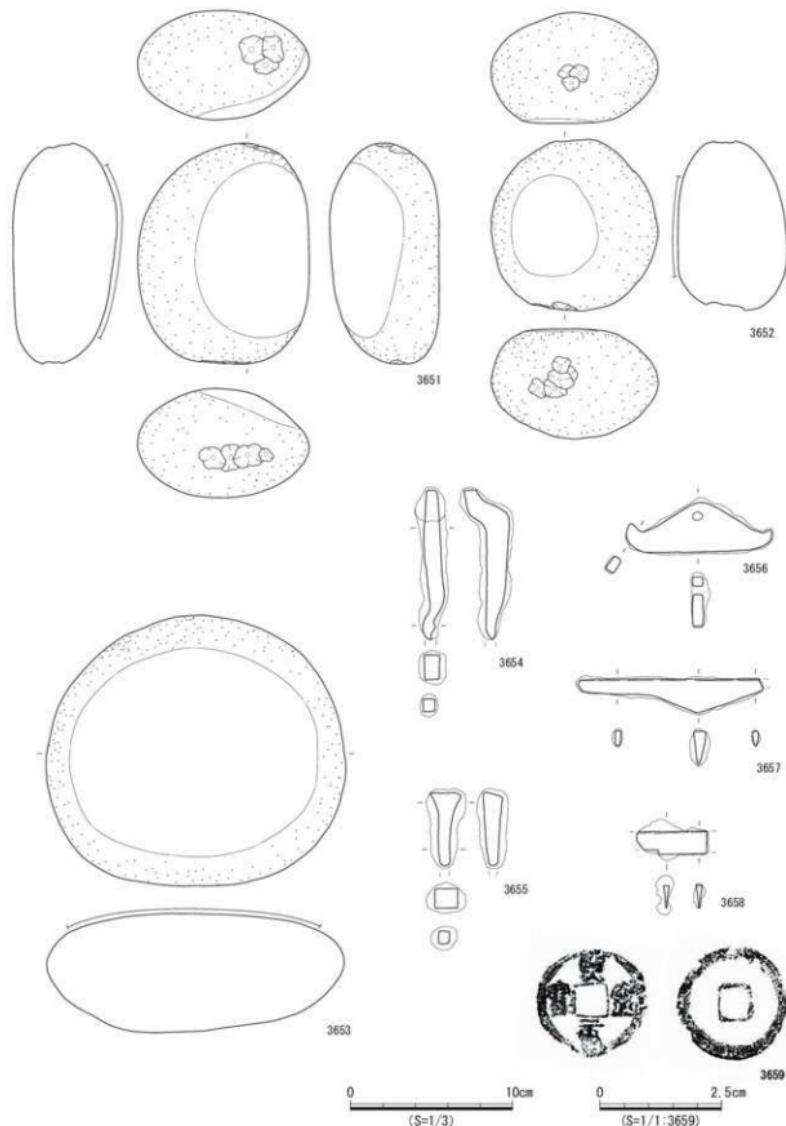


図 642 その他の遺構出土遺物実測図 (5)

8 遺物集中区出土遺物（図643・644）

4地点出土遺物のうち、JJ8～JJ9グリッドではIII層を人力掘削する過程で多数の完形品を含む土師器皿や山茶碗が出土した。この時点では、遺構の平面形が確認できなかったため、出土位置を記録して遺物を取り上げた。III層掘削後にIV層上面で遺構検出作業を行ったところ、上記の遺物が出土した直下で溝や土坑等の遺構を検出したことから、いざれかの遺構に伴う可能性がある遺物として、III層出土遺物とは別に報告を行う。出土した遺物の内、土師器13点、山茶碗15点を図示した。3660～3671はM3類、3672はM2類の土師器皿である。3673～3691は尾張型山茶碗である。3673～3680は第5型式、3681～3687は第6型式の小皿で、3680は底部外面に「上」の墨書が認められる。3688～3690は第6型式の碗、3691は第5型式の片口鉢である。底部外面に多くの砂粒が付着し、成形時の離れ砂として用いたと考えられる。

4地点III層出土遺物（遺構直上の座標取上げ分）

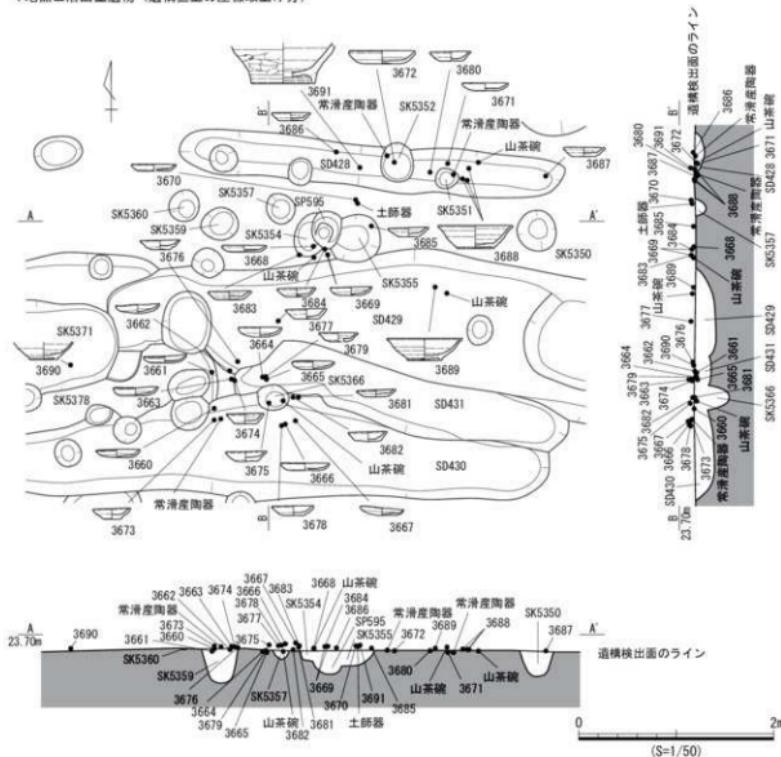


図643 遺物集中区遺物出土状況図

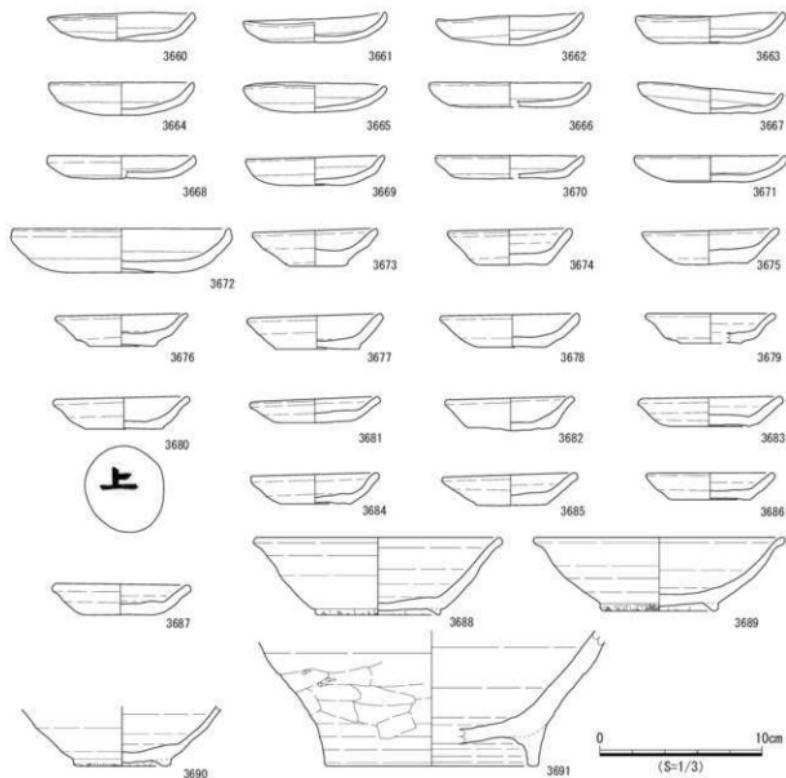


図 644 遺物集中区出土遺物実測図

9 III層等出土遺物（図 645～647）

III層からは3・4地点から25469点の遺物が出土した。土器類はいずれの種別も遺構出土数よりIII層出土数が多くなった。また、I・II層から3033点が出土した。これらの出土遺物のうち60点を図示したが、搅乱から出土した遺物についても本項目に含めた。3692～3694はロクロ成形の土師器で、3692は碗、3693は柱状高台皿、3694は皿である。3695は底部中央を押し上げたへそ皿である。3696～3698はM3類、3699はM4類、3700はC1類、3701はM2類の皿である。3702はB類の清郷型鍋である。3703は8世紀前葉の須恵器坏身C類、3704は8世紀後半の須恵器双耳环である。3705は縁釉陶器の碗底部小片である。灰白色の精製された胎土を用い、外面は高台内まで施釉される。3706～3708は灰釉陶器である。3706は西坂1号窯式に比定した玉縁皿である。3707は黒窯90号窯式に比定した四足壺の肩部で貼付凸帯をもつ。3708は短頸壺で上部に短く引き出した口縁端部は肥厚する。3709～3718は山茶碗である。3709～3718は第5型式の尾張型山茶碗の小皿で、3716と3717は底部外面に墨書が

認められ、3716は釈読不明で呪符、3717は「〇」で記号と考えられる。3718は内面に「元」と釈読できるヘラ書きの窯記号が認められる。3719は第6型式の尾張型山茶碗の小皿である。3720は大畠大洞4号窯式古段階に比定した東濃型山茶碗の小皿である。3723は第6型式の尾張型山茶碗の底部で、底部外面に判読不明の墨書が認められる。3721・3722は谷迫間2号窯式、3724～3726は大洞東1号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗である。3727は第9型式の尾張型山茶碗の片口鉢である。3728は中IV期の古瀬戸折縁深皿、3729は後II期の古瀬戸折縁深皿である。3730は後III期の古瀬戸天目茶碗で高台は削出整形する。3731は後II期の古瀬戸袴腰形香炉で脚部は3箇所中2個所が残存する。外面の施釉は底部付近まで及ぶ。3732は後IV期古段階の古瀬戸縁釉小皿である。3733は第3段階9型式の常滑産陶器甕である。胴部の張りは弱く、外面の胴部最大径よりも下半は縦方向のヘラナデ調整を施す。3734・3735は太宰府分類龍泉窯系青磁碗のI類で、いずれも劃花文を配する。3736は青磁合子の蓋である。上面と側面に鎬文を施す。口縁端部と内面は露胎する。3737は青白磁合子の身で、胴部は鎬文を施す。口縁の内外面の受口部分と外面の胴部下半は露胎する。3738～3740は砂岩製の輪羽口である。いずれも被熱により上部が赤変し先端部に鉛滓が付着する。3738は胴部に弱い面取り痕を残し、孔は外形の中心から一方に偏って穿たれる。孔径は2.7cm～3.1cmである。3741～3747は砥石である。3741・3742は中砥である。3741は4面を砥面として用い、表面は幅広の断面「V」字状の抉りが斜め方向に認められる。3742は表面と両側面の3面と砥面として用いる。3743～3745は中砥～仕上げ砥である。3743は4面を砥面として用いるが、側面は部分的な使用にとどまる。3744は表裏面を砥面として用い、表面の上部は使用によりすり減って湾曲する。下部は端部に連続する擦痕が明瞭に認められ、砥石表面の角を意図的に使用したと考えられる。3745は表裏面と右側面を砥面として用い、側面の一部は被熱により赤変する。3746・3747は仕上げ砥である。3746は表面と右側面を砥面として用いる。3747は3面と砥面として用い、上端面は明瞭な面を有するが砥面としては未使用である。3748は叩石・磨石である。表裏面に磨面が認められ、下端面に敲打痕が認められる。3749～3751は金属製品である。3749は銅製と考えられる耳環である。断面形はやや潰れた椿円形で、表面は緑青の銅に覆われる。3750・3751は銅製の錢貨である。3750は祥符通寶（初鑄1008年）で、3751は「樂」と「通」が釈読できることから永樂通寶（初鑄1411年）と考えられる。

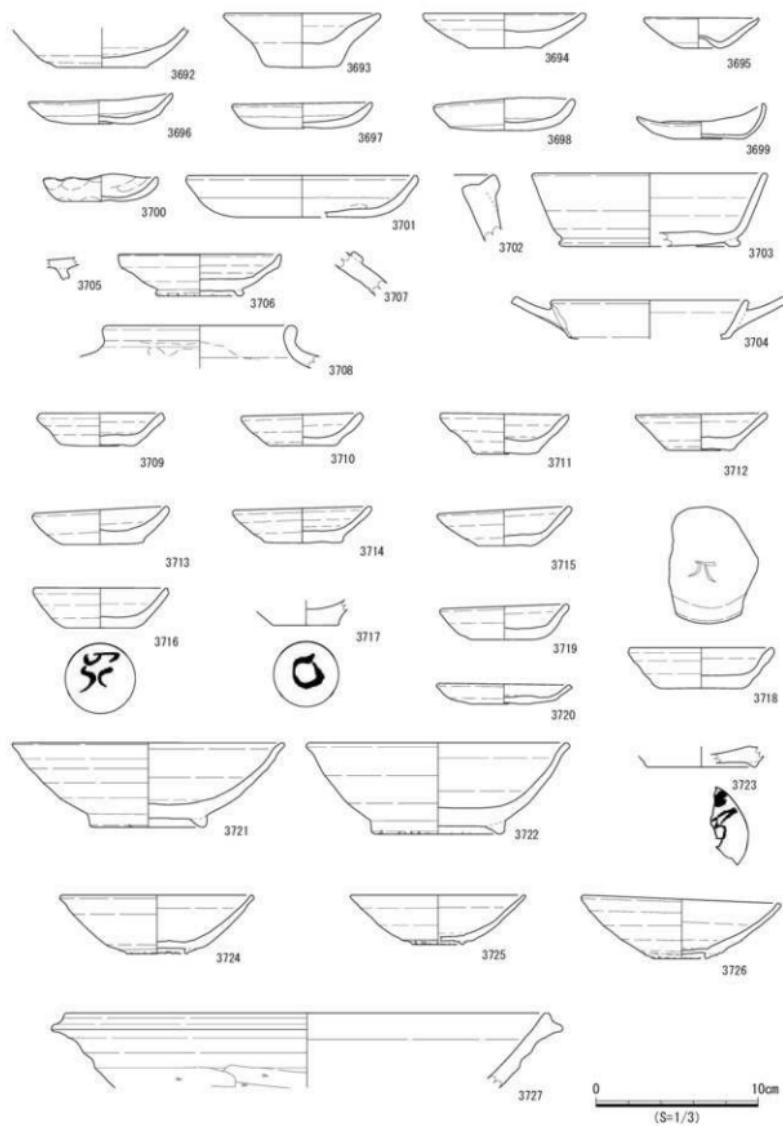


図 645 III層等出土遺物実測図 (1)

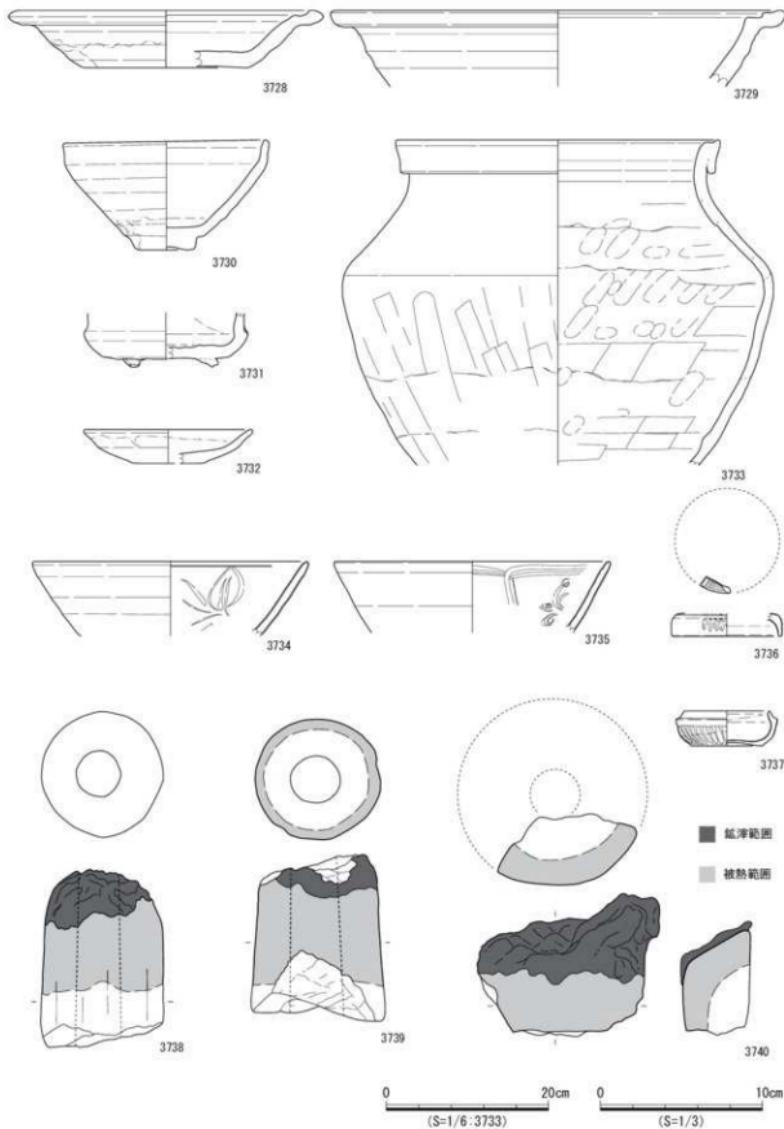


図 646 Ⅲ層等出土遺物実測図 (2)

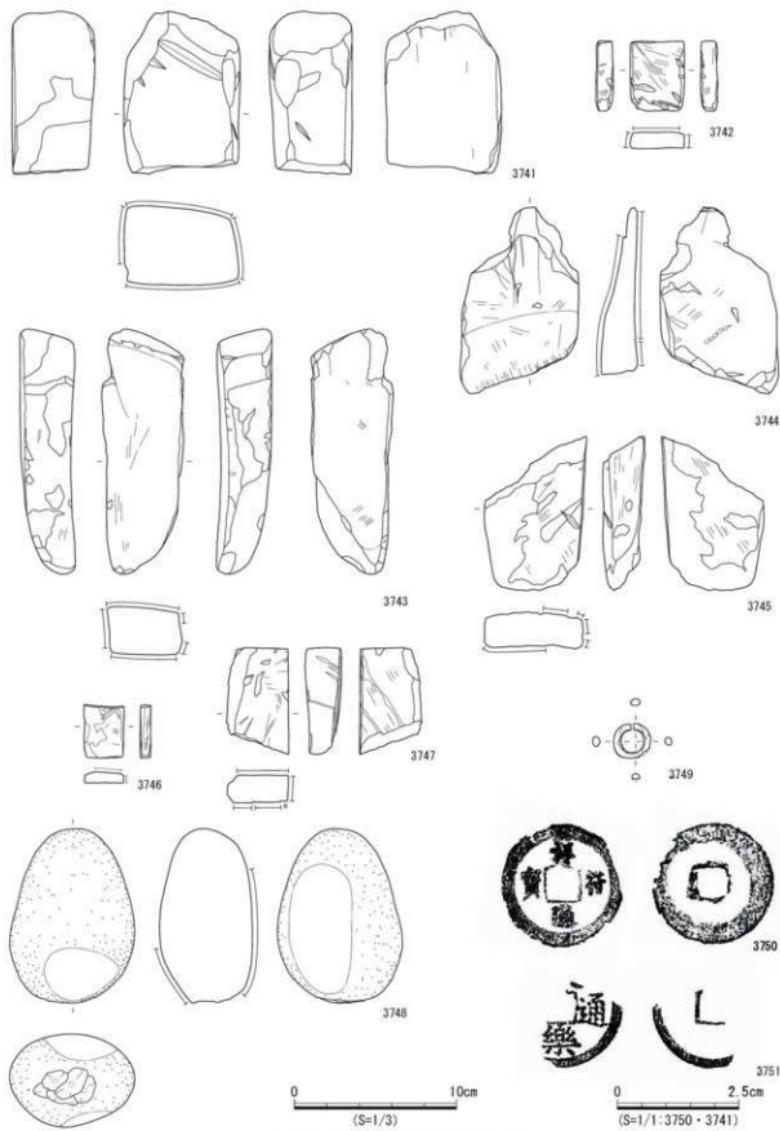


図 647 Ⅲ層等出土遺物実測図 (3)

第5章 自然科学分析

第1節 分析の概要と成果

1 花粉分析とプランツ・オバール分析（第2節）

分析の経緯 17地点南西部で検出した古代末の湿地性堆積と思われる黒褐色土を対象とし、中世以前の古環境を検証することを目的として花粉分析及びプランツ・オバール分析を実施した。

分析の結果と考察 花粉化石は産出せず古代の古環境を検証するための資料を得ることはできなかつたが、ウシクサ族やネザサ族のプランツ・オバールが算出したことにより、比較的乾燥した状態と推定された。また、イネ機動細胞珪酸体とイネ類破片の産出量が水田土壤の目安と比べて少ないことから、中世以前は耕地化が進んでいない環境を反映していると考えられる。

2 石材同定（第3節）

分析の経緯 9地点で検出した上保岩坪1号古墳・同2号古墳の石室に用いられた石材を対象とし、石材の入手経路や当遺跡の北側に隣接する船来山古墳群と比較するための資料化を目的として石材同定を実施した。対象とした石材は、横穴式石室の奥壁及び側壁に用いられた人頭大よりも大きい石材を主とし、上保岩坪1号古墳の棺台に用いられた石材も含めた。また、郡府山の北側石丁場と正傳寺裏山の露頭資料を比較資料とした。

分析の結果と考察 砂岩・礫質砂岩・チャート・花崗閃綠岩の4種類が同定された。砂岩・礫質砂岩は比較資料とした郡府山丘陵の砂岩を、チャート・花崗閃綠岩は近くの根尾川水系の川原石を利用したと考えられ、近隣で容易に入手可能な石材を用いていたことが明らかとなった。

3 ガラス玉の蛍光X線分析（第4節）

分析の経緯 9地点上保岩坪1号古墳の石室内から出土した18点のガラス玉のうち、肉眼観察による各色の計3点を対象として、古墳時代のガラス玉に関する資料を蓄積と、船来山古墳群出土ガラス玉との比較により被葬者の性格を考究する一助とすることを目的として蛍光X線分析を実施した。

分析の結果と考察 3点とも化学組成の特徴から、基礎ガラスはいずれもアルミナソーダ石灰ガラスに属し、銅イオンと鉛スズ化合物の含有量により異なる色調を表していることが明らかとなった。船来山古墳群では、7世紀以降はコバルトで着色された植物灰ソーダガラスの割合が多くなることが指摘されており¹⁾、当古墳から出土したガラス玉とは異なる入手経路を反映している可能性がある。

4 金属製品・鉛滓等の成分分析（第5節（1）～（3））

分析の経緯 4・6・17地点では鍛冶炉や鍛冶滓（鉄滓や銅滴、坩埚）、鉄素材（鉄錠）、製品（刀子や釘）などが出土し、金属製品に関する鍛冶を行っていることが確認された。これらの鍛冶関連遺物を対象とし、鉄やその他の金属に関する資料蓄積と、鍛冶の様相や工程などから遺跡の性格や古代から中世の生業を考える一助とすることを目的として成分分析を実施した。なお、3回に分けて分析を実施したため、各分析を（1）～（3）として結果を掲載した。

分析の結果と考察 4・6・17地点では板状剥片や粒状滓、鉄滓の分析結果から鉄製品の鍛錬鍛冶が行われており、6地点では銅滓や銅滴が付着した坩埚（清郷型鍋）の分析結果から銅製品の鋳造を行

っていたと判断された。また、肉眼観察による分類とは異なる結果を得た分析資料も確認した。

5 獣骨の成分分析（第6節）

分析の経緯 11地点で検出したSD316で、饗宴儀礼と考えられる土師器皿の大量投棄と共に出土した獸骨を対象とし、種の同定と祭祀行為を考究するための資料とすることを目的として、分析を行った。なお、層位的な検討により、土師器皿と近い時期に獸骨も廃棄されたと考えられる。

分析の結果と考察 ウシ、ウマ、シカ、イノシシなどの大型の哺乳綱の哺乳類の四肢骨と同定された。獸骨が出土した溝底面の18層は暗緑灰色粘土の堆積で流水状況を示す埋土では無く、また、周囲から他の部位が出土していないことから、溝の上流より流れてきたのでは無く、人為的に溝に置かれたか投棄された可能性が考えられる。

6 繊維同定（第7節）

分析の経緯 11地点で検出したSK3377から出土した権（2336）の穿孔内に付着していた、糸と思われる繊維状の付着物を対象として、付着物の材質同定を目的として分析を実施した。

分析の結果と考察 アサの韁皮繊維と同定された。棹秆は棹棒と皿・権（鍤）、吊り下げるための紐からなるが、権の出土事例が少なく、また古代～中世のアサの出土例や分析例が少ないとことから、中世の紐素材の選択についての資料となった。

7 木製品樹種同定（第8節）

分析の経緯 11・20・21地点から出土した中世後半の木製品を対象とし、中世の木製品の樹種選択についての基礎資料を得ることを目的として、樹種同定を実施した。

分析の結果と考察 火付木（2024・2614）、一本下駄（2541）、差歛下駄（2023）、曲物底板（2031）、箸（1988）はヒノキ、漆器椀（2540）はトチノキ、柱根（1682）はクリ、杭（1886）はモモ、残材（2542・2543・2615）はマツ属複維管束材とヒノキであった。可児市の柿田遺跡で出土した平安時代～鎌倉時代の木製品樹種の分析とともに傾向が一致することから²⁾、古代から中世を通じて共通した樹種選択を行っていたことを示す可能性がある。

8 漆製品の塗膜構造（第9節（1）・（2））

分析の経緯 4地点・17地点から出土した赤漆片と11地点から出土した赤漆片と赤色漆器と黒色漆器の生材を対象とし、塗装工程や下地材料を明らかとした漆器の品質等から遺跡や使用者の階層を検討するための資料とすることを目的として塗膜構造分析を実施した。2回に分けて分析を実施したため、各分析を（1）・（2）に分けて結果を掲載した。

分析の結果と考察 分析の結果、いずれの塗膜も炭粉洗下地に1層の透明漆層で、黒色の漆は無顔料、赤色の漆は朱を顔料とする赤色漆を1層加えたものと明らかになった。これらの漆器は安価で量産型の漆器に属するもので³⁾、当遺跡の居住者の階層を考える上で一つの資料となった。

注

1) 加藤千里 2019「第3節 ガラス小玉について」『本巣市船来山24号墳 東京国立博物館所蔵資料の調査』本巣市文化財調査報告書 第5集

2) 財团法人岐阜県教育文化財团 2005『柿田遺跡』岐阜県教育文化財团文化財保護センター調査報告書第92集

3) 四柳嘉章 1995『漆器』『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

第2節 花粉分析とプラント・オパール分析

1 花粉分析

17 地点において、湿地性堆積物と考えられている土層が観察された。以下では、採取した試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、分析は森特志（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析試料は、17 地点西壁面 7 層から採取された黒褐色土（10YR3/2）1 点である。試料（湿重量約 3 g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製し、プレパラート 1 枚の全面を検鏡した。

分析の結果と考察 プレパラート 1 枚の全面を検鏡したが、花粉は含まれていなかった。花粉が検出されなかつたため、分布図は示していない。検鏡の結果、分析試料には花粉が含まれていなかつた。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壤バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉が残りにくい。分析試料採取層は乾燥状態（酸化的環境）にあったと考えられ、そのために花粉の保存状態が悪いと思われる。

2 プラント・オパール分析

以下に同様の試料について行ったプラント・オパールの結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお分析は同じく森特志（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 秤量した資料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1 g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスピーブ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20~30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスピーブが 300 個に達するまで行った。なお、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、図 649 に示した。

分析の結果と考察 同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーブ個数の比率から試料 1 g 当りの各プラント・オパール個数を求めた。一覧表を表 5 に、分布図を図 648 に示す。なお、以下に記す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1 g 当りの検出個数である。検鏡の結果、イネとネザサ節型、ササ属型、他のタケ亞科、キビ族、ウシクサ族の 6 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。このうち、最も産出が多いのがウシクサ族機動細胞珪酸体で 33,600 個である。次いでネザサ節型機動細胞珪酸体が 15,100 個となる。その他にはイネの穂穀に形成されるイネ穎破片の産出も確認できた。

表 5 試料 1 g 当りのプラント・オパール個数

イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亞科 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)
2,600	2,600	18,100	1,300	6,500	2,600	33,600

植物珪酸体はガラス質であるため乾燥状態でも良好に保存される。プラント・オパール分析の結果では、ウシクサ族機動細胞珪酸体が多く产出し、次いでネザサ節型機動細胞珪酸体の产出が目立つ。試料採取地点周辺にはススキやチガヤなどのウシクサ族やネザサ節のササ類が分布を広げていたと考えられる。ウシクサ族（オギを除く）やネザサ節のササ類は比較的乾いた場所に生育するイネ科植物であり、プラント・オパール分析の結果からも、試料採取地点周辺は比較的乾燥した場所であったと推測できる。さらに、分析試料ではイネ機動細胞珪酸体とイネ頸片の产出が確認できた。イネ機動細胞珪酸体の产出量については、試料1g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており¹⁾、試料1g当り5,000個が水田土壤か否かを判断する目安とされている。17地点の7層から产出するイネ機動細胞珪酸体の产出量は水田土壤の目安に比べると少なく、稲作地の可能性は低いと考えられるが、17地点の7層はイネの葉身やイネの初穂が堆積する場所であったと思われる。

注

- 1) 藤原宏志 1984「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」『考古学ジャーナル』227、ニューサイエンス社2-7頁

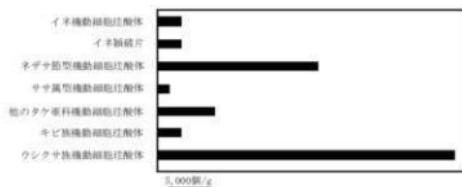


図648 植物珪酸体分布図

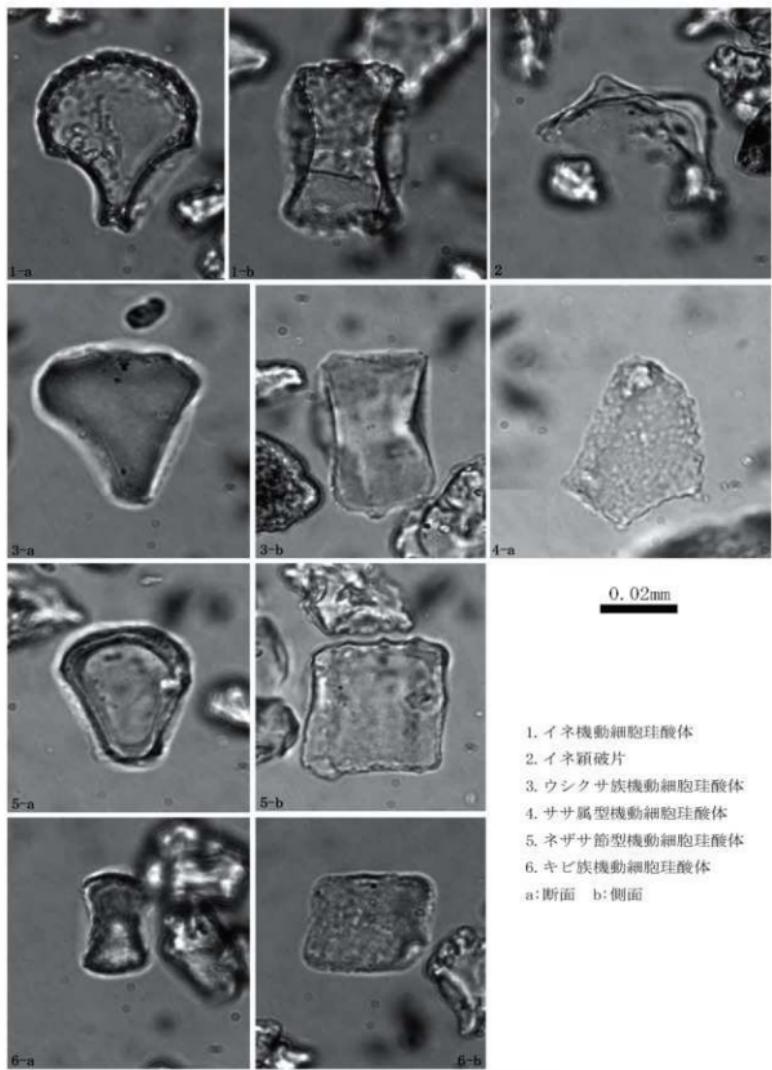


図 649 上保本郷遺跡東地区から産出した植物珪酸体

第3節 石材同定

上保本郷遺跡の上保岩坪1号古墳及び上保岩坪2号古墳の石室石材について、肉眼および実体顕微鏡による石材同定を実施した。なお、分析は藤根久・中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、石室石材62点である（図650）。また、上保本郷遺跡に隣接する郡府山の2ヶ所（北側石丁場、正傳寺跡裏山）において、露頭観察と岩石採取を行い、比較試料とした。これらの石材は、肉眼および実体顕微鏡による観察を行い、石材同定を行った。

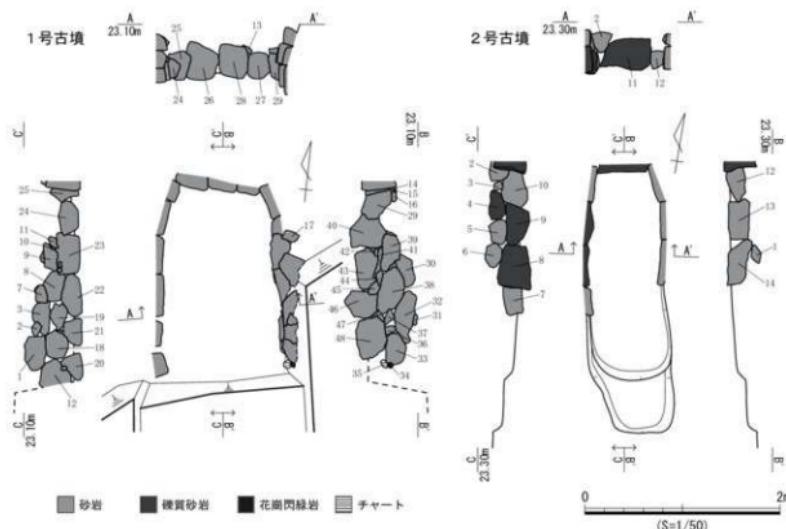


図650 上保岩坪1号古墳・2号古墳の試料番号と石材

分析の結果と考察 肉眼および実体顕微鏡による観察から、表6で示すようにチャート・砂岩・矽質砂岩・花崗閃綠岩の4種類の石材が同定された。各試料の石材の分類を表7で示した。また実体顕微鏡写真を図651-1～8に示した。以下に、各石材の肉眼および実体顕微鏡観察による特徴について述べる。

①チャート（試料No.35）

この石材は、黒灰色のガラス質の岩石である（図651-1）。なお、このチャートは、直径約10cm程度の円盤である。

②砂岩（上保岩坪2号古墳：試料No.1～3・5～7・10～14、上保岩坪1号古墳：試料No.1～33・36～48、北側石丁場：試料No.1、正傳寺跡裏山：資料No.1）

これらの石材は、浅黄～灰黄～にぶい黄橙～淡黄色などを呈し、細粒砂から構成される岩石である（図 651-2・3・7）。なお、正傳寺跡裏山の砂岩は、新鮮面において灰白色である（図 651-8）。

③礫質砂岩（上保岩坪 2 号古墳：試料 No. 4・8・9・11）

これらの石材は、灰黄褐～にぶい黄色などを呈し、2～3mm の黒色礫が混じる細粒砂から構成される岩石である（図 651-4・5）。

④花崗閃綠岩（上保岩坪 1 号古墳：試料 No. 34）

この石材は、オリーブ黄色を呈し、石英・長石・黒雲母からなる完晶質の岩石である（図 651-6）。なお、この花崗閃綠岩は、直径約 6cm 程度の円礫である。

石材は、上保岩坪 2 号古墳では、砂岩 10 点、礫質砂岩 4 点であった。上保岩坪 1 号古墳では、チャート 1 点、砂岩 46 点、花崗閃綠岩 1 点であった。

表 6 上保岩坪 1 号・2 号古墳石室石材と比較試料

分析No.	遺構	試料No.	岩石	備考	分析No.	遺構	試料No.	岩石	備考
1	上保岩坪 2 号古墳	1	砂岩		33	上保岩坪 1 号古墳	19	砂岩	
2		2	砂岩	被熱	34		20	砂岩	
3		3	砂岩		35		21	砂岩	
4		4	礫質砂岩	礫：黑色泥岩	36		22	砂岩	
5		5	砂岩		37		23	砂岩	
6		6	砂岩	被熱	38		24	砂岩	
7		7	砂岩		39		25	砂岩	
8		8	礫質砂岩	礫：黑色泥岩	40		26	砂岩	
9		9	礫質砂岩	礫：黑色泥岩	41		27	砂岩	
10		10	砂岩	礫混じり	42		28	砂岩	
11		11	礫質砂岩	礫：黑色泥岩	43		29	砂岩	
12		12	砂岩	礫混じり	44		30	砂岩	
13		13	砂岩	礫混じり	45		31	砂岩	礫混じり
14		14	砂岩	礫混じり	46		32	砂岩	
15	上保岩坪 1 号古墳	1	砂岩		47		33	砂岩	礫混じり
16		2	砂岩		48		34	花崗閃綠岩	円礫
17		3	砂岩		49		35	チャート	円礫
18		4	砂岩		50		36	砂岩	
19		5	砂岩		51		37	砂岩	
20		6	砂岩		52		38	砂岩	
21		7	砂岩		53		39	砂岩	手斧痕
22		8	砂岩		54		40	砂岩	手斧痕
23		9	砂岩		55		41	砂岩	
24		10	砂岩		56		42	砂岩	
25		11	砂岩		57		43	砂岩	
26		12	砂岩		58		44	砂岩	
27		13	砂岩		59		45	砂岩	
28		14	砂岩		60		46	砂岩	
29		15	砂岩		61		47	砂岩	礫混じり
30		16	砂岩		62		48	砂岩	
31		17	砂岩		63	北側石丁場	1	砂岩	
32		18	砂岩		64	正傳寺跡裏山	1	砂岩	

表 7 上保岩坪 1 号・2 号古墳石室石材と比較試料の分類

岩石	小分類	大分類	遺構		比較試料		総計
			上保岩坪 2 号古墳	上保岩坪 1 号古墳	北側石丁場	正傳寺跡裏山	
チャート	化岩岩			1			1
砂岩	堆積岩類		10	46	1	1	58
礫質砂岩			4				4
花崗閃綠岩	深成岩	火成岩類		1			1
	総計		14	48	1	1	64

上保本郷遺跡の北側丘陵には、古生代後期－中世代の美濃帯、那比・上麻生及び金山ユニットの砂岩が分布する（図 652）。この北側丘陵部には、石丁場跡が見られるが、石室石材の砂岩と類似した岩石が見られた（図 651-7・8）。上保岩坪 1 号古墳の No. 39 と No. 40 の岩石には、手斧痕が見られたことから、北側丘陵部などに分布する岩石を切り出して使用したことが考えられる。

なお、チャートと花崗閃緑岩は握りこぶし程度の円礫であることから、主に根尾川により運ばれてきた川原の礫を利用したと考えられる。

注

i) 猿投変動と呼ばれる：日本の地質「中部地方 II」編集委員会編 1988 「日本の地質 5」『中部地方 II』共立出版。

引用・参考文献

岐阜西開発株式会社・財团法人岐阜市教育文化振興事業団 2007 『船来山古墳群』

駒田浩二・原山 智・鹿野和彦・三村弘二・坂本 亨・広島俊男・駒沢正夫 1992 「20万分の 1 地質図幅」『岐阜』通商産業省
工業技術院地質調査所

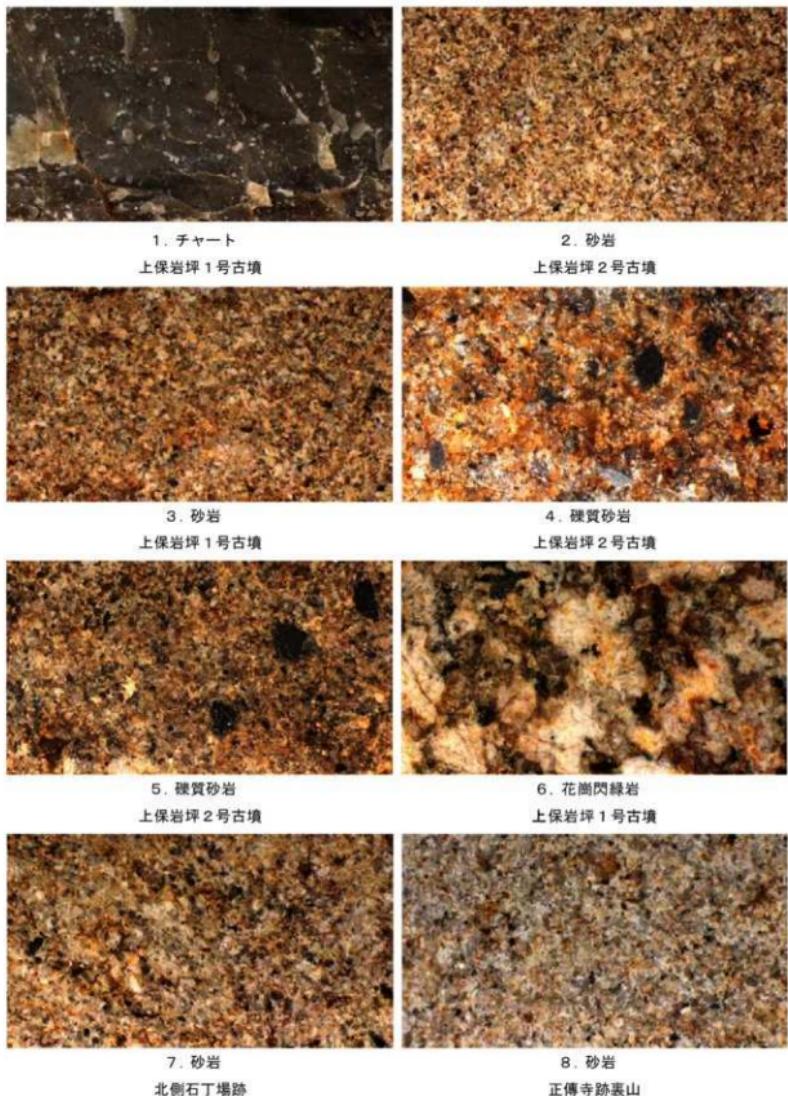


図 651 石材の実体顕微鏡写真

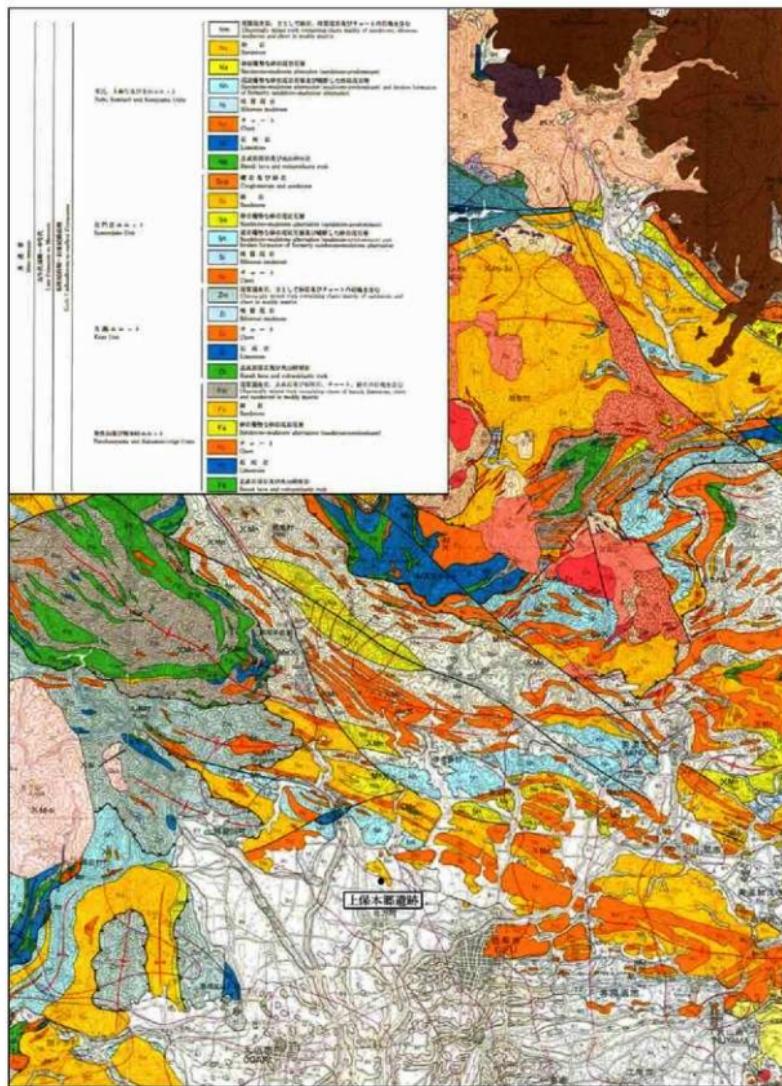


図 652 上保本郷遺跡とその周辺の地質（脇田ほか（1922）を抜粋・編集）

第4節 ガラス玉蛍光X線分析

上保岩坪1号古墳から出土したガラス玉について、蛍光X線分析による元素分析及び元素マッピング分析を実施した。なお、分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、ガラス玉3点（図17-20・22・28）である（表8）。時期は、7世紀初頭と考えられる。各試料について、蛍光X線分析装置による1mm照射径での面分析と、10μm照射径での元素マッピング分析を行った。

表8 分析対象一覧

No.	色調	遺跡番号	地点	図番号	開載番号	取上番号	遺構名	出土遺構層位	法量(cm, g)		
									直徑(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	緑	15801		9	17	20	6049-1	上保岩坪1号古墳	B327	1	0.3 0.2 0.1
2	黄	15801				28	6322-7	上保岩坪1号古墳	B327	2	0.3 0.2 0.1
3	青緑	15801				22	6322-1	上保岩坪1号古墳	B327	2	0.3 0.2 0.1

面分析には、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000μAのロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)であるが、ナトリウム、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)といった軽元素は、蛍光X線分析装置の性質上検出感度が悪い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV(一次フィルタ無し)・50kV(一次フィルタPb測定用・Cd測定用)の計3条件で、測定時間は各条件500～1700s、管電流自動設定、照射径1mm、試料室内雰囲気真空中に設定した。定量分析は、酸化物の形で合計が100%になるよう算出する、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。得られる半定量値は、同装置での測定結果を相対的に比較するための値である。

元素マッピング分析には、株式会社堀場製作所製の分析顕微鏡XGT-5000TypeIIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、X線検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)である。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により元素マッピング分析が可能となる。測定条件は、管電圧50kV、管電流1.00mA、ビーム径10μm、測定時間10000sを4回走査、画素数512×512に設定した。また走査幅は、今回の測定条件下での最小範囲である1.024mm四方に設定した。

表9に各蛍光X線分析装置の仕様の一覧を示す。

各試料は、エタノールで軽く洗浄し、実体顕微鏡下での観察後、非破壊で測定した。なお、ガラス製遺物は、透明で風化がないように見える箇所でも表面の風化が進んでおり、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化カリウム(K₂O)の減少など化学組成に変化が生じている(肥塚1997)。人為的に露出させた完全な新鮮面でない場合は、解釈の際に風化の影響を考慮す

表9 蛍光X線分析装置仕様

	SEA1200VX	XGT-5000TypeII
管電圧	50kV	
最大電流	1mA	
ターゲット	Rh	
照射径	8mm or 1mm	100μm or 10μm
集光電子	コリメータ	モノキャビラリ
一次フィルタ	内蔵(4種)	無し
照射方式	下面照射	上面照射
検出機構	SDD	エネルギー分散型
検出器	SDD	HP-SI
元素マッピング分析	不可	可能

る必要がある。

分析の結果と考察 1 mm 照射径での面分析により得られた半定量値を表 10 に示す。なお、表では考察で述べる化学組成上の分類に従って試料の順番を並べ替えてある。また、実体顕微鏡写真を図 653-1、図 654-1、図 655-1 に、10 μm 照射径での 1.024mm 四方範囲の元素マッピング分析により得られたアルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、ストロンチウム (Sr)、ジルコニウム (Zr)、スズ (Sn)、バリウム (Ba)、鉛 (Pb) のマッピング図を図 653-2、図 654-2、図 655-2 に示す。

表10 半定量分析結果 (mass%)

No.	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Br	SrO	ZrO ₂	SnO ₂	BaO	PbO
1	緑	2.78	0.93	16.66	67.46	0.59	0.61	2.59	2.56	0.44	0.05	1.95	0.76	0.01	0.01	0.08	0.08	0.17	0.22	2.07
2	黄	10.90	0.70	14.15	62.11	0.49	0.64	2.06	2.79	0.46	0.07	2.64	0.01	—	0.01	0.08	0.09	0.28	0.23	2.40
3	青緑	9.54	0.52	9.63	67.59	0.59	0.78	1.73	5.23	0.62	0.05	1.90	0.63	—	—	0.08	0.08	—	1.02	0.01
管電圧 測定条件 分析線										15kV	50kV									
フィルタ 一次フィルタ無し										Pb用フィルタ										La用 無し Pb用 La

蛍光X線分析を行った結果、いずれもアルカリ金属と二酸化ケイ素 (SiO₂) を主成分とするアルカリ珪酸塩ガラスに属するガラスであった。

検出できた元素は試料によって異なるが、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、二酸化ケイ素 (SiO₂)、酸化リン (P₂O₅)、酸化硫黄 (SO₃)、酸化カリウム (K₂O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO₂)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe₂O₃)、酸化銅 (CuO)、酸化亜鉛 (ZnO)、臭素 (Br)、酸化ストロンチウム (SrO)、酸化ジルコニウム (ZrO₂)、酸化スズ (SnO₂)、酸化バリウム (BaO)、酸化鉛 (PbO) の合計 19 元素が検出された。

今回分析した試料は、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化アルミニウム (Al₂O₃) の量が多く、酸化カルシウム (CaO) をある程度含有し、酸化ルビジウム (Rb₂O) が少なく、酸化ストロンチウム (SrO) と酸化ジルコニウム (ZrO₂) が比較的多いなどの特徴により、基礎ガラスはいずれもアルミナソーダ石灰ガラス (Na₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂系) に属すると考えられる。試料 No. 1 の酸化ナトリウム (Na₂O) がやや少ないのは、風化の影響によると考えられる。

試料 No. 1 の緑色ガラス玉は、青緑色のガラス（試料 No. 3）と比べると、酸化銅 (CuO) に加えて、酸化スズ (SnO₂) と酸化鉛 (PbO) の含有量が多かった。

試料 No. 2 の黄色ガラス玉は、緑色ガラス玉（試料 No. 1）と比べると、酸化スズ (SnO₂) と酸化鉛 (PbO) の含有量がさらに多い一方、酸化銅 (CuO) は極めて少なかった。

試料 No. 3 の青緑色のガラス玉は、酸化銅 (CuO) が検出されるが、酸化スズ (SnO₂) と酸化鉛 (PbO) の含有量は少なかった。

これらのことからガラス玉の色調は、銅イオン、および黄色顔料の鉛スズ化合物の多寡により説明できる。すなわち、試料 No. 1 は銅イオンに加えて鉛スズ化合物の黄色顔料の添加により緑色を呈し、試料 No. 2 は銅が入らないため鉛スズ化合物による黄色となる。元素マッピング分析においても、黄色顔料の成分である鉛とスズは均一には分布していない様子が示された。試料 No. 3 は銅イオンにより青緑色に着色される。

また、元素マッピング分析では、上述のスズ (Sn) と鉛 (Pb) の他に、特にジルコニウム (Zr) の分布が不均一である様子が顕著に確認された。ジルコニウム (Zr) は、数 $10\text{ }\mu\text{m}$ ほどの粒子状に分散していた。スズ (Sn) と鉛 (Pb) は、今回の分析では粒子としてはどちらえきれておらず、少なくとも試料の表面付近においては、さらに細かい粒子の状態で分散していると考えられる。

実体顕微鏡観察の結果、ガラス中に気泡が多くみられ、いずれの試料も気泡が孔に対して平行に筋状に連なっている様子が観察された。この特徴からいずれの試料もガラスを管状に引き伸ばした後、管を切って製作されたと推定される。

引用・参考文献

- 大賀克彦・田村朋美 2015 「弥生時代後期におけるガラス玉の地域性に関する考古科学的研究」『日本文化財科学会第32回研究発表要旨集』24-25。
- 作花济夫・境野照雄・高橋克明編 1975 『ガラスハンドブック』朝倉書店。
- 白瀧絢子・阿部善也・タンタラカーン・クリアンカモル・中井 泉・池田朋生・坂口圭太郎・後藤克博 2010 「熊本県の古墳から出土したガラスピースの考古化学的研究」『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集』254-255。
- 白瀧絢子・阿部善也・K. タンタラカーン・中井 泉・池田朋生・坂口圭太郎・後藤克博・荒木隆宏 2012 「熊本県出土の古代ガラスの考古化学的研究」『考古学と自然科学』63, 29-52。
- 竹原弘展 2010 「蔚屋北遺跡出土ガラス等玉類の蛍光X分析」大阪府教育委員会編『蔚屋北遺跡、1 総括・分析編』214-231、大阪府教育委員会。
- 中井 泉編 2005 『蛍光X線分析の実際』朝倉書店。
- 肥塚隆保 1997 「日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究」東京藝術大学博士学位論文。
- 肥塚隆保 2003 「日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史的変遷—」沢田正昭編『遺物の保存と調査』145-158、ケバブロ。
- 松崎真弓・白瀧絢子・池田朋生・中井 泉 2012 「非破壊オンライン分析による日本出土の古代ガラスの流通に関する考古化学的研究」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』374-375。

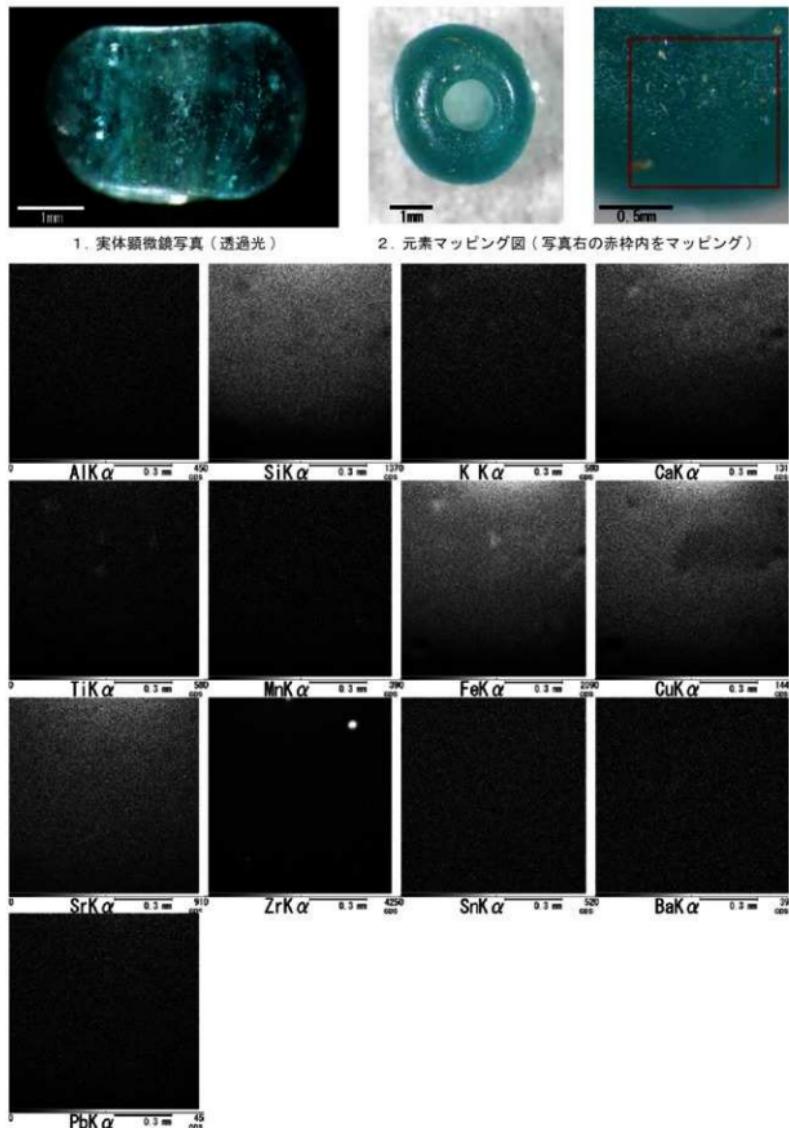


図 653 ガラス玉の蛍光X線分析（分析 No. 1）

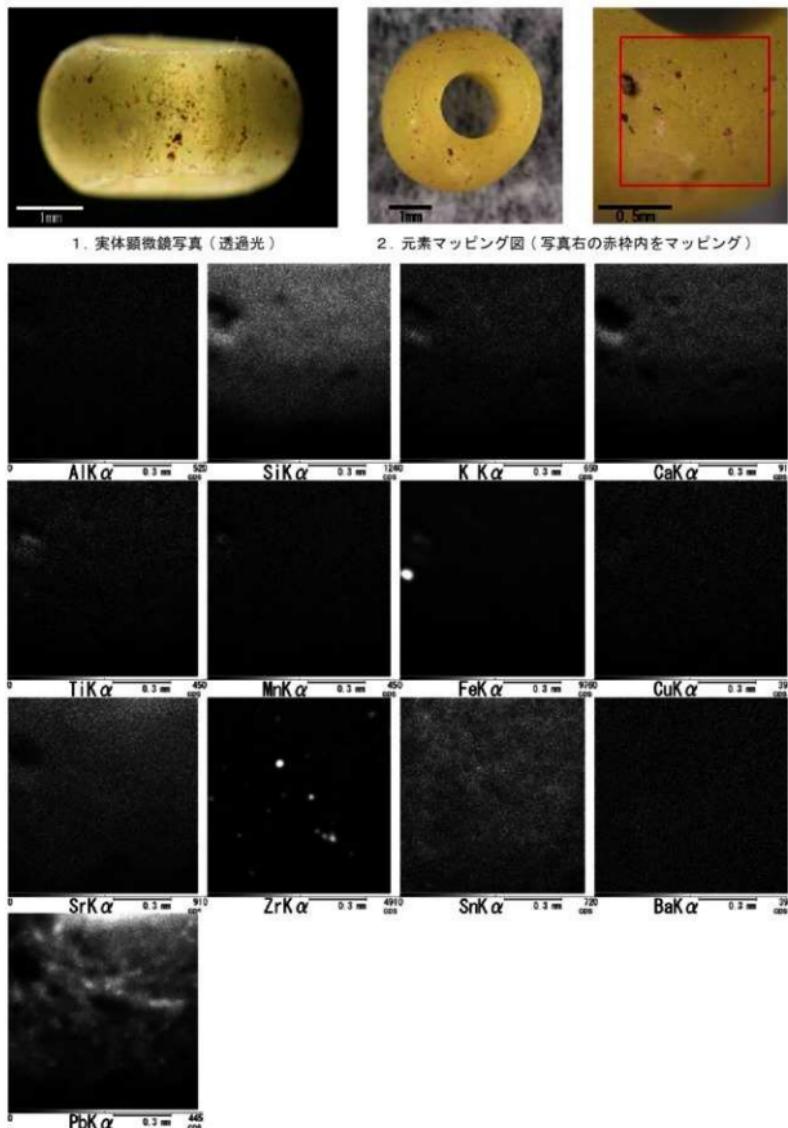


図 654 ガラス玉の蛍光X線分析（分析 No. 2）

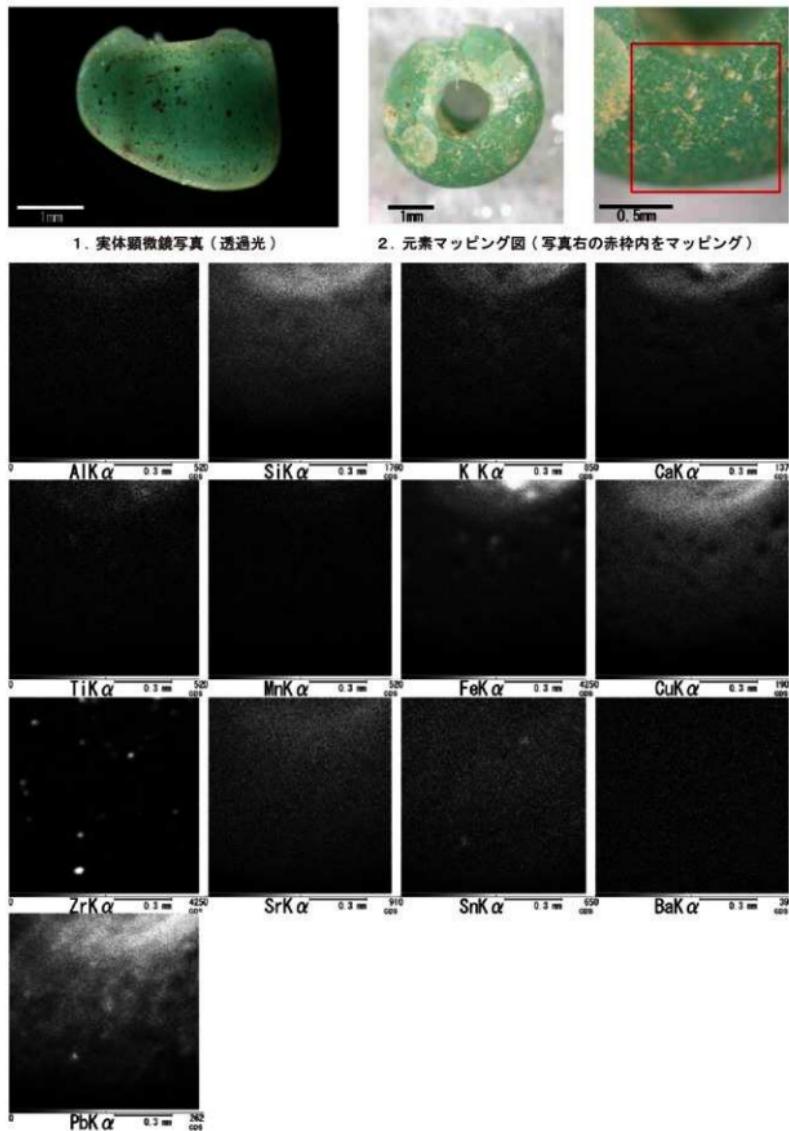


図 655 ガラス玉の蛍光X線分析（分析 No. 3）

第5節 鉱滓・鍛冶関連遺物の成分分析（1）

平成27年度に実施した4・6・17地点より出土した鉄関連遺物について、遺跡で行われた金属生産活動の調査を目的として、断面観察およびX線分析を行い、材質を検討した。なお、分析は竹原弘展（株式会社バレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、4地点および6・17地点より出土した鉄関連遺物23点である（表11）。時期は、4地点出土遺物が中世、6・17地点出土遺物が古代後半から中世前半とみられている。No.20以外は、いずれも磁着が認められ、観察・測定面は比較的磁着の強い箇所を選び、断面試料を作製して観察・分析を行った。

表11 分析対象一覧

No.	遺跡番号	地点	発掘番号	採取番号	取上番号	遺構名	出土遺物	出土層位	法量(g, cm)				種別
									重量	長さ	幅	厚さ	
1	1500	4	586	3230	1489-27	SK5464	B326①	I	262.4	7.3	6.5	3.5	鉄塊
2	1500	6	60	390	2751-3	SK749	C342②	2	34.3	4.2	3.0	1.5	鉄塊
3	1500	4	630	3511	1623-45	SB445	B364①	a	16.7	3.4	1.5	1.5	鉄製品
4	1500	4	519	2982	1522-36	S115	B304①	b	18.2	3.3	3.8	1.5	鉄製品
5	1500	6	55	373	2757-4	SL6	C340	2					板状剝片
6	1500	6	54	368	2762-8	SL4・SL5	C341	燒土面上					板状剝片
7	1500	6	56	374	2799-6	SL7	C345	4					板状剝片
8	1500	6	57	379	2800-6	SL8	C345	6					板状剝片
9	1500	4	583	3213	5801-13	SK5424	B610	2					板状剝片
10	1500	4	583	3214	5799-25	SK5424	B610	4					板状剝片
11	1500	6	54	369	2762-9	SL4・SL5	C341	燒土面上					粒状滓
12	1500	4	583	3212	5801-14	SK5424	B610	2					粒状滓
13	1500	4	583	3211	5799-26	SK5424	B610	4					粒状滓
14	1500	6	59	385	2396-2	SP60	C344②	4	197.2	7.5	5.0	3.7	楕形滓
15	1500	4	608	3370	5611-1	SK5926	B667	1	109.4	7.7	4.8	2.4	楕形滓
16	1600	17	89	623	2049-1	SD193	E657		105.8	5.0	5.5	1.5	楕形滓
17	1600	17	89	624	2050-1	SD193	E657		86.2	6.5	4.5	2.5	楕形滓
18	1500	4	572	3149	5460-1	SK5395	B622②	2	435.3	18.0	3.5	3.0	鉄瓶
19	1500	6	60	391	2751-1	SK749	C342②	2	410.5	15.0	4.0	3.0	鉄瓶
20	1500	6	66	426	2454-63	包含層			101.6	4.3	2.3	0.5	土器付着金属
21	1500	6	54	372	2504-1	SL4・SL5	C341⑤	5	19.8	4.2	3.5	1.0	鐵か
22	1500	4	625	3454	1245-58	SD414	B238①	a	3.0	2.5	2.3	0.3	鉄製品
23	1500	6	57	382	2560-1	SL8	C345②	a	12.9	5.0	1.8	0.5	鉄製品

まず、各試料の一部を岩石カッターで切り取り、超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製SEA1200VX、照射径8mm or 1mm：以後XRF分析）を行い、採取部位の化学組成を調べた。続いて、注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。図656～664の遺物写真に採取部位を示す。なお、No.5～13の板状剝片と粒状滓といった小型の試料は、丸ごと蛍光X線分析を行った後、包埋した。包埋試料は、ディスクプランで研磨した後、超精密研磨フィルムの#1000・4000・8000の順で研磨し、観察・分析面とした。金属鉄の残存が確認できた試料については、ナイタル（硝酸エタノール溶液）によるエッチングを行い、光学顕微鏡で金属組織を観察した。金属鉄の残存していないその他試料、および鉄滓組織が確認された試料については、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200、以後EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

分析の結果と考察

XRF 分析による半定量値を表 12～表 14 に示す。なお、表 12 は金属鉄ないし錆化鉄、表 13 は No. 20 の土器付着金属、表 14 は鉄滓（酸化物表記）の測定結果を示している。また、光学顕微鏡写真および SEM 反射電子像を図 656～664 に、金属組織観察結果を表 15 に、SEM 反射電子像に示した a～d のポイントの EDS 分析結果を表 16 に示す。

[No. 1・2] 鉄塊

XRF 分析では、微量のアルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、リン (P)、硫黄 (S)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、バナジウム (V)、クロム (Cr)、コバルト (Co)、銅 (Cu)、ヒ素 (As) 等が検出された。

金属組織の観察では、No. 1 からは針状のフェライトとパーライトとみられる組織が観察された（図 656-2・3）。亜共析鋼（炭素量 0.77%未満）と考えられる。フェライトが針状に大きく発達した過熱組織で、冷却に時間がかかったものと推定される。

No. 2 からは、網状のセメントタイトの内部にパーライトとみられる組織が観察された（図 656-5・6）。過共析鋼（炭素量 0.77%より多い）と考えられる。

以上、2 点いずれも鋼鉄の範疇に入る鉄素材とみられる。

表12 XRF分析による金属鉄ないし錆化鉄の半定量値 (mass%)

No.	照射径	Al	Si	P	S	Ca	Ti	V	Cr	Fe	Co	Cu	As	Mo	測定位置
1	—	—	0.19	0.72	0.43	0.13	0.03	—	0.01	97.96	0.45	0.08	0.01	—	金属鉄
2	—	0.13	0.13	—	—	0.07	0.04	0.01	99.16	0.46	—	—	—	金属鉄	
3	—	0.33	0.55	0.22	0.05	—	—	0.08	0.01	98.18	0.55	0.02	—	—	金属鉄
4	—	—	0.82	0.51	0.19	0.12	—	0.03	0.02	98.03	0.24	0.04	—	—	金属鉄
14	1mm	—	0.17	0.27	0.15	—	—	0.06	0.01	98.85	0.36	0.11	0.01	0.01	金属鉄
18	—	0.30	0.27	0.27	—	0.05	0.05	0.01	98.52	0.54	—	—	—	金属鉄	
19	—	0.55	0.40	—	—	0.06	0.08	0.01	98.38	0.52	—	0.01	—	金属鉄	
21	—	3.83	16.34	0.50	0.15	0.59	0.23	—	0.02	77.79	0.45	0.09	0.01	—	錆化鉄
22	—	1.74	1.38	0.70	0.33	0.08	—	—	0.05	95.49	0.23	—	—	—	錆化鉄
23	—	1.60	6.87	0.19	0.06	0.25	0.30	—	0.03	90.44	0.27	—	—	—	金属鉄

ただし、金属鉄を測定箇所とした試料でも、周辺の金属鉄以外の部分を拾っている可能性がある。

表13 XRF分析による土器付着金属の半定量値 (mass%)

No.	照射径	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb	Bi	測定位置
1	1mm	77.73	1.04	0.46	7.97	0.16	12.52	0.12	金属鉄

[No. 1・2] 板状剥片・粒状滓

XRF 分析では、微量のアルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、リン (P)、硫黄 (S)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、バナジウム (V)、クロム (Cr)、コバルト (Co)、銅 (Cu)、ヒ素 (As) 等が検出された。

金属組織の観察では、No. 1 からは板状のフェライトとパーライトとみられる組織が観察された（図 657-7、図 658-2 の a）と残りの部分（同図 b）の計 2 層に分かれている様子が観察された。EDS 分析では、2 層とも鉄と酸素が検出された。

反射電子像では、像のコントラストは物質の原子番号に依存するため、暗く映し出されている表層の

表14 XRF分析による鉄滓類の半定量値 (mass%)

No.	照射径	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	FeO	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CaO	ZnO	As ₂ O ₃	Rb ₂ O	SeO ₂	ZrO ₂	MoO ₃	SnO ₂	BaO	PtO	
5	—	—	3.14	2.79	0.76	0.35	1.48	0.25	0.45	—	—	90.78	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6	—	—	5.28	6.58	0.83	0.83	0.24	0.35	—	—	85.88	0.01	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	—	—	2.81	2.60	0.81	0.00	0.28	0.24	—	—	0.06	93.21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	1mm	1.16	8.80	15.87	0.81	0.00	0.53	0.18	0.26	0.04	0.04	72.32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	—	1.48	9.05	8.37	1.3	1.30	0.38	0.95	0.44	0.08	0.11	74.67	—	0.01	0.01	0.01	0.04	0.01	—	—	0.05	0.01	—
10	—	1.64	6.85	13.43	2.30	0.41	0.37	0.32	0.44	0.03	0.09	74.11	0.01	0.01	—	—	—	—	—	—	—	—	0.01
11	—	0.79	9.23	11.99	2.76	1.36	0.32	0.86	0.37	—	0.07	72.14	0.09	—	—	—	—	0.01	—	—	—	—	0.02
12	—	0.91	7.13	16.65	9.92	0.17	0.46	1.49	0.19	—	0.23	62.79	0.01	0.01	0.01	—	0.01	—	—	—	—	—	0.02
13	—	—	4.19	11.68	2.51	0.20	0.30	0.26	0.41	0.08	0.06	80.31	—	—	—	—	—	—	0.01	—	—	—	—
14	—	—	2.64	9.33	0.42	1.30	0.20	0.19	0.22	0.03	—	85.62	0.01	—	0.01	—	—	0.01	0.01	—	0.01	0.01	0.01
15	8mm	—	0.43	1.29	0.54	0.14	0.00	0.09	0.23	0.03	—	96.67	0.38	—	0.04	—	—	—	—	0.04	—	—	0.06
16	—	0.53	5.17	13.02	0.87	0.18	0.23	0.48	0.20	—	0.10	79.21	0.01	—	—	—	—	—	—	—	0.01	—	—
17	—	—	4.83	10.27	0.60	0.16	0.22	0.40	0.22	0.03	0.05	83.19	0.01	—	—	—	—	0.01	—	—	0.01	—	—

[No. 5～13] 板状剥片・粒状滓

No. 5 と No. 6 は、SEM 反射電子像では表面約 10 μm ほど（図 657-7、図 658-2 の a）と残りの部分

（同図 b）の計 2 層に分かれている様子が観察された。EDS 分析では、2 層とも鉄と酸素が検出された。

反射電子像では、像のコントラストは物質の原子番号に依存するため、暗く映し出されている表層の

方が、原子番号の小さい酸素の割合が高いと考えられる。したがって、表層がマグネタイト (Fe_3O_4)、内層がウスタイト (FeO) と推定される。No. 5 は表面近くのウスタイトが非晶質化しているのに対し、No. 6 は粒子が残る。いずれも鍛錬鍛冶に伴い発生する鍛造剥片と考えられる。

No. 7・8・10 は、表面に層らしきものが観察されるものの、上述 2 点とはやや様子が異なっており、鍛造剥片か鍛治滓の破片か判断できなかった（図 658-5・8、図 659-6）。鍛造剥片だとすると、いずれもウスタイトは粒状を示しており、鍛打が進んでいない段階での発生物と考えられる。

No. 9 は、ガラス質滓が多くを占めており、鍛治滓の微細な破片と考えられる（図 659-3）。

No. 11～13 は、暗色のガラス質（図 660-1・4・7 の c）中に明色のウスタイト（同 a）と中間色のファイヤライト ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)（同 b）が晶出しており、鍛錬鍛冶に伴い発生する粒状滓と考えられる。No. 12 と No. 13 は、中は大部分が空洞となっていた。

[No. 14～17] 鉄滓・銅滓？

XRF 分析では、いずれも鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 80%以上と高い割合で検出された。チタン (TiO_2) 含有量は少ない。いずれもウスタイト（図 661-4・7、図 662-2・5 の a）とファイヤライト（同 b）が確認されている。

No. 14・16・17 は、チタン含有量は少なく、チタンを含む結晶鉱物はみられない。ウスタイトが多く晶出しているなどの特徴より、鍛治滓の

表15 鉄の金属組織観察結果

No.	観察される組織	所見
1	針状フェライト、パーライト	亜共析鋼の過熱組織
2	網状のセメントタイト、パーライト	過共析鋼
3	網状のセメントタイト、パーライト	過共析鋼
4	パーライト	共析鋼
14	フェライト、パーライト	亜共析鋼
18	針状フェライト、パーライト	亜共析鋼の過熱組織
19	フェライト、パーライト	亜共析鋼
23	フェライト、パーライト	共析鋼

表16 EDS分析結果

No.	ポイント	検出元素	組織	所見
5	a	O, Fe	マグネタイト	鍛造剥片
	b	O, Fe	非晶質ウスタイト	
	c	O, Fe	ウスタイト	
	d	O, Si, Fe	ファイヤライト	
6	a	O, Fe	マグネタイト	鍛造剥片
	b	O, Fe	ウスタイト	
7	a	O, Fe	ウスタイト	鍛造剥片 または鉄滓破片
	b	O, Fe	ウスタイト	
	c	O, Si, Fe	ファイヤライト	
8	a	O, Fe	ウスタイト	鍛造剥片 または鉄滓破片
	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	
	c	O, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
9	a	O, Si, Fe	ファイヤライト	鉄滓破片
	b	O, Al, Si, K, Fe	ガラス質	
	c	O, Si, (Fe)	石英	
10	a	O, Fe	ウスタイト	鍛造剥片 または鉄滓破片
	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	
11	a	O, Fe	ウスタイト	粒状滓
	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	
12	c	O, Al, Si, Fe	ガラス質	粒状滓
	a	O, Fe	ウスタイト	
13	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	粒状滓
	a	O, Fe	ウスタイト	
14	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	含鉻榴鉬治滓 (鉄滓鉬治滓か)
	c	O, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
	a	O, Fe	ウスタイト	
15	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	鋼滓か
	a	O, Fe	ウスタイト	
16	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	塊形鉄滓 (鉄滓鉬治滓か)
	a	O, Fe	ウスタイト	
17	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	鉄治滓 (鉄滓鉬治滓か)
	c	O, Na, Al, Si, K, Fe	ガラス質	
	a	Cu		
20	b	Sn, Cu, Pb		青銅の溶融付着物
	c	Pb, Cu, Sn		
21	a	O, Fe, (Si)	鈣化鉄	鉄製品
	b	O, Fe, (Si)	鈣化鉄	
	c	O, Fe, (Si)	鈣化鉄	
	d	O, Al, Si, K, Fe	土	
22	a	O, Fe	鈣化鉄	鉄製品
	a	Fe	金屬鉄	
23	b	O, Si, (S), Ti, Fe	ウルボスピネル?	鉄製品 (砂鉄起源か)
	c	O, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	

中でも鍛錬鍛治滓と推定される。No. 14 からは、金属鉄も観察された。フェライトとパーライトからなる亜共析鋼と考えられる（図 661-1・2）。

No. 15 は、XRF 分析で銅 (CuO) がやや多く検出されており、スズ (Sn)、鉛 (Pb) も検出されているのが、他試料と大きく異なる特徴である。銅粒などの組織は確認されなかつたが、鉄滓ではなく、銅滓である可能性がある。

[No. 18・19] 鉄錠

XRF 分析では、微量のケイ素、リン、チタン、バナジウム、クロム、コバルト等が検出された。金属組織の観察では、No. 18 からは針状フェライトにパーライトとみられる組織が観察された（図 662-7・8）。亜共析鋼と考えられる。フェライトが針状に大きく発達した過熱組織で、冷却に時間がかかったものと推定される。

No. 19 も、フェライトとパーライトとみられる組織が観察され（図 663-2・3）、亜共析鋼と考えられる。フェライトの占める割合が高く、炭素含有量は比較的少ないと考えられる。

いずれも鋼鉄の範疇に入る素材である。

[No. 20] 土器付着金属

試料採取の段階で、銅合金とみられる金属粒の存在が確認された。EDS 分析、XRF 分析とともに、銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が主に検出された。ヒ素も約 1% とそれなりに多く含まれている。Cu-Sn-Pb(-As) 系の青銅であった。微量成分として、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) が検出された。青銅素材の溶解に利用されたと考えられる。

[No. 3・4・21～23] 鉄製品

No. 3 は、網状セメンタイトとパーライトとみられる組織が観察され（図 656-8、図 657-1）、過共析鋼と考えられる。

No. 4 は、金属鉄の残存はわずかであったが、ほぼパーライトのみとみられる組織が観察され（図 657-3・4）、共析鋼（炭素量 0.77%付近）と考えられる。

No. 21・No. 22 は、鍋と推定されている遺物だが、腐食が進んでおり、金属組織は観察できなかつた。

No. 23 は、中心部に金属が残存していた。金属組織観察では、フェライトとパーライトからなる典型的な亜共析鋼が確認された。また、No. 23 の金属組織中からは、非金属介在物が観察された（図 664-6～8）。非金属介在物の EDS 分析では、チタンを含む鉱物が確認されたため（図 664-8 の b）、砂鉄起源の鉄と推定される。非金属介在物は薄く延びており、鍛造品といえる。

今回の分析の結果、鍛造剥片や粒状滓など、鍛錬鍛治に伴う遺物が確認され、少なくとも鍛錬鍛治の工程が行われていたと考えられる。確認された金属鉄の組織は、いずれも鋼鉄に分類される鉄であった。

また、土器付着金属の存在より、銅関連の工程も行われていたことが明らかとなった。

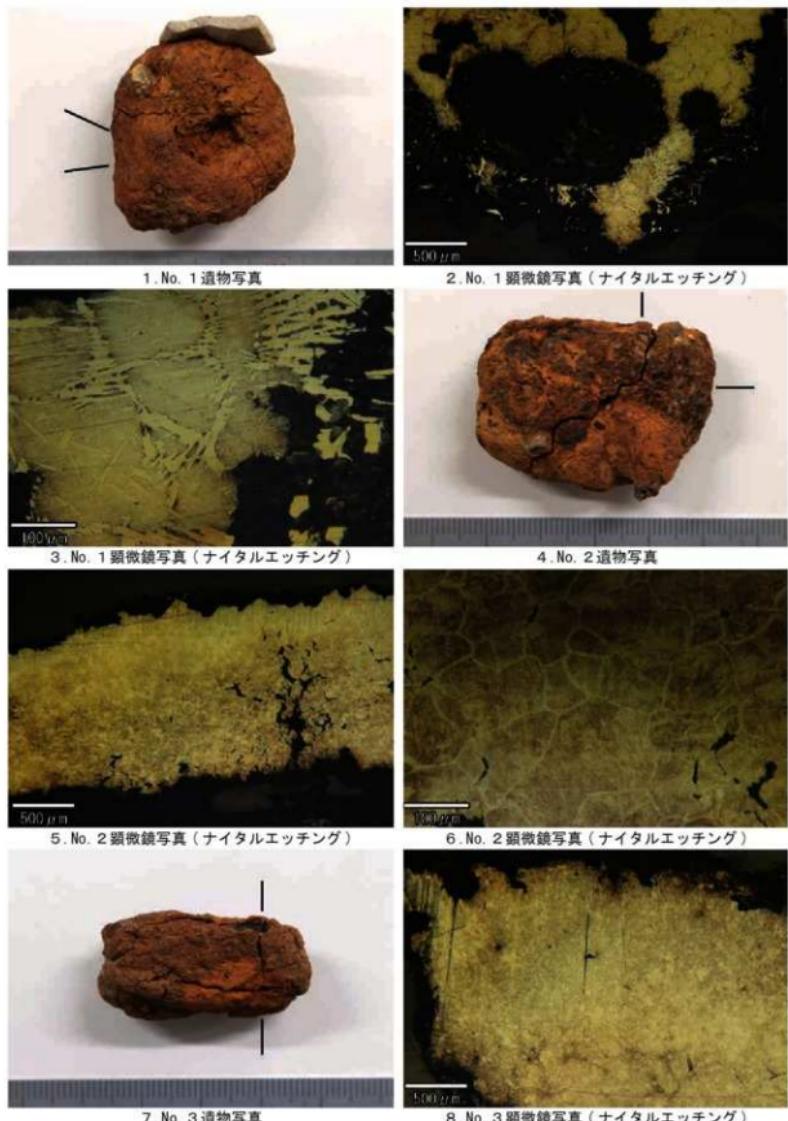


図 656 鉄滓関連遺物の断面組織（1）

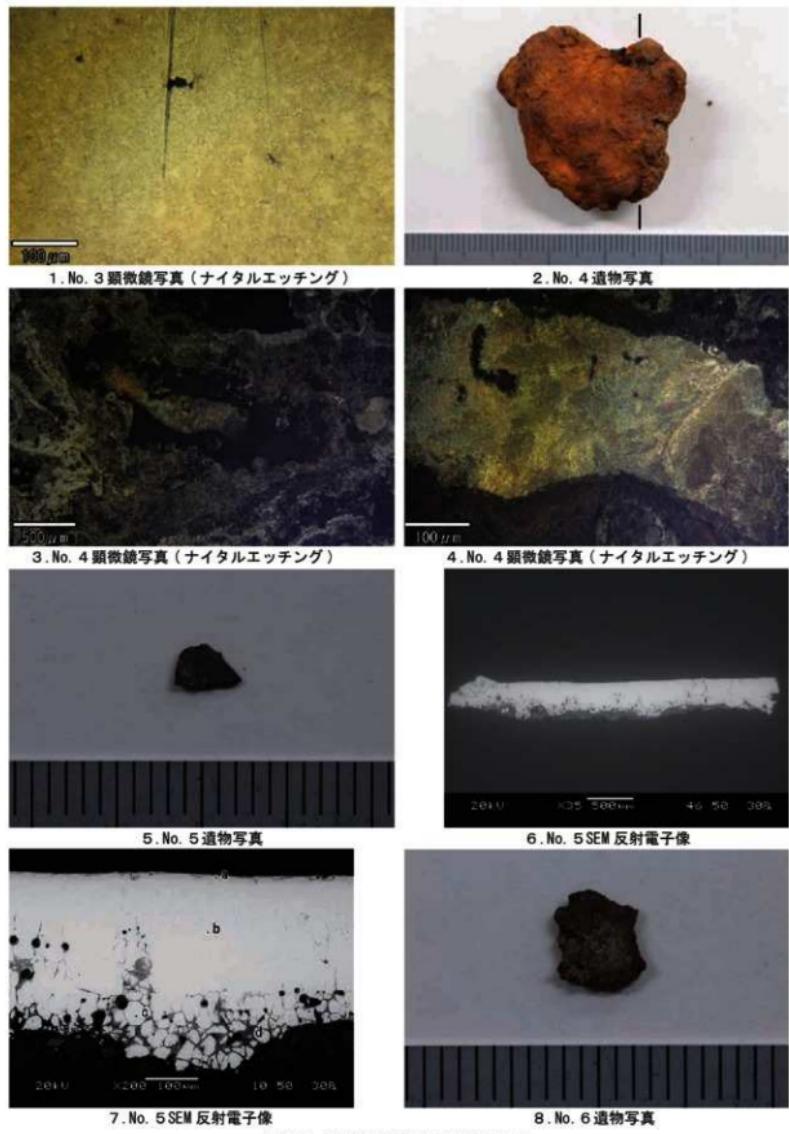
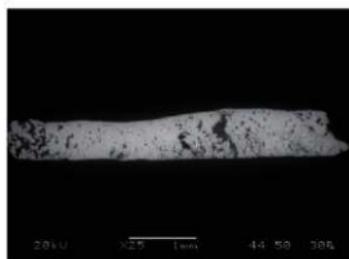
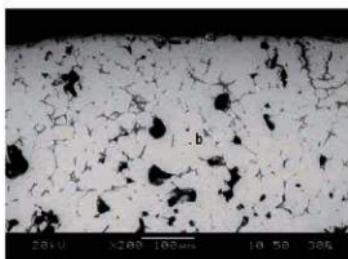


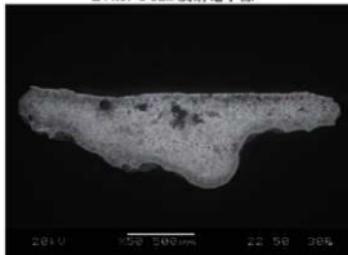
図 657 鉄滓関連遺物の断面組織（2）



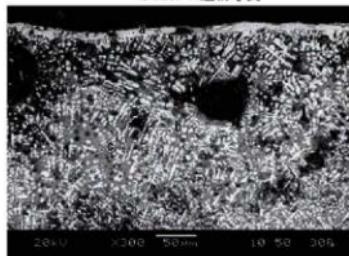
1. No. 6 SEM 反射電子像



2. No. 6 SEM 反射電子像



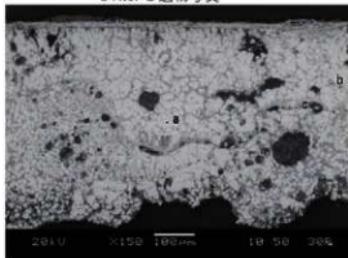
4. No. 7 SEM 反射電子像



5. No. 7 SEM 反射電子像



7. No. 8 SEM 反射電子像



8. No. 8 SEM 反射電子像

図 658 鉄滓関連遺物の断面組織（3）

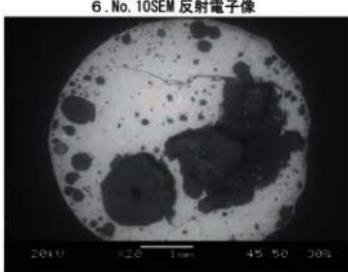
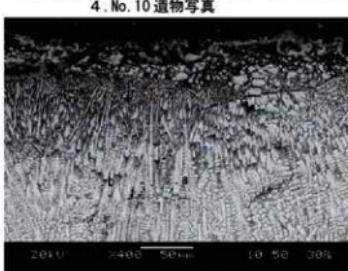
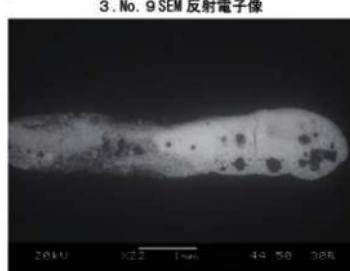
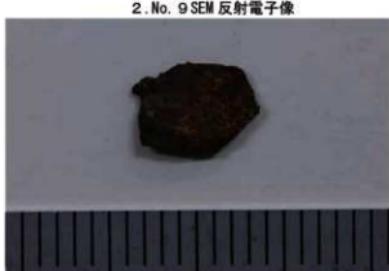
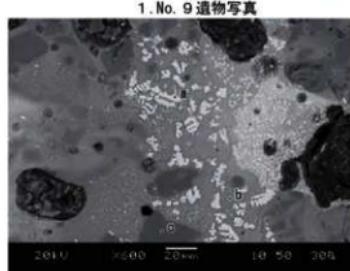
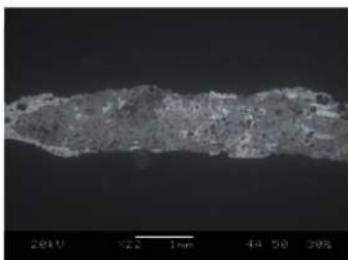


図 659 鉄滓関連遺物の断面組織（4）

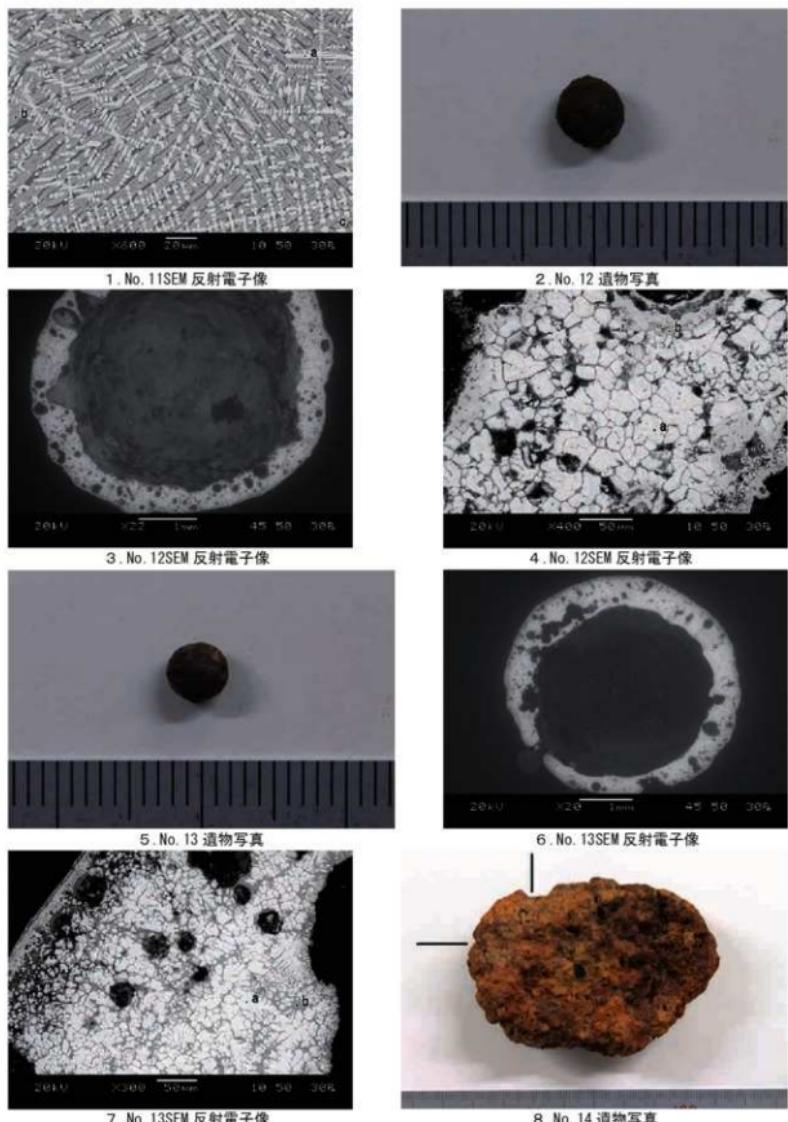


図 660 鉛滓関連遺物の断面組織（5）

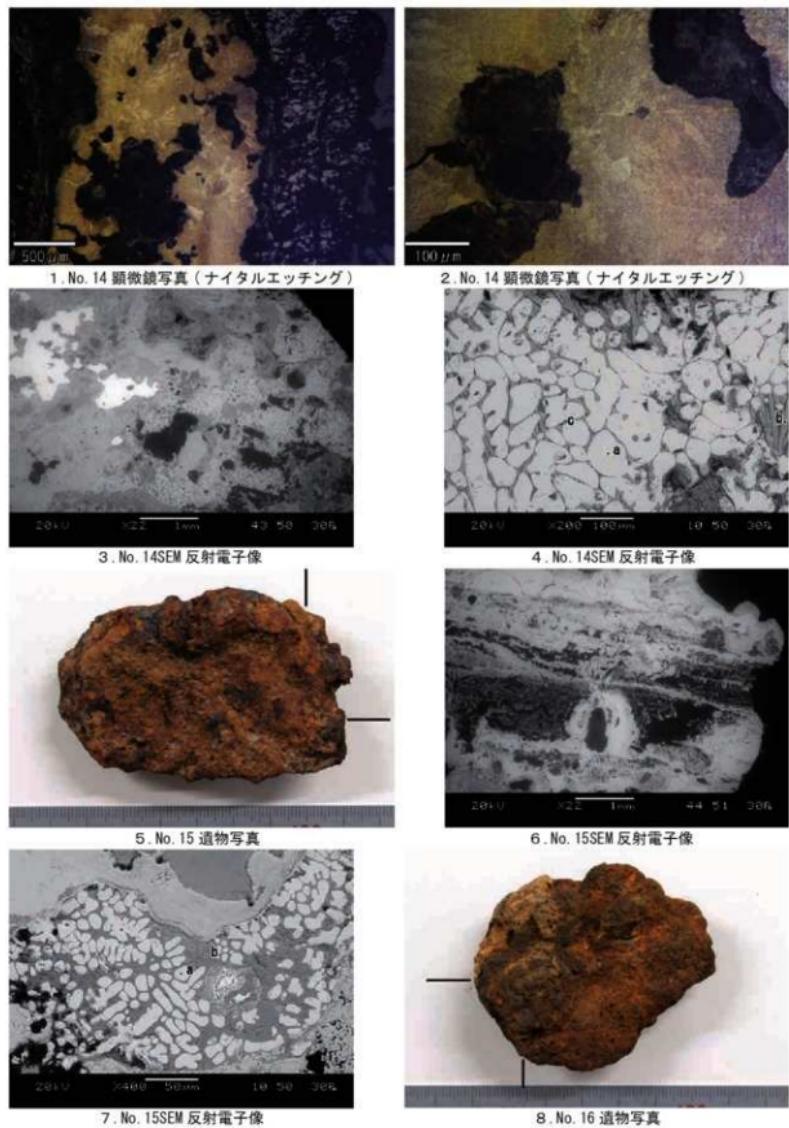


図 661 鉄滓関連遺物の断面組織（6）

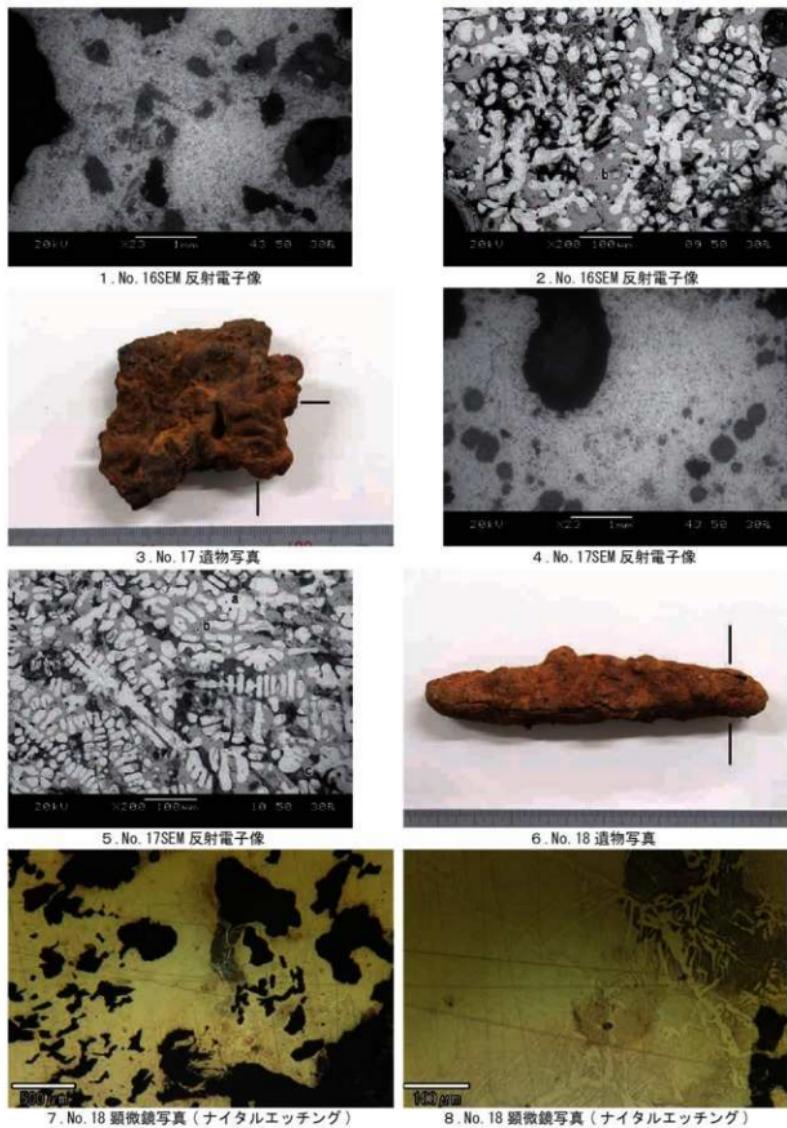
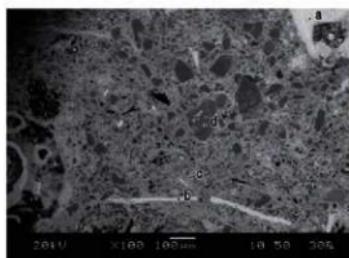


図 662 鉱滓・鍛冶関連遺物の断面組織（7）



図 663 鉄滓関連遺物の断面組織（8）



1. No. 21SEM 反射電子像



2. No. 22 遺物写真



3. No. 22SEM 反射電子像



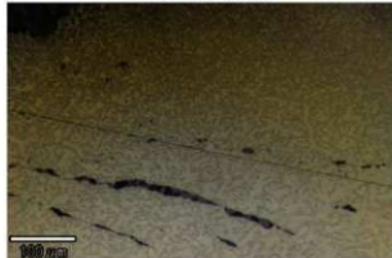
4. No. 22SEM 反射電子像



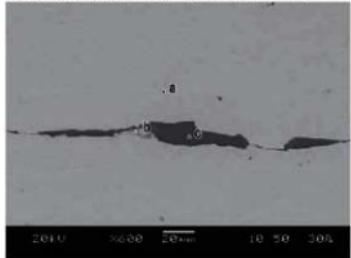
5. No. 23 遺物写真



6. No. 23顕微鏡写真（ナイタルエッティング）



7. No. 23顕微鏡写真（ナイタルエッティング）



8. No. 23SEM 反射電子像

図 664 鉛滓・鍛冶関連遺物の断面組織（9）

第5節 鉱滓・鍛冶関連遺物の成分分析（2）

6 地点より出土した鉱滓等について、(1) の分析結果により銅の鋳造が行われていた可能性が高まったことから、その様相を解明することを目的として追加の分析を企図し、4 点を対象として断面観察およびX線分析、元素マッピング分析を行い、材質を検討した。なお、分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、6 地点より出土した鉱滓等 4 点である（表 17）。No. 1・2 は鉱滓、No. 3 は土器融着物、No. 4 は銅滴である。時期は、古代後半から中世前半とみられている。No. 1・2・4 は、断面試料を作製して観察・分析を行った。No. 3 は、元素マッピング分析を行った。

表17 分析対象一覧

No.	測定番号	地点	回収番号	開載番号	取上番号	遺構名	出土層位	出土遺構	法量(g, cm)				種別	分析方法
									重量	長さ	幅	厚さ		
1	15SH	6	57	381	2502-3	SL8	C435	a	33.9	3.0	3.0	1.5	鉱滓	断面SEM-EDS
2	15SH		64	420	2586-5	SK670	C455	a	2.3	1.0	1.0	0.5	鉱滓	断面SEM-EDS
3	15SH		63	405	2525-3	SK705	C421	I	85.0	6.5	6.0	1.5	土器融着部	元素マッピング
4	15SH		66	433	2431-1	包含層	包含層D3	III	4.2	2.5	1.2	0.4	銅滴	断面SEM-EDS

まず、No. 1・2・4 の一部を岩石カッターで切り取り、超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製 SEA1200VX、照射径 8 mm or 1 mm；以後 XRF 分析）を行い、採取部位の化学組成を調べた。続いて、注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。図 665-1～3 の遺物写真に採取部位を示す。包埋試料は、ディスクブランで研磨した後、超精密研磨フィルムの#1000・4000・8000 の順で研磨し、観察・分析面とした。走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV、以後 SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同 JED-2200、以後 EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

No. 3 は、蛍光X線分析装置の一種である分析顕微鏡（（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II、照射径 100 μm）による元素マッピング分析を行い、土器表面の融着物の元素分布を調べた。

分析の結果と考察 表 18 に No. 1 の鉱滓の XRF 分析による半定量値（酸化物表記）を、表 19 に金属銅が検出された No. 2・4 の XRF 分析による半定量値を示す。また、No. 1・2・4 の SEM 反射電子像を図 665-4～9 に、SEM 反射電子像に示した a～e のポイントの EDS 分析結果を表 20 に示す。

No. 3 の元素マッピング図を図 666 に示す。また、マッピング図に示した a～e のポイント分析による半定量値を表 21 に示す。

[No. 1] 鉱滓

XRF 分析では、鉄が酸化

物 (Fe_2O_3) 換算で約 85% 以上と高い割合で検出された。

銅 (CuO) の含有量は 0.03% と、それほど多くない。ウスタイト（図 665-5 の a）、ファイヤライト（同 b）、基質のガラス質（同 c）が確認されている。

銅の含有量は少なく、断面観察においても銅粒などは確認されておらず、鉱滓ではなく鉄滓の可能性が高い。チタン (TiO_2) 含有量は少なく、チタンを含む結晶鉱物はみられない。ウスタイトが多く

表18 XRF分析による鉱滓の半定量値 (mass%)

No.	測定番号	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	CaO	K_2O	Cr_2O_3	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	CuO	As_2O_3	PbO
1	1mm	3.01	7.34	1.39	0.10	0.15	0.42	0.16	0.09	0.07	87.28	0.03	0.01	0.01

晶出しているなどの特徴より、鍛治澤の中でも鍛錬鍛治澤と推定される。

[No. 2 · 4] 銅淬·銅滴

No. 2 の銅滓は XRF 分析では、銅 (Cu) が 95%以上を占め、他にヒ素 (As) と鉛 (Pb) が約 1 ~ 2 %含まれていた。また、微量の銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、金 (Au)、

ビスマス(Bi)が検出された。EDS分析では、金属銅(図665-7のa)中に明色の鉛を多く含む相(同b)が観察された。銅粒の端部には酸化銅の相(同c)があり、その外側の淬部からは、銅、鉄、鉛、ケイ素を含む明色の相(同d)と、銅、ケイ素、ヒ素、鉄、鉛を含む暗色の相(同e)が観察された。

No. 4 の銅滴はXRF分析では、銅が約80%で、鉛が10%以上、ヒ素が5%以上と多めに含まれていた。他にニッケル、銀、アンチモンが微量検出された。EDS分析においても、金属銅(図665-9のa)中にヒ素が多く含まれていた。明色の鉛を多く含む相(同b)が金属銅中に観察された。

[No. 3] 土器融着物

元素マッピングおよびポイント分析により、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、金 (Au)、鉛 (Pb)、ビスマス (Bi) が検出された。場所によって化学組成が大きく異なるが、Cu-Pb-(Sn) 系の鋼合金の溶解に利用されたと考えられる。金 (Au) や銀 (Ag) 等もやや多く検出される箇所が確認されており、鋼合金以外の加工にも使用されていた可能性がある。

銅滓、銅滴、土器融着物の存在より、銅関連の工程が行われていたことが確認された。いずれも鉛が比較的多く検出されており、銅合金加工にかかる工程が想定される。

表19 XRF分析による金属銅の半定量値 (mass%)

No.	照射径	Ni	Cu	As	Ag	Sb	As	Pb	Bi	测定位置
2	mm	—	96.42	1.97	0.35	0.04	0.03	1.07	0.12	金属网
4	mm	0.03	81.52	5.40	0.21	0.17	—	12.66	—	金属网

表20 EDS分析結果

No.	ポイント	検出元素	組織	所見
1	a	O, Fe	ウスタイト	紫河津 (銀鉱脈河津か)
	b	O, Si, Fe	フィヤライト	
	c	O, Na, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
2	a	Cu	金屬相	鋼洋
	b	Cu, Pb	鉛の相か	
	c	O, Cu	酸化膜	
	d	O, Cu, Fe, Pb, Si	浮遊	
	e	O, Cu, Si, As, Pb	浮遊	
4	a	Cu, As	金屬相	銅溝
	b	Cu, Pb	鉛の相か	

表21 土器付着物マッピング図中のポイントの半定量値 (mass%)

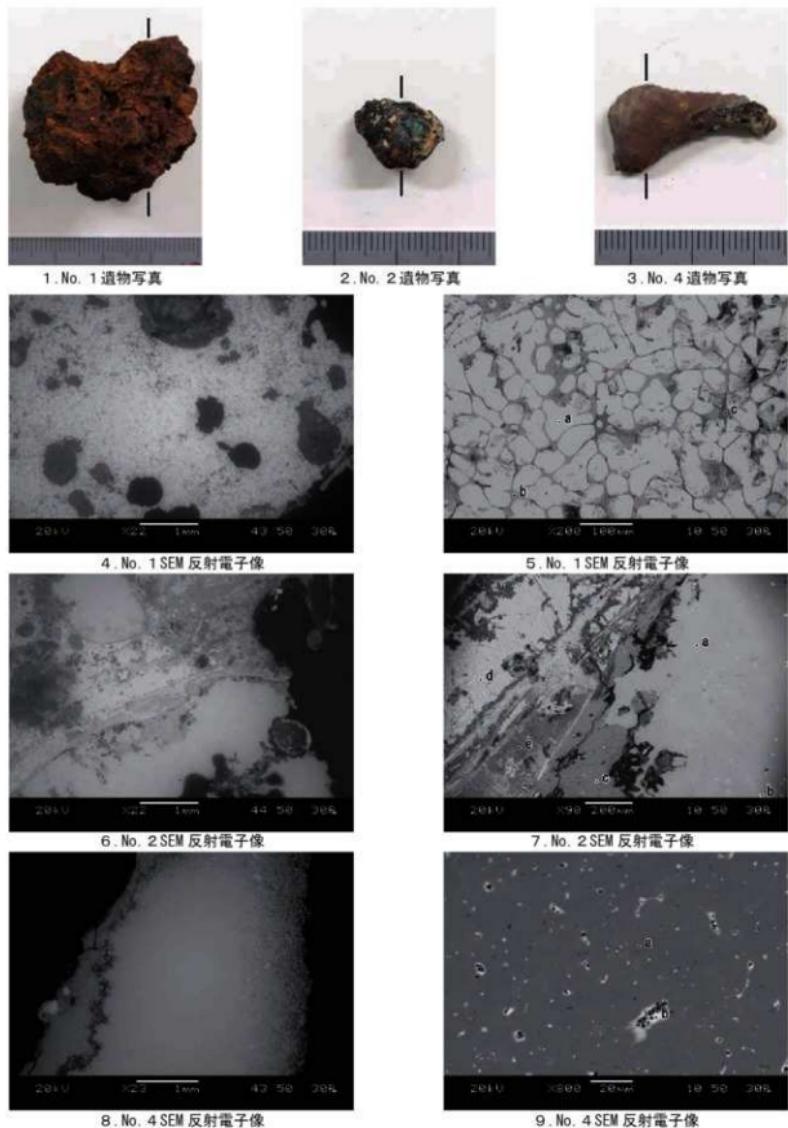
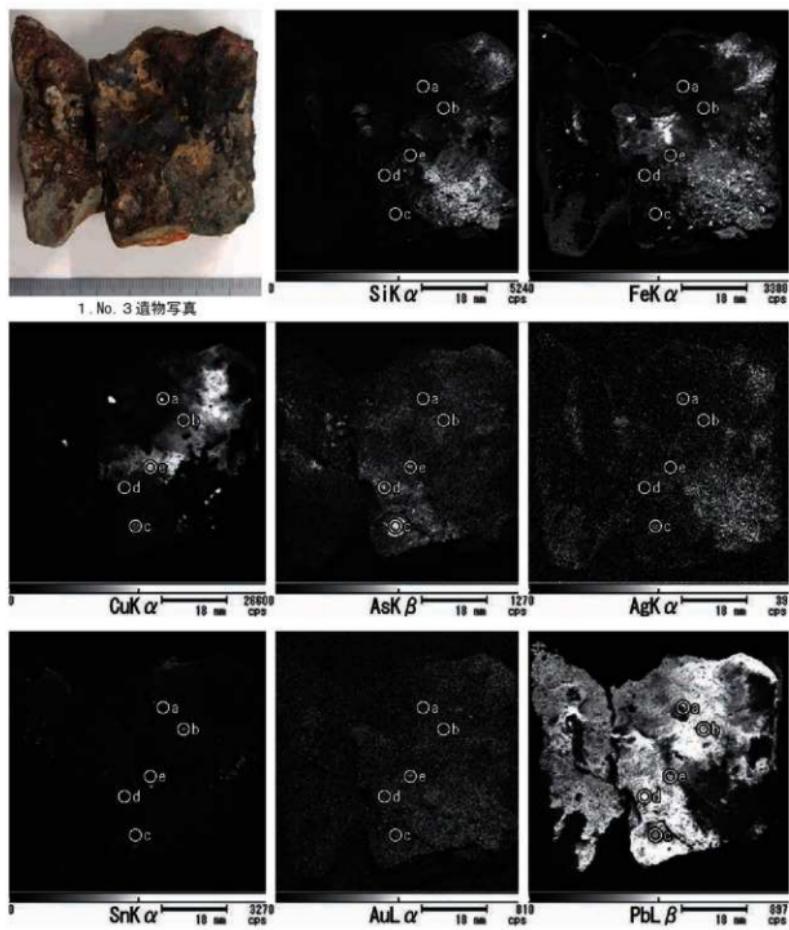


図 665 鉄滓の断面組織



Si: ケイ素 Fe: 鉄 Cu: 銅 As: ヒ素 Ag: 銀 Sn: スズ Au: 金 Pb: 鉛

図 666 元素マッピング図

第5節 鉱滓・鍛冶関連遺物の成分分析（3）

平成28年度に調査を実施した11～13地点より出土した坩埚、輪羽口、鉄滓、銅滴について、遺跡内で行われた金属生産活動の調査を目的として、元素マッピング分析、断面観察およびX線分析を行い、材質を検討した。なお、分析は竹原弘展（株式会社バレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、遺跡より出土した坩埚1点、輪羽口1点、鉄滓3点、銅滴1点の合計6点である（表22）。時期は、中世とみられている。No.1・2は、元素マッピング分析を行った。No.3～6は、断面試料を作製して観察、分析を行った。

表22 分析対象一覧

No.	遺跡番号	地点	団番号	地番番号	取上番号	造形名	出土遺物	出土層位	法値(g, cm)			種別	分析方法
									重量	長さ	幅		
1	1683	11	422	2491	5396-1	S0300	G027	c	8.5	4.9	3.8	坩埚	元素マッピング
2	1683	12	478	2803	6094-7	S03785	J071	1	5.5	2.6	3.1	輪羽口	元素マッピング
3	1683	11	444	2668	0927-232	S0322	G172	c	33.2	3.5	2.7	鉄滓	断面SEM-EDS
4	1683	11	422	2594	5519-54	S0300	G027	q=?	38.7	4.3	2.8	鉄滓	断面SEM-EDS
5	1683	12	496	2886	6642-1	S0332	J322	a	42.2	5.4	2.4	鉄滓	断面SEM-EDS
6	1683	13	194	1254	1427-1	S0234	H018	j	0.4	0.8	0.6	銅滴	断面SEM-EDS

No.1・2は、蛍光X線分析装置の一種である分析顕微鏡（（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type II、照射径100μm）による元素マッピング分析を行い、遺物表面の融着物の元素分布を調べた。

No.3～6は、一部を岩石カッターで切り取り、超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製SEA1200VX、照射径8mm or 1mm：以後XRF分析）を行い、採取部位の化学組成を調べた。統いて、注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。図669・670の遺物写真に採取部位を示す。包埋試料は、ディスコプランで研磨した後、超精密研磨フィルムの#1000・4000・8000の順で研磨し、観察・分析面とした。走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200、以後EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

分析の結果と考察 No.1・2の元素マッピング図を図667・668に示す。また、マッピング図に示したa～eのポイント

分析による半定量値

を表23に示す。

表24にNo.3～5の鉄滓のXRF分析による半定量値（酸化物表記）を、表25にNo.6の銅滴のXRF分析による半定量値を示す。また、

表23 元素マッピング図中のポイントの半定量値 (mass%)

No.	E(G)	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	CaO	K ₂ O	Cr ₂ O ₃	TiO ₂	Na ₂ O	Fe ₂ O ₃	Ni	Cu	Zn	Sn	Pb
i	a	1.01	26.36	—	—	2.12	4.50	0.54	0.64	4.57	—	59.14	—	0.95	0.17
	b	3.28	15.22	6.88	—	—	3.89	1.77	1.04	49.99	1.15	9.59	7.10	3.88	0.21
	c	—	11.47	2.56	0.42	1.23	1.79	2.08	0.53	38.02	0.29	21.61	1.10	28.28	0.62
	d	—	21.30	—	0.81	1.05	2.99	2.01	1.44	23.22	0.15	16.44	1.82	27.00	1.76
	e	—	18.67	4.09	1.81	0.55	18.31	1.83	1.57	23.77	0.25	15.38	2.79	16.69	0.47
ii	最大値	3.28	26.36	6.88	1.81	2.12	18.31	2.08	1.57	49.99	1.15	59.14	7.10	28.28	1.76
	a	7.57	45.43	—	0.64	4.25	3.42	0.92	0.97	30.51	—	4.52	1.99	—	—
	b	10.15	44.60	1.19	0.24	3.19	4.67	0.84	0.56	32.73	—	1.69	0.73	—	—
	c	6.23	35.20	1.48	0.56	2.03	5.83	0.73	0.62	38.01	—	5.64	2.53	—	—
	d	8.71	44.47	—	—	4.97	2.26	1.24	0.50	32.65	—	2.84	1.35	—	—
iii	e	8.09	41.94	0.49	0.24	2.12	2.27	0.85	0.49	25.69	—	2.61	1.62	—	—
	最大値	10.15	45.43	1.48	0.64	4.97	5.83	1.24	0.62	30.01	—	5.64	2.53	—	—

No. 3 ~ 6 の SEM

反射電子像を図

669・670 に、SEM

反射電子像に示し

た a~e のポイント

の EDS 分析結果を表 26 に示す。

[No. 1] 埠場

元素マッピングおよびポイント分析により、ニッケル (Ni)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が検出された。場所によって化学組成が大きく異なるが、銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が検出されることから青銅 (銅・スズ・鉛の合金) の溶解に、また、亜鉛 (Zn) も比較的多く検出されることから、真鍮 (銅・亜鉛の合金) の溶解に利用された可能性が考えられる。亜鉛 (Zn) の検出については、亜鉛 (Zn) の K α 線が銅 (Cu) の K β 線と近いため、銅 (Cu) が多過ぎるとピークが重なってしまうことがあるが、今回は図 667 下部のスペクトルに示されるように、ピークは明らかに分離できており、かつ亜鉛 (Zn) の K β 線も検出されるため、亜鉛 (Zn) の存在は間違いない。また、古代や中世の銅合金に含有されることが多い、ヒ素 (As) や銀 (Ag) が検出されない点も特徴的であった。

[No. 2] 輸羽口

元素マッピングおよびポイント分析により、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn) が検出された。スズ (Sn) や鉛 (Pb) は検出されず、真鍮の溶解に利用された可能性が考えられる。No. 1 埠場と同様、銅 (Cu) と亜鉛 (Zn) のピークは明らかに分離できており、かつ亜鉛 (Zn) の K β 線も検出されている（図 668 下部のスペクトル参照）。また、古代や中世の銅合金だと含有されることが多い、ヒ素 (As) や銀 (Ag) が検出されない点も No. 1 埠場と同様である。

[No. 3 ~ 5] 鉄滓

XRF 分析では、鉄が酸化物 (Fe_2O_3) 換算で約 75%以上と高い割合で検出された（表 24）。チタン (TiO_2)、銅 (Cu) の含有量は少ない。断面観察およびEDS 分析では、繊維状ないし樹枝状のウスタイト（図 669-3・6、図 670-1 の a）、多角形のファイヤライト（同 b）、基質のガラス質（同 c）が確認されている。

銅の含有量は少なく、断面観察においても銅粒などは確認されておらず、鉄滓ではなく鉄滓の可能性が高い。チタン (TiO_2) 含有量は少なく、チタンを含む結晶鉱物はみられない。ウスタイトが多く晶出しているなどの特徴より、鍛冶場の中でも鍛錬鍛冶場にあたると推定される。

[No. 6] 銅滴

No. 6 の銅滴は、XRF 分析では銅 (Cu) が約 90%を占め、他にスズ (Sn) が約 8%、鉛 (Pb) が約 1 ~

表24 XRF分析による鉄滓の半定量値 (mass%)

No.	組成	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MoO ₃	Fe ₂ O ₃	CuO	SrO	ZrO ₂	BaO
3		9.74	4.06	13.04	1.95	0.35	0.10	0.45	0.25	0.07	0.10	78.87	0.01	0.01	0.01	0.01
4	8mm	4.13	11.94	0.49	0.24	0.27	0.45	0.24	0.02	0.04	82.24	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02
5		0.43	5.57	15.21	0.55	0.24	0.71	1.53	0.24	0.02	0.04	75.42	0.01	0.01	0.02	0.02

表25 XRF分析による金属銅の半定量値 (mass%)

No.	照射強度	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb	Bi
6	1 mm	0.06	90.11	0.11	0.08	8.06	0.11	1.41	0.06

表26 EDS分析結果

No.	ポイント	検出元素	組織	所見
3	a	Fe	ウスタイト	鍛冶滓 (鍛錬鍛冶滓か)
	b	Si, Fe	ファイヤライト	
	c	Al, Si, K, Fe	ガラス質	
4	a	Fe	ウスタイト	鍛冶滓 (鍛錬鍛冶滓か)
	b	Si, Fe	ファイヤライト	
	c	Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
5	a	Fe	ウスタイト	鍛冶滓 (鍛錬鍛冶滓か)
	b	Si, Fe	ファイヤライト	
	c	Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
6	a	Cu (Sn)	金属銅(スズ固溶)	銅
	b	Cu, Pb	鉛の相か	
	c	Cu	無定形	

2%含まれていた。また、微量の鉄(Fe)、ヒ素(As)、銀(Ag)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)が検出された。EDS分析では、金属銅(図670-4のa)中に明色の鉛を多く含む相(同b)が観察された。暗色部は酸化銅(同c)とみられる。金属銅(同a)からは、スズ(Sn)も検出されており、固溶していると考えられる。

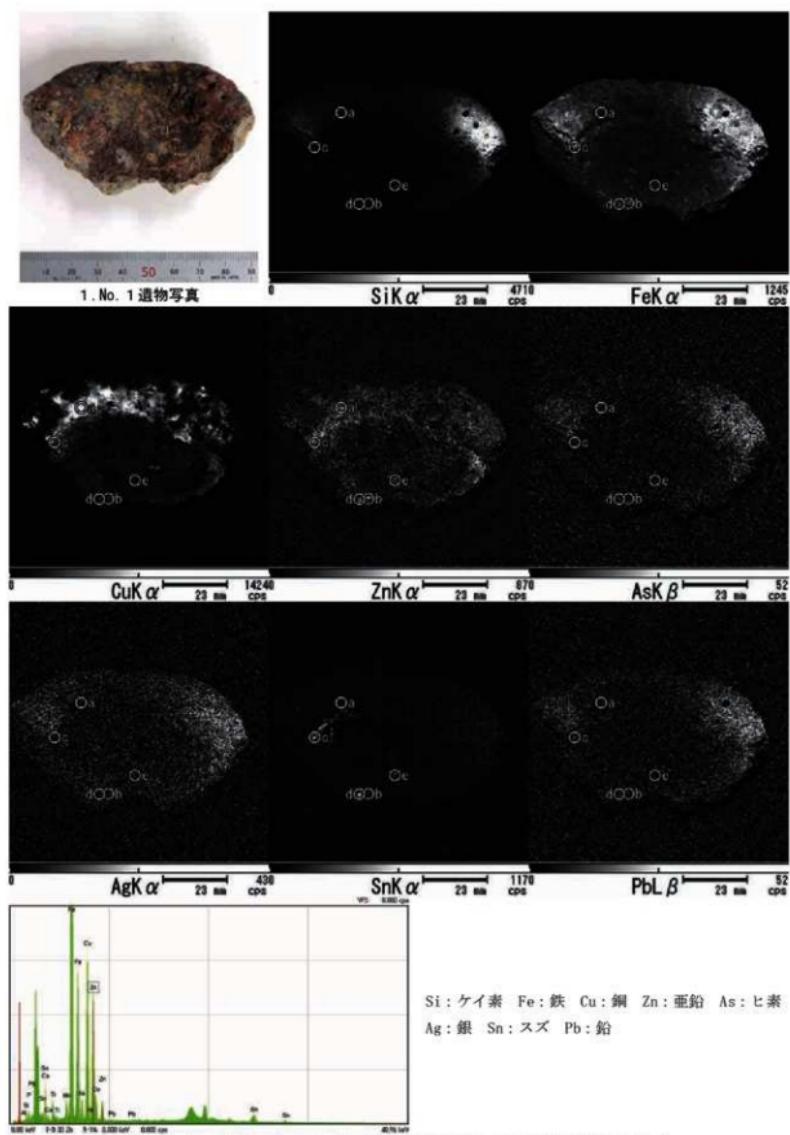
銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)が主に検出されることから、青銅加工に伴う遺物と考えられる。

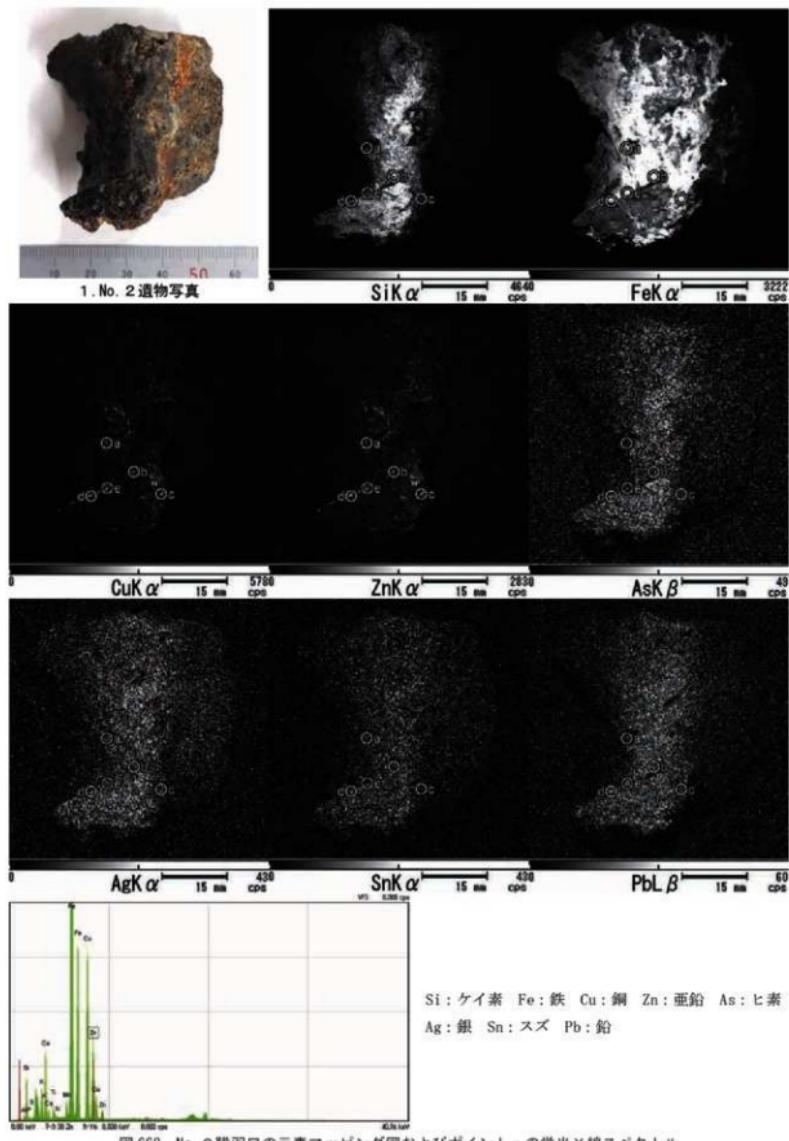
鍛冶関連とみられる鉄滓3点に、銅合金加工に関わるとみられる遺物が3点確認された。なかでも、No.1坩埚とNo.2轆羽口からは、亜鉛(Zn)が検出された。

真鍮(別名黄銅・錫石)の材料となる亜鉛は、14~15世紀初めになって、鉱石から単独に精錬することが可能になったといわれている(村上, 2003ab)。その一方で、銅、亜鉛合金である真鍮自体は、正倉院宝物や法隆寺献納宝物など、飛鳥、奈良時代には存在していたことが知られる(成瀬, 2002)。これら古代の真鍮は、銅鉱石中にもともと亜鉛が含まれていたもので、亜鉛として意図的に添加されたものではないと考えられている(村上, 2003a)。また、平安~鎌倉時代においても、数は少ないが、長原遺跡出土銅鏡底部片や、個人蔵寛治元年銘経筒、紺紙金字経などの使用例が確認されている(西山・東野, 2015)。今回の遺物も、銅(Cu)と亜鉛(Zn)が同時に検出されているため、亜鉛を意図的に添加したものではないと考えられるが、坩埚や轆羽口といった加工道具であり、国内でも真鍮を素材として、加工がなされていたことを示す貴重な例といえよう。

参考文献

- 大澤正巳・鈴木瑞徳 2005「中道東山西山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属性の調査」鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター編『中道東山西山遺跡』149~173、鳥取県教育文化財団。
- 大澤正巳・鈴木瑞徳 2013「石塚遺跡(第2次)の鍛冶滓等の自然科学分析」萩原義彦・伊藤裕偉編。
- 『石塚遺跡(第1・2次)・高橋遺跡(第1・2次)発掘調査報告』49~65、三重県埋蔵文化センター。
- 材料技術教育研究会編 2008『組織検査用試料のつくり方』大河出版。
- 材料技術教育研究会編 2015『標準顕微鏡組織 第1類(灰素鋼・鋳鉄編)』改定8版、山本化学工具研究社。
- 中井 泉編 2005『蛍光X線分析の実際』朝倉書店。
- 成瀬正和 2002「正倉院宝物の素材」『日本の美術』439、至文堂。
- 西山要一・東野治之 2015「東アジアの真鍮と紺紙金字経古写経の科学分析」『文化財学報第三十三集』(1)~(19)、奈良大学文学部文化財学科。
- 村上 隆 2003a「金工技術」『日本の美術』443、至文堂。
- 村上 隆 2003b「銅」『文化財科学の事典』馬渕久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田昭正・三浦定俊編69~72、朝倉書店。





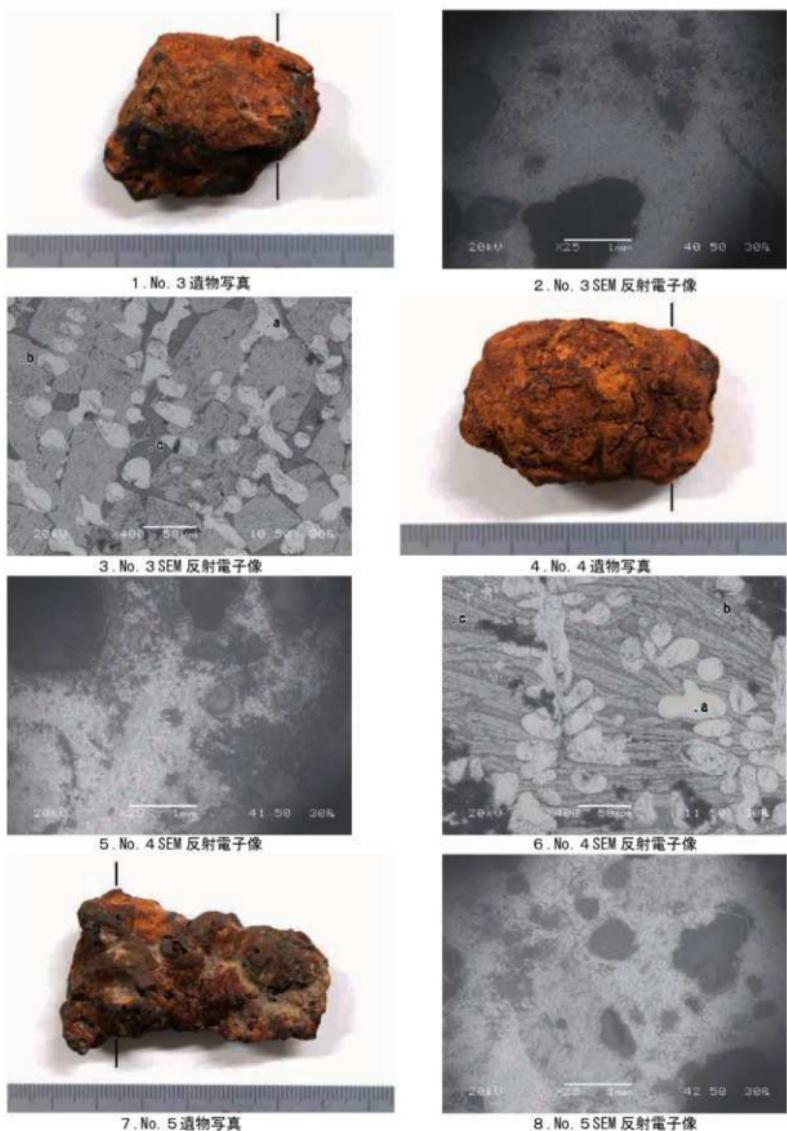
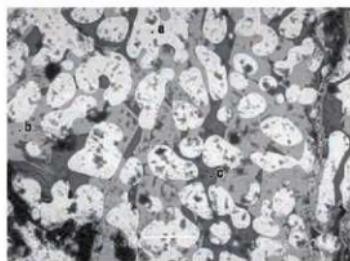
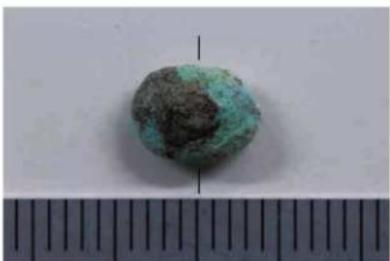


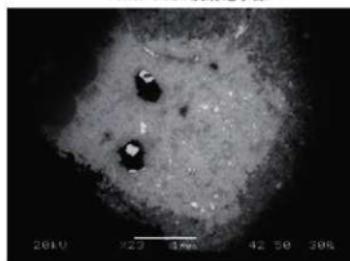
図 669 金属関連遺物の断面組織（1）



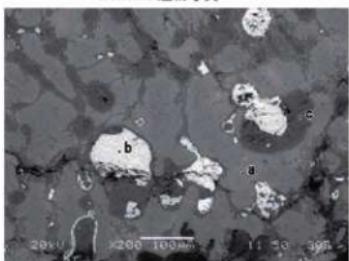
1. No. 5 SEM 反射電子像



2. No. 6 遺物写真



3. No. 6 SEM 反射電子像



4. No. 6 SEM 反射電子像

図 670 金属関連遺物の断面組織（2）

第6節 獣骨同定分析

11 地点の SD316 から出土した獣骨について、種と部位の同定分析を実施した。獣骨の同定結果を報告する。なお、分析は中村賢太郎・竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 試料は、室町時代の溝である SD316 の r 層（シルト～粘土）から出土した獣骨 1 点（図 431）である。発掘調査時の所見によると、獣骨は 1 点で、長さ 10cm、幅 4cm、厚さ 4cm であった。また、獣骨の周辺からは土器師皿が出土した。獣骨は、発掘調査現場で土ごと取り上げられ、室内でのクリーニングで小片に分かれた。

観察は肉眼でを行い、現生標本と比較した。

また、試料の状態が悪かったため、骨であるかどうかの確認のために、合わせて蛍光 X 線分析を行った。分析は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1000 μA のロジウム (Rh) ターゲット、X 線照射径が 8 mm または 1 mm、X 線検出器は SDD 検出器である。検出可能元素はナトリウム (Na) ～ウラン (U) である。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタ Pb 測定用）の 2 条件で、測定時間は各条件 100～300s、管電流自動設定、照射径 8 mm、試料室内雰囲気真空中に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダード FP 法による半定量分析を行った。

分析の結果と考察 獣骨は哺乳綱 (Mammalia) の四肢骨であった。大きさから、ウシ、ウマ、シカ、イノシシなどの大型の哺乳綱と思われる。色調は黄白色で、一部に青みがかった部分もあった。

蛍光 X 線分析の結果（表 27）、マグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al₂O₃)、ケイ素 (SiO₂)、リン (P₂O₅)、硫黄 (SO₃)、カリウム (K₂O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO₂)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe₂O₃)、亜鉛 (ZnO)、ストロンチウム (SrO)、バリウム (BaO) が検出された。リン (P₂O₅) と鉄 (Fe₂O₃) が極めて多く検出されており、カルシウム (CaO) も多く検出されているため、カルシウムと鉄

表27 半定量分析結果 (mass%)

	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	ZnO	SrO	BaO
り、カルシウム (CaO)	0.92	2.36	4.81	35.35	1.92	0.27	11.75	0.16	0.59	41.72	0.03	0.04	0.1

が置換したビビアナイト化が進んだ骨と考えられる。

シルト～粘土層 (1/16 mm 以下の碎屑物) から長さ 10cm の骨が出土した状況から、水流で運搬されて堆積したとは考えにくい。周囲から他の部位が出土していない点と合わせると、哺乳綱の四肢骨は人により溝へ置かれたか投棄された可能性が考えられる。



図 671 SD316 出土の哺乳鋼四肢骨

第7節 繊維同定

11 地点の SK3377 から出土した桿(2336)に付着した糸状繊維について、光学顕微鏡による同定を行った。なお、分析は黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 試料は桿の穿孔に付着していた糸状の繊維である。同定の方法は、まず試料の観察と写真撮影の後、一部を採取した。分析はC染色液を用いた繊維分析と、樹脂包埋法を行った¹⁾。C染色液を用いた繊維分析では、JIS P 8120に基づき、C染色液を作製した。プレパラートに試料から採取した繊維を載せて水を滴下し、繊維を分散させた。乾燥後、C染色液を滴下し、カバーガラスを載せて光学顕微鏡で観察を行った。樹脂包埋は、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包埋した。樹脂包埋試料はミクロトームを用いて切片を作製し、プレパラートに封入した。プレパラートを光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

分析の結果と考察 同定の結果、試料はアサの韌皮繊維であった。

以下に、素材植物の特徴と同定根拠を示す。また、試料写真と光学顕微鏡写真を図 672 に示す。

(1) アサ *Cannabis sativa L.* アサ科 図 672 1～4 (糸状繊維)・5 (現生)

C染色液では、ワインレッド～茶赤色に染まった(図 672-2)。繊維の形態は、繊維幅がおよそ 10～20 μm ほどである。細胞内腔は、径の小さい細胞では狭く、径が大きい細胞では細胞が押しつぶされて細胞内腔は線状となっている。断面の形状は円～楕円形、多角形である(図 672-3・4)。細胞は繊維が解れてしまっているため、塊状ではなく、ほぼ単独であった。C染色液による色と、繊維の太さと形状から、アサの韌皮繊維であると同定した。

アサ (*Cannabis sativa L.*) は、アサ科アサ属の1年生草本である。中央アジアが原産とされ、日本列島では縄文時代早期にアサの果実が確認されている²⁾。近世では東京都新宿区の南元町遺跡や、群馬県長野原町の東宮遺跡などにおいて、布の素材としてアサの利用が確認されているが³⁾、古代～中世の出土例や分析例はまだ少ない。

注

1) 日本工業(JIS)規格 1998『JIS P 8120 紙・板紙及びバルブー繊維組成試験法』

佐々木由香・小林和貴・能城修一・鈴木三男 2015「三内丸山遺跡北の谷出土の繊維製品・樹皮素材の技法」『三内丸山遺跡』42、青森県教育委員会 152-159 頁

2) 工藤雄一郎・一本松里 2014「縄文時代のアサ出土例集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 187 集、国立歴史民俗博物館 425-440 頁

3) 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男 2015「南元町遺跡第 3 次調査出土繊維製品等の素材植物」国際文化財株式会社編『南元町遺跡III』、住友不動産

鈴木三男 2012「東宮遺跡出土繊物の繊維素材」『東宮遺跡(2)-遺物編-』、群馬県埋蔵文化財調査事業団 478-479 頁

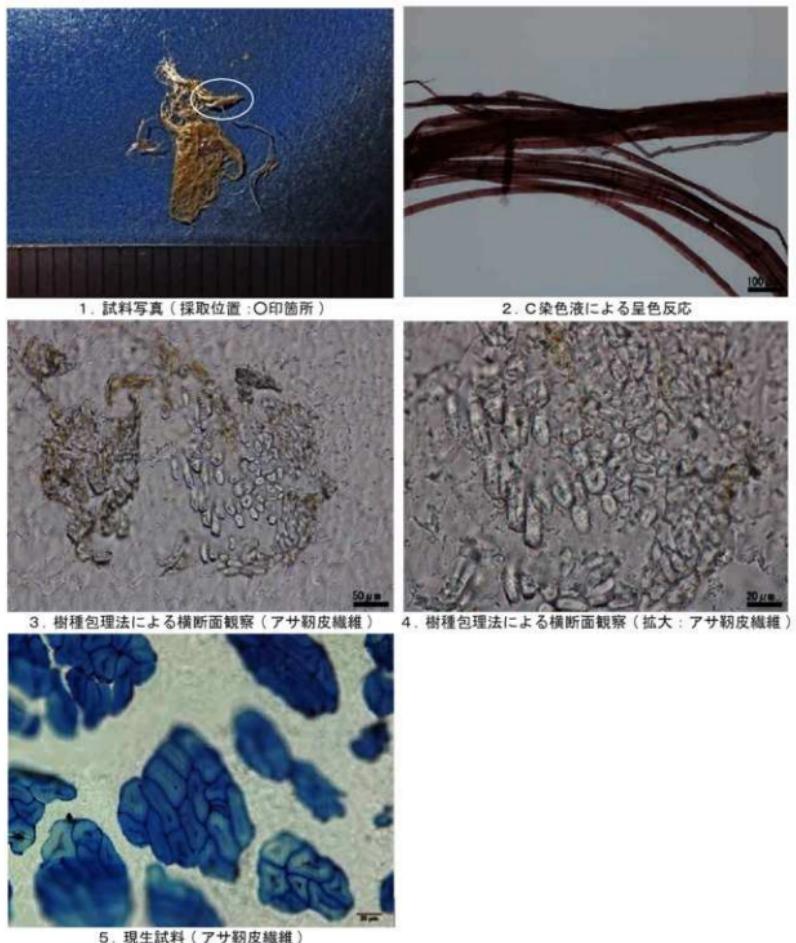


図 672 繊維の試料写真と光学顕微鏡写真

第8節 木製品樹種同定

11・20・21 地点から出土した木製品について、樹種同定を行った。なお、分析は小林克也（株式会社イビソク）が担当した。

試料と方法 試料は、上保木郷遺跡から出土した木製品 12 点である。いずれも中世後半の木製品と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

分析の結果と考察 同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属とヒノキの2分類群、広葉樹ではモモとクリ、トチノキの3分類群の、計5分類群がみられた。ヒノキが8点で最も多く、マツ属複維管束亜属、モモ、クリ、トチノキは各1点であった。同定結果を表28に、一覧を表29に示す。

表28 上保木郷遺跡出土木製品の樹種同定結果

樹種・部材	大材木	一本下駄	削削下駄頭	油漆柄	油物底板	筆	柱脚	杭	残材	合計
マツ属複維管束亜属										
ヒノキ	2	1	1		1	1		1	2	8
モモ								1		1
クリ							1			1
トチノキ					1					1
合計	2	1	1	1	1	1	1	1	3	12

以下に、同定された材の特徴を記載し、図に光学顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図673 1a-1c(No. 10)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図673 2a-2c(No. 9)
・3c(No. 11)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ 1~15 列である。分野壁孔はトウヒヒノキ型で、1 分野に 2 個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(3) モモ *Prunus persica* (L.) Batsch バラ科 図673 4a-4c(No. 8)

年輪のはじめに中型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が単独ないし 2~3 個複合してやや密に散在する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、幅 1~5 列であ

る。

モモの原産地は中国北部で、平安時代には果実を食用や薬用として利用するために日本列島でも栽培されていた樹木である。材は重硬で、切削加工等は困難である。

(4) クリ *Castanea crenata* Siebold, et Zucc. ブナ科 図 673 5a-5c(No. 7)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(5) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 図 673 6a-6c(No. 3)

小型の道管が単独ないし2~3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

表29 上保本郷遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

No.	遺跡番号	地点	図番号	掲載番号	取上番号	遺構名	出土遺構	出土層位	器種	樹種	木取り	備考	時期
1	16KH	11	439	2614	3409-1	SB316	GD48	17	火付木	ヒノキ	削材		15C末~16C初頭
2	16KH	11	428	2541	5583-1	SD307	GD25	t	一本下駄	ヒノキ	追査目		15C後葉
3	16KH	11	428	2540	5678-2	SD307	GD25	21	漆器椀	トチノキ	横木取り	密度分析	15C後葉
4	17KH	20	333	2023	2876-1	SD269	K1519	#	差歛下駄齒	ヒノキ	柾目		15C前葉廃弛
5	17KH	20	333	2024	2879-1	SD269	K1519	#	火付木	ヒノキ	柾目		15C前葉廃弛
6	17KH	20	331	1988	2901-1	SD269	K1519	3	箸	ヒノキ	芯去除出	破片	15C前葉廃弛
7	17KH	21	226	1682	1912-1	S19-P2	K0931	1	柱根	クリ	芯持丸木		15C中葉
8	17KH	21	310	1886	1950-1	SK2591	K0813	14	杭	モモ	芯持丸木	破片	15C中葉
9	17KH	21	337	2031	2206-1	SD277	K1000	n	曲物底板	ヒノキ	追査目	破片	16C後葉
10	16KH	11	439	2615	3377-1	SB316	GD48	q	残材	マツ属複雑管束型	削材		15C末~16C初頭
11	16KH	11	428	2542	5559-1	SD307	GD25	p	残材	ヒノキ	削材		15C後葉
12	16KH	11	428	2543	5531-1	SD307	GD25	p	残材	ヒノキ	削材		15C後葉

火付木と一本下駄、差歛下駄齒、曲物底板、箸は、いずれもヒノキであった。ヒノキは木理通直で真っすぐに生育する加工性の良い樹種である¹⁾。また、針葉樹は広葉樹よりも一般的に着火性が高い。可児市の柿田遺跡から出土した平安時代~鎌倉時代の木製品では、火付木および下駄類、曲物、箸でヒノキが多くみられ²⁾、傾向は一致する。

漆器椀は、トチノキであった。トチノキは比較的軽軟で加工しやすく、挽物の木胎として利用されることが多い³⁾。柿田遺跡の鎌倉時代~江戸時代初期頃の漆器椀にもトチノキの利用が確認できる²⁾。

柱根はクリであった。クリは堅硬な樹種であり、耐久性が高い¹⁾。柿田遺跡の平安時代~鎌倉時代の柱では、ヒノキとカヤに次いでクリも多くみられる²⁾。

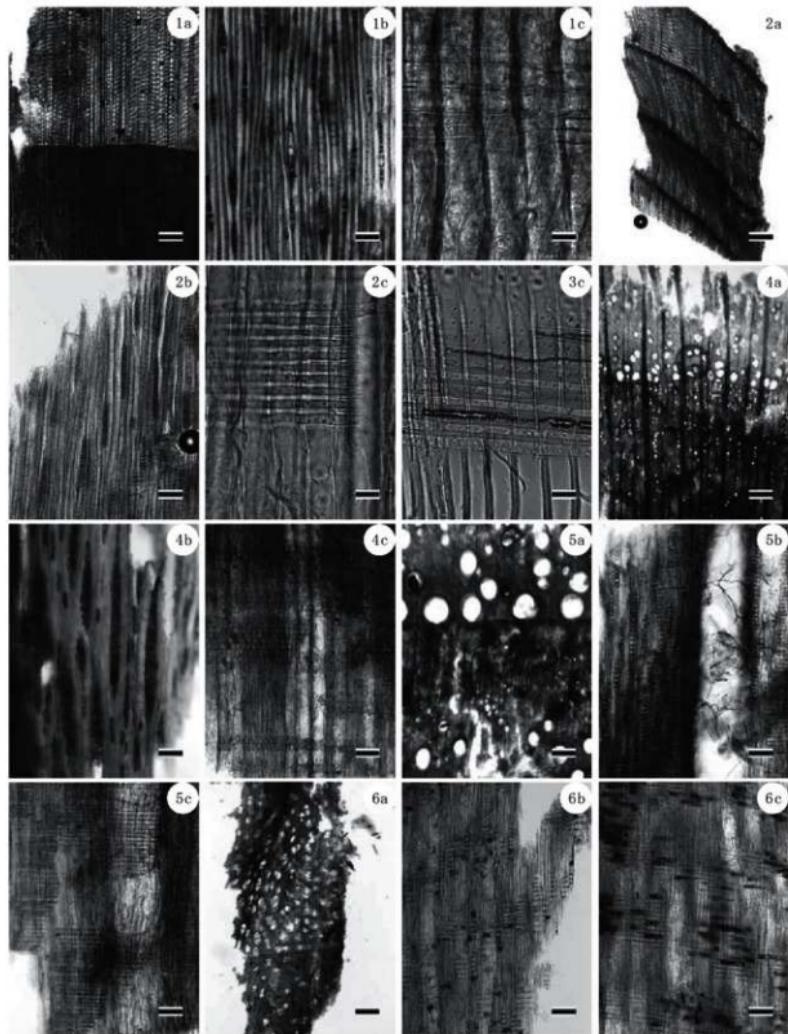
杭はモモであった。モモは堅硬で強韌な樹種である³⁾。柿田遺跡の鎌倉時代~江戸時代初期頃の杭

では、多様な針葉樹および広葉樹が確認されており、モモも1点みられた。モモは中国原産であり、日本では自生していない樹種である。

残材は、マツ属複維管束亜属とヒノキであった。いずれも木製品を加工した際の残材である。マツ属複維管束亜属はヒノキと同様に、真っすぐに生育する加工性の良い樹種である¹⁾。今回の同定では確認できなかったが、マツ属複維管束亜属が使用されていた木製品が他にもあったと考えられる。

注

- 1) 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳（2011）『日本有用樹木誌』238、海青社
- 2) 伊東隆夫・山田昌久編（2012）『木の考古学—出土木製品用材データベース—』449、海青社
- 3) 平井信二（1996）『木の大百科—解説編—』642、朝倉書房



1a-1c. マツ属複維管束亞属(No. 10)、2a-2c. ヒノキ(No. 9)、3c. ヒノキ(No. 11)、4a-4c. モモ(No. 8)、
5a-5c. クリ(No. 7)、6a-6c. トチノキ(No. 3)
a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=1-3:25 μm ・4-6:100 μm)

図 673 木製品の光学顕微鏡写真

第9節 漆製品の塗膜構造調査（1）

4・17 地点で出土した漆製品について、EPMA 分析により塗膜混和物の元素同定を実施した。なお、分析は藤田秀臣（株式会社吉田生物研究所）が担当した。

試料と方法 分析対象は、漆器片 2 点である（表 30）。時期は試料 No. 1 は 15 世紀前葉、試料 No. 2 は 13 世紀中葉以降の可能性がある。また FT-IR 分析において、スグロメ漆（塗布後 60 日経過）を比較試料とした。

表30 分析対象一覧

No.	遺跡番号	地点	図番号	取上面番号	遺構名	出土遺構	品名	概要
1	1500	4	—	565	SK5112	A232	赤色漆片	土の上に赤色の塗膜が遺存している。
2	1600	17	—	414	SK1450	E438	赤色漆片	土の上に赤色の塗膜が遺存している。その赤色部の下に、黒色の塗膜が隠れていた。この赤色部と黒色部から試料を採取した。

各資料の塗膜付着部分から数 mm四方の破片を採取し、バーキンエルマー社製の FT-IR 分析装置 Spectrum One を用いて、膠着剤の材質を調査した。次に、破片試料をエポキシ樹脂に包埋し、作製した塗膜断面プレパラートの導電性を上げて観察精度を上げる為に金(Au)蒸着を行い、株式会社日立サイエンスシステムズ製走査型電子顕微鏡 SEMEDX3Type3、堀場製作所製エネルギー分散型 X 線分析装置 EMAXEnergy400 の装置を用いて、EPMA 分析により塗膜混和物の元素同定を行った。最後に塗膜断面の薄片プレパラートを完成し、これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

分析の結果と考察 FT-IR 分析によるスペクトル図を図 674-1～4 に示した。図 674-1～3 と図 674-4 のスペクトルの比較により、今回調査した資料 2 点とも、膠着剤の材質は漆と判断される。

次に EPMA 分析による成分分析の結果を表 31 に示した。検出できた元素は試料によって異なるが、炭素(C)、酸素(O)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、硫黄(S)、カルシウム(Ca)、水銀(Hg)の元素が検出された。また電子顕微鏡画像を図 675-1・3・5 に、EDX 分析のスペクトル図を図 675-2・4・6 に示した。分析の結果、試料 No. 1 及び試料 No. 2 の内面から Hg が検出され、朱の混和が認められる。

塗膜断面の観察結果を表 32 に示した。いずれの試料も塗膜構造は下層から、下地、漆層が観察された。下地はいずれも柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。漆層は 2 点とも赤色部は、下地の上に透明漆 1 層、その上に赤色漆 1 層が重なっていた。試料 No. 2 で確認した黒色部は、下地の上に透明漆 1 層のみであった。黒色部の透明漆層の層厚は、赤色部の下層の透明漆層の 3～4 倍ほどの層厚であった。漆層はどの層も、層の境は平滑ではなく、凹部が多数認められ、層中に空隙もみられた。これは漆層の劣化を示している。顔料は赤色漆層には赤色顔料として、透明度が高く明瞭な粒子形状を呈する朱の混和が見られた。

表31 成分分析結果（単位：wt%）

元素	No. 1	No. 2 内	No. 2 外
C	60.15	53.87	65.48
O	21.51	15.74	30.73
Al	0.49	—	1.03
Si	0.71	—	2.14
S	1.43	2.96	—
Ca	0.69	—	0.62
Hg	15.02	27.43	—

試料No. 1は赤色の塗膜のみで、試料No. 2は赤色の塗膜と黒色の塗膜が重なった状態で検出されたが、木胎は腐朽して遺存していないかった。2点とも炭粉洗下地が認められ、その上に透明漆層が1層見られた。赤色の塗膜には、薄い透明漆層の上にさらに朱を混和した赤色漆が1層重ねられていた。黒色の塗膜は、顔料を特に何も混和しない透明漆1層であった。2点とも漆層の劣化が進行して腐朽しつつある。

表32 漆器の断面観察結果表

No.	器種	部位	試番号	塗膜構造(下層から)			顔料
				下地	炭粉	漆層構造	
1	漆鏡片	赤色部	688・689	絹絃	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	未
2	漆鏡片	赤色部	692	絹絃	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	未
		黒色部	694	絹絃	木炭粉	透明漆1層	—

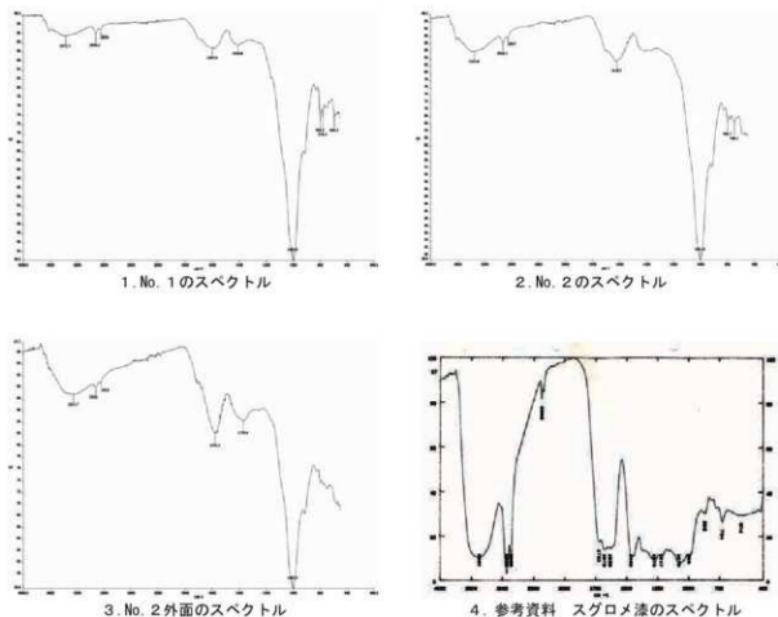


図 674 塗膜のスペクトル (1)

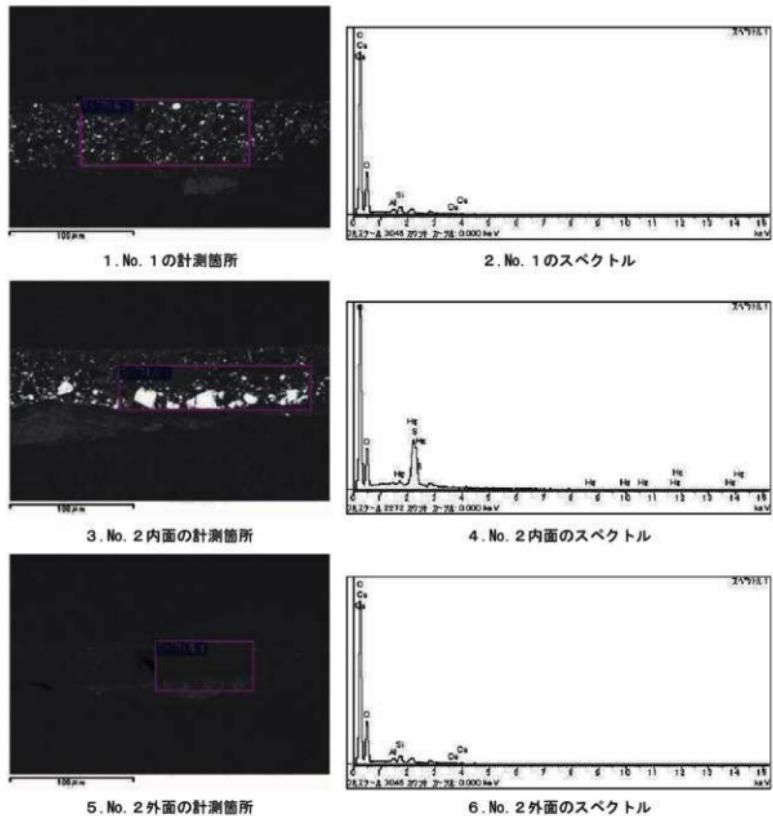


図 675 塗膜のスペクトル(2)

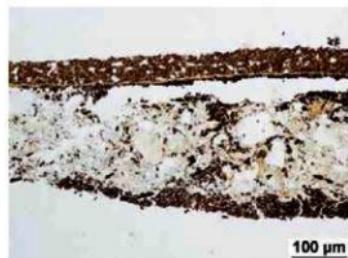


1. 資料 No. 1

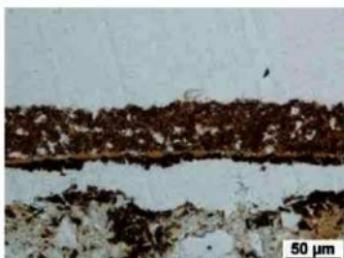


2. 資料 No. 1 拡大

図 676 塗膜の断面組織(1)



1. No. 1 剥離面



2. No. 1 剥離面拡大



3. 資料 No. 2



4. 資料 No. 2 内面



5. No. 2 内面の断面



6. 資料 No. 2 外面



7. No. 2 外面の断面

図 677 塗膜の断面組織（2）

第9節 漆製品の塗膜構造調査（2）

11 地点で出土した中世前期の漆製品について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。なお、分析は竹原弘展・藤根久・米田恭子・小林克也（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、漆製品 3 点である（表 33）。時期は、中世後半とみられている。No. 1 は、赤色塗膜で、漆塊とみられる内容物がある。No. 2 は、赤色塗膜のみの漆片で、胎部は消失している。No. 3 は、黒色塗膜の漆器桶破片である。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。分析にあたっては、竹原・小林が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察、X線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

分析は、漆成分を調べるために、No. 1 は赤

色塗膜層と、茶褐色層と黄褐色の発泡質物が付着する内容物、No. 2 は赤色塗膜、No. 3 は

内面の黒色塗膜について、赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、および X 線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ 1 mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光（株）製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-410、IRT-30-16 を使用して、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆の吸収スペクトルと比較・検討した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約 50 μm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、赤色塗膜層および無機質の下地層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約 20 μm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

分析の結果と考察 図 678 に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。図 679 に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率 (%R)、横軸は波数 (Wavenumber (cm⁻¹))；カイザー）である。各スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表 34）。また、表 35 に赤色塗膜層等の X 線分析結果を示す。

以下に、塗膜の分析結果について述べる。各塗膜の特徴は表 36 にまとめた。

[No. 1 (漆器内面赤色塗膜と内容物)]

表33 分析対象一覧

No.	遺跡番号	地点	図番号	掲載番号	取上番号	遺物名	出土遺物番号	出土層位	寸法(cm)	種別	特徴
1	168H		415	2418	5055-1	SD297	6845	e	6.4 5.9 2.5	漆器	赤色塗膜、内容物あり
2	168H	II	—	—	5370-1	—	6827	j	7.0 2.4 0.1	漆片	赤色塗膜のみ
3	168H		428	2540	5678-2	SD307	6925	21	4.7 2.6 0.7	漆器桶	黒色塗膜

表34 生漆の赤外吸収位置とその強度

機器No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.9346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	9%±4
7	1270.86	46.3336	9%±4
8	1218.79	47.5362	9%±4
9	1087.66	53.9428	
10	727.03	75.3890	

塗膜薄片では、漆器としては胎部、下地は残っておらず、内面の赤色塗膜のみが確認された（図 678-1・2）。内面赤色塗膜は、赤色塗層 c 層が観察された。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 7 および No. 8）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（図 679-1）。赤色塗層 c 層からは、X 線分析で水銀（HgO）と硫黄（SO₃）が検出され（表 35）、水銀朱の使用が確認された。

内容物は、薄片観察では夾雑物の少ない透明塗塊 d1 層と、夾雑物をやや多く含み上部で発泡が認められる塗塊 d2 層が観察された。d1 層の周囲を充填するように d2 層が存在しており、先に d1 層が存在していたところに、d2 層が後から入り込んだと推定される。内容物の赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 6～8）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（図 679-2）。

内容物は塗塊であり、漆容器として使用されたと推定される。状態の異なる塗層が少なくとも 2 層以上認められるため、繰り返し使用されたと考えられる。

[分析 No. 2 (漆片赤色塗膜)]

塗膜薄片では、胎部は残っておらず、土からなる下地 b 層、黒色？塗層 c1 層、赤色塗層 c2 層、透明塗層 c3 層、赤色塗層 c4 層が観察された（図 678-3）。c1 層は、反射電子像では確認できない混和物が観察され、例えば煤など、有機系の物質が混和されていると推定される。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 7）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収もほぼ一致した。なお、吸収 No. 9 付近に大きな吸収が見られるが、ゴム質の吸収であり、劣化している。以上、劣化が認められるものの、漆と同定された（図 679-3）。下地 b 層からは、X 線分析でアルミニウム（Al₂O₃）とケイ素（SiO₂）が主に検出され（表 35）、土を使用した下地と確認された。

赤色塗層 c2、c4 層からは、X 線分析で水銀（HgO）と硫黄（SO₃）が検出され（表 35）、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No. 3 (漆器碗内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b 層、透明塗層 c1・c2 層が観察された（図 678-4）。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 7 および No. 8）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（図 679-4）。

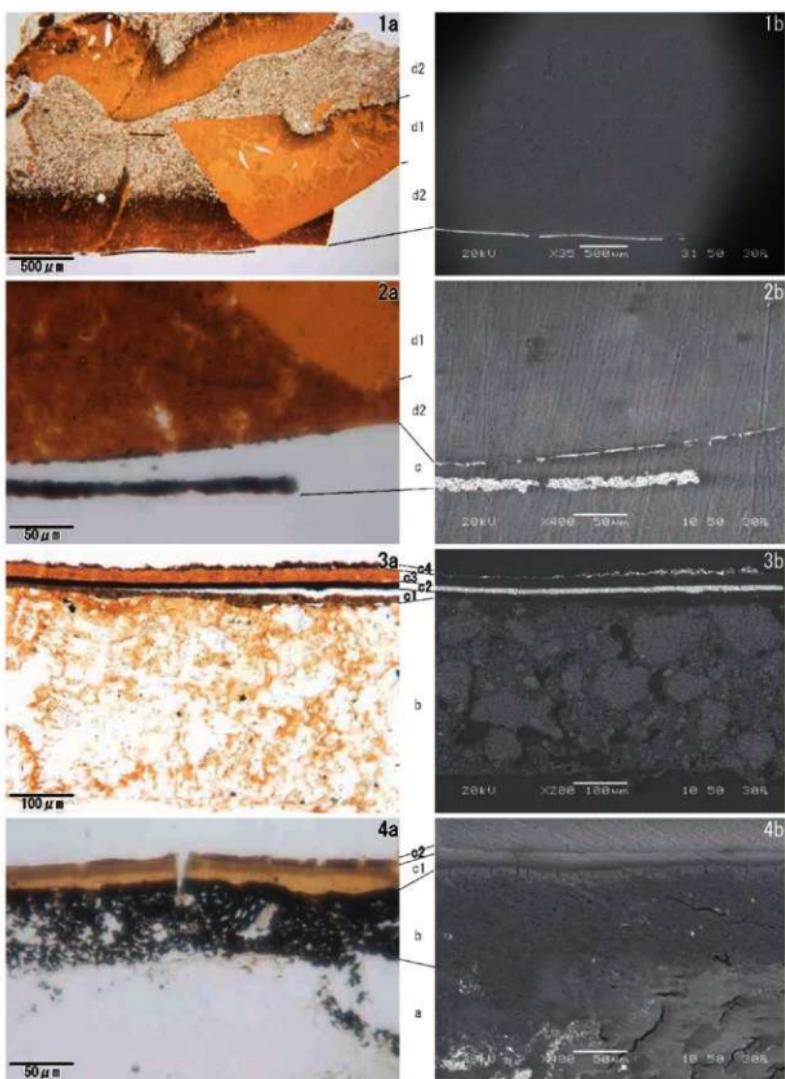
上保本郷遺跡より出土した中世後半とみられる漆製品 3 点について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、No. 1 漆器は、内面の水銀朱を用いた赤色塗膜 1 層のみ残存し、また、内容物は塗塊で 2 層以上あり、漆容器として繰り返し使用されたと推定される。No. 2 漆片は、土の下地の上に黒色？塗層、水銀朱を用いた赤色塗層、透明塗層、水銀朱を用いた赤色塗層の 4 層塗られる構造と考えられた。No. 3 漆器碗は、炭粉渋下地に透明塗層が 2 層塗られる構造と考えられた。

表35 赤色塗膜層等の X 線分析結果 (mass%)

No.	試験層	C	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	SiO	CaO	Fe ₂ O ₃	HgO
1	c層	78.53	—	0.31	5.38	—	1.19	—	14.59
	c+d層	79.34	0.72	8.36	4.06	—	3.13	1.69	11.71
	d層	66.57	2.68	5.77	5.97	—	3.16	—	16.06
	b層	52.52	5.76	34.84	—	0.57	0.98	5.32	—

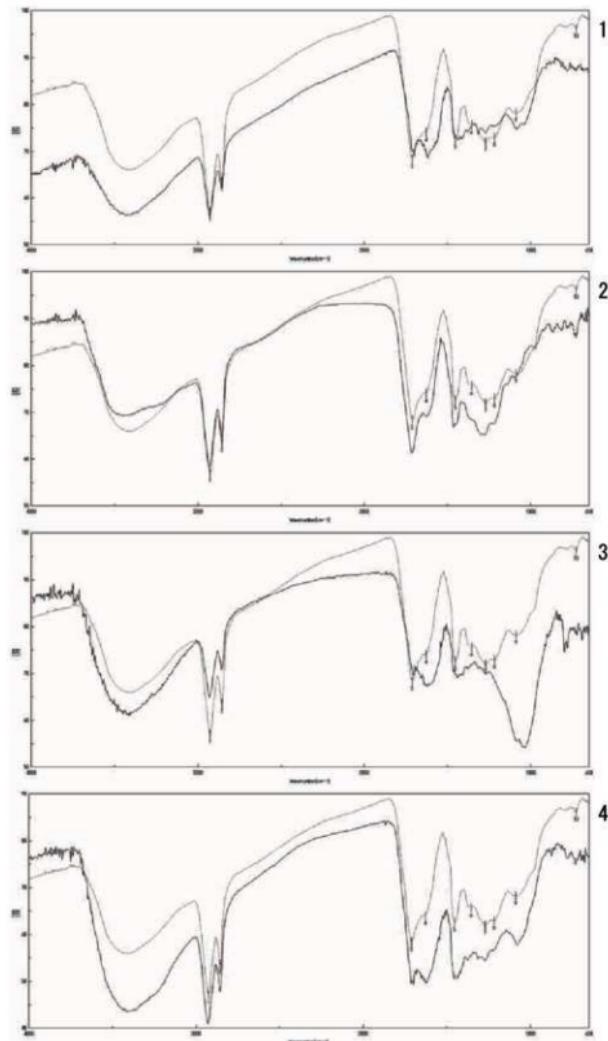
表36 塗膜分析結果

No.	器種等	採取部位	下地	塗膜層
1	漆器 (中に漆塊)	内面赤色塗膜	—	1層 赤色塗層(水銀朱)、内容物は塗塊2層以上
2	漆片	赤色塗膜	土下地	4層 黒色？塗層、赤色塗層(水銀朱)、透明塗層、赤色塗層(水銀朱)
3	漆器碗	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	2層 透明塗層2層



1・2. No. 1 漆器内面赤色塗膜と内容物 3. No. 2 漆片赤色塗膜 4. No. 3 漆器椀内面黒色塗膜

図 678 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b)



(実線：塗膜および内容物試料、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置)

1. No. 1 漆器内面赤色塗膜 2. No. 2 漆器の内容物 3. No. 2 漆片赤色塗膜 4. No. 3 漆器内面黒色塗膜

図 679 塗膜および内容物の赤外線分光スペクトル

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第151集

上保本郷遺跡

(第3分冊)

2021年3月25日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 山興印刷株式会社